神出窯跡群発掘調査報告書

昭和 56 年度　宮ノ裏支群・釜ノ口支群
昭和 57 年度　堂ノ前支群・田井裏支群・池ノ下支群・南下支群
昭和 58・59 年度　老ノ口支群
昭和 62 年度　万堡池支群

2018
神戸市教育委員会

神出窯跡群発掘調査報告書

昭和56年度　宮ノ裏支群・釜ノ口支群
昭和57年度　堂ノ前支群・田井裏支群・池ノ下支群・南下地区
昭和58・59年度　老ノ口支群
昭和62年度　万堡池支群

２０１８
神戸市教育委員会

序

中世において、西日本を中心に広く流通した東播系須恵器。その一大生産地であったのが、神出窯跡群です。今回の報告は、長期に渡る操業期間の中で、最も窯業が盛んだった時期の窯跡の調査を中心としたものになります。

今回の報告は、発掘調査から30年以上の月日を経て、ようやく刊行の運びとなりました。圃場整備事業等に伴いおこなわれた長年の神出窯跡群（神出遺跡）の調査からすれば、まだまだ一端にあたります。しかし、本書が東播系須恵器や平安時代から鎌倉時代の瓦の研究並びに、地域の歴史を復元することに少しでも役立つことを祈念いたします。

最後に、発掘調査及び本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

神戸市教育委員会

例言

1．本書は、神戸市西区神出町北・田井・南・小束野において、昭和56年度から59年度、62年度に発掘調査を実施した、神出窯跡群第６・７・８・９・17次の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。ただし、神出窯跡群は、従来から窯跡のまとまりを「支群」として呼称している。本書では、窯跡に関連しない遺構を含む場合と区別して、以下の通り表記する。

６－１次調査・・・宮ノ裏支群　　６－２次調査・・・釜ノ口支群
７－２次調査・・・堂ノ前支群　　７－３次調査・・・田井裏支群
７－４次調査・・・池ノ下支群　　７－１次調査・・・南下地区
８次調査・・・・・老ノ口支群（1983）　９次調査・・・・・老ノ口地区（1984）
17次調査・・・・・万堡池支群

2．昭和56年度から59年度の調査は圃場整備事業に伴い実施し、昭和62年度の調査は溜池改修工事における不時発見による緊急調査として実施した。調査は、第１章第２節に示した調査組織によって実施した。

3．本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の１の地形図「前開」（平成17年２月１日発行）・「淡河」（平成25年４月１日発行）・「三木」（平成21年１月１日発行）・「東二見」（平成17年10月１日発行）の一部、神戸市（平成23年）発行2,500分の１の地形図「神出」・「紫合」・「広谷」・「雌岡山」の一部、神戸市（昭和41年）発行3,000分の１の地形図「宝勢」「山西」「雄岡山」の一部を使用した。

4．本書に用いた方位は国土座標の北で、一部不明なものや推定を含むものもある。標高は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。

5．本書は、瓦について岡田健吾（現 京都府教育委員会）・鎌羅文佳が執筆し、それ以外は鎌羅文佳が執筆・編集した。

6．遺構番号は、調査ごとに01から記述する。遺構の種類ごとに以下の略記号を使用した。
窯跡、灰原は略記号を使用しない。
SB…掘立柱建物跡　SD…溝　SK…土坑　SP…ピット、柱穴　SX…不明遺構

7．土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、土師器を白抜き、硯・磁器・瓦をトーン表現により区別した。

8．須恵器の整理については、森内秀造氏の協力をいただいた。
瓦については、(公財) 辰馬考古資料館長・京都大学名誉教授・上原眞人氏から指導を受けた。
また、第14章には上原名誉教授から玉稿を賜りました。記して、深謝いたします。

9．鬼瓦実測・トレース作業については、株式会社　文化財サービスに委託した。

10．遺構写真は各調査担当者が撮影した。
遺物写真の撮影と、写真図版・図193の作成・編集は丸山　潔氏がおこなった。

11．本書では調査概要を報告した各年度の『神戸市埋蔵文化財年報』を参照する場合、書名を省略し、『昭和56年度年報』等として記載する。ただし、昭和57年度については『昭和57年度神戸市文化財年報』(1984) と『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』(1985) の２冊があり、区別するために『昭和57年度年報』(1984)、『昭和57年度年報』(1985) と表示する。

12．発掘調査の実施に当たっては、神戸市神出土地改良区・神戸市農政局（当時）・(財) 神戸市緑農開発公社（当時）の協力をいただいた。また、本書の作成に当たり、坂口勤氏の協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

神出窯跡群発掘調査報告書目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査組織 …… 2
　第３節　調査と整理の経過、整理及び本書記載の方法 …… 3
　　（１）調査の経過 …… 3
　　（２）整理の経過 …… 4
　　（３）整理及び本書記載の方法 …… 4
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 6
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 7
　第３節　既往の調査 …… 7
第３章　昭和56年度　第６－１次調査（宮ノ裏支群）の成果 …… 12
　第１節　調査区の設定と基本層序 …… 12
　　（１）調査区の設定 …… 12
　　（２）基本層序 …… 12
　第２節　調査成果 …… 14
　　（１）１号窯 …… 15
　　（２）２号窯 …… 16
　　（３）３号窯 …… 18
　　（４）４号窯 …… 19
　　（５）灰原 …… 19
　　（６）軒瓦 …… 30
第４章　昭和56年度　第６－２次調査（釜ノ口支群）の成果 …… 43
　第１節　調査区の設定と基本層序 …… 43
　　（１）調査区の設定 …… 43
　　（２）基本層序 …… 44
　第２節　調査成果 …… 44
　　（１）１号窯 …… 47
　　（２）２号窯 …… 47
　　（３）３号窯 …… 47
　　（４）４号窯 …… 52
　　（５）５号窯 …… 53
　　（６）６号窯 …… 57
　　（７）７号窯 …… 57
　　（８）灰原 …… 60
　　（９）３トレンチ SD01 …… 60
　　（10）軒瓦 …… 60
第５章　昭和57年度　第７－２次調査（堂ノ前支群）の成果 …… 67
　第１節　調査区の設定と基本層序 …… 67
　　（１）調査区の設定 …… 67
　　（２）基本層序 …… 67
　第２節　調査成果 …… 69
　　（１）１号窯 …… 69
　　（２）灰原 …… 72
　　（３）軒瓦 …… 78

第６章　昭和57年度　第７－３次調査（田井裏支群）の成果 …… 90
第１節　調査区の設定と基本層序 …… 90
（１）調査区の設定 …… 90
（２）基本層序 …… 90
第２節　調査成果 …… 92
（１）１号窯 …… 92
（２）灰原 …… 95
（３）土器だまり …… 96
（４）軒瓦 …… 99
第７章　昭和57年度　第７－４次調査（池ノ下支群）の成果 …… 106
第１節　調査区の設定と基本層序 …… 106
（１）調査区の設定 …… 106
（２）基本層序 …… 106
第２節　調査成果 …… 107
（１）１号窯 …… 107
（２）２号窯 …… 109
（３）３号窯 …… 109
（４）軒瓦 …… 111
第８章　昭和57年度　第７－１次調査（南下地区）の成果 …… 115
第１節　調査区の設定と基本層序 …… 115
第２節　調査成果 …… 116
（１）調査区概要 …… 116
（２）軒瓦 …… 116
第９章　昭和58年度　第８次調査（老ノ口支群（1983））の成果 …… 122
第１節　調査区の設定と基本層序 …… 122
（１）調査区の設定 …… 122
（２）基本層序 …… 122
第２節　調査成果 …… 124
（１）１号窯 …… 124
（２）２号窯 …… 127
（３）SX01・灰原 …… 129
（４）軒瓦 …… 130
第10章　昭和59年度　第９次調査（老ノ口地区（1984））の成果 …… 136
第１節　調査区の設定 …… 136
第２節　調査成果 …… 137
（１）０トレンチ …… 138
（２）５・８トレンチ …… 147
（３）24～27・52トレンチ …… 147
（４）28・29・53・54トレンチ …… 153
（５）38トレンチ …… 153
（６）46・48トレンチ …… 153
（７）上人谷池南１号灰原・２号灰原 …… 155
（８）軒瓦 …… 155

第11章　昭和62年度　第17次調査（万堂池支群）の成果 …… 163
第１節　調査区の設定と基本層序 …… 163
第２節　調査成果 …… 164
（１）１号窯 …… 164
（２）２号窯灰原 …… 173
（３）軒瓦 …… 173
第12章　土器の検討 …… 176
第１節　口縁部計測法及び資料の操作方法 …… 176
（１）口縁部計測法 …… 176
（２）対象資料 …… 176
（３）型式分類 …… 177
第２節　土器の個体数復元 …… 181
（１）６－１次調査　宮ノ裏支群 …… 181
（２）６－２次調査　釜ノ口支群 …… 182
（３）７－２次調査　堂ノ前支群 …… 183
（４）７－３次調査　田井裏支群 …… 186
（５）７－４次調査　池ノ下支群 …… 186
（６）８次調査　老ノ口支群（1983） …… 187
（７）９次調査　老ノ口地区（1984） …… 188
（８）17次調査　万堂池支群 …… 190
（９）小結 …… 191
第３節　土器の口径分析 …… 213
（１）須恵器鉢 …… 213
（２）須恵器埦 …… 214
（３）須恵器甕 …… 215
（４）須恵器皿 …… 216
（５）小結 …… 216
第13章　瓦の検討 …… 225
第１節　鬼瓦 …… 225
第２節　軒瓦の型式分類 …… 228
（１）軒丸瓦 …… 228
（２）軒平瓦 …… 229
第３節　瓦の製作技法について …… 243
第14章　神出窯跡群の調査成果に対する消費地からのコメント（上原眞人） 257
第１節　はじめに－神出窯跡との出会い－ …… 257
第２節　播磨系瓦屋のなかの神出窯－軒瓦の同笵・同文関係から－ …… 258
第３節　新たな研究の地平－丸・平瓦の検討－ …… 259
第15章　まとめ …… 261
第１節　遺構について …… 261
（１）窯跡 …… 261
（２）遺構の分布 …… 261
第２節　遺物について …… 262
（１）須恵器 …… 262
（２）瓦 …… 262

挿図目次

第１章
図１　遺跡位置図 …… 1
第２章
図２　周辺の遺跡 …… 8
図３　本書掲載の調査位置図 …… 9
第３章
図４　宮ノ裏支群　トレンチ配置図 …… 12
図５　宮ノ裏支群　土層断面図 …… 13
図６　宮ノ裏支群　遺構平面図 …… 14
図７　宮ノ裏支群　１号窯平面・立面図 …… 15
図８　宮ノ裏支群　１号窯出土土器 …… 16
図９　宮ノ裏支群　２号窯平面・断面図 …… 17
図10　宮ノ裏支群　２号窯出土土器 …… 17
図11　宮ノ裏支群　３号窯平面・断面図 …… 18
図12　宮ノ裏支群　３号窯出土土器 …… 18
図13　宮ノ裏支群　４号窯平面・立面図 …… 19
図14　宮ノ裏支群　D－４・５グリッド出土土器 21
図15　宮ノ裏支群　Ｉ－４グリッド出土土器 …… 22
図16　宮ノ裏支群　Ｉ－５グリッド出土土器 …… 23
図17　宮ノ裏支群　Ｊ－４グリッド出土土器 …… 24
図18　宮ノ裏支群　Ｊ－５グリッド出土土器 …… 25
図19　宮ノ裏支群　Ｊ－６グリッド出土土器 …… 26
図20　宮ノ裏支群　Ｋ－３グリッド出土土器 …… 27
図21　宮ノ裏支群　Ｋ－４グリッド出土土器 …… 28
図22　宮ノ裏支群　Ｋ－５グリッド出土土器 …… 28
図23　宮ノ裏支群　Ｋ－６グリッド出土土器① … 28
図24　宮ノ裏支群　Ｋ－６グリッド出土土器② … 29
図25　宮ノ裏支群　Ｋ－６グリッド出土土器③ … 30
図26　宮ノ裏支群　Ｌ－４グリッド出土土器 …… 31
図27　宮ノ裏支群　Ｌ－５グリッド出土土器 …… 32
図28　宮ノ裏支群出土軒丸瓦① …… 33
図29　宮ノ裏支群出土軒丸瓦② …… 34
図30　宮ノ裏支群出土軒平瓦① …… 36
図31　宮ノ裏支群出土軒平瓦② …… 37
図32　宮ノ裏支群出土軒平瓦③ …… 38
第４章
図33　釜ノ口支群　トレンチ配置図 …… 43
図34　釜ノ口支群　Ｃ地点グリッド図 …… 44
図35　釜ノ口支群　Ｂ・Ｃ地点土層断面図 …… 45
図36　釜ノ口支群　Ｃ地点土層断面図 …… 46
図37　釜ノ口支群　Ｂ・Ｃ地点遺構平面図 …… 48
図38　釜ノ口支群　１号窯平面・立面・断面図 … 49
図39　釜ノ口支群　１号窯西側部土層断面図 …… 50
図40　釜ノ口支群　１号窯出土土器 …… 50
図41　釜ノ口支群　２号窯平面・断面図 …… 51
図42　釜ノ口支群　２号窯出土土器 …… 52
図43　釜ノ口支群　３号窯平面・断面図 …… 53
図44　釜ノ口支群　３号窯出土土器 …… 54
図45　釜ノ口支群　４号窯平面・断面図 …… 55
図46　釜ノ口支群　４号窯出土土器 …… 55
図47　釜ノ口支群　５号窯平面・立面・断面図 … 56
図48　釜ノ口支群　５号窯出土土器 …… 57
図49　釜ノ口支群　６号窯平面・断面図 …… 58
図50　釜ノ口支群　６号窯出土土器 …… 58
図51　釜ノ口支群　７号窯平面・断面図 …… 59
図52　釜ノ口支群　７号窯出土土器 …… 59
図53　釜ノ口支群出土軒丸瓦① …… 62
図54　釜ノ口支群出土軒丸瓦② …… 63
図55　釜ノ口支群出土軒平瓦① …… 64
図56　釜ノ口支群出土軒平瓦② …… 65
第５章
図57　堂ノ前支群　トレンチ配置図 …… 67
図58　堂ノ前支群　土層断面図 …… 68
図59　堂ノ前支群　遺構平面図 …… 70
図60　堂ノ前支群　１号窯平面・断面図 …… 71
図61　堂ノ前支群　１号窯・「６号」出土土器 …… 71
図62　堂ノ前支群　Ｉ－Ａグリッド出土土器 …… 72
図63　堂ノ前支群　Ⅱ－Ｂグリッド出土土器 …… 72
図64　堂ノ前支群　Ｉ－Ｃグリッド出土土器 …… 73
図65　堂ノ前支群　Ｉ－Ｄグリッド出土土器 …… 75
図66　堂ノ前支群　Ｉ－Ｅグリッド出土土器 …… 76
図67　堂ノ前支群　Ｉ－Ｆグリッド出土土器 …… 77
図68　堂ノ前支群　Ｇグリッド出土土器 …… 77
図69　堂ノ前支群　Ｉ－Ｈグリッド出土土器 …… 77
図70　堂ノ前支群　Ｉ－Ｊグリッド出土土器 …… 78
図71　堂ノ前支群　Ｉ－Ｌグリッド出土土器 …… 78
図72　堂ノ前支群　Ｉ－Ｋグリッド出土土器 …… 79
図73　堂ノ前支群出土軒丸瓦① …… 81
図74　堂ノ前支群出土軒丸瓦② …… 82
図75　堂ノ前支群出土軒丸瓦③ …… 83
図76　堂ノ前支群出土軒丸瓦④ …… 84
図77　堂ノ前支群出土軒平瓦① …… 85
図78　堂ノ前支群出土軒平瓦② …… 86
第６章
図79　田井裏支群　トレンチ配置図 …… 90
図80　田井裏支群　土層断面図 …… 91
図81　田井裏支群　遺構平面図 …… 93
図82　田井裏支群　１号窯前庭部灰層出土土器 … 94
図83　田井裏支群　１号窯灰層出土土器 …… 95
図84　田井裏支群　土器だまり出土土器① …… 97
図85　田井裏支群　土器だまり出土土器② …… 98
図86　田井裏支群出土軒丸瓦 …… 101
図87　田井裏支群出土軒平瓦① …… 102
図88　田井裏支群出土軒平瓦② …… 103
第７章
図89　池ノ下支群　トレンチ配置図 …… 106
図90　池ノ下支群（推定）　土層断面図 …… 107
図91　池ノ下支群　１号窯平面・断面図 …… 108
図92　池ノ下支群　１号窯灰原出土土器 …… 108
図93　池ノ下支群　２号窯平面・断面図 …… 109
図94　池ノ下支群　２号窯灰原出土土器 …… 110
図95　池ノ下支群　３号窯灰原出土土器 …… 110
図96　池ノ下支群　３号窯平面・断面図 …… 111
図97　池ノ下支群出土軒丸瓦 …… 112

図98　池ノ下支群出土軒平瓦 …… 114
第８章
図99　南下地区　トレンチ配置図 …… 115
図100　南下地区　１トレンチ遺構平面図 …… 117
図101　南下地区　３トレンチ遺構平面図 …… 118
図102　南下地区出土軒丸瓦① …… 119
図103　南下地区出土軒丸瓦② …… 120
図104　南下地区出土軒平瓦 …… 121
第９章
図105　老ノ口支群（1983）トレンチ配置図 …… 122
図106　老ノ口支群（1983）２～５トレンチ土層断面図 123
図107　老ノ口支群（1983）１トレンチ遺構平面・断面図 125
図108　老ノ口支群（1983）１号窯平面・断面図 126
図109　老ノ口支群（1983）１号窯灰原出土土器 127
図110　老ノ口支群（1983）２号窯平面・断面図 128
図111　老ノ口支群（1983）２号窯出土土器 …… 129
図112　老ノ口支群（1983）２号窯灰原出土土器 130
図113　老ノ口支群（1983）SX01出土土器 …… 131
図114　老ノ口支群（1983）１トレンチ西部灰層出土土器 131
図115　老ノ口支群（1983）出土軒瓦① …… 134
図116　老ノ口支群（1983）出土軒瓦② …… 135
第10章
図117　老ノ口地区（1984）トレンチ配置図 …… 136
図118　老ノ口地区（1984）０トレンチ遺構平面・断面図 139
図119　老ノ口地区（1984）３号窯平面・断面図 140
図120　老ノ口地区（1984）３号窯西側溝出土土器 140
図121　老ノ口地区（1984）４号窯平面・断面図 142
図122　老ノ口地区（1984）４号窯出土土器 …… 143
図123　老ノ口地区（1984）０トレンチ１区灰層出土土器 144
図124　老ノ口地区（1984）０トレンチ２区灰層出土土器 144
図125　老ノ口地区（1984）０トレンチ３区灰層出土土器 145
図126　老ノ口地区（1984）０トレンチ４区灰層出土土器 146
図127　老ノ口地区（1984）24～27・52トレンチ遺構平面図 148
図128　老ノ口地区（1984）24～27・52トレンチ土層断面図 149
図129　老ノ口地区（1984）24～25トレンチ灰層出土土器 150
図130　老ノ口地区（1984）28・29・53トレンチ遺構平面図 151
図131　老ノ口地区（1984）54トレンチ遺構平面・断面図 151
図132　老ノ口地区（1984）28・29・53トレンチ土層断面図 152
図133　老ノ口地区（1984）38トレンチ遺構平面・断面図 153
図134　老ノ口地区（1984）46トレンチ遺構平面・断面図 154
図135　老ノ口地区（1984）48トレンチ遺構平面・断面図 154
図136　老ノ口地区（1984）48トレンチ灰層出土土器 154
図137　上人谷池南　１号灰原採集土器 …… 155
図138　老ノ口地区（1984）出土軒瓦① …… 157
図139　老ノ口地区（1984）出土軒瓦② …… 158
図140　老ノ口地区（1984）出土軒瓦③ …… 159
第11章
図141　万堂池支群　トレンチ配置図 …… 163
図142　万堂池支群　トレンチ土層断面図 …… 164
図143　万堂池支群　１号窯出土土器 …… 165
図144　万堂池支群　１号窯・トレンチ平面図 … 166
図145　万堂池支群　１号窯土層断面図 …… 167
図146　万堂池支群　１号窯掘削土出土土器 …… 167
図147　万堂池支群　２区灰層出土土器 …… 168
図148　万堂池支群　Ｎトレンチ灰層出土土器 … 169
図149　万堂池支群　Ｓトレンチ灰層出土土器 … 170
図150　万堂池支群　Ｗトレンチ灰層出土土器① 171
図151　万堂池支群　Ｗトレンチ灰層出土土器② 172
図152　万堂池支群　Ｅトレンチ灰層出土土器 … 172
図153　万堂池支群　２号窯　採集土器 …… 173
図154　万堂池支群出土軒瓦 …… 174
第12章
図155　神出窯跡群須恵器型式分類① …… 179
図156　神出窯跡群須恵器型式分類② …… 180
図157　支群・地区別　器種構成グラフ …… 197
図158　遺構・灰層別　器種構成グラフ① …… 198
図159　遺構・灰層別　器種構成グラフ② …… 199
図160　遺構・灰層別　器種構成グラフ③ …… 200
図161　遺構・灰層別　器種構成グラフ④ …… 201
図162　遺構・灰層別　器種構成グラフ⑤ …… 202
図163　遺構・灰層別　器種構成グラフ⑥ …… 203
図164　遺構・灰層別　器種構成グラフ⑦ …… 204
図165　遺構・灰層別　器種構成グラフ⑧ …… 205
図166　支群・地区別　鉢の型式構成グラフ …… 206
図167　遺構・灰層別　鉢の型式構成グラフ① … 207
図168　遺構・灰層別　鉢の型式構成グラフ② … 208
図169　遺構・灰層別　鉢の型式構成グラフ③ … 209
図170　遺構・灰層別　鉢の型式構成グラフ④ … 210
図171　遺構・灰層別　鉢の型式構成グラフ⑤ … 211
図172　遺構・灰層別　鉢の型式構成グラフ⑥ … 212
図173　支群別　須恵器鉢の口径分布 …… 219
図174　支群別　須恵器鉢Ａ型式の口径分布 …… 220
図175　支群別　須恵器鉢Ｂ型式の口径分布 …… 221
図176　支群別　須恵器壺の口径分布 …… 222
図177　支群別　須恵器甕の口径分布 …… 223
図178　支群別　須恵器皿の口径分布 …… 224
第13章
図179　神出窯跡群出土鬼瓦① …… 225
図180　神出窯跡群出土鬼瓦② …… 226
図181　神出窯跡群出土鬼瓦③ …… 227
図182　神出窯跡群出土鬼瓦④ …… 228
図183　軒丸瓦の瓦当裏面調整模式図 …… 247
図184　軒平瓦の瓦当成形模式図 …… 247
図185　平瓦のタタキ調整の種類① …… 248
図186　平瓦のタタキ調整の種類② …… 249
図187　軒平瓦の瓦当裏面調整模式図 …… 250
図188　平瓦のヘラ記号・スタンプ …… 252
図189　支群別　丸瓦の厚さ …… 255
図190　支群別　平瓦の厚さ …… 256
第15章
図191　須恵器鉢の口縁部形態による変遷案 …… 263
図192　今回の報告における
　　神出窯跡群の須恵器の出土傾向 …… 263
図193　神出窯跡群関連遺構分布図 …… 265

表目次

第2章
表1　既往の調査 …… 11
第3章
表2　宮ノ裏支群出土土器 …… 39
表3　宮ノ裏支群出土軒瓦 …… 42
第4章
表4　釜ノ口支群出土軒瓦 …… 61
表5　釜ノ口支群出土土器 …… 65
第5章
表6　堂ノ前支群　遺構名対応表 …… 69
表7　堂ノ前支群出土土器 …… 87
表8　堂ノ前支群出土軒瓦 …… 89
第6章
表9　田井裏支群出土土器 …… 104
表10　田井裏支群出土軒瓦 …… 105
第7章
表11　池ノ下支群　遺構名対応表 …… 107
表12　池ノ下支群出土器 …… 113
表13　池ノ下支群出土軒瓦 …… 114
第8章
表14　南下地区出土軒瓦 …… 120
第9章
表15　老ノ口支群（1983）遺構名対応表 …… 124
表16　老ノ口支群（1983）出土土器 …… 132
表17　老ノ口支群（1983）出土軒瓦 …… 133
第10章
表18　老ノ口地区（1984）
　トレンチ名・遺構名対応表 …… 137
表19　老ノ口地区（1984）出土土器 …… 160
表20　老ノ口地区（1984）出土軒瓦 …… 162
第11章
表21　万堡池支群　遺構名対応表 …… 164
表22　万堡池支群出土土器 …… 174
表23　万堡池支群出土軒瓦 …… 175
第12章
表24　遺構・灰層別　器種構成の復元個体数 …… 192
表25　遺構・灰層別　鉢の型式構成の復元個体数 195
表26　須恵器鉢・塊・皿の口径分布表 …… 217
表27　須恵器鉢の型式別口径分布表 …… 218
表28　須恵器甕の口径分布表 …… 223
第13章
表29　軒丸瓦の型式一覧 …… 231
表30　軒平瓦の型式一覧 …… 236
表31　丸瓦の調整ごとの資料数 …… 244
表32　凹面布目丸瓦の諸要素資料数 …… 245
表33　平瓦の調整ごとの資料数 …… 246
表34　丸瓦・平瓦の総数と比率 …… 251
表35　支群別　丸瓦の厚さ …… 253
表36　支群別　平瓦の厚さ …… 254

写真目次

第1章
写真1　阪神・淡路大震災による遺物の被災状況　5
第4章
写真2　釜ノ口支群　4号窯出土平瓦 …… 55
第6章
写真3　田井裏支群　1号窯出土土器 …… 92
第13章
写真4　塼（？）…… 254

写真図版

図版1　1．神出地区垂直写真
図版2　1．神出窯跡群出土鬼瓦
図版3　1．堂ノ前支群出土軒丸瓦
　2．釜ノ口支群　3号窯出土須恵器
図版4　1．堂ノ前支群出土須恵器
　2．田井裏支群　土器だまり出土土器
図版5　1．宮ノ裏支群　全景
　2．宮ノ裏支群　1号窯
図版6　1．宮ノ裏支群　4号窯　遺物出土状況
　2．宮ノ裏支群　4号窯　完掘状況
　3．釜ノ口支群　全景
図版7　1．釜ノ口支群　3号窯
　2．釜ノ口支群　1号窯
　3．釜ノ口支群　6号窯
図版8　1．釜ノ口支群　5号窯セクションベルト
　2．釜ノ口支群
　　2Gグリッド南北セクションベルト
　3．堂ノ前支群　土層断面東半
図版9　1．堂ノ前支群　土層断面西半
　2．田井裏支群　1トレンチ西壁北部
図版10　1．田井裏支群　2トレンチ南壁
　2．池ノ下支群　2号窯
　3．池ノ下支群　3号窯
図版11　1．南下地区　1トレンチ全景
　2．南下地区　3トレンチ掘立柱建物跡
　3．南下地区　1トレンチ全景
　4．老ノ口支群（1983）　1トレンチ全景
図版12　1．老ノ口地区（1984）　0トレンチ全景
　2．老ノ口地区（1984）　4号窯
　3．老ノ口地区（1984）　4号窯
図版13　1．老ノ口地区（1984）　24～27トレンチ
　2．万堡池支群　1号窯全景
図版14　1．万堡池支群　1号窯窯体断面
　2．万堡池支群　1号窯全景
図版15　1．宮ノ裏支群　全景
　2．宮ノ裏支群　全景
図版16　1．宮ノ裏支群
　　1号窯南北セクションベルト

2．宮ノ裏支群
1号窯東西セクションベルト
3．宮ノ裏支群　2号窯
4．宮ノ裏支群　3号窯
5．宮ノ裏支群
K－5グリッドセクションベルト
6．宮ノ裏支群
J－5グリッドセクションベルト
図版17　1．釜ノ口支群　B地点全景
2．釜ノ口支群　B地点全景
3．釜ノ口支群　C地点全景
4．釜ノ口支群　C地点全景
図版18　1．釜ノ口支群　3トレンチSD01
2．釜ノ口支群　2号窯セクションベルト
3．釜ノ口支群　1号窯窯体断面
4．釜ノ口支群
1号窯西側灰層（?）セクションベルト
図版19　1．釜ノ口支群　2号窯
2．釜ノ口支群　5号窯
図版20　1．釜ノ口支群　5号窯窯壁
2．釜ノ口支群　7号窯
3．釜ノ口支群　4号窯
4．堂ノ前支群　全景
図版21　1．堂ノ前支群　東半
2．堂ノ前支群　西半
図版22　1．堂ノ前支群　1号窯
2．堂ノ前支群　2号窯
3．堂ノ前支群　4号窯
4．堂ノ前支群　5号窯
図版23　1．田井裏支群　全景
2．田井裏支群　1号窯
図版24　1．池ノ下支群　1号窯
2．池ノ下支群　1号窯セクションベルト
3．池ノ下支群　2号窯セクションベルト
4．南下地区　3トレンチ全景
図版25　1．老ノ口支群（1983）　1号窯
2．老ノ口支群（1983）　2号窯
図版26　1．老ノ口支群（1983）　1トレンチSX01
2．老ノ口支群（1983）　2トレンチSX02
3．老ノ口支群（1983）　2トレンチSX03
4．老ノ口地区（1984）　3号窯
図版27　1．老ノ口地区（1984）　24トレンチ全景
2．老ノ口地区（1984）　25トレンチ全景
3．老ノ口地区（1984）　26トレンチ東半
4．老ノ口地区（1984）　26トレンチ西半
5．老ノ口地区（1984）　27トレンチ全景
6．老ノ口地区（1984）　52トレンチ全景
7．老ノ口地区（1984）　29トレンチ粘土採掘坑
8．老ノ口地区（1984）　53トレンチ粘土採掘坑
図版28　1．老ノ口地区（1984）　54トレンチ全景
2．老ノ口地区（1984）　38トレンチ全景
3．老ノ口地区（1984）　46トレンチ全景
4．老ノ口地区（1984）　48トレンチ南壁
5．老ノ口地区（1984）　48トレンチ全景
6．万堡池支群　Wトレンチ北壁
7．万堡池支群　1号窯全景
図版29　1．宮ノ裏支群出土土器
2．釜ノ口支群
1・2・4～7号窯出土須恵器と焼台
図版30　1．田井裏支群　1号窯周辺出土土器
2．池ノ下支群出土土器
図版31　1．老ノ口支群（1983）・老ノ口地区（1984）
0トレンチ出土土器
2．老ノ口地区（1984）
24・25・48トレンチ灰層出土土器
図版30　1．万堡池支群出土土器
2．神出窯跡群出土軒瓦
図版33　1．須恵器鉢ＡⅠａⅰ型式
2．須恵器鉢ＡⅠａⅱ型式
3．須恵器鉢ＡⅠａⅲ型式
4．須恵器鉢ＡⅠｂ型式
5．須恵器鉢ＡⅡａ型式
6．須恵器鉢ＡⅡｂ型式
7．須恵器鉢ＡⅡｃ型式
8．須恵器鉢ＡⅢ型式
9．須恵器鉢ＡⅣ型式
10．須恵器鉢ＢⅠａ型式
11．須恵器鉢ＢⅠｂ型式
12．須恵器鉢ＢⅡａ型式
13．須恵器鉢ＢⅡｂ型式
14．須恵器鉢ＢⅡｃ型式
15．須恵器鉢ＢⅢａ型式
図版34　1．須恵器鉢ＢⅢａ型式
2．須恵器鉢ＢⅢｂ型式
3．須恵器鉢ＢⅣ型式
4．須恵器鉢ＣⅠ型式
5．須恵器鉢ＣⅡ型式
6．須恵器鉢ＣⅢ型式
7．須恵器鉢中型
8．須恵器鉢中型
9．須恵器椀・輪高台
10．須恵器椀ＡⅠａ型式
11．須恵器椀ＡⅠｂ型式
12．須恵器椀ＡⅡ型式
13．須恵器椀ＢⅠ型式
14．須恵器椀ＢⅡ型式
15．須恵器椀Ｃ型式
16．須恵器甕ＡⅠ型式
17．須恵器甕ＡⅡ型式
18．須恵器甕ＡⅢ型式
19．須恵器甕ＡⅣ型式
20．須恵器甕ＡⅤ型式
21．須恵器甕ＢⅠ型式
22．須恵器甕ＢⅡ型式

図版35　1．須恵器甕Ｂ Ⅲ型式
2．須恵器甕Ｂ Ⅳ型式
3．須恵器甕Ｃ型式
4．須恵器皿Ａ Ⅰ型式
5．須恵器皿Ａ Ⅱ型式
6．須恵器皿Ｂ Ⅱ型式
7．須恵器皿Ｃ型式
8．須恵器皿Ｃ型式
9．須恵器皿Ｄ型式
10．須恵器皿Ｄ型式
11．須恵器壺Ａ型式
12．須恵器壺Ａ型式
13．須恵器壺Ａ型式
14．須恵器壺Ｂ Ⅱ型式
15．須恵器壺Ｂ Ⅰ型式
16．須恵器壺Ｃ型式
17．風字硯
18．二面硯
19．風字硯
20．風字硯
図版36　1．鎮面硯
2．焼台
3．焼台
4．窯道具（？）
5．土師器羽釜
6．土師器坏
7．土師器坏
8．土師器皿
9．土師器皿
10．土師器皿
11．土師器皿
12．土師器托
13．土師器托
14．土師器托
15～21．軒丸瓦　丸0101～0306
図版37　軒丸瓦　丸0401～1601
軒丸瓦　丸1702～1902
図版38　軒丸瓦　丸1701
軒丸瓦　丸2101～2903
軒丸瓦　丸3001～3201
図版39　軒丸瓦　丸2901
軒平瓦　平0101～0701b
図版40　軒平瓦　平0801a～2601a
図版41　軒平瓦　平2701～3901
図版42　軒平瓦　平4001～4802
11．鬼瓦１
12．鬼瓦２
図版43　1．鬼瓦３
2．鬼瓦４
3．鬼瓦５
4．丸瓦成形痕（凹面：粘土紐痕跡）
5．丸瓦成形痕（凹面：粘土紐痕跡）
図版44　1．丸瓦成形痕（凹面：粘土紐痕跡）
2．丸瓦成形痕（凹面：布目痕跡）
3．丸瓦成形痕（筒部のみ布目痕跡）
4．丸瓦成形痕（玉縁まで布目痕跡）
5．単位の違う布目痕跡
6．玉縁の段の形状（明らか）
7．玉縁の段の形状（緩やか）
8．玉縁の段の形状（ほぼなし）
9．平瓦成形痕（凹面：粘土紐痕跡）
10．平瓦成形痕（凹面：粘土紐痕跡）
11．平瓦成形痕（凹面：粘土紐・布目痕跡）
12．平瓦成形痕（凹面：粘土紐痕跡）
図版45　1．平瓦成形痕（凹面：布目痕跡）
2．平瓦成形痕・調整痕
（凹面：布目・糸切痕跡／凸面：格子タタキ）
3．平瓦成形痕・調整痕
（凹面：布目・ナデ痕跡／凸面：格子タタキ）
4．平瓦成形痕・調整痕
（凹面：ナデ痕跡／凸面：十字状タタキ）
5．平瓦調整痕（凸面工具によるナデ）
6．平瓦調整痕（格子タタキ）
7．平瓦調整痕（格子タタキ）
8．平瓦調整痕（十字状タタキ）
9．平瓦調整痕（格子タタキ）
10．平瓦調整痕（平行タタキ）
11．平瓦調整痕（縄タタキ）
12．平瓦調整痕（その他タタキ）
13．平瓦調整痕（その他タタキ）
14．平瓦調整痕（米字状ナデ）
15．ヘラ記号「 」
16．ヘラ記号「 」
17．ヘラ記号「 」
18．ヘラ記号「 」
19．ヘラ記号「 」
20．スタンプ記号「 」
21．乾燥時の痕跡
22．全形の窺える平瓦

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

今回報告する調査のうち、第６～９次調査は、西区神出町における神出地区県営圃場整備事業に伴い実施した。第17次調査は、万堡池堰堤改修工事に伴う仮設道路の工事中に不時発見され、緊急調査としておこなった。

第６次調査（昭和56年度;宮ノ裏支群、釜ノ口支群）の事業範囲内では、神出町北の宮ノ裏地区、神出町田井の釜ノ口地区において多量の遺物が採集された。そのため、試掘調査を実施した結果、窯跡に伴うと考えられる灰層が確認された。この試掘調査の結果を受け、窯跡の検出と灰層の範囲確認、さらに窯跡の実態を明確にして保存に必要な資料を得ることを目的として発掘調査（約2,500㎡）を実施した。

第７次調査（昭和57年度;堂ノ前支群、田井裏支群、池ノ下支群、南下地区）の事業範囲内は、前年度に試掘調査をおこない、その結果、窯跡に伴うと考えられる灰層及び集落跡の存在を堂ノ前、田井裏、池ノ下、南下の各地区で確認した。その後の磁気探査でも窯跡の存在が予想されたため、事業部局の協力によって工事計画を変更し、現状保存が図られた。計画変更の不可能な区域について発掘調査（約3,000㎡）を実施した。

第８次調査（昭和58年度；老ノ口支群）の事業範囲内において試掘調査を実施した結果、老ノ口地区において灰原を確認した。そのため、調査区を設定して発掘調査(約500㎡)を実施した。

第９次調査（昭和59年度；老ノ口地区）の事業範囲内の試掘調査を昭和57・58年度に実施した。その結果、清水谷池東側で窯跡、老ノ口集落の西側で集落跡の存在が想定された。そのため、設計上保存が不可能な排水路敷とパイプライン敷において、遺物包含層と遺構面に影響のある範囲に限定し、発掘調査（約3,100㎡）を実施した。調査は圃場ごとにトレンチを設定しておこなった。

昭和62年度、神出町小束野における万宝池[1]堰堤改修工事用仮設道路の工事中に窯壁の一部が露出していることが、研究者の通報によって明らかになった。窯壁及び遺物の散布を確認し、仮設道路を迂回させることで、これ以上の損壊は免れたが、保存を図るために必要な最小の範囲（約100㎡）の調査を実施した（第17次調査　万堡池支群）。調査は、仮設道路建設工事によって損壊を受けた窯跡の断面精査作業と、窯跡及び灰層の遺存状態確認、灰層の範囲確認を目的とした。

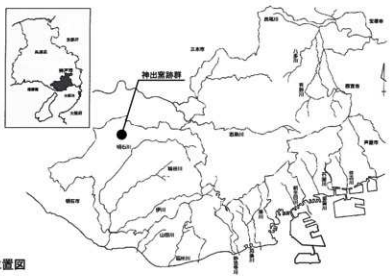


図１　神出窯跡群　遺跡位置図

第２節　調査組織

発掘調査及び報告書作成は神戸市文化財専門委員（昭和56年度～59年度、62年度）、文化財保護審議会委員（平成26年度～29年度）の指導を得て実施した。各年度の組織体制は、以下の通りである。

神戸市文化財専門委員会（埋蔵文化財部会委員）（昭和56年度～59年度、62年度）（役職は当時）

野地修左	神戸大学名誉教授（昭和61年度まで）
小林行雄	京都大学名誉教授
櫃上重光	神戸新聞社編集局長（昭和56年度）
	神戸新聞社副主筆（昭和57年度）
	神戸新聞社監査員・神戸市立博物館副館長（昭和58年度）
	神戸新聞社監査役・神戸市立博物館副館長（昭和59年度から）
宮本長二郎	奈良国立文化財研究所（昭和61年度から）

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）（平成26年度～29年度）

工樂善通	大阪府立狭山池博物館館長（平成27年８月12日まで）
黒崎　直	大阪府立弥生文化博物館館長（平成27年８月13日から）
菱田哲郎	京都府立大学文学部教授

現地調査・出土遺物整理

昭和56年度
教育委員会事務局

教育長	安好　匠
社会教育部長	畑岡　瑞夫
文化課長	安田　博司
埋蔵文化財係長	奥田　哲通
事務担当学芸員	丸山　潔
	渡辺　伸行
調査担当学芸員	丹治　康明

昭和57年度
教育委員会事務局

教育長	山本　治郎
社会教育部長	太田　修治
文化財課長	八尾　明
埋蔵文化財係長	奥田　哲通
事務担当学芸員	丸山　潔
	渡辺　伸行
調査担当学芸員	丹治　康明

昭和58年度
教育委員会事務局

教育長	山本　治郎
社会教育部長	太田　修治
文化財課長	八尾　明
埋蔵文化財係長	奥田　哲通
事務担当学芸員	福田　信安
	宮本　郁雄
調査担当学芸員	森田　稔

昭和59年度
教育委員会事務局

教育長	山本　治郎
社会教育部長	太田　修治
文化財課長	八尾　明
埋蔵文化財係長	奥田　哲通
事務担当学芸員	菅本　宏明
事務職員	沢田　剛
調査担当学芸員	森田　稔

昭和62年度
教育委員会事務局

教育長	山本　治郎
社会教育部長	岡村　二郎
文化財課長	西川　知佑
埋蔵文化財係長	奥田　哲通
文化財課主査	中村　善則
事務担当学芸員	渡辺　伸行
調査担当学芸員	丹治　康明

出土遺物再整理・報告書作成

平成26年度
教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野　展也
文化財課長	千種　浩
文化財専門役	丸山　潔
埋蔵文化財係長	前田　佳久
埋蔵文化財センター担当係長	安田　滋
文化財課担当係長	斎木　巌
同	松林　宏典
報告書作成担当学芸員	纐纈　文佳
遺物整理担当学芸員	佐伯　二郎

平成27年度
教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野　展也
文化財課長	千種　浩
文化財専門役	丸山　潔
埋蔵文化財係長	前田　佳久
埋蔵文化財センター担当係長	安田　滋
文化財課担当係長	斎木　巌
同	松林　宏典
報告書作成担当学芸員	纐纈　文佳
遺物整理担当学芸員	佐伯　二郎
	中谷　正

平成28年度
教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	日下　優
文化財課長	千種　浩
埋蔵文化財センター担当課長	安田　滋
埋蔵文化財係長	前田　佳久
文化財課担当係長	斎木　巌
同	松林　宏典
事務担当学芸員	佐伯　二郎
報告書作成担当学芸員	纐纈　文佳
	岡田　健吾
遺物整理担当学芸員	中谷　正

平成29年度
教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	日下　優
文化財課長	千種　浩
埋蔵文化財センター担当課長	安田　滋
埋蔵文化財係長	前田　佳久
文化財課担当係長	松林　宏典
同	中村　大介
事務担当学芸員	佐伯　二郎
報告書作成担当学芸員	纐纈　文佳
遺物整理担当学芸員	谷　正俊

第３節　調査と整理の経過、整理及び本書記載の方法

（１）調査の経過

昭和56年度には宮ノ裏支群（昭和56年６月22日～９月２日）と釜ノ口支群（昭和56年10月28日～12月25日）の調査をおこない、各支群で窯跡や灰原を検出した。

昭和57年度には堂ノ前支群、田井裏支群、池ノ下支群、南下地区の調査をおこなった。調査期間は昭和57年８月23日～12月25日である。堂ノ前支群では、検出した８基の窯跡のうち７基は現状保存されることになり、表面検出のみで調査を完了した。池ノ下支群では、現状保存できない煙管状窯（３号窯）の切り取り保存をおこなった。

昭和58年度には老ノ口支群の調査をおこない、窯跡や灰原などを検出した。調査期間は昭和58年６月１日～昭和59年３月31日である。

昭和59年度は前年度に引き続き、老ノ口地区の調査をおこなった。調査期間は昭和59年６月28日～12月27日である。前年度調査地の西側に広がる地点である。窯跡、灰原、粘土採掘坑、集落跡を検出した。トレンチ調査のため、各遺構の全容を明らかにすることはできなかった。老ノ口地区の調査と並行して、上人谷池内で灰原を２箇所発見し、遺物の採集をおこなった。

昭和62年度は万堡池支群の調査をおこない、窯跡と灰原を検出した。調査期間は昭和63年２月15日～２月26日である。窯跡は溜池改修工事に伴う仮設道路建設工事により破壊された部分の精査をおこなった他は、現状保存を図り、窯体断面の土層転写をおこなった。この調査時に、万堡池の南半部で窯跡を新たに１基発見し、灰原の遺物の採集をおこなった。

（2）整理の経過

平成26年度より神出窯跡群の発掘調査報告書を刊行すべく、報告書作成の準備に着手し、平成29年度に本書を刊行した。

1．遺構

平成27年度に、調査後整理が十分になされていなかった図面・写真・調査記録などの照合をおこない、確認できたものについて、平成28～29年度に図版の作成・トレース作業をおこなった。

2．遺物

平成26年度に土器と瓦を分別し、瓦の遺物台帳を支群・調査年度ごとに作成した。また、各瓦の凹凸両面における調整の観察と法量（主に厚さ）の計測作業をおこなった。

平成27年度は土器の遺物台帳を作成し、それに基づき資料化する土器をピックアップした。これらの土器について、接合・マーキング作業をおこなった後、実測図を作成した。

平成28年度は引き続き、土器の実測図を作成し、全支群の窯跡出土土器の実測を終えた段階で、型式分類をおこなった。それに基づき、灰層出土土器を再ピックアップし、実測図を作成した。同時に全器種の口径を計測し、個体数の復元をおこなった。須恵器鉢に関しては、型式分類をおこない、型式ごとに計測した。瓦は、実測図の作成・採拓をおこなった。

平成28～29年度にかけて土器・瓦の図版を作成し、トレース作業をおこなった。

（3）整理及び本書記載の方法

1．遺構

窯跡の名称は支群ごとに1号窯から付している。遺構名の付し方を統一するため、基本的に最も東に位置する窯跡を1号窯として、西に向かって昇順に付している。そのため、各調査年度の『年報』において報告した名称とは異なるものがある。遺構名が異なる場合は各章で、『年報』と本書における遺構名の対照表を掲示している。

ただし、池ノ下支群は『昭和57年度年報』（1984）の名称に従い、老ノ口支群においては、調査年度が2ヶ年に渡っているため、名称は通して付している。

2．土器

①以下の通り、支群ごとに整理及び対象資料が異なる。

宮ノ裏支群：窯跡及び灰原から出土した資料を対象とした。灰原の区分名は調査時に設定されたグリッドに、出土層位名は遺物の取り上げ時の記録に従った。

釜ノ口支群：窯跡から出土した資料のみを対象とした。

堂ノ前支群：1号窯・灰原から出土した資料を対象とした。灰原出土の資料は調査時のグリッド、出土層位は遺物の取り上げ時の記録に従った。

田井裏支群：窯跡及びその関連遺構・灰原と土器だまりから出土した資料を対象とした。

池ノ下支群・老ノ口支群（1983）：窯跡及び灰原から出土した資料を対象とした。調査記録から、出土地点を窯跡内と灰原に区別できない資料が多い。

老ノ口地区（1984）：窯跡・関連遺構・灰原から出土した資料を対象とした。

万堡池支群：出土地が判明している資料すべてを対象とした。

②遺物番号については支群ごとに1から通し番号を付した。資料を混同しないため、本文

中では「図版番号－遺物番号（例：図１－10、図２－11）」のように表記する。老ノ口支群は調査年度ごとに１から番号を付している。

３．瓦

①本書においては、各支群の調査で出土した軒瓦については、原則として全資料を報告することとした。ただし、瓦当面が著しく欠損や磨滅しており、瓦当文様の判別が困難な資料については除外した。掲載した軒瓦は全334点（軒丸瓦148点、軒平瓦186点）である。

②調査当時に採った拓本が存在するものの、現在その所在が不明である資料が複数存在する。それらについては、参考資料として拓本のみを掲載することにした。実物との照合ができないため、掲載した拓本の向きは任意の方向となっている。

③図版については、それぞれの軒瓦において、拓本と断面図を掲載した。ただし、一部の細片資料については、拓本のみ掲載している。拓本は丹治が採拓したものを使用し、不備・不足があるものについては岡田・纐纈が新たに採拓した。また断面図は、岡田が新たに全点実測した。

④遺物番号は、軒丸瓦についてはNM○○、軒平瓦についてはNH○○とし、下記の通り、番号を付した。老ノ口支群は年度ごとに番号をわけた。

宮ノ裏支群101～	釜ノ口支群201～	堂ノ前支群301～	田井裏支群401～
池ノ下支群501～	南下地区601～	老ノ口支群（1983）701～	
老ノ口地区（1984）801～		万堡池支群901～	

例えば、宮ノ裏支群出土の軒丸瓦にはNM101～NM123、軒平瓦にはNH101～NH154の番号を付している。

⑤丸瓦・平瓦については本来、軒瓦と合わせて報告すべきであるが、今回報告は見送った。ただし、写真図版に丸瓦・平瓦を数点掲載しているので、参照されたい。

⑥鬼瓦については、主要なものを第13章で報告している。

４．阪神・淡路大震災

本書に掲載する遺物の多くは、平成７年当時、長田区にあった市営重池住宅１階に併設されていた旧おもいけ幼稚園の空き教室に収蔵されていたが、阪神・淡路大震災によって被災した。そのため、多くの資料が滅失・混在することとなった。

整理時に、他地点の混入が多く認められた資料に関しては、今回の報告対象から除外したが、混入しているかどうか確認できない資料が大半であった。また、混入が認められたが、資料数が少なく報告せざるを得なかった資料に関しては、本文中でその都度、混入の事実を記載している。

写真１　阪神・淡路大震災による遺物の被災状況

[1] 池の名前は「万宝池」（地形図参照）と表記されるが、支群名は既報告で「万堡池」としているため、既報告に準じる。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境（図３）

神出窯跡群は、神戸市域西端から加古川市域に広がる印南野台地の北東端に位置する。周辺は、雌岡山とそれに連なる隆起扇状地及び高位段丘面からなり、小河川による浸食によって、谷が入り込む。窯跡は主に、雌岡山西側の開析谷と雌岡山の南麓から西麓に点在する。また窯跡が存在する谷と谷の間にある段丘面上に集落が築かれた。

第６－１次調査（宮ノ裏支群）は、神出窯跡群の西端、神出町北から広谷に向かって開く谷に立地する窯跡群である。この谷の二十番池から南に分かれる支谷の最奥に構築されている。同じ開析谷上に鴨谷支群も存在する（兵庫県教育委員会2011）。調査地の中すぐ南には三坂神社[1]が鎮座し、神社の南側に県道65号線が東西に通っている。現在は調査地東側に国道175号線神出バイパスが敷設されている。調査当時は、南西に宮池が存在していたが、現在は埋められている。

第６－２次調査（釜ノ口支群）は、神出窯跡群の南西端にあたり、神出町田井に所在する窯跡群である。神出町田井に存在する東西方向の広い谷から、南東に分かれる支谷の南側斜面に存在する。当時は南に明治池が存在したが、現在は埋められている。現在は調査地東側に国道175号線神出バイパスが通り、その敷設に伴う調査では、今回の調査地の南東に工房跡と見られる掘立柱建物跡が見つかっている（兵庫県教育委員会2011）。

第７－１次調査（南下地区）は、神出町東・南に位置する。池ノ下支群の南東にあたり、掘立柱建物跡や溝、土坑などを検出した。すぐ南で粘土採掘坑を検出している（妙見山麓遺跡調査会2006）。調査当時は南に堂ノ池が存在したが、現在は埋められている。

第７－２次調査（堂ノ前支群）は、釜ノ口支群が立地するのと同じ開析谷の北側斜面に立地する窯跡群である。北側には観音池があり、現在は、国道175号線と国道175号線神出バイパスに挟まれた地点である。

第７－３次調査（田井裏支群）は、神出町田井に位置する窯跡である。堂ノ前支群の北東、観音池の南東に存在する。釜ノ口支群・堂ノ前支群と同じ開析谷から北に分かれる小さな支谷に位置する。西側斜面に窯跡が、東側斜面に土器だまりが検出されている。

第７－４次調査（池ノ下支群）は、神出町田井に位置する窯跡群である。釜ノ口支群・堂ノ前支群・田井裏支群の３支群と同じ谷の南側斜面に立地する。東側の中ノ池と西側の国道175号線に挟まれた地点である。池ノ下支群の西側に窯跡を１基確認している（妙見山麓遺跡調査会1989）。この窯跡の焚口の方向は不明だが、位置関係から池ノ下支群と一連のものと考えられる。

第８・９次調査（老ノ口支群）は、神出窯跡群の北西、神出町北に位置する。第８・９次調査で見つかった窯跡は上人谷池から口池に入り込む谷の北側斜面に存在する。第９次調査で見つかったその他灰原は、谷の分岐点である上人谷池付近で３箇所、上人谷池から円弧状に入り込む谷に２箇所見つかっている。この他に、上人谷池の北側で２箇所の灰原を確認している（妙見山麓遺跡調査会1989）。第９次調査で見つかった集落跡は、窯跡・灰原を検出した２つの谷の間の段丘面上に、粘土採掘坑は南の谷内に存在する。

第17次調査（万堡池支群）は、神出窯跡群の北端にあたり、神出町小東野・東の境界に位置する窯跡群である。雌岡山から北西に入り込む谷中に造られた、万宝池内に存在する。北の支谷に窯跡２基と灰原を検出している。見つかっている窯跡や集落跡の大半は雌岡山南西麓に位置するが、万堡池支群は数少ない雌岡山北麓に所在する窯跡群である。

第２節　歴史的環境（図２）

周辺では旧石器時代から鎌倉時代に至る各時期の遺物・遺跡が発見されている。

旧石器・縄文時代は、笹ヶ池遺跡や金棒池遺跡、大皿池遺跡など主に雌岡山東麓でナイフ形石器など遺物の散布が認められる。他に青池遺跡や白蛇池遺跡、木屋池遺跡でも旧石器時代の遺物が採集されている。また、元住吉山遺跡では縄文時代後期後半の標識土器である元住吉山土器が出土している。

弥生時代の遺跡は雌岡山周辺には見られず、丘陵を隔てた南側、押部谷町に多く分布している。鍋谷池遺跡は中期の竪穴建物や甕棺、焼土坑の他、前期の土器も出土している高地性集落である。養田中の池遺跡では、中期の石器製作場を含む多数の竪穴建物や遺物が出土しており、磨製石剣も出土している。元住吉山遺跡では弥生時代中期～後期の遺構を検出しており、養田遺跡では後期のベッド状遺構を伴う大型の竪穴建物や多数の土器が出土している。

古墳時代は、前期初頭に養田中の池古墳が存在する。一辺10m の方墳で、割竹形木棺２基以上、土器棺１基の主体部を持つ。後期には、雌岡山周辺に雌岡山群集墳や金棒池古墳群といった群集墳が数多く点在する。これらの多くは円墳だが、金棒池の南岸あたりに位置する金棒池１号墳は前方後円墳であることが確認されている。他に、神出地区圃場整備事業に伴う調査で発見された神出東古墳群や新内古墳がある。神出東古墳群は削平を受けているものの、横穴式石室を持つ円墳である。新内古墳は単独の円墳であり、墳丘は著しい削平を受け、埋葬施設などは不明だが、周溝から多量の遺物が出土している。須恵器は多数の器種があり、埴輪は円筒埴輪や朝顔形埴輪、人物埴輪の他に、全国的に類例の少ない双脚輪状文形埴輪も出土している。また押部谷町にも群集墳が多数見られる。寺谷群集墳や池谷群集墳が隣接している他、七曲り群集墳や内の池群集墳などが明石川左岸の丘陵上に存在している。七曲り群集墳は６基以上で構成されるが、大半は後世の削平により消滅している。その中で調査された６号墳は３基以上の主体部を持つ円墳である。主体部は木棺直葬であり、棺内に鉄刀や刀子といった鉄製品を納めている。出土した須恵器から６世紀前半の年代が与えられている。鍋谷池２号墳は６世紀中頃～後半の円墳である。主体部から須恵器、鉄製品が出土した他、周溝から多数の須恵器が見つかっている。後期の集落は、養田遺跡で方形の竪穴建物や掘立柱建物、祭祀をおこなったと思われる溝や土坑、完形の須恵器などが出土している。また七曲り群集墳の北東には藤原橋窯跡も存在し、６世紀後半の須恵器を焼成していた。

奈良時代は、押部谷町に細田遺跡、和田遺跡が存在するが、希薄である。

平安時代から中世まで神出窯跡群（神出遺跡）[2]が神出町一帯に分布し、窯跡や粘土採掘坑、集落跡などを検出している。押部谷町には細田遺跡で平安時代以降の水田跡、養田遺跡で平安時代の溝や土器溜め遺構が見つかっており、また、近世まで続く性海寺遺跡も存在する。また図２の地図の範囲外になるが、押部谷町には12世紀前半にあたる繁田窯跡が存在する。神出窯跡群と同時期の東播系須恵器窯であるが、１基のみであることや窯体構造などに違いが見られる。

第３節　既往の調査

従来、神出町の雌岡山周辺では窯跡の存在が知られており、分布調査が眞野修氏らによりおこなわれた（眞野1971、1974）。本格的な発掘調査は、昭和52年度に宅地造成に伴い、茶山支群の調査が最初におこなわれ、煙管状窯を１基検出している（神戸市立考古館1980、神戸市立

図2　周辺の遺跡（S＝1/25000）

1　神出窯跡群（神出遺跡）
2　広谷遺跡
3　白蛇池遺跡
4　木屋池遺跡
5　青池遺跡
6　雌岡山群集墳
7　西区No. 11
8　神出東古墳群
9　新内古墳
10　大池遺跡
11　笹ヶ池遺跡
12　金椗池西遺跡
13　金椗池古墳
14　西区No. 15
15　西区No. 16
16　西区No. 17
17　西区No. 18
18　金椗池遺跡
19　大畑池遺跡
20　寺谷群集墳
21　池谷群集墳
22　西区No. 45
23　住吉神社遺跡
24　蛸田遺跡
25　元住吉山群集墳
26　元住吉山遺跡
27　西区No. 56
28　西区No. 58
29　性海寺
30　大坪橋遺跡
31　西区No. 68
32　愛田遺跡
33　愛田中の池遺跡
34　藤原橋窯跡
35　七曲り群集墳
36　内の池群集墳
37　古野池群集墳
38　和田遺跡
39　鍋谷池遺跡
40　鍋谷池群集墳

博物館1986)。ここでは窯の中から人為的に投げ込まれたような状態で瓦や須恵器鉢、埦、小皿などが出土している。中でも瓦は、京都の石清水八幡宮に供給されたものと同笵の軒平瓦が３点出土した。

その後大規模な調査は、昭和54年度より圃場整備事業に伴い始まった。神戸市教育委員会や妙見山麓遺跡調査会により平成２年度まで継続的におこなわれ、主に雌岡山より南側の地域で平安時代から鎌倉時代の窯跡、集落跡、粘土採掘坑を多数検出している（神戸市教育委員会1983～1993、妙見山麓遺跡調査会1986・1989・1990・2006)。平成３年度～平成15年度までは、民間事業に伴う調査が神出町東において断続的におこなわれ、掘立柱建物跡や溝などの集落跡と粘土採掘坑を検出した（神戸市教育委員会1994～2006)。

兵庫県教育委員会による国道175号線神出バイパス建設に伴う37次調査（桑谷・鴨谷支群）がおこなわれ、それまで神出窯跡群の操業は11世紀中頃から開始されると考えられていたが、10世紀代に遡ることが判明した（兵庫県教育委員会2011)。

神出窯跡群は、雌岡山南西麓を中心に東西２km・南北２kmの範囲に窯跡が存在したと考えられる。既往の分布調査・発掘調査において現在まで約90基の窯跡と10箇所以上の灰原が見つかっている。

神出窯跡群で焼成された東播系須恵器は畿内各地や、瀬戸内海沿岸をはじめとして、東は鎌倉から西は北部九州まで流通していることが今までの研究により明らかになっている。瓦は12世紀前半のものを中心に、京都の六勝寺造営や地元寺院の建立に際し、多量に生産されたと考えられ、尊勝寺などから同笵もしくは同文の軒瓦が出土している。

神戸市西区神出町一帯は、良質の粘土層と豊かな森林資源に恵まれ、当時は窯業に適した地域であったようで、窯の操業は平安時代から鎌倉時代まで続いたと考えられている。

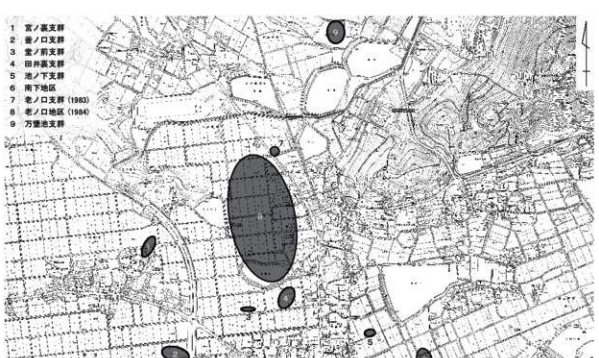


図３　本書掲載の調査位置図（1/15,000）

参考文献

神戸市教育委員会1976『元住吉山遺跡』

神戸市教育委員会1983『昭和56年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1984『昭和57年度　神戸市文化財年報』

神戸市教育委員会1985『昭和57年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1986『昭和58年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1987『昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1988『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1988『繁田古窯址』

神戸市教育委員会1989『昭和61年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1990『昭和62年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1991『昭和63年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1992『平成元年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1993『平成２年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1994『平成３年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1997『平成６年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会1998『平成７年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会2002『平成11年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会2003『平成12年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会2004『平成13年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会2006a『平成15年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会2006b『西神ニュータウン内の遺跡』

神戸市教育委員会2017『神戸市埋蔵文化財分布図　平成29年度版』

神戸市考古館1980『地下にねむる神戸の歴史展』

神戸市立博物館1986『神戸市立博物館だより』No. 16

兵庫県教育委員会1998『兵庫県文化財調査報告第171冊　神出窯跡群』

兵庫県教育委員会2011『兵庫県文化財調査報告第407冊　神出窯跡群Ⅲ』

兵庫県教育委員会2012『兵庫県文化財調査報告第418冊　神出窯跡群Ⅱ（神出遺跡の調査）』

真野修1971「神出窯跡群の須恵器生産形態」『武陽史学』第５巻第１号　武陽史学会

真野修1974「雌岡山周辺の古窯址　神出窯跡群（１）」『神戸古代史』１・３　神戸古代史研究会

妙見山麓遺跡調査会1985『神出』

妙見山麓遺跡調査会1989『神出1986』

妙見山麓遺跡調査会1990『神出Ⅲ』

妙見山麓遺跡調査会2006『神出Ⅳ』

[1] 昭和41年発行地形図の表記は「八幡神社」である。

[2] 埋蔵文化財包蔵地としての遺跡名は、「神出窯跡群」であるが、集落域や粘土採掘坑などその他を含めて「神出遺跡」とも呼称されることがある。

表１　既往の調査

次数	調査年度	支群・地区名	所在地	調査主体	調査面積	調査内容	参考文献
1	昭和 52	茶山支群	神出町東字茶山	神戸市教育委員会	40㎡	窯跡１(11 世紀末葉～ 12 世紀初頭)	神戸市博 1986
2	昭和 54	広谷地区	神出町広谷	神戸市教育委員会	480㎡	焼土層	未報告
3	昭和 55	北地区	神出町北	神戸市教育委員会	800㎡	灰原、溝、ピット	未報告
4	昭和 55	古神地区	神出町古神	神戸市教育委員会	400㎡	遺構なし、時期差のある遺物	未報告
5	昭和 55	五百蔵地区	神出町五百蔵	神戸市教育委員会	200㎡	遺構・遺物なし	未報告
6-1	昭和 56	宮ノ裏支群	神出町北	神戸市教育委員会	2,500㎡	窯跡４、灰原	神戸市教委 1983
6-2		釜ノ口支群	神出町田井			窯跡７、灰原	
7-1	昭和 57	南下地区	神出町東	神戸市教育委員会	390㎡	溝、土坑、柱穴、粘土採掘坑	神戸市教委 1984・1985
7-2		堂ノ前支群	神出町田井		240㎡	窯跡８、灰原	
7-3		田井裏支群	神出町田井		125㎡	窯跡１、灰原	
7-4		池ノ下支群	神出町田井		125㎡	窯跡３、灰原	
8	昭和 58	老ノ口支群	神出町北	神戸市教育委員会	500㎡	窯跡２、灰原	神戸市教委 1986
9	昭和 59	老ノ口地区	神出町北	神戸市教育委員会	3,100㎡	窯跡２、灰原、掘立柱建物、溝、土坑、ピット、粘土採掘坑	神戸市教委 1987
10	昭和 60	東地区	神出町東	神戸市教育委員会	1,200㎡	溝、木棺墓（鎌倉前半）	神戸市教委 1988
11	昭和 60	東地区	神出町東	妙見山館遺跡調査会	2,000㎡	土坑、ピットなど（中世）	妙見山館遺跡調査会 1985
12	昭和 60	東地区	神出町東字追ノ谷	神戸市教育委員会	150㎡	溝、落込み、遺物包含層（13 世紀）	神戸市教委 1988
13	昭和 61	田井地区	神出町田井	神戸市教育委員会	1,950㎡	粘土採掘坑、掘立柱建物（12 ～ 13 世紀）	神戸市教委 1989
14	昭和 61	東地区	神出町東	妙見山館遺跡調査会	1,750㎡	溝、ピット（鎌倉）	妙見山館遺跡調査会 1989
15-1	昭和 62	東地区	神出町東	神戸市教育委員会	1,600㎡	溝・土坑・ピット（12 ～ 13 世紀） 窯跡１・粘土採掘坑、溝、ピット（鎌倉）	神戸市教委 1990
15-2		南地区	神出町南				
16	昭和 62	東地区	神出町東	妙見山館遺跡調査会	1,162㎡	窯跡、粘土採掘坑（平安～鎌倉）	妙見山館遺跡調査会 1990
17	昭和 62	万堡池支群	神出町小来野	神戸市教育委員会	100㎡	窯跡１・灰原	神戸市教委 1990
18	昭和 63	東地区	神出町東	妙見山館遺跡調査会	2,600㎡	横穴式石室（古墳後期） 窯跡（平安後期）	妙見山館遺跡調査会 2005
19	昭和 63	東地区	神出町東	神戸市教育委員会	2,130㎡	窯跡、掘立柱建物、溝、粘土採掘坑（鎌倉初頭）	神戸市教委 1991
20	平成１	東地区	神出町東	神戸市教育委員会 (財)神戸市スポーツ教育公社	2,320㎡	窯跡、掘立柱建物、溝、土坑、ピット（平安～鎌倉）	神戸市教委 1992
21	平成１	東地区	神出町東	妙見山館遺跡調査会	2,028㎡	掘立柱建物、溝、土器だまり、粘土採掘坑（平安）	妙見山館遺跡調査会 2005（一部）
22	平成２	東地区	神出町東	神戸市教育委員会	78㎡	溝、焼成土坑、ピット（中世）	神戸市教委 1993
23	平成３	東地区	神出町東	神戸市教育委員会	220㎡	掘立柱建物、溝、土坑（11 ～ 12 世紀）	神戸市教委 1994
24	平成３	東地区	神出町東	神戸市教育委員会	170㎡	溝（平安後期）	神戸市教委 1994
25	平成５	田井地区	神出町田井	兵庫県教育委員会	1,593㎡	灰原、掘立柱建物（平安末～鎌倉）	兵庫県教委 2012
26	平成６	垣内支群	神出町南字大西	兵庫県教育委員会	3,517㎡	窯跡７(平安後半)	兵庫県教委 1988
27	平成７	南地区	神出町東	妙見山館遺跡調査団	633㎡	粘土採掘坑（中世） 堤（近世）	妙見山館遺跡調査会 2005
28	平成７	東地区	神出町東	神戸市教育委員会	170㎡	溝（12 世紀中ごろ）	神戸市教委 1998
29	平成７	田井地区	神出町田井	兵庫県教育委員会	1,525㎡	集落跡（平安～中世） 掘立柱建物・炭窯	兵庫県教委 2012
30	平成９	芝垣内支群	神出町北字芝垣内	兵庫県教育委員会	1,070㎡	窯跡（平安）	兵庫県教委 2012
31	平成 10	北地区	神出町北	兵庫県教育委員会	2,876㎡	掘立柱建物、溝、土坑、井戸、水田（12 世紀前半～ 13 世紀中頃）	兵庫県教委 2012
32	平成 10	東地区	神出町東字畝ノ神	神戸市教育委員会	67㎡	遺物包含層	未報告
33	平成 11	東地区	神出町東	神戸市教育委員会	54㎡	溝、粘土採掘坑（中世）	神戸市教委 2002
34	平成 11	東地区	神出町東字天神前	神戸市教育委員会	91㎡	溝、土坑、ピット、落ち込み（11 世紀後半）	神戸市教委 2002
35	平成 12	東地区	神出町東字天神前	神戸市教育委員会	87㎡	溝、ピット（中世）	未報告
36	平成 13	東地区	神出町東字追ノ谷	神戸市教育委員会	120㎡	土坑、ピット、落ち込み（11 世紀中頃～後半）	神戸市教委 2004
37	平成 14	皇谷支群 鴨谷支群	神出町北 字皇谷・鴨谷	兵庫県教育委員会	4,226㎡	窯跡３、灰原、窯に伴う作業場	兵庫県教委 2011
38	平成 15	東地区	神出町東字奥ノ垣	神戸市教育委員会	64㎡	溝、土坑、柱穴（中世後半～近世）	神戸市教委 2006

支群名は従来の呼称を採用し、地区名は大字に従って、一部新たに付与した。
参考文献は前頁に記載した。

第３章　昭和56年度　第６－１次調査（宮ノ裏支群）の成果

第１節　調査区の設定と基本層序

（１）調査区の設定（図４）

宮ノ裏支群では試掘調査の結果をもとに、灰原の広がりと窯跡の確認を目的として、２×30mのトレンチを３本（Ⅰ～Ⅲトレンチ）設定した。各トレンチは10m単位でグリッドを設けた（A～C区）。その後、灰原がトレンチ外に広がることが確認できたため、トレンチを東側に30m延長して、同じくグリッドを設けた（A'～C'区）。また、Ⅲトレンチから北東方向に直交するⅣトレンチを、Ⅲ－A'・B区に長さ10m、Ⅲ－A区に長さ20mで設定した。灰原の確認できた範囲全体に調査区を広げ、窯跡の精査をおこなった。

拡張した調査区のうち、東半部では５×５mのグリッドを設けた。グリッド名は東西をⅠ～L区、南北を２～８区として、「Ⅰ－４」「K－６」のように表記した。西側は３号窯の前庭部にT字状にトレンチD・E区を設定した。

（２）基本層序（図５）

調査地における圃場整備前の地表面の標高は105.46～105.90mであり、南から北にわずかに傾斜している。圃場整備前の地表面から約0.1～0.7mは盛土・耕土層であり、その下層に遺物包含層である灰褐色粘質土が約0.3～0.4mの厚さで堆積している。遺物包含層の一部は調査区外に広がっている。遺物包含層の下は0.3～0.7mの厚さで灰層・焼土層が重なり合って堆積している。標高約104.40～105.20mで基盤層の上面となる。

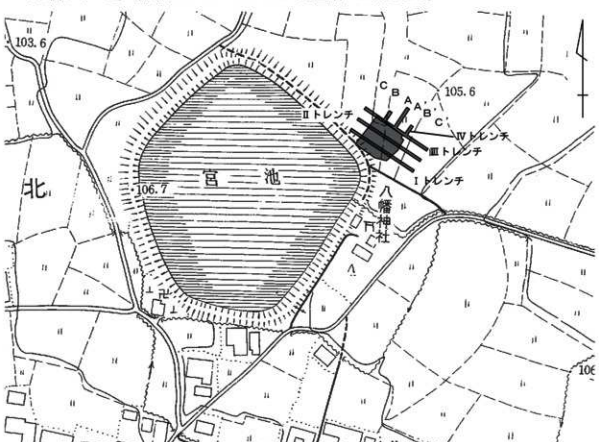
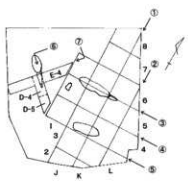
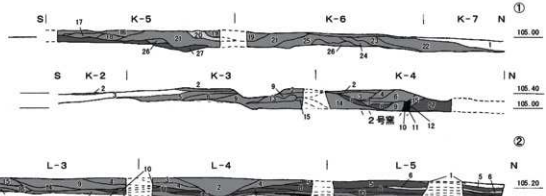


図４　宮ノ裏支群　トレンチ配置図（S＝1：3,000）

図5　宮ノ裏支群　土層断面図





①上層註記
耕土層
1　灰褐色粘質土
床層
2　炭焼土灰層（灰褐色粘質土を多く含む）
3　炭焼土灰層（炭土粒が少量、焼土ブロック含む）
4　炭焼土灰層（焼土粒を多く含む）
5　炭焼土灰層（焼土を多く含む）
6　炭焼土灰層（焼土ブロックを含む）
7　炭焼土灰層（焼土粒を少し含む）
8　純灰層（焼土粒を少量含む）
9　炭焼土灰層（地山ブロックを極少量含む）
②上層註記
2次焼窯
10　濃い暗赤褐（粘質）
11　濃い暗赤褐（粘質）
12　赤色暗赤褐（粘質）
床層
13　炭焼土灰層（青い炭とブロックを多く含む）
14　炭焼土灰層（焼土粒を極少量含む）
15　炭焼土灰層（焼土ブロックを少量含む）
16　炭焼土灰層（焼土粒を少し含む）
17　炭焼土灰層（焼土粒が多い）
18　炭焼土灰層（焼土ブロックを多く含む）
19　炭焼土灰層（粒子が小さい）
20　炭焼山灰層
21　炭焼土灰層（19よりも焼土が少）
22　炭焼土灰層（焼土粒をやや多く含む）
23　炭焼土灰層（焼土粒を少量含む）
24　炭焼土灰層（焼土を多量に含む）
25　炭焼土灰層（炭を多く含む）
26　炭焼土灰層（地山ブロックを含む）
27　純灰層

②上層註記
耕土層
1　灰褐色粘質土
床層
2　炭焼土灰層（粒子が小さい）
3　炭焼土灰層（2より焼土が少）
4　炭焼土灰層（焼土粒を少量含む）
5　純灰層（焼土粒が多い）
6　炭焼山灰層
7　純灰層
8　炭焼土灰層
9　炭焼土灰層（上層を多く含む）
10　炭焼土灰層（炭を多く含む）
11　純灰層（焼土粒を極少量含む）
12　炭焼土灰層（19より焼土が少）
13　炭焼土灰層（焼土ブロックを含む）
14　炭焼土灰層（焼土粒を少し含む）
15　炭焼山灰層
16　炭焼土灰層（焼土ブロックを含む）
17　炭焼土灰層（焼土粒を多く含む）
18　炭焼土灰層（上層・焼土を多く含む）
19　炭焼土灰層
20　炭焼土灰層（焼土粒を少し含む）
21　炭焼山灰層
22　炭焼土灰層（20よりも焼土を多く含む）

③上層註記
耕土層
1　灰褐色粘質土
床層
2　炭焼土灰層（粒子が小さい）
3　炭焼土灰層（2より焼土が少）
4　炭焼土灰層（焼土粒を少量含む）
5　純灰層（焼土粒が多い）
6　炭焼山灰層
7　純灰層
8　炭焼土灰層（6よりやや砂質が強い）
基盤層
9　灰褐色砂質土（地山質粒土）

④上層註記
耕土層
1　灰褐色粘質土
2　暗灰褐色炭焼粘質土
3　暗灰褐色炭焼粘質土
焼土層・灰層
4　炭焼土灰層（小片）
5　炭焼土灰層（焼土が少々多い）
6　炭焼土灰層（焼土粒が多い）
7　炭焼土灰層（小片が多い）
8　炭焼土灰層（上層は少量）
9　炭焼土灰層（焼土粒が多い）
10　炭焼土灰層（赤焼けが多い）
11　炭焼土灰層（上層にやや多く含む）
12　炭焼土灰層（焼土にやや多く含む）
13　炭焼土灰層（焼土粒が多い）
14　純灰層
15　炭焼土灰層（焼土ブロックを含む）
16　炭焼土灰層（地山ブロックを含む）
17　炭焼土灰層（焼土粒が多い）
18　炭焼土灰層（焼土ブロックを多く含む）
19　炭焼土灰層（粒子が小さい）
20　炭焼山灰層
21　炭焼土灰層（19よりも焼土が少）
22　炭焼土灰層（焼土粒をやや多く含む）
23　炭焼土灰層（焼土粒を少量含む）
24　炭焼土灰層（焼土を多量に含む）
25　炭焼土灰層（炭を多く含む）
26　炭焼土灰層（地山ブロックを含む）
27　純灰層

⑤上層註記
耕土層
1　灰褐色粘質土
2　炭焼土灰層（粒子が小さい）
3　炭焼土灰層（2より焼土が少）
4　炭焼土灰層（焼土粒を少量含む）
5　純灰層（焼土粒が多い）
6　炭焼山灰層
7　純灰層
8　炭焼土灰層（6よりやや砂質が強い）
基盤層
9　灰褐色砂質土（地山質粒土）

⑥上層註記
耕土層
1　灰褐色粘質土
2　炭焼土灰層（粒子が小さい）
3　炭焼土灰層（2より焼土が少）
4　炭焼土灰層（焼土粒を少量含む）
5　純灰層（焼土粒が多い）
6　炭焼山灰層
7　純灰層
8　炭焼土灰層（6よりやや砂質が強い）
基盤層
9　灰褐色砂質土（地山質粒土）

⑦上層註記
耕土層
1　灰褐色粘質土
2　炭焼土灰層（粒子が小さい）
3　炭焼土灰層（2より焼土が少）
4　炭焼土灰層（焼土粒を少量含む）
5　純灰層（焼土粒が多い）
6　炭焼山灰層
7　純灰層
8　炭焼土灰層（6よりやや砂質が強い）
基盤層
9　灰褐色砂質土（地山質粒土）

⑧D－4・5／⑦D・E－4上層註記
耕土層
1　灰褐色粘質土
焼土層・灰層
2　炭焼土灰層（炭・焼土＝7：3）
3　炭焼土灰層（焼土粒がやや多い）
4　炭焼山灰層（炭：地山＝5：5）
5　炭焼山灰層（炭：地山＝3：7）
6　炭焼土灰層
（赤焼けブロックを含む、炭：焼土＝8：2）
7　純灰層
8　炭焼土灰層（赤焼けが多量）
9　炭焼土灰層（地山をわずかに含む）
10　炭焼山灰層（炭：地山＝2：8）
11　炭焼山灰層
基盤層
12　地山ブロック
13　灰褐色粘質土

0　1:100　5m

窯壁
焼土層
純灰層・混灰土器層
混灰焼土層・混焼土灰層
混地山灰層・混土灰層

第２節　調査成果（図６）

調査区において、東西約35m×南北約30mの1,050㎡に広がる灰原、窖窯３基、煙管状窯１基を検出した。

調査地付近は開墾時に削平されたため地形が平坦になっており、窯跡の多くは削平を受けているものと予想された。しかし調査の結果、現地形の大半が盛土により形成されていたことと、窯体の傾斜が緩やかであったため、比較的良好な状態で窯跡が検出できた。調査地は、旧地形において、北西から南東に入り込んだ谷の最も奥の部分に位置している。

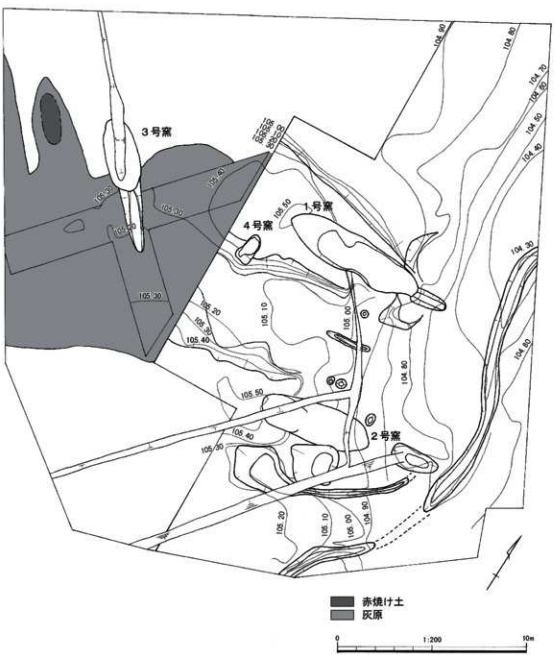


図６　宮ノ裏支群　遺構平面図

（1）1号窯（図7、8）

1号窯は調査区北東で検出した窯跡である。焼成部の一部と煙道部は削平されており、現存長5.4m、最大幅1.55m、現存高0.45m、床面傾斜角度9度を測る。窯体が築かれた谷に直交する東西方向を主軸に持ち、ほぼ真東に焚口を開く。窯体断面から2～3回の修復がおこなわれたことが窺え、焚口付近では窯体が拡張されている。焚口から約2mのところでわずかに段差をつくっており、焼成部と燃焼部の境と考えられる。『昭和56年度年報』では、「周辺部から土を取り、盛土をして築山状にした部分を穿って、窯体を構築している」としたが、神出窯跡群における他の調査例（兵庫県教育委員会2011、2012）から、浅く地面を掘り下げ、支柱などを設けて側面の盛土および窯壁の構築をおこなったと考えられる。

出土土器は土師器皿、羽釜、須恵器鉢、塊、甕である。

図8－1～4は、窯体内の出土である。図8－1は土師器皿である。図8－2は土師器羽釜である。外面には平行タタキが見られ、ススコゲが全面に付着する。図8－3・4は須恵器鉢である。

図8－5～7は土層観察用に残した畦の埋土から出土した。

図8－5・6は須恵器塊である。図8－7は須恵器甕の胴部である。図8－8～12はすべて須恵器鉢で、埋土下層からの出土である。

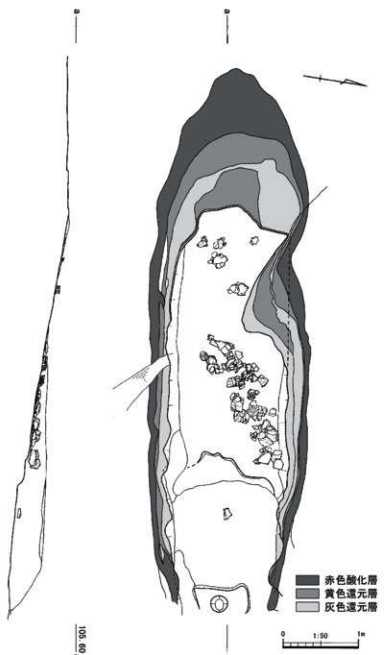


図7　宮ノ裏支群　1号窯平面・立面図

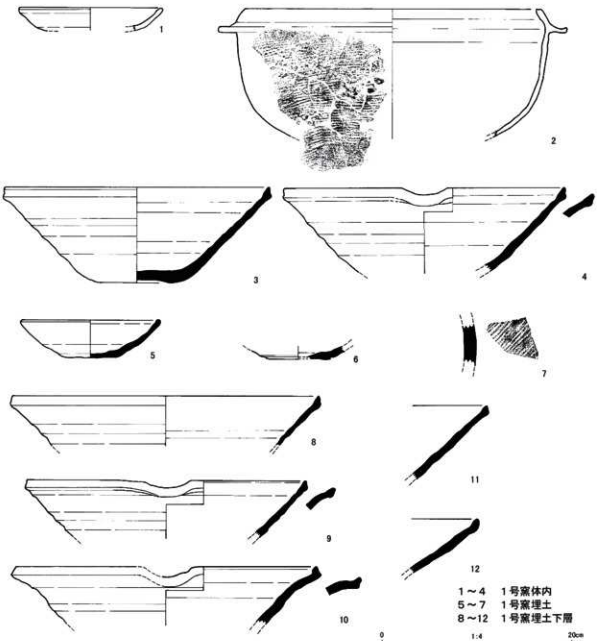


図8　宮ノ裏支群　1号窯出土土器

（2）2号窯（図9、10）

2号窯は調査区南東で検出した窯跡である。焼成部の一部と煙道部は削平されており、現存長4.7m、最大幅2.2m、現存高0.4m、床面傾斜角度7度を測る。1号窯と平行に並んでおり、焚口はほぼ真東を向く。窯体断面から2～3回の修復がおこなわれたことが窺え、焚口付近で窯体を拡張している。窯体の構築方法は1号窯と同様と考えられる。また、窯体の中央には縦に並んだピットを4つ検出しており、これは窯体の天井部を支えた支柱ピットと考えられる。窯跡のすぐ南には溝が確認されているが、用途は不明である。

土器は窯体内から土師器坏・皿、須恵器鉢・埦・皿が出土している。ただし、2号窯を横断する土層断面図（図5①）から、2号窯の窯壁を切って灰層が流れ込んでいる様子がわかる。このことから窯体内出土資料であっても、2号窯に帰属しない可能性がある。

図９－13は土師器托の底部である。図９－14は土師器皿である。図９－15は土師器坏である。図９－16・17は須恵器塊である。図９－18～20は須恵器鉢である。図９－18は片口を有する。

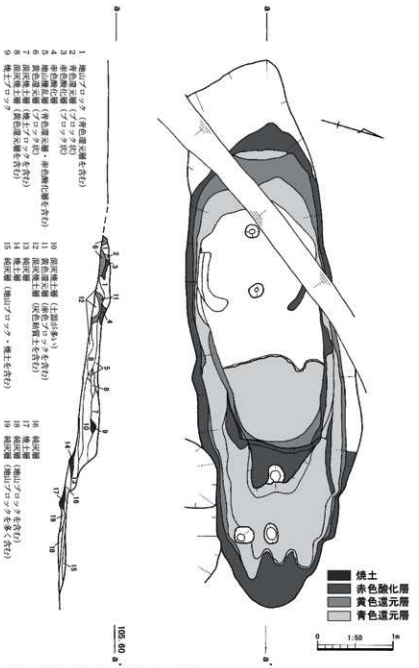


図９　宮ノ裏支群　２号窯平面・断面図

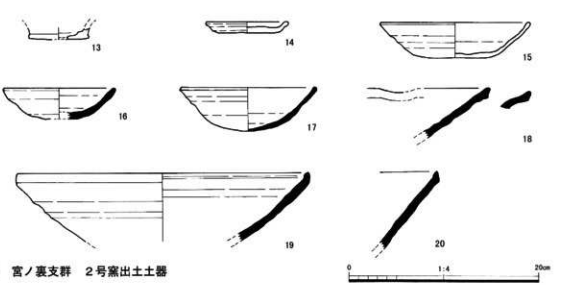


図10　宮ノ裏支群　２号窯出土土器

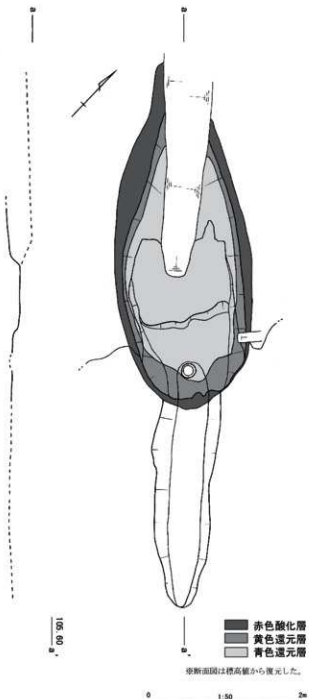


図11　宮ノ裏支群　３号窯平面・断面図

（３）３号窯（図11、12）

３号窯は調査区北西で検出した窯跡である。

１・２号窯と同じく焼成部の一部と煙道部は削平されている。現存長3.75m、最大幅1.58m、現存高0.2mを測る。窯跡の中央部が攪乱を受けているため、傾斜角度は不明である。焚口は南東を向いており、排水溝が付随している。窯体断面から２～３回の修復をおこなっている。灰層の堆積状況から１・２号窯から続く谷状の掘り込みに灰や土器を廃棄していると考えられる。

また、図６より３号窯の西側に「赤焼け土」と大きく北側に張り出した灰層を確認できる。他にこれに関する調査記録はないが、消滅した窯跡を示す痕跡の可能性がある。

土器は須恵器鉢・埦が出土しており、そのうち図示した資料は須恵器鉢３点、須恵器埦１点である。すべて窯体内の出土である。図12－21は須恵器埦である。図12－22～24は須恵器鉢であるが、小片である。このうち図12－23は片口を有するが、ほとんど欠損しており、図化できなかった。

図12　宮ノ裏支群　３号窯出土土器

（4）４号窯（図13）

４号窯は調査区中央で検出した窯跡である。他の３基が窖窯であるのに対し、この窯は煙管状窯である。現存長2.8m、最大幅1.55m、現存高0.2mを測り、かなり削平を受けている。３号窯と同じく１・２号窯から続く谷状の掘り込みに灰や土器を廃棄している。

遺物整理時には、４号窯体内出土の遺物は確認できなかった。しかし窯跡平面図・立面図・写真からは、平瓦が数点確認できる。調査記録の検討の結果、釜ノ口支群４号窯体内として次章で報告する遺物が、宮ノ裏支群４号窯の遺物である可能性がある。

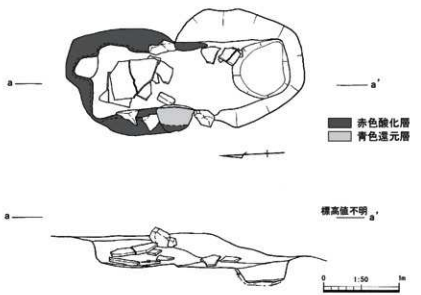


図13　宮ノ裏支群　４号窯平面・立面図

（5）灰原

灰原から土器は大量に出土しており、器種としては土師器坏・皿・鍋・羽釜、須恵器鉢・埦・皿・甕がある。グリッドごとに出土層位がわかる資料の一部を図化した。しかし、詳細な記録が無いため、遺物の出土層位名と土層断面図の土層名の正確な対応関係については不明である。よって、主に「灰層」・「混灰焼土層」から出土している資料を図化した。出土層位名には「黄褐色混灰焼土層」「黄褐色混焼土灰層」なども存在したが、検討の結果、これらは同一層を指すものと考え、「黄褐色混灰焼土層」に統一して報告する。また土層断面図から層位の上下関係を推測し、上層と考えられる層位から順に述べる。

①D－４・５グリッド（図14）

D－４・５グリッドは３号窯の前庭部に、窯の長軸と同一方向に設定されたグリッドであると考えられる。遺物は、灰層と灰層下の黄褐色混灰焼土層から取り上げている。

D－４灰層においては土師器坏・皿・鍋・羽釜、須恵器鉢・埦・皿を図化した。図14－25・26は土師器皿である。図14－27は土師器坏である。図14－28・29は土師器鍋である。図14－30は土師器羽釜である。図14－31は須恵器皿である。図14－32は須恵器埦である。図14－33～37は須恵器鉢である。

D－４黄褐色混灰焼土層においては土師器皿・鍋・羽釜、須恵器鉢を図示した。図14－38は土師器皿である。図14－39は土師器鍋である。図14－40は土師器羽釜である。図14－41～43は須恵器鉢で、図14－42は片口を有する。

D－5黄褐色混灰焼土層においては、須恵器鉢を図化した（図14－44～46）。小片が多い。図14－46は鉢底部である。

②Ⅰ－4グリッド（図15）

Ⅰ－4グリッドは4号窯の前庭部あたりに設定されたグリッドである。土器は土師器坏・皿・羽釜、須恵器鉢・埦・皿・甕が出土している。

黄褐色混灰焼土層からは、土師器皿、須恵器鉢・埦・皿を図化した。図15－47は土師器皿である。図15－48は須恵器皿である。図15－49・50は須恵器埦である。図15－51～56は須恵器鉢である。このうち51・52・54・56は片口を有する。

黄褐色混灰焼土層（下層）からは、土師器坏・皿、須恵器鉢・甕を図化した。図15－57は土師器皿、図15－58は土師器坏である。図15－59は須恵器甕の胴部である。図15－60～62は須恵器鉢で、60は片口を有する。

純灰層からは、土師器羽釜、須恵器鉢・埦を図化した。図15－63は土師器羽釜である。内面にハケメを施す。図15－64は須恵器埦である。図15－65～67は須恵器鉢であり、67は片口を有するが、ほとんど欠損しており、図化できていない。

③Ⅰ－5グリッド（図16）

Ⅰ－5グリッドは4号窯の存在する地点に設定されたグリッドである。土器は、土師器坏・皿、須恵器鉢・埦・皿が出土している。

黄褐色混灰焼土層からは、土師器坏・皿、須恵器鉢・埦・皿を図化した。図16－68～71は土師器皿である。図16－71は、平高台をもつ。図16－72・73は土師器坏である。図16－74は須恵器皿である。図16－75は須恵器埦である。図16－76～79は須恵器鉢であり、78は片口を有する。図16－80は須恵器鉢であり、純灰層からの出土である。

④J－4グリッド（図17）

J－4グリッドは2号窯の西半にあたる位置に設定されたグリッドである。前述したように窯壁を切って灰層が流れ込んでいることから、2号窯以外の窯に由来する資料の可能性もある。

黄褐色混灰焼土層からは、土師器坏、須恵器鉢・埦・甕を図化した。図17－81は土師器坏である。図17－82・83は須恵器埦である。図17－84～90は須恵器鉢である。図17－91は須恵器甕である。外面に平行タタキを施す。

赤褐色混灰焼土層からは、須恵器鉢・埦・皿を図化した。図17－92は須恵器皿である。図17－93は須恵器埦である。図17－94～98は須恵器鉢である。図17－94は小型の鉢で、図17－95・96は片口を有する。

⑤J－5グリッド（図18）

J－5グリッドは1・2号窯の間から1号窯の南東部にかけて設定されたグリッドである。

赤褐色混灰焼土層から、土師器皿、須恵器鉢・埦・皿・壺を図化した。図18－99は土師器皿である。図18－100は須恵器皿である。図18－101は須恵器埦である。図18－102～107は須恵器鉢であり、106は片口を有する。図18－108は、須恵器壺肩部である。一条の突帯を貼り付けている。

⑥J－6グリッド（図19）

J－6グリッドは1号窯の北東部に設定されたグリッドである。土器は、須恵器鉢・埦・皿が出土している。

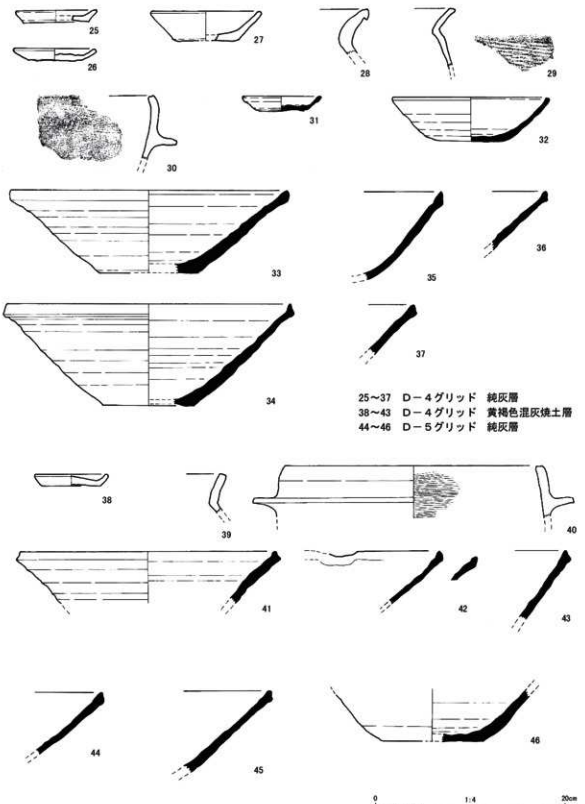


図14　宮ノ裏支群　D－4・5グリッド出土土器

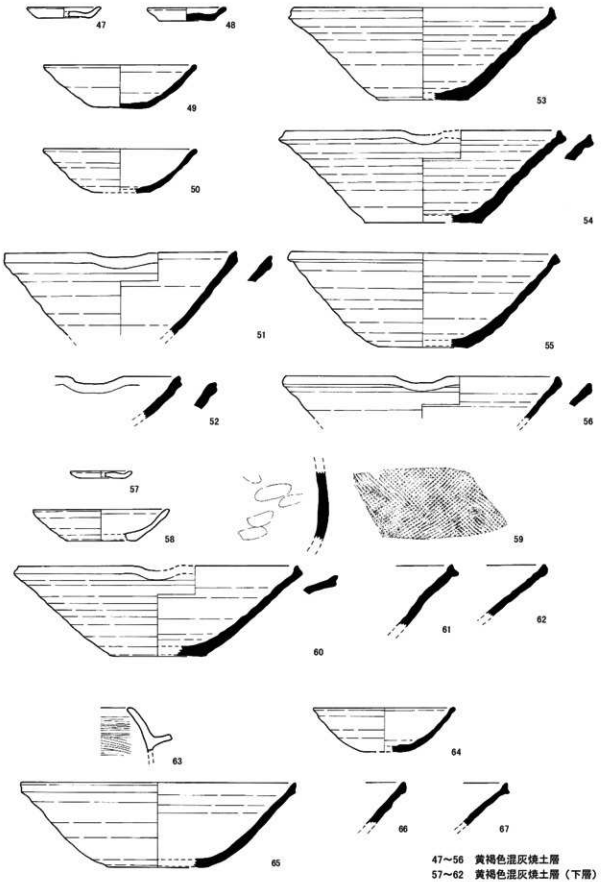


図15　宮ノ裏支群　Ⅰ－４グリッド出土土器

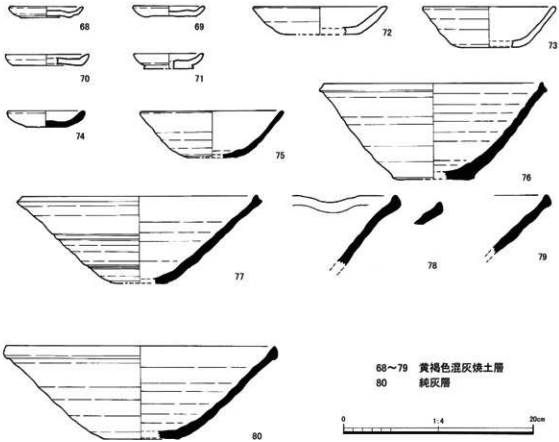


図16 宮ノ裏支群 Ⅰ－5グリッド出土土器

混灰焼土層からは、須恵器鉢・塊・皿を図化した。図19－109は須恵器皿である。図19－110・111は須恵器塊である。図19－112～117は須恵器鉢であり、114・115・117は片口を有するが、115の片口はほとんど欠損しており、断面の図化はできなかった。

図19－118・119は純灰層からの出土で、須恵器鉢である。

純灰層（下層）からは、須恵器鉢・皿を図示した。図19－120は須恵器皿である。図19－121・122は須恵器鉢である。

⑦K－3グリッド（図20）

K－3グリッドは2号窯の南東に設定されたグリッドである。土器は、須恵器鉢・塊・皿・甕が出土している。

混灰焼土層からは、須恵器鉢・塊・皿を図示した。図20－123は須恵器皿である。図20－124・125は須恵器塊である。図20－126～128は須恵器鉢である。

混灰層からは、須恵器鉢・塊を図化した。図20－129は須恵器塊である。図20－130は須恵器片口鉢である。片口はほとんど欠損しており、図化できない。この混灰層は、上記の混灰焼土層と同一層を指す可能性もある。

純灰層からは、須恵器鉢・塊・甕・皿を図示した。図20－131は須恵器皿である。底部がかなり厚く、口縁部はわずかに立ち上がる。図20－132・133は須恵器塊である。図20－134～139は須恵器鉢である。135・136・137・139は片口を有する。139は片口をほとんど欠損しており、図化できなかった。図20－140は須恵器甕の胴部である。外面に平行タタキを施す。内面はナデで調整している。

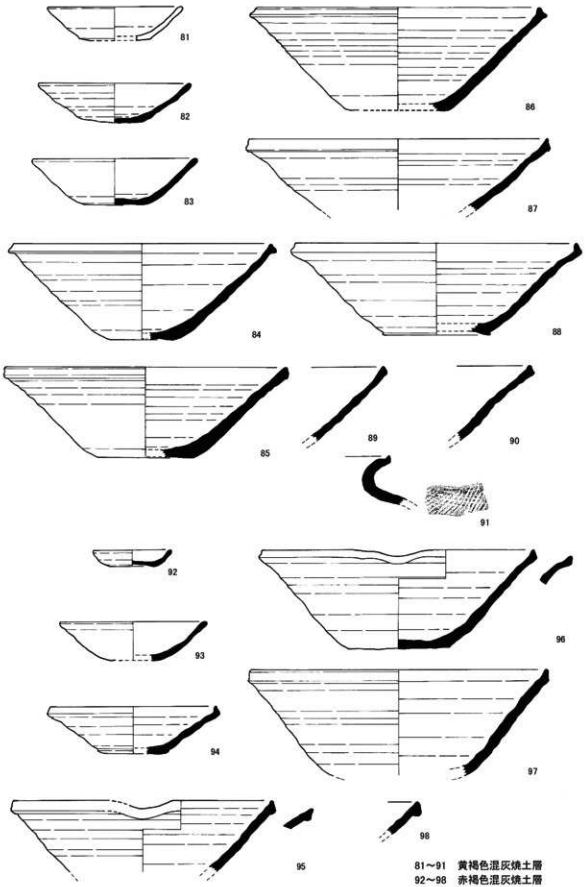


図17　宮ノ裏支群　J－4グリッド出土土器

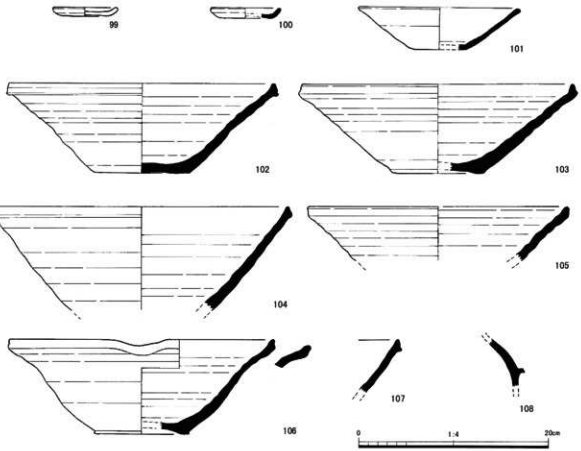


図18　宮ノ裏支群　J－5グリッド出土土器

⑧K－4グリッド（図21）

K－4グリッドは2号窯の焚口に設定されたグリッドである。

純灰層からは、須恵器鉢・塊・皿を図示した。図21－141～143は須恵器皿である。図21－144は須恵器塊である。図21－145～149は須恵器鉢であり、146・149は片口を有する。

純灰層（最下層）からは、図21－150～152の須恵器鉢3点を図化した。150は片口を有する。これら3点の土器は、遺物取り上げ時の記録に「2号窯焚口付近出土」とある。

⑨K－5グリッド（図22）

K－5グリッドは1号窯の焚口南半に設定されたグリッドである。

純灰層から、須恵器鉢・塊・甕が出土している。いずれも小片である。図22－153は須恵器塊である。図22－154は須恵器甕である。図22－155・156は須恵器鉢である。

⑩K－6グリッド（図23～25）

K－6グリッドは1号窯の焚口北半に設定されたグリッドである。

混灰焼土層から、須恵器鉢3点（図23－157～159）を図化した。158は片口を有する。

純灰層からは、須恵器鉢・塊・皿を図示した。図24－160・161は須恵器皿である。161は器壁がかなり厚い。図24－162～164は須恵器塊である。162は器高が他に比べて低い。図24－165～171は須恵器鉢である。165は小型の鉢で、167は片口を有する。

純灰層（下層）からは、須恵器鉢・塊・皿・壺を図示した。図24－172は須恵器皿である。図24－173は須恵器壺底部と考えられる。図24－174・175は須恵器塊である。図24－176～181は須恵器鉢である。176は小型の鉢で、178・181は片口を有する。

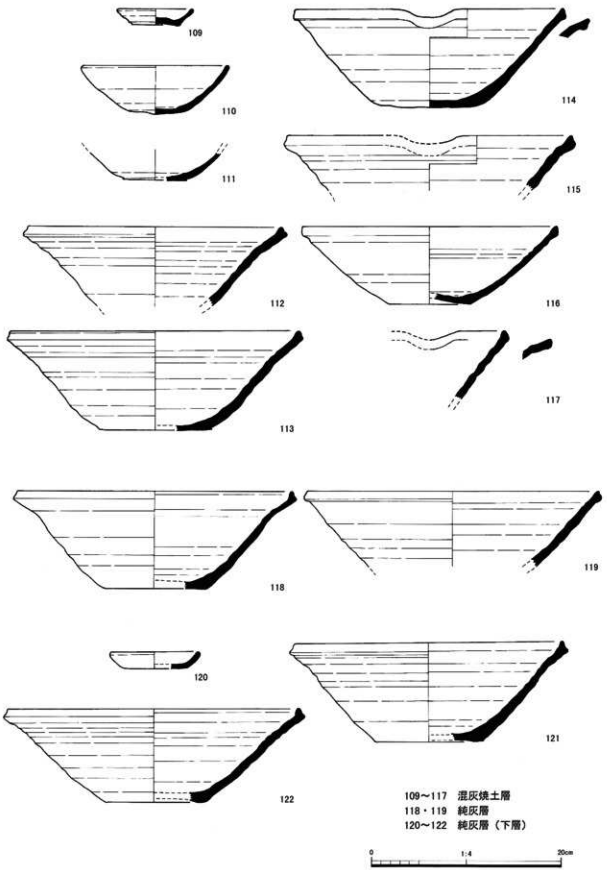


図19　宮ノ裏支群　J－6グリッド出土土器

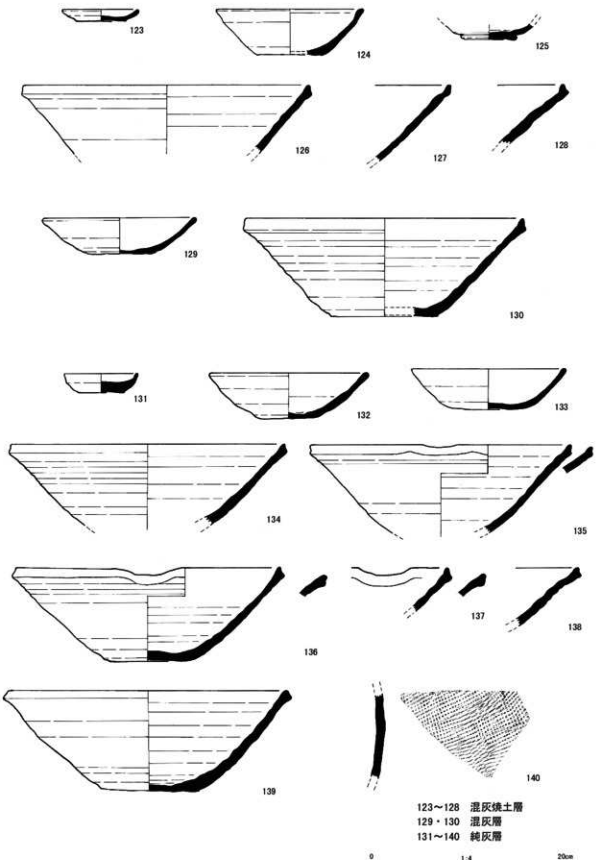


図20 宮ノ裏支群 K－3グリッド出土土器

純灰層（最下層）からは、須恵器鉢・埦・甕・皿、白磁碗を図示した。図25－182は白磁碗の底部である。図25－183・184は須恵器皿である。図25－185・186は須恵器埦である。図25－187～191は須恵器鉢である。187・188・190・191は片口を有する。図25－192は須恵器甕である。頸部の反りがあまり見られない。

⑪Ｌ－４グリッド（図26）

Ｌ－４グリッドは２号窯の前庭部に設定したグリッドである。

純灰層からは、須恵器鉢・埦・甕・皿を図化した。図26－193・194は須恵器皿である。図26－195～197は須恵器埦である。図26－198～202は須恵器鉢である。200は底部片で、輪高台である。201･202は片口を有する。図26－203は須恵器甕の胴部である。外面に平行タタキを施す。

純灰層（下層）からは、須恵器鉢３点（図26－204～206）を図化した。

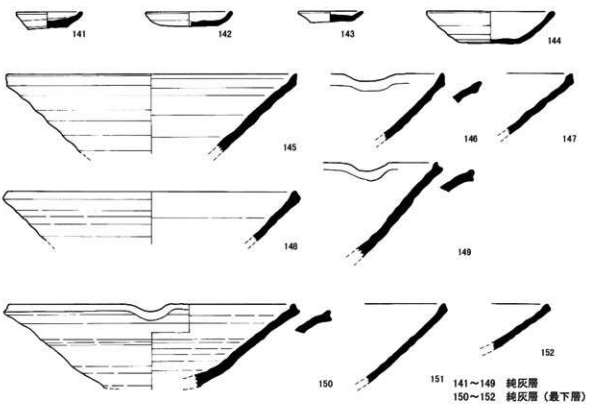


図21　宮ノ裏支群　Ｋ－４グリッド出土土器

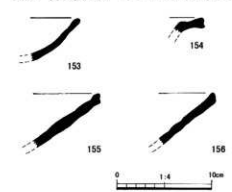


図22　宮ノ裏支群　Ｋ－５グリッド出土土器

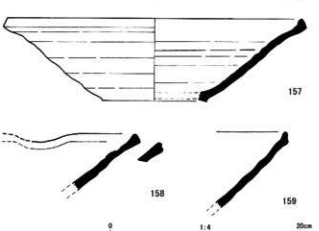


図23　宮ノ裏支群　Ｋ－６グリッド出土土器①

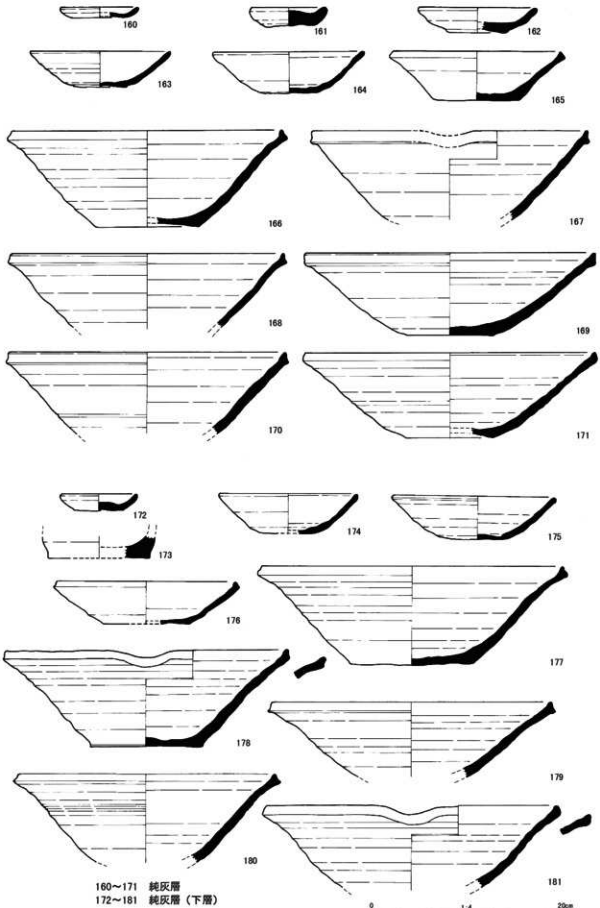


図24　宮ノ裏支群　K－6グリッド出土土器②

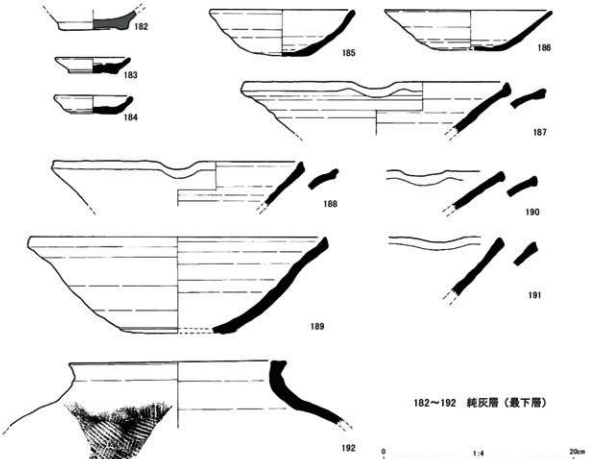


図25　宮ノ裏支群　K－6グリッド出土土器③

⑫L－5グリッド（図27）

L－5グリッドは1号窯の焚口前方に設定したグリッドである。

純灰層から、土師器皿、須恵器鉢・埦・皿が出土した。図27－207は土師器皿である。図27－208・209は須恵器皿である。図27－210は須恵器埦である。図27－211～216は須恵器鉢である。215・216は片口を有する。

（6）軒瓦

宮ノ裏支群から出土した軒瓦として軒丸瓦23点、軒平瓦49点、道具瓦1点を図示した。また、参考資料として、現在遺物の所在が不明である軒平瓦の拓本4点を掲載した。各瓦の出土地点については、表3に掲載している。窯体内から出土した軒瓦はない。

①軒丸瓦（図28、29）

NM101・102は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には1＋7の蓮子を配し、周囲には雄蕊帯が巡る。蓮弁は弁面を盛り上がらせ、2つの子葉は窪ませて表現する。蓮弁の先端は内側に回んだ表現となっており、隣接する蓮弁の間には水滴状の突出が見られる。蓮弁の形に沿って凸線で縁取りがされ、周縁にはさらに圏線が巡る。NM101に比してNM102のほうが蓮子の表現が扁平である。

NM103・104は梵字文軒丸瓦である。中房には断面が扁平な盛り上がりで梵字が表され、周縁には圏線が巡る。NM103の梵字は「 （アク）」が候補として考えられる。NM104は残存部

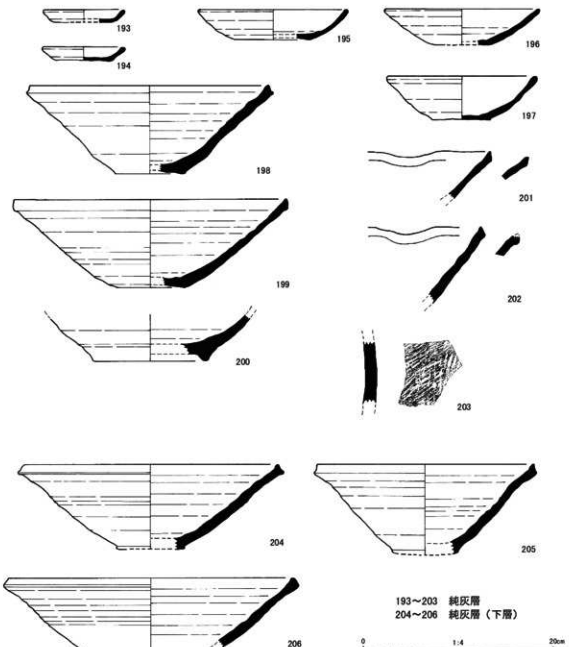


図26　宮ノ裏支群　L－4グリッド出土土器

分だけでは候補を絞り込めない。

NM105は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房はわずかに中心が盛り上がっているのみの素文である。蓮弁は先端が尖る形となっており、周縁には圏線が巡る。瓦当面全体に糸切痕が見られる。

NM106は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房と蓮弁の間に圏線が一条巡る。蓮弁は縦長の盛り上がりで表現され、間弁を伴う。弁面の中心軸付近を少し削って子葉を表している。周縁には太めの圏線が巡る。

NM107～109は複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中房には蓮子がなく、丸く盛り上がるのみである。蓮弁と子葉は太い凸線で表現される。NM108は圏線が一条巡る。鳥羽離宮の金剛心院へ供給された瓦である。NM109は瓦笵から外した後に一部粘土を貼り付け、文様が潰れている。

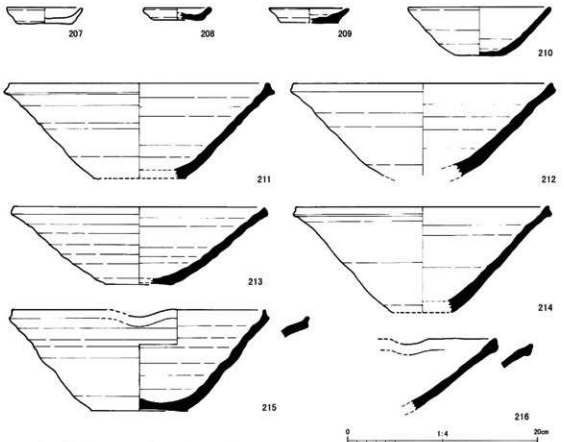


図27　宮ノ裏支群　Ｌ－５グリッド出土土器

NM110は単弁蓮華文軒丸瓦である。中高で立体的な中房に１＋４の大きめの蓮子を配する。蓮弁は凸線で輪郭を縁取り、子葉は突出させる。隣接する蓮弁が区切られることなく連続している。

NM111～114は左巻き三巴文軒丸瓦である。NM111・112に比してNM113・114は巴の断面形態が扁平である。

NM115は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房には蓮子が配され、その外周には圏線が巡る。蓮弁は凸線の縁取りで表現され、先端が内側に凹んだ形をして、隣り合う蓮弁はつながっている。子葉は３本の凸線で表されており、蓮弁の周縁には圏線が巡る。

NM116・117は複弁蓮華文軒丸瓦である。いずれも残存状態が悪く瓦当文様が判然としない。NM116の中房には盛り上がりが見られるが、蓮子があるのかは確認できない。蓮弁は凸線で縁取りをして、弁面には２つの盛り上がりをつくる。

NM118・119は単弁蓮華文軒丸瓦である。NM118は凸線で各花弁を区画し、その先端は間弁となっている。弁面は緩やかに盛り上がった表現となっている。やや簡略化した蓮華文である。NM119も同様の文様の可能性があるが、小片のため、詳細は不明である。

NM120～123は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房の周辺には雄蕊帯が巡り、蓮弁は周縁に配される。凸線で間弁状の区画が設けられ、蓮弁は２つの珠文で表される。

②軒平瓦（図30～32）

NH101～103は均整唐草文軒平瓦である。いずれもＣ字背向中心飾である。NH101・103は周縁に圏線が巡る。唐草の展開は不明である。NH101は顎貼付技法[1]、NH102は瓦当貼付ａ技法によって瓦当を成形している。

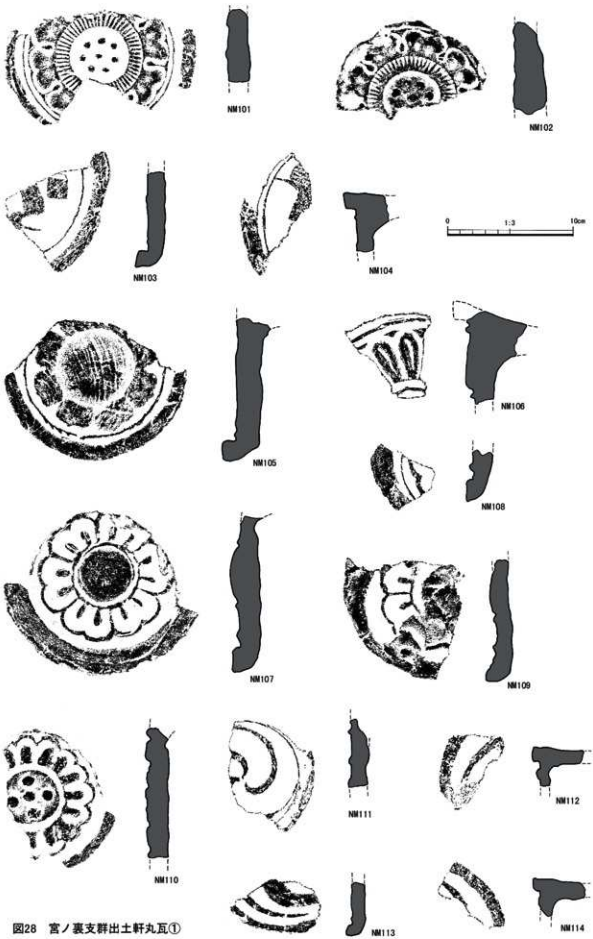


図28　宮ノ裏支群出土軒丸瓦①

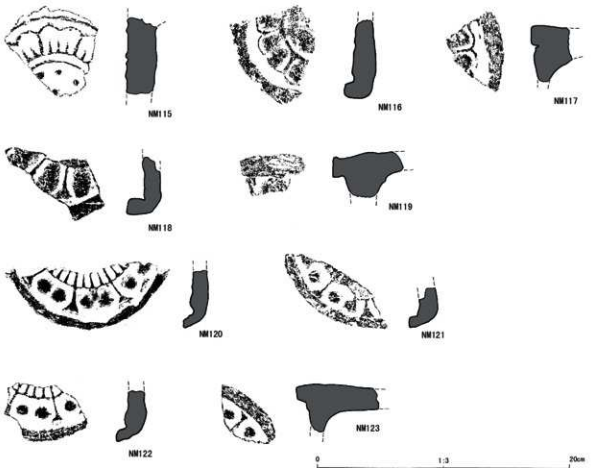


図29　宮ノ裏支群出土軒丸瓦②

NH104～106は唐草文軒平瓦である。それぞれ全体の文様構成は不明である。いずれも周縁に圏線が巡る。

NH107は均整唐草文軒平瓦である。C字上向中心飾から唐草がやや複雑に展開する。唐草の展開はNH134などと同じ系譜にあると考えられる。包み込みb技法によって瓦当を成形する。

NH108・109は偏行宝相華唐草文軒平瓦である。いずれの個体も小片であるが、同意匠の軒平瓦は釜ノ口支群で出土しており、文様構成が判明する。瓦当成形は、NH108は包み込みb技法、NH109は瓦当貼付b技法による。

NH110～112は唐草文軒平瓦である。詳細な文様構成は不明であるが、偏行唐草文の可能性が高い。

NH113は唐草文軒平瓦である。残存している部分はおそらく中心飾であると見られるが、文様の展開は不明である。包み込みb技法によって瓦当成形している。

NH114は唐草文軒平瓦である。林崎三本松瓦窯で同意匠と考えられる軒平瓦が出土しているが、当該資料より左脇区が切り縮められている。包み込みb技法により瓦当成形している。

NH115は宝相華唐草文軒平瓦である。

NH116・117は連巴文軒平瓦である。左巻きの三巴文が細い凸線で表現される。巴の尾が隣接する巴とつながっており、圏線状になっている。

NH118・119は連巴文軒平瓦である。左巻きの三巴文だが、NH116・117とは表現が異なって

おり、やや幅広で断面が扁平な凸線で巴を表現している。また、三巴文の周囲を円形に窪め、それ以外の余白部分を突出させている。NH119は包み込みｂ技法で瓦当成形している。

NH120～125は唐草文軒平瓦である。それぞれ中心部が残存しておらず、文様構成が判然としないが、単純な唐草文が展開していると見られる。NH122～125はＣ字上向中心飾を持つ均整唐草文の簡略化された表現とも考えられる。NH122・123は包み込みｂ技法によって瓦当を成形する。

NH126～132は均整唐草文軒平瓦である。Ｃ字上向の中心飾から唐草が左右に３転する。先端は２手に分枝して収める。NH126・128とNH127・131・132は残存箇所が異なり、同文かは不明である。NH129は他に比べ凸線が細く、右端の唐草が離れている点が異なる。NH130は瓦当面が縮小されており、先端が分枝せずに終わる。NH127～129・131は包み込みｂ技法により瓦当を成形する。

NH133～137は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はＣ字背向が変形したものと考えられる。唐草は複雑な枝葉を持つものが左右に展開する。NH134は右脇区が丸みを帯びており、文様が切り縮められている。NH138もこれらに似た構成の文様が展開しており、同じ系譜であると考えられる。NH137は瓦当貼付ｂ技法によって瓦当を成形する。

NH139～141は均整唐草文軒平瓦である。NH133～138と文様構成が似ており、同じ系譜であると考えられるが、より簡略化が進んでいる。すべて包み込みｂ技法により瓦当を成形する。

NH142～144は均整唐草文軒平瓦である。NH142は瓦笵を上下に半截し、その下半部を用い、瓦当を形成している。そのため文様構成が読み取りにくい。NH143は瓦当文様のひずみが激しい。いずれも中心飾はＣ字上向と見られ、左右に唐草文が展開する。NH142のみ、下外区に圏線が巡る。

NH145・146は宝相華唐草文軒平瓦である。中心飾が五弁の宝相華文で、左右に唐草が展開する。文様は細い凸線で表現される。

NH147・148は宝相華唐草文軒平瓦である。下外区と脇区にのみ珠文帯が巡る。珠文は大粒で密に並ぶ。NH148は中心飾の部分が残っていると見られ、三弁で表現される。左右に唐草が展開するものと考えられる。NH147は包み込みｂ技法で瓦当を成形する。

NH149は半截花文軒平瓦である。おそらく上下交互に半截花文が配置される文様構成である。半截花文は子葉の部分が一段高く突出しており、花弁はそれより低く盛り上がっている。

NH150は宝相華文道具瓦である。幅広の凸線で宝相華を縁取りして表現する。周縁には圏線が巡る。

NH151～154は所在不明で、調査当時の拓本のみ現存する資料である。

NH151は連巴文軒平瓦である。巴は６連と考えられる。左巻きの三巴文が細い凸線で表現される。巴の尾が隣接する巴とつながっており、圏線状になっている。NH116・117と同意匠と考えられる。

NH152は均整唐草文軒平瓦である。NH126・128と同文と考えられる。

NH153は均整唐草文軒平瓦である。Ｃ字上向中心飾を持つと考えられ、NH107の右脇を切り縮めた意匠と考えられる。

NH154は唐草文軒平瓦である。NH111と同意匠で、偏行唐草文の可能性が高い。

---

[1] 軒平瓦の瓦当成形技法については、第13章にて詳細を述べる。以下も同様である。

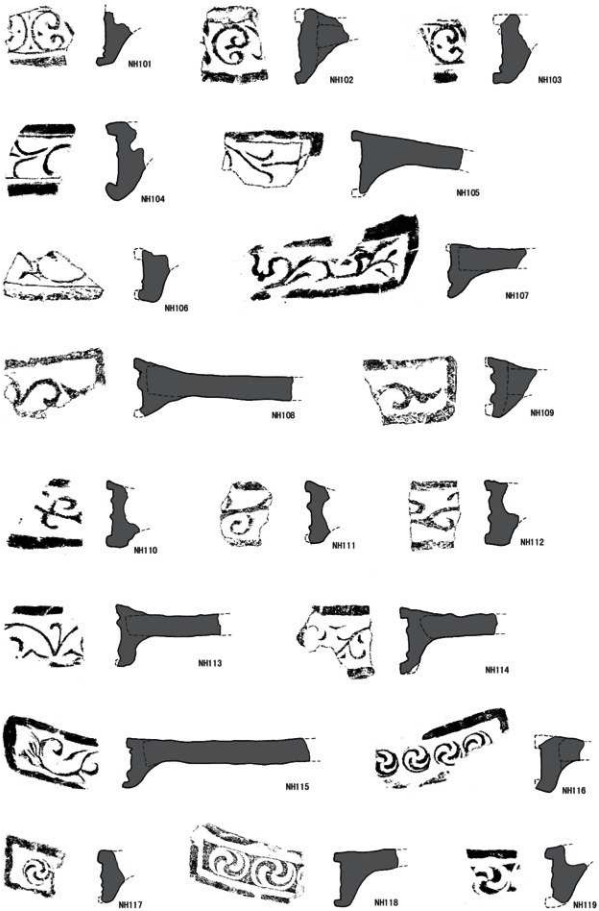


図30　宮ノ裏支群出土軒平瓦①

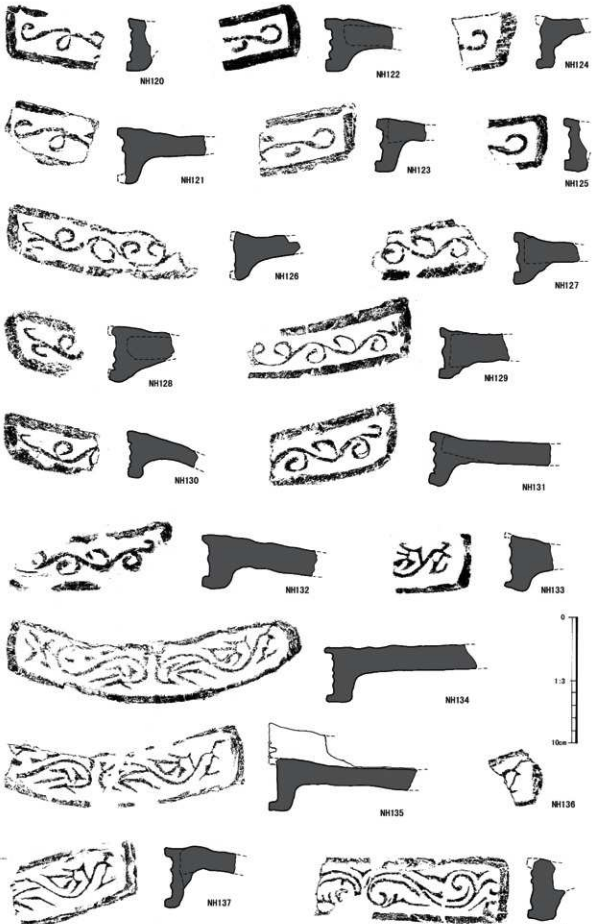


図31　宮ノ裏支群出土軒平瓦②

図32　宮ノ裏支群出土軒平瓦③

表２　宮ノ裏支群出土土器

※（　）は復元数値

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
9	1	1号窯体内	土師器 皿				淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 やや良好	1㎜以下の砂粒わずか（赤色粒）	
	2	1号窯体内	土師器 羽釜	(31.40)			淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 不良	2㎜以下の砂粒まばら、粗い	外面：平行タタキ4本/㎝ ススコゲ付着、写真図版36-5
	3	1号窯体内	須恵器 鉢	(28.00)	(9.90)	(10.05)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の砂粒わずか	
	4	1号窯体内	須恵器 片口鉢	(29.60)			灰白	灰白	灰白	良好	6㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の砂粒まばら	
	5	1号窯　埋土内	須恵器 椀	(14.70)	(5.40)	(4.00)	青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒まばら	
	6	1号窯　軸	須恵器 椀底部		(6.60)		淡灰	淡灰～暗灰	淡灰	良好	精良	
	7	1号窯　埋土内	須恵器 甕胴部	(15.20)			黒灰	暗灰	灰白～淡褐	やや良好	3㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	8	1号窯　埋土下層	須恵器 鉢	(32.40)			青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら（黒色粒）	
	9	1号窯　埋土下層	須恵器 片口鉢	(29.60)			青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒多い	
	10	1号窯　埋土下層	須恵器 片口鉢	(31.80)			暗青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	11	1号窯　埋土下層	須恵器 鉢				暗茶褐	黒褐	黒褐	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	12	1号窯　埋土下層	須恵器 鉢				淡灰	暗青灰	淡灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
10	13	2号窯体内	土師器 杯底部		(6.40)		淡褐	淡褐	淡褐	酸化 やや不良	5㎜以下の赤色粒まばら	
	14	2号窯体内	土師器 皿	(8.60)	(6.20)	(1.15)	淡褐	橙褐	淡褐	酸化 やや良好	7㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒多い	
	15	2号窯体内	土師器 杯	(15.80)	(5.80)	(3.75)	淡褐	淡褐	淡褐	酸化 やや良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	16	2号窯体内	須恵器 椀	(11.80)	(6.80)	(3.25)	暗灰	灰白～灰	灰白～灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら	
	17	2号窯体内	須恵器 椀	(14.20)	(4.80)	(4.65)	暗青灰	暗青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	18	2号窯体内	須恵器 片口鉢				灰褐	灰～暗灰褐	灰褐	良好	1㎜以下の砂粒多い	
	19	2号窯体内	須恵器 鉢	(30.80)			紫灰	紫灰	紫灰	良好	6㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の砂粒多い	
	20	2号窯体内	須恵器 鉢				黒灰	黒灰～黒褐	黒灰～黒褐	良好	6㎜以下の小礫わずか	
12	21	3号窯体内	須恵器 椀	(15.60)	(7.20)	(4.30)	淡灰	淡灰	淡灰	良好	1㎜以下の砂粒まばら	
	22	3号窯体内	須恵器 鉢				淡黒褐	淡黒褐	灰	良好	1㎜以下の砂粒まばら	
	23	3号窯体内	須恵器 片口鉢				暗青灰	明灰	暗青灰	良好	1㎜以下の砂粒わずか	
	24	3号窯体内	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
14	25	D－4　純灰層	土師器 皿	(6.50)	(8.00)	(1.20)	淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 やや良好	2㎜以下の赤色粒まばら	
	26	D－4　純灰層	土師器 皿	(6.60)	(5.60)	(1.30)	淡褐～淡灰褐	淡褐～淡灰褐	淡褐～淡灰褐	酸化 やや不良	2㎜以下の砂粒まばら（赤色粒）	黒斑
	27	D－4　純灰層	土師器 杯	(11.60)	(7.00)	(3.10)	淡褐白	淡褐白	淡褐白	酸化 不良	3㎜以下の砂粒多い	
	28	D－4　純灰層	土師器 鍋				淡褐白	淡褐白	淡褐白	酸化 やや良好	3㎜以下の砂粒多い	
	29	D－4　純灰層	土師器 鍋				淡褐	淡褐	淡褐	良好	4㎜以下の砂粒・小礫多い	
	30	D－4　純灰層	土師器 羽釜				淡赤褐	淡褐	淡褐	酸化 不良	4㎜以下の砂粒非常に多い	焼き推定、貼付把手
	31	D－4　純灰層	須恵器 皿	(8.20)	(5.20)	1.60	明青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	32	D－4　純灰層	須恵器 椀	(16.40)	7.60	4.70	淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	7㎜以下の小礫まばら	
	33	D－4　純灰層	須恵器 鉢	(29.20)	(10.50)	(8.80)	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	34	D－4　純灰層	須恵器 鉢	(30.00)	(9.60)	(10.90)	青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	35	D－4　純灰層	須恵器 鉢				暗青灰	褐灰	褐灰	やや良好	精良	
	36	D－4　純灰層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の砂粒わずか	
	37	D－4　純灰層	須恵器 鉢				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	38	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	土師器 皿	(7.60)	(6.00)	(1.20)	淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 やや不良	1㎜以下の赤色粒まばら	
	39	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	土師器 鍋				淡褐	淡褐	淡褐	酸化 やや不良	1㎜以下の砂粒多い	
	40	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	土師器 羽釜	(27.20)			褐	褐	褐	酸化 やや不良	2㎜以下の砂粒非常に多い	
	41	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	須恵器 鉢	(27.00)			暗青灰	淡青灰～青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	42	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	須恵器 片口鉢				青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	43	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	44	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	1㎜以下の砂粒わずか	
	45	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	須恵器 鉢				黒青色 自然釉	黒灰色 自然釉	暗青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	46	D－4 黄褐色混灰焼土層（純灰層下）	須恵器 鉢底部		(11.00)		紫灰	紫灰	紫灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
15	47	i－4　黄褐色混灰焼土層	土師器 皿	(7.60)	(5.60)	(10.10)	淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 やや不良	1㎜以下の赤色粒わずか	
	48	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 皿	(8.00)	(5.60)	(1.40)	青灰	青灰	暗青灰	良好	精良	
	49	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 椀	(16.00)	(6.30)	(4.60)	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	50	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 椀	(16.00)	(6.70)	(4.65)	暗青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	51	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 片口鉢	(24.40)			暗青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	52	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 片口鉢				暗褐色 自然釉	暗褐色 自然釉	灰	良好	精良	
	53	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 鉢	(27.30)	(9.60)	(9.75)	黒灰色 自然釉	青灰	青灰	良好	7㎜以下の小礫わずか	4㎜以下の黒色融物まばら
	54	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 片口鉢	(29.00)	(12.40)	(9.60)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	55	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 鉢	(27.90)	(9.40)	(10.00)	紫灰	紫灰	紫灰	良好	5㎜以下の小礫まばら	
	56	i－4　黄褐色混灰焼土層	須恵器 片口鉢	(26.80)			暗灰	暗灰	暗灰	良好	7㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	57	i－4　黄褐色混灰焼土層（下層）	土師器 皿	(6.60)	(5.00)	(0.75)	淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 やや不良	2㎜以下の砂粒まばら（石英）	
	58	i－4　黄褐色混灰焼土層（下層）	土師器 杯	(10.40)	(5.60)	(3.30)	淡褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 やや不良	4㎜以下の小礫・砂粒まばら（赤色粒）	
	59	i－4　黄褐色焼土層 黄褐色混灰焼土層（下層）	須恵器 壺				灰色自然釉	淡灰	淡灰	良好	精良	天地焼き不明
	60	i－4　黄褐色混灰焼土層（下層）	須恵器 片口鉢	(29.60)	(10.40)	(9.55)	明青灰	明青灰	明青灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら	
	61	i－4　黄褐色混灰焼土層（下層）	須恵器 鉢				暗青灰	灰	灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	62	i－4　黄褐色混灰焼土層（下層）	須恵器 鉢				暗褐色 自然釉	暗褐色 自然釉	青灰	良好	7㎜以下の小礫まばら	
	63	i－4　純灰層	土師器 羽釜				淡褐	淡褐	淡褐	酸化 やや不良	3㎜以下の砂粒非常に多い	
	64	i－4　純灰層	須恵器 椀	(14.90)	(4.60)	(4.10)	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	良好	精良	
	65	i－4　純灰層	須恵器 鉢	(29.00)	(11.00)	(8.90)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	66	i－4　純灰層	須恵器 鉢				青灰～明青灰	青灰～明青灰	青灰～明青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	67	i－4　純灰層	須恵器 片口鉢				青灰	青灰	青灰	良好	精良	片口は残存部が少なく、図化できず
16	68	i－5　黄褐色混灰焼土層	土師器 皿	7.60	5.40	1.20	赤褐	赤褐	赤褐	酸化 良好	2㎜以下の砂粒多い（赤・白色粒）	
	69	i－5　黄褐色混灰焼土層	土師器 皿	(8.60)	(5.40)	(1.20)	赤褐	赤褐	赤褐	酸化 やや不良	3㎜以下の赤色粒まばら	写真図版36-6
	70	i－5　黄褐色混灰焼土層	土師器 皿	(7.60)	(5.60)	1.10	赤褐	赤褐	赤褐	酸化 やや不良	5㎜以下の小礫多い（赤色粒、石英）	
	71	i－5　黄褐色混灰焼土層	土師器 皿	(7.20)	(5.20)	(1.60)	褐	赤褐	褐	酸化 やや不良	2㎜以下の赤色粒まばら	
	72	i－5　黄褐色混灰焼土層	土師器 杯	(14.00)	(8.80)	(2.95)	褐	褐	褐	酸化 良好	6㎜以下の小礫まばら	

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
16	73	i－5　黄褐色混炭焼土層	土師器 坏	(1.00)	(7.60)	(4.30)	赤褐	赤褐～灰	赤褐	酸化不良	2㎜以下の砂粒まばら	写真図版 38-7
	74	i－5　黄褐色混炭焼土層	須恵器 皿	(8.00)	4.20	1.70	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	75	i－5　黄褐色混炭焼土層	須恵器 椀	(15.20)	(5.40)	(4.90)	灰	灰	灰	良好	3㎜以下の黒色粒まばら	
	76	i－5　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(23.20)	(8.60)	(10.20)	黒灰色自然釉	灰～暗灰	灰～暗灰	良好	5㎜以下の小礫まばら	
	77	i－5　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(24.80)	(6.20)	(9.20)	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	78	i－5　黄褐色混炭焼土層	須恵器 片口鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	79	i－5　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢				淡灰	淡灰	淡灰	やや良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	80	i－5　純炭層	須恵器 鉢	(26.50)	(8.00)	(9.60)	黒灰	黒灰	黒灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら	
17	81	J－4　黄褐色混炭焼土層	土師器 坏	(14.20)	(7.60)	(3.55)	淡褐	淡褐	淡褐	酸化不良	3㎜以下の砂粒多い（赤色粒）	
	82	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 椀	(16.00)	(6.20)	(4.15)	暗灰	青灰	青灰	良好	精良	
	83	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 椀	(17.20)	(7.20)	(4.90)	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	84	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(27.20)	(7.00)	(10.20)	青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	85	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(29.80)	(10.20)	(9.60)	暗褐	暗褐	暗褐	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	86	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(30.00)	(10.40)	(10.90)	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	87	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(31.60)			明青灰	明青灰	明青灰	良好	精良	
	88	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(29.80)	(11.40)	(9.75)	明青灰	明青灰	明青灰	良好	5㎜以下の小礫まばら	
	89	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	90	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	91	J－4　黄褐色混炭焼土層	須恵器 壺				暗青灰	青灰	青灰	良好	精良	焼き推定
	92	J－4　赤褐色混炭焼土層	須恵器 皿	8.30	4.60	1.70	灰	灰	灰	良好	4㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	93	J－4　赤褐色混炭焼土層	須恵器 椀	(15.40)	(6.00)	(4.10)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	94	J－4　赤褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(17.60)	(7.60)	(5.00)	明青灰	明青灰	明青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	95	J－4　赤褐色混炭焼土層	須恵器 片口鉢	(27.40)			青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の白色粒まばら	
	96	J－4　赤褐色混炭焼土層	須恵器 片口鉢	(29.80)	(10.80)	(10.50)	暗灰	暗灰	暗灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	97	J－4　赤褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(29.40)			灰～青灰	灰～青灰	灰～青灰	良好	精良	
	98	J－4　赤褐色混炭焼土層	須恵器 鉢				青灰	灰	灰	良好	7㎜以下の小礫わずか	
18	99	J－5　赤褐色混炭焼土層	土師器 皿	(8.00)	(5.00)	(1.90)	暗赤褐	暗赤褐	暗赤褐	酸化良好	3㎜以下の小礫まばら	
	100	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 皿	(7.30)	(3.60)	(1.10)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	101	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 椀	(16.80)	(6.20)	(4.40)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	102	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(26.00)	10.10	9.50	青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	103	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(28.60)	(9.60)	(9.40)	青灰	青灰	青灰	良好	13㎜以下の礫わずか	
	104	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(31.00)			暗青灰	暗青灰～青灰	暗青灰～青灰	良好	3㎜以下の小礫まばら	
	105	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 鉢	(27.40)			青灰	青灰	青灰	良好	7㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	106	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 片口鉢	(26.00)	(10.00)	(10.00)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	107	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	108	J－5　赤褐色混炭焼土層	須恵器 壺底部				暗灰	灰	灰	良好	精良	焼き推定
19	109	J－6　混炭焼土層	須恵器 皿	8.00	5.00	1.70	明青灰	明青灰	明青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	110	J－6　混炭焼土層	須恵器 椀	(15.40)	(8.00)	(5.10)	青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	111	J－6　混炭焼土層	須恵器 椀底部		(6.60)		灰	暗褐色自然釉	灰	良好	精良	
	112	J－6　混炭焼土層	須恵器 鉢	(26.80)			黒灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	113	J－6　混炭焼土層	須恵器 鉢	(30.60)	(12.00)	(10.50)	青灰	青灰	青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	114	J－6　混炭焼土層	須恵器 片口鉢	(26.20)	10.30	10.40	灰	灰	灰	良好	精良	写真図版 34-2
	115	J－6　混炭焼土層	須恵器 片口鉢	(30.00)			黒褐色自然釉	灰褐	灰褐	良好	精良	
	116	J－6　混炭焼土層	須恵器 鉢	(27.00)	(8.80)	(8.30)	暗青灰～暗灰	暗青灰～暗灰	暗青灰～暗灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	
	117	J－6　混炭焼土層	須恵器 片口鉢				青灰	青灰	青灰	良好	8㎜以下の小礫わずか	
	118	J－6　純炭層	須恵器 鉢	(29.00)	(11.40)	(10.30)	淡紫灰	淡紫灰	淡紫灰	良好	4㎜以下の小礫まばら	
	119	J－6　純炭層	須恵器 鉢	(30.80)			青灰	灰	灰	良好	精良	
	120	J－6　純炭層（下層）	須恵器 皿	(6.40)	(6.80)	(1.60)	青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	121	J－6　純炭層（下層）	須恵器 鉢	(28.30)	(11.40)	(10.50)	暗青灰	青灰	青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	122	J－6　純炭層（下層）	須恵器 鉢	(30.80)	(11.20)	(10.00)	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
20	123	K－3　混焼土炭層	須恵器 皿	(8.00)	(5.20)	(1.20)	明青灰	明青灰	明青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	124	K－3　混焼土炭層	須恵器 椀	(15.40)	(7.00)	(4.60)	黒灰～青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	125	K－3　混焼土炭層	須恵器 椀底部		(5.60)		暗青灰	青灰～黒青灰	青灰～黒青灰	良好	精良	
	126	K－3　混焼土炭層	須恵器 鉢	(30.20)			青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	127	K－3　混焼土炭層	須恵器 鉢				明青灰	明青灰	明青灰	良好	3㎜以下の黒色粒多い	
	128	K－3　混焼土炭層	須恵器 鉢				青灰	暗青灰	青灰	良好	精良	
	129	K－3　混炭層	須恵器 椀	(16.20)	(6.70)	(3.60)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3㎜以下の砂粒多い	
	130	K－3　混炭層	須恵器 片口鉢	(29.40)	(11.40)	(10.40)	青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の黒色粒まばら	片口は残存部が少なく、図化できず
	131	K－3　混炭層	須恵器 皿	(7.90)	4.90	2.00	淡青灰～青灰	淡青灰～青灰	淡青灰～青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	132	K－3　混炭層	須恵器 椀	(16.40)	(8.00)	(4.30)	灰～暗青灰	灰～暗青灰	灰～暗青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の白色粒まばら	
	133	K－3　混炭層	須恵器 椀	16.60	6.30	4.90	青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫まばら	
	134	K－3　混炭層	須恵器 鉢	(29.00)			青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の黒色粒まばら	
	135	K－3　混炭層	須恵器 片口鉢	(27.50)			灰白色自然釉	暗褐色自然釉	青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	136	K－3　混炭層	須恵器 片口鉢	(27.90)	9.50	9.90	青灰	青灰	青灰	良好	7㎜以下の黒色粒まばら	
	137	K－3　混炭層	須恵器 片口鉢				黒灰色自然釉	明青灰	明青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	
	138	K－3　混炭層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	139	K－3　混炭層	須恵器 片口鉢	(29.40)	10.40	10.90	青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫まばら	片口は残存部が少なく、図化できず 写真図版 34-1
	140	K－3　混炭層	須恵器 甕				暗青灰	灰褐	淡灰	良好	精良	外面：平行タタキ3～4本／㎝ 天地・傾き不明
21	141	K－4　純炭層	須恵器 皿	(6.90)	4.30	(1.90)	青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	142	K－4　純炭層	須恵器 皿	(8.00)	(7.60)	1.50	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	良好	1㎜以下の砂粒まばら	
	143	K－4　純炭層	須恵器 皿	8.60	4.70	1.15	暗褐	青灰	青灰	良好	精良	
	144	K－4　純炭層	須恵器 椀	(13.40)	(4.80)	(3.40)	暗青灰	暗灰	暗灰	良好	2㎜以下の砂粒多い	
	145	K－4　純炭層	須恵器 鉢	(30.80)			暗青灰	灰～暗青灰	灰～暗青灰	良好	6㎜以下の小礫・砂粒まばら	

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
21	146	K－4　純灰層	須恵器 片口鉢				灰	灰	灰	やや不良	6㎜以下の小礫・砂粒多い	
	147	K－4　純灰層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら（赤色粒）	
	148	K－4　純灰層	須恵器 鉢	(30.40)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	4㎜以下の白色粒多い	
	149	K－4　純灰層	須恵器 片口鉢				黒灰	暗灰	暗灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	150	K－4　純灰層（最下層）第2窯体焚口付近	須恵器 片口鉢	(30.20)	(10.40)		青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら	
	151	K－4　純灰層（最下層）第2窯体焚口付近	須恵器 鉢				暗青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	
	152	K－4　純灰層（最下層）第2窯体焚口付近	須恵器 鉢				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3㎜以下の砂粒わずか	
22	153	K－5　純灰層	須恵器 碗				淡灰～暗灰	淡灰～暗灰	淡灰～暗灰	良好	7㎜以下の小礫わずか	
	154	K－5　純灰層	須恵器 壺				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	155	K－5　純灰層	須恵器 片口鉢				明青灰～暗灰	明青灰～暗灰	明青灰～暗灰	良好	2㎜以下の砂粒多い	
	156	K－5　純灰層	須恵器 鉢				暗灰	暗灰	暗灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら	
23	157	K－6　還灰焼土層	須恵器 鉢	(31.20)	(11.00)	(8.70)	青灰～暗青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	歪みにより口径開き気味か
	158	K－6　還灰焼土層	須恵器 片口鉢				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	159	K－6　還灰焼土層	須恵器 片口鉢				灰	灰	灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	片口は残存部が少なく、図化できず
24	160	K－6　純灰層	須恵器 皿	(8.10)	(5.50)	(1.10)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	精良	
	161	K－6　純灰層	須恵器 皿	(7.90)	(5.50)	(2.10)	灰～暗灰	灰～暗灰	灰～暗灰	良好	1㎜以下の砂粒わずか	
	162	K－6　純灰層	須恵器 碗	(12.40)	(5.60)	(2.60)	暗灰	青灰	青灰	良好	8㎜以下の小礫わずか	写真図版 34-12
	163	K－6　純灰層	須恵器 碗	(14.80)	(5.80)	(3.80)	紫灰	紫灰	紫灰	良好	8㎜以下の小礫わずか	
	164	K－6　純灰層	須恵器 碗	(16.00)	(6.10)	(4.40)	暗灰	暗灰	暗灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	165	K－6　純灰層	須恵器 鉢	(17.80)	(9.00)	(5.20)	暗灰	黒色自然釉	青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	166	K－6　純灰層	須恵器 鉢	(28.60)	(11.00)	(10.20)	灰	暗青灰	灰	良好	9㎜以下の礫わずか	写真図版 33-7
	167	K－6　純灰層	須恵器 片口鉢	(29.00)			青灰	青灰	青灰	良好	7㎜以下の小礫わずか	
	168	K－6　純灰層	須恵器 鉢	(28.80)			灰	暗灰	灰	良好	精良	
	169	K－6　純灰層	須恵器 鉢	(30.60)	(9.00)	(8.70)	青灰	青灰	青灰	良好	精良	歪みにより口径開き気味か
	170	K－6　純灰層	須恵器 鉢	(29.20)			青灰	青灰	青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	171	K－6　純灰層	須恵器 鉢	(30.80)	(9.20)	(9.00)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	172	K－6　純灰層（下層）	須恵器 皿	(8.00)	(6.20)	(1.80)	暗灰	暗灰～黒灰	暗灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	173	K－6　純灰層（下層）	須恵器 香炉形		(10.80)		黒青色自然釉	灰	灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	174	K－6　純灰層（下層）	須恵器 碗	(14.60)	(6.60)	(4.20)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	175	K－6　純灰層（下層）	須恵器 碗	(15.90)	6.70	4.60	青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫・砂粒わずか	写真図版 34-15
	176	K－6　純灰層（下層）	須恵器 鉢	(19.00)	(8.10)	(4.50)	淡青灰～暗青灰	明青灰	明青灰	良好	5㎜以下の小礫・砂粒多い	歪みにより口径開き気味か
	177	K－6　純灰層（下層）	須恵器 鉢	(31.80)	13.20	10.50	紫灰	紫灰	紫灰	良好	5㎜以下の黒色粒まばら	
	178	K－6　純灰層（下層）	須恵器 片口鉢	(29.70)	(10.00)	(10.20)	淡青灰～暗青灰	淡青灰～暗青灰	淡青灰～暗青灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら	写真図版 33-14
	179	K－6　純灰層（下層）	須恵器 鉢	(29.80)			青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	180	K－6　純灰層（下層）	須恵器 鉢	(27.20)			暗青灰	灰	灰	良好	4㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	181	K－6　純灰層（下層）	須恵器 片口鉢	(30.80)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	4㎜以下の小礫・砂粒まばら	
25	182	K－6　純灰層（最下層）	白磁 碗底部		(7.20)		淡灰白	白緑色釉	淡灰白	良好	精良	
	183	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 皿	(7.60)	(5.00)	(1.60)	暗灰褐色自然釉	青灰	青灰	良好	1㎜以下の砂粒わずか	
	184	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 皿	(6.00)	(4.60)	(1.90)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	185	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 碗	(15.10)	6.20	4.90	暗灰	暗灰	暗灰	やや不良	5㎜以下の小礫わずか	
	186	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 碗	(17.20)	(7.20)	(4.20)	青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	187	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 片口鉢	(27.80)			青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	188	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 片口鉢	(26.20)			暗灰	黒灰	暗灰	良好	5㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒まばら	
	189	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 鉢	(31.20)	(13.40)	(10.20)	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒多い	
	190	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 片口鉢				青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	191	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 片口鉢				黒色自然釉	暗青灰	暗青灰	良好	8㎜以下の小礫わずか	
	192	K－6　純灰層（最下層）	須恵器 壺	(22.50)			青灰	青灰	淡灰	良好	精良	外面：平行タタキ3～4本／㎝ 格子状に密
26	193	L－4　灰褐色粘質土（純灰層）	須恵器 皿	(8.40)	(6.20)	(1.30)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	194	L－4　純灰層	須恵器 皿	8.60	5.60	1.50	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	精良	
	195	L－4　純灰層	須恵器 碗	(15.60)	(7.60)	(3.15)	黒灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の砂粒多い	
	196	L－4　純灰層	須恵器 碗	(16.30)	(6.10)	(3.60)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3㎜以下の砂粒まばら	
	197	L－4　純灰層	須恵器 碗	(15.70)	(6.20)	(4.60)	青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫まばら	
	198	L－4　純灰層	須恵器 鉢	(23.40)	(6.70)	(8.20)	明青灰	明青灰	明青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	199	L－4　純灰層	須恵器 鉢	(26.80)	(7.00)	(7.30)	明青灰	明青灰	明青灰	良好	5㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	200	L－4　純灰層	須恵器 鉢底部		(12.20)		青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	輪高台
	201	L－4　純灰層	須恵器 片口鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	
	202	L－4　純灰層	須恵器 片口鉢				暗褐色自然釉	黒褐色自然釉	暗青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	203	L－4　灰褐色粘質土（純灰層）	須恵器 壺				黒灰色自然釉	淡青灰	淡青灰	良好	精良	天地傾き不明
	204	L－4　純灰層（下層）	須恵器 鉢	(26.80)	(7.20)	(8.90)	青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	205	L－4　純灰層（下層）	須恵器 鉢	(23.00)	(7.00)	(9.40)	青灰	青灰	青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
	206	L－4　純灰層（下層）	須恵器 鉢	(30.20)			明青灰	明青灰	明青灰	良好	2㎜以下の黒色粒多い	
27	207	L－5　純灰層	土師器 皿	(8.00)	(5.60)	1.70	明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化 やや不良	4㎜以下の赤色粒多い	
	208	L－5　純灰層	須恵器 皿	(7.00)	(5.00)	(1.30)	淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	
	209	L－5　純灰層	須恵器 皿	(8.40)	(6.00)	1.50	青灰～暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の砂粒まばら	
	210	L－5　純灰層	須恵器 碗	(15.00)	5.60	5.10	青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	211	L－5　純灰層	須恵器 鉢	(27.40)	(9.80)	(10.10)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	7㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	212	L－5　純灰層	須恵器 鉢	(27.40)			灰褐	灰褐	灰褐	良好	4㎜以下の小礫わずか	
	213	L－5　純灰層	須恵器 鉢	(26.60)	(7.20)	(8.20)	灰～暗灰	灰～暗灰	灰～暗灰	良好	7㎜以下の小礫わずか	
	214	L－5　純灰層	須恵器 鉢	(26.80)	(6.60)	(11.20)	青灰	青灰	青灰	良好	6㎜以下の小礫・砂粒わずか	
	215	L－5　純灰層	須恵器 片口鉢	(26.60)	10.20	10.70	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	216	L－5　純灰層	須恵器 片口鉢				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	4㎜以下の小礫まばら	
／	217	K－7　純灰層（下層）	須恵器 鉢									写真図版 33-6
	218	K－6　純灰層（下層）	須恵器 鉢									写真図版 34-5

表３　宮ノ裏支群出土軒瓦

軒丸瓦

※（　）は復元数値

図版	番号	文様	出土地	瓦当径(cm)	瓦当厚(cm)	外区			内区			備考
						外縁幅(cm)	外縁高(cm)	内縁幅(cm)	中房径(cm)	蓮子	弁数	
28	NM 101	複弁蓮華文	遺物包含層	(15.6)	—	—	—		4.7	1+7	8	『昭和56年度年報』fig.41-7、写真図版37-20
	NM 102	複弁蓮華文	遺物包含層	—	—	—	—	—	(4.7)	1+7か	—	『昭和56年度年報』fig.41-8
	NM 103	梵字文	J−3　黄褐色混灰焼土層	(18.0)	2.1	1.3	1.0	—	—	—	—	梵字"[illegible](アク)"、写真図版38-21
	NM 104	梵字文	L−4　純灰層	—	—	1.3	1.0	—	—	—	—	梵字不明、写真図版38-22
	NM 105	単弁蓮華文	遺物包含層	(14.6)	2.0	1.6	1.15	—	6.2	なし	8	『昭和56年度年報』fig.41-11、写真図版37-9
	NM 106	単弁蓮華文	K−6　純灰層	—	—	—	—		—	—	—	写真図版38-16
	NM 107	複弁蓮華文	1−2号窯灰層	—	2.2	2.0	0.6	—	4.5	なし	6	『昭和56年度年報』fig.41-10、写真図版37-24
	NM 108	複弁蓮華文		—	1.3	1.7	0.5	—	—	—	—	写真図版37-26
	NM 109	複弁蓮華文		(14.8)	1.9	1.5	0.6	—	—	なし	—	
	NM 110	単弁蓮華文	遺物包含層	—	—	—	—	—	4.7	1+4	16か	『昭和56年度年報』fig.41-9、写真図版37-12
	NM 111	左巻き三巴文	L−3　黄褐色混灰焼土層	—	—	—	—	—	—	—	—	写真図版38-17
	NM 112	左巻き三巴文		—	—	1.1	0.6	—	—	—	—	
	NM 113	左巻き三巴文	Ⅱ−B　黄褐色混灰焼土層	—	1.1	0.9	0.5	—	—	—	—	
	NM 114	左巻き三巴文		—	—	1.0	0.55	—	—	—	—	
29	NM 115	複弁蓮華文		—	—	—	—	—	—	1+3〜	—	
	NM 116	複弁蓮華文	I−5　最下層	—	2.1	1.2	0.7	—	—	—	—	写真図版38-2
	NM 117	複弁蓮華文	I−4・5　掘削土	—	—	1.8	0.55	—	—	—	—	
	NM 118	単弁蓮華文	L−4　純灰層	—	2.6	1.25	1.4	—	—	—	—	写真図版37-6
	NM 119	蓮華文		—	—	1.55	0.9	—	—	—	—	
	NM 120	複弁蓮華文	J−4　黄褐色混灰焼土層	—	1.7	1.0	0.8	—	—	—	—	写真図版38-5
	NM 121	複弁蓮華文	L−5　純灰層	—	2.2	0.9	0.6	—	—	—	—	
	NM 122	複弁蓮華文		—	2.2	1.1	0.8	—	—	—	—	『昭和56年度年報』fig.41-12
	NM 123	複弁蓮華文	L−5　純灰層	—	—	1.1	0.7	—	—	—	—	

軒平瓦

図版	番号	文様	出土地	瓦当幅(cm)	瓦当厚(cm)	外区				脇区幅(cm)	顎深(cm)	備考
						上外縁厚(cm)	下外縁厚(cm)	上外縁高(cm)	下外縁高(cm)			
30	NH 101	均整唐草文	Ⅲ−C　灰褐色	—	—	—	0.7	—	0.7	—	—	『昭和56年度年報』fig.41-15
	NH 102	均整唐草文	Ⅱ−A　灰褐色粘質土下層	—	(5.9)	—	0.9	—	0.4	—	—	『昭和56年度年報』fig.41-14、写真図版40-25
	NH 103	均整唐草文	Ⅲ−C　灰褐色粘質土	—	(5.4)	—	0.9	—	0.7	—	—	『昭和56年度年報』fig.41-13
	NH 104	唐草文	I−6　混灰焼土層	—	6.0	0.9	1.3	0.95	0.9	—	—	『昭和56年度年報』fig.41-16、写真図版41-27
	NH 105	唐草文		—	—	0.8	—	0.7	—	1.15	—	
	NH 106	唐草文		—	—	—	—	—	—	—	—	写真図版42-2
	NH 107	均整唐草文	K−6　純灰層	—	4.3	0.95	0.65	0.3	0.2	0.6	—	写真図版40-30
	NH 108	偏行宝相華唐草文	Ⅱ−A　灰層上層	—	(4.6)	1.1	—	0.6	—	0.9	—	写真図版40-22
	NH 109	偏行宝相華唐草文	I−4・5　掘削土	—	(4.6)	0.8	—	—	—	1.1	—	
	NH 110	偏行宝相華唐草文	J−6　純灰層	—	4.0	0.6	0.8	0.5	0.4	—	—	写真図版40-15
	NH 111	偏行宝相華唐草文	I−5　赤褐色混灰焼土層	—	(4.8)	0.8	—	0.4	—	—	—	写真図版40-17
	NH 112	偏行宝相華唐草文	I−5　黄褐色混灰焼土層	—	4.9	0.6	0.8	0.4	0.35	—	—	写真図版40-16
	NH 113	唐草文	J−5　赤褐色混灰層	—	(4.8)	0.9	—	0.3	—	—	—	写真図版42-3
	NH 114	唐草文	I−6　混灰焼土層	—	5.2	0.8	1.0	0.6	0.6	—	—	写真図版41-26
	NH 115	宝相華唐草文		—	3.8	0.6	0.45	0.4	0.5		—	写真図版40-13
	NH 116	連巴文	I−4　赤褐色混灰焼土層	—	(4.0)	—	—	—	—	1.1	—	写真図版41-20
	NH 117	連巴文	Ⅲ−C	—	(4.0)	1.0	—	0.4	—	0.6	—	『昭和56年度年報』fig.41-20
	NH 118	連巴文		—	4.2	0.75	0.5	0.5	0.5	0.6	—	『昭和56年度年報』fig.41-21、写真図版41-22
	NH 119	連巴文	Ⅲ−C　灰褐色粘質土下層	—	—	0.8	—	0.6	—	—	—	
31	NH 120	唐草文	Ⅱ−A　灰層上層	—	4.1	0.8	0.7	0.4	0.3	1.0	—	写真図版41-7
	NH 121	唐草文	I−5　黄褐色混灰焼土層	—	4.1	0.9	0.9	0.5	0.4	1.2	—	
	NH 122	唐草文	Ⅱ−A　灰層上層	—	(4.1)	—	0.7	—	0.4	1.2	—	
	NH 123	唐草文	Ⅳ−C　灰褐色粘質土上層	—	(4.3)	0.8	—	0.4	—	—	—	写真図版41-6
	NH 124	唐草文		—	4.1	0.95	0.7	0.6	0.4	1.25	—	
	NH 125	唐草文	Ⅲ−A　灰褐色粘質土	—	4.1	0.6	0.8	0.5	0.4	1.3	—	
	NH 126	均整唐草文		—	3.9	0.8	0.85	0.4	0.45	1.0	—	写真図版41-3
	NH 127	均整唐草文	L−4・5　純灰層 I−5　最下層	—	4.1	0.8	1.0	0.25	0.5	—	—	
	NH 128	均整唐草文	J−5　赤褐色混灰層	—	(4.2)	0.65	1.1	0.4	0.5	1.3	—	
	NH 129	均整唐草文	J−5　赤褐色混灰層	—	3.9	0.6	0.6	0.4	0.45	1.0	(1.7)	
	NH 130	均整唐草文	K−4　純灰層	—	3.7	0.9	0.85	0.35	0.4	1.3	—	写真図版41-4
	NH 131	均整唐草文	J−6　混灰焼土層	—	4.1	0.9	0.8	0.4	0.45	1.05	—	
	NH 132	均整唐草文		—	4.0	0.75	0.8	0.5	0.5	1.15	—	
	NH 133	均整唐草文	I−4　灰褐色粘質土	—	(4.1)	—	0.5	—	0.6	0.9	—	
	NH 134	均整唐草文		22.9	4.3	0.5	0.6	0.6	0.5	0.75	2.5	『昭和56年度年報』fig.41-17、写真図版39-20
	NH 135	均整唐草文		—	(4.1)	—	0.8	—	0.7	1.05	3.1	写真図版39-19
	NH 136	均整唐草文	Ⅱ−A　灰層上層	—	—	—	—	—	—	—	—	
	NH 137	均整唐草文	K−2　灰褐色粘質土	—	4.6	0.7	0.7	0.5	0.6	1.4	—	
	NH 138	均整唐草文		—	(4.6)	—	0.6	—	0.3	0.9	0.1	写真図版40-3
32	NH 139	均整唐草文		—	4.6	0.5	0.3	0.65	0.5	0.95	(1.6)	写真図版40-1
	NH 140	均整唐草文	D−4　黄褐色混灰焼土層	—	(4.6)	—	0.9	—	0.60	0.6	—	『昭和56年度年報』fig.41-18
	NH 141	均整唐草文	I−4　灰褐色粘質土	—	(4.7)	—	—	—	—	0.6	(2.0)	写真図版40-2
	NH 142	均整唐草文	I−5　黄褐色混灰焼土層	—	—		1.5	—	0.9	—	—	写真図版40-28
	NH 143	均整唐草文	I−5　黄褐色混灰焼土層	—	(3.9)	—	0.8	—	0.2	—	—	写真図版40-29
	NH 144	均整唐草文	Ⅱ−A　灰褐色粘質土下層	—	—	—	1.0	—	0.45	0.6	—	
	NH 145	宝相華唐草文		—	4.9	1.0	0.9	0.7	0.7	—	—	写真図版40-11
	NH 146	宝相華唐草文		—	(4.5)	0.7	—	0.8	—	—	—	
	NH 147	宝相華唐草文	Ⅱ−A　黄褐色混灰層 (水道管掘方内)	—	4.6	—	0.2	—	0.2	1.75	—	『昭和56年度年報』fig.41-19、写真図版40-10
	NH 148	宝相華唐草文	I−5　黄褐色混灰焼土層	—	—	—	0.2	—	0.1	—	—	写真図版40-9
	NH 149	半截花文		—	5.1	1.0	1.0	0.3	0.4	—	—	写真図版40-6
	NH 150	宝相華文	Ⅳ−D　灰褐色粘質土	—	—	—	0.6	—	0.75	—	—	道具瓦、写真図版42-10
	NH 151	連巴文（左巻き）		—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存 『昭和56年度年報』fig.41-20
	NH 152	均整唐草文		—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存
	NH 153	均整唐草文		—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存
	NH 154	偏行宝相華唐草文		—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存

第４章　昭和56年度　第６－２次調査（釜ノ口支群）の成果

第１節　調査区の設定と基本層序

（１）調査区の設定（図33、34）

釜ノ口支群は、遺物の散布が認められる地点に１×15mのトレンチ１本（１トレンチ）、遺物の散布が著しい圃場内に東西約100mのトレンチ３本ないし４本（２～５トレンチ）、最も谷に近い崖面にトレンチ２本（６・７トレンチ）の計６ないし７本を設定した。

１トレンチは窯跡精査のため幅４m×長さ８mの拡張区を設けA地点とし、３トレンチでは溝状遺構を検出したため、15×18mの拡張区を設けた。

６・７トレンチにおいては灰層を検出したため、その周辺に調査区を設定した。６トレンチを中心として広げた調査区をB地点、７トレンチの南側の調査区をC地点とした。B・C地点は接続している。『昭和56年度年報』ではこれらB・C地点をB地点としてまとめて報告しているが、本書では調査記録に従って、B地点・C地点として報告する。

また、トレンチの名称とトレンチ配置や遺構との対応関係が記録によって異なっているため、トレンチを何本設定したか正確には不明である。下記のトレンチ配置図は種々の資料から復元した。ただし、調査記録の不備により５トレンチの位置は不明である。おそらくB・C地点のあたりに設定されたと考えられる。

B地点は、６トレンチの南壁を中心として南北に分け、北をⅠ区、南をⅡ区として遺物の取り上げをおこなったと推測できる。C地点はB地点と同じく北をⅠ区、南をⅡ区とし、東から５m単位でC～K区としてグリッドを設け、遺物の取り上げをおこなっている。

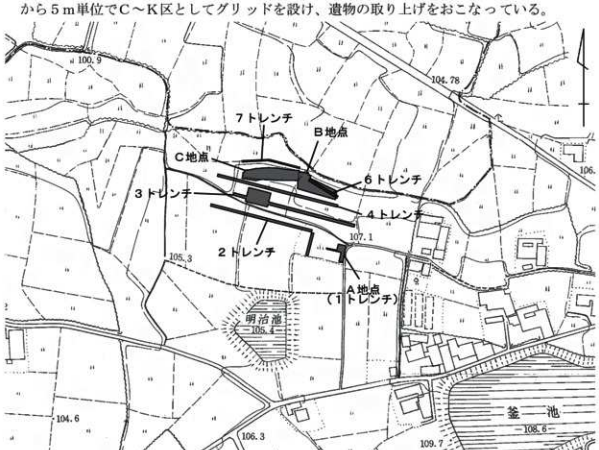


図33　釜ノ口支群　トレンチ配置図（S=1：3,000）

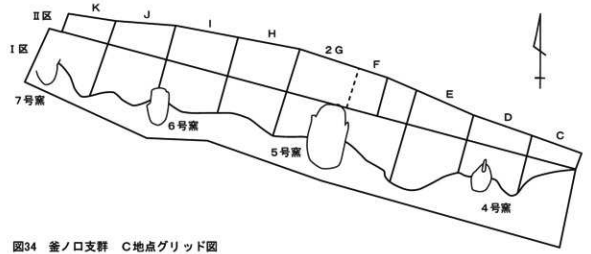


図34　釜ノ口支群　C地点グリッド図

（2）基本層序（図35、36）

調査地の圃場整備前地表面は標高約105.00～108.30mである（土層断面図において耕土層が図示されていないため、図33の地形図や、遺構断面図の標高からおおよそを推定している）。

A地点（1トレンチ）においては、標高約107.75mで窯跡（1号窯）を検出した。窯跡の南側下層、標高107.20～107.40mに灰層が見られる。

2トレンチにおいては、耕土層の直下で基盤層である黄褐色包礫粘土層を検出した。遺物包含層や遺構は検出されていない。

3・4トレンチは、耕土層下に大量の土器を含む灰色粘質土（溝状遺構埋土）が堆積している。基盤層は、東側では耕土層直下に検出しており、西側では灰色粘質土層の下層に存在している。

5トレンチは、「耕土層直下が基盤層であり、遺物包含層や遺構の検出はない」とする記録と、「窯体直上」として遺物を取り上げた記録があり、正確な土層や遺構は不明である。

6・7トレンチは耕土層を除くと、灰層が約0.3～1.0m堆積しており、その下に基盤層が存在する。基盤層は西に向かって緩やかに傾斜するため、灰層は西方が厚くなる。

B地点は耕土層を除くと、標高105.10～105.30mで灰層、混灰焼土層、焼土層の上面となる。それらの土層が相互に重なり合って堆積し、標高105.00mで基盤層となる。

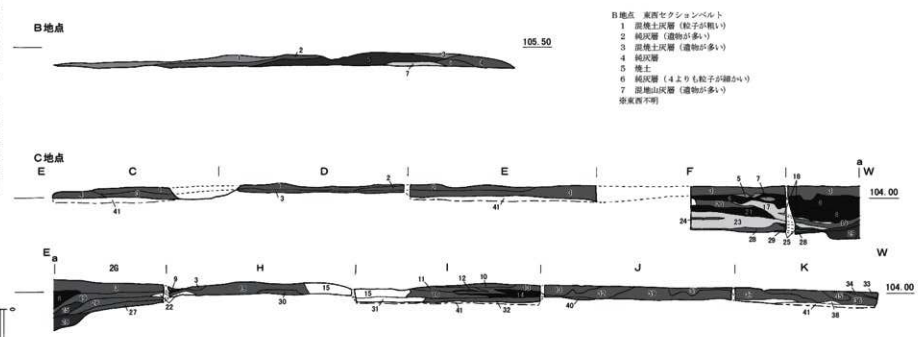
C地点においては、耕土層を除去すると、標高104.00～104.30mで灰層上面となる。標高約103.90～104.00mで数箇所の窯体崩壊土層が見られる他は、灰層や焼土層が重なり合って堆積し、標高103.00～104.00mで基盤層である赤褐色～黄褐色～暗茶灰色土となる。

第2節　調査成果（図37）

釜ノ口支群は従来、窯跡の分布が希薄な地域と考えられていたが、「釜ノ口」という字名や、遺物の散布が認められたことから、窯跡の存在が想定された。試掘調査によって大量の遺物の出土と灰層を確認したことから、本調査をおこない、窯跡7基とそれに伴う灰原、溝状遺構1基を検出した。

調査地の南東に位置するA地点において1基の窯跡（1号窯）を確認した。また、北側に位置するB・C地点において、6基の窯跡（2～7号窯）が標高104.00～105.00mの緩斜面に谷と直交するように横並びに構築されている。1号窯はこれら6基の窯跡からやや離れた立地である。

図35　峯ノ口支群　B・C地点土層断面図



B地点　東西セクションベルト
1　混焼土灰層（粒子が粗い）
2　純灰層（遺物が多い）
3　混焼土灰層（遺物が多い）
4　純灰層
5　焼土
6　純灰層（4よりも粒子が細かい）
7　混地山灰層（遺物が多い）
※東西不明

C地点東西セクションベルト
1　純灰層（崩壊土を含む）
2　純灰層（1より崩壊土を多く含む）＝南北2
3　純灰層（遺物が多い）＝南北5
4　純灰層
5　混焼土灰層（焼土ブロックを含む）
6　崩壊土（粒子が細かい）もしくは混焼土灰層＝南北12, 13
7　混灰焼土層
8　崩壊土（窯壁ブロックを含む）＝南北15
9　崩壊土（粒子が細かい）＝南北17
10　純灰層（11より焼土を多く含む）
11　純灰層（遺物を多く含む）
12　焼土
13　純灰層（崩壊土を含む）＝南北18
14　崩壊土
15　黄褐色混疎土＝南北23
16　純灰層
17　混地山灰層
18　黄褐色粘質土
19　純灰層（焼土粒を含む）＝南北24
20　純灰層
21　崩壊土（窯壁ブロックを含む）
22　黄褐色～黄灰色粘質土
23　混地山灰層＝南北26
24　純灰層
25　赤褐色焼土層
26・27　純灰層
28　純灰層＝南北32
29　赤色焼土層＝南北35
30　純灰層（炭を多く含む）
31　灰黒色混疎土＝南北36
32　純灰層（粘質土を含む）＝南北40
33　純灰層
34　純灰層（焼土を含む）
35　純灰層（遺物を多く含む）
36　純灰層（崩壊土を多く含む）
37　純灰層（崩壊土を13より多く含む）＝南北41
38　暗黄色粘質土
39　純灰層（遺物・地山を含む）＝南北44
40　純灰層（炭を多く含む）
41　赤褐色～黄褐色～暗茶灰色土（基盤層）＝南北51
※6・8・21は同一層の可能性あり

崩壊土
焼土
純灰層
混灰焼土層・混焼土灰層
混地山灰層

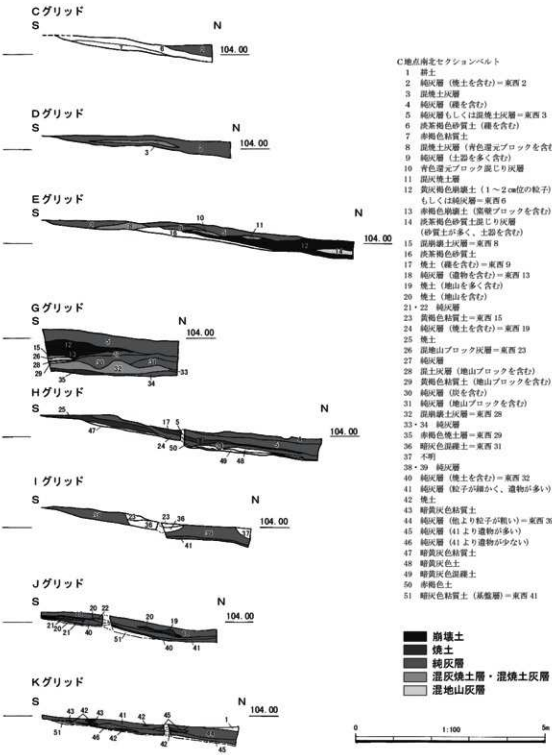


図36　釜ノ口支群　C地点土層断面図

（1）１号窯（図38～40）

１号窯は現存道路により東側半分が削られており、その断面の一部が露出していた。焚口から煙道部付近まで残存しており、現存長7.45m、最大幅1.1m、現存高0.85m、床面傾斜は10度前後で、焚口は北に開く。標高107.60mに位置する。窯体の西側部に幅1.9～4.4m、深さ0.75mの南北に長い谷状の掘り込みを確認できる。この掘り込み中には、窯体側から傾斜する土器を多量に含む層が存在し、不良品などを廃棄する場所として使用されたと考えられる。窯跡の上位までこの層が広がっており、１号窯に伴うものかは不明である。

土層断面図から窯体盛土の下層に灰層が認められる。１号窯は焚口を北に向けており、窯体より下層にあることから、この灰層は１号窯には属さず、南方に１号窯より古い窯跡の存在が想定できる。しかし、当時の調査記録では特に言及されておらず、この灰層から出土した遺物の特定もできないため、詳細は不明である。

土器は、土師器坏、須恵器鉢・塊が出土している。そのうち、須恵器鉢５点、須恵器塊１点を図示した。図40－１は須恵器塊である。図40－２～６は須恵器鉢である。２・４・６は片口を有する。３・６は体部に板状工具のナデによると考えられる沈線状の凹みを持つ。

（2）２号窯（図41、42）

２号窯はＢ地点に位置し、東西に並ぶ６基の窯跡の最も東で検出した。現存長3.1m、最大幅1.65m、現存高0.45m、床面傾斜は10度未満であり、焚口を北に持つ。『昭和56年度年報』においては、宮ノ裏支群１・２号窯同様に「周辺部から土を取り、盛土をして築山状にした部分を穿って、窯体を構築している」と想定していたが、やはり、浅く地面を掘り下げ、支柱などを設けて側面の盛土および窯壁の構築をおこなったと考えられる。窯壁を支えた支柱の痕跡は確認できないが、窯跡の中央には縦に並んだピットを４つ検出しており、これは天井部を支えた支柱ピットと考えられる。窯跡の両側部に掘り込みが見られ、『昭和56年度年報』では排水溝と想定していた。燃焼部と焼成部の間に大きな段を持ち、断面から２～３回の修復が認められる。

また、「２号窯西側溝」出土とする大量の遺物が存在する。Ｂ地点において、２号窯の西側に３号窯以外の遺構はないことから、「２号窯西側溝」は２号窯西側の排水溝を指すと考えられる。遺物図面は掲載していないが、器種構成や須恵器鉢の型式構成が２号窯とは異なることが第12章に後述する分析結果からわかる。そのため、「２号窯西側溝」出土遺物は、２号窯の修復前に伴う資料、もしくは周辺の消失した窯跡に伴う資料と考えられる。

２号窯出土の土器は、須恵器鉢・塊・皿を図示した。図42－７は須恵器皿である。図42－８・９は須恵器塊である。ともに体部が直線的に開く。図42－10～17は須恵器鉢である。17は片口を有する。10は口縁部端面が凹むことで、内側にわずかに膨らむ。11・16は口縁端部が下方に大きく拡張する。12は口縁端部で内側に屈曲し、体部は粘土紐の痕跡が良く残る。13は口縁部端面が凹むことで、内外に膨らむ。内外面ともに口縁部下で器壁が薄くなる。14・15は口縁部がくの字状に内側にわずかに屈曲する。

（3）３号窯（図43、44）

３号窯はＢ地点に位置する。現存長4.35m、最大幅1.6m、現存高0.45m、床面傾斜は10度未満を測り、焚口は北に開く。窯体内にピットなどは確認できないが、検出状況から２号窯

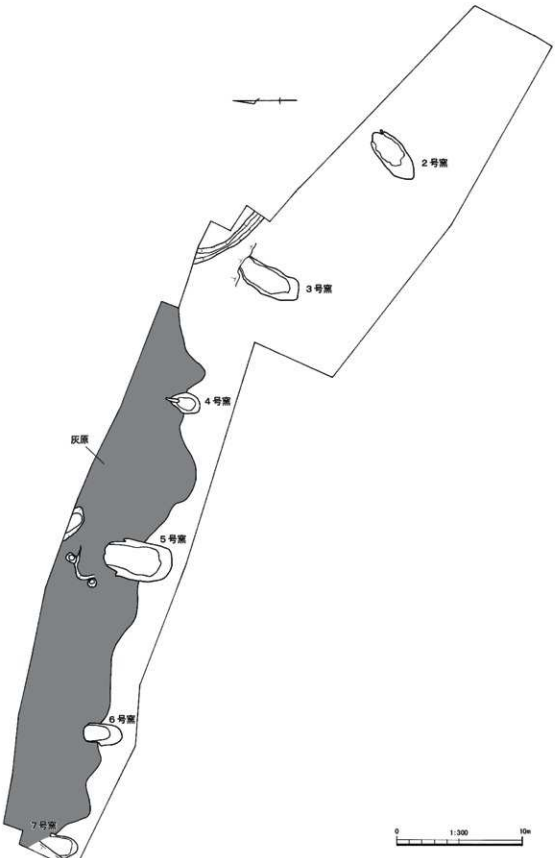


図37　釜ノ口支群　B・C地点遺構平面図

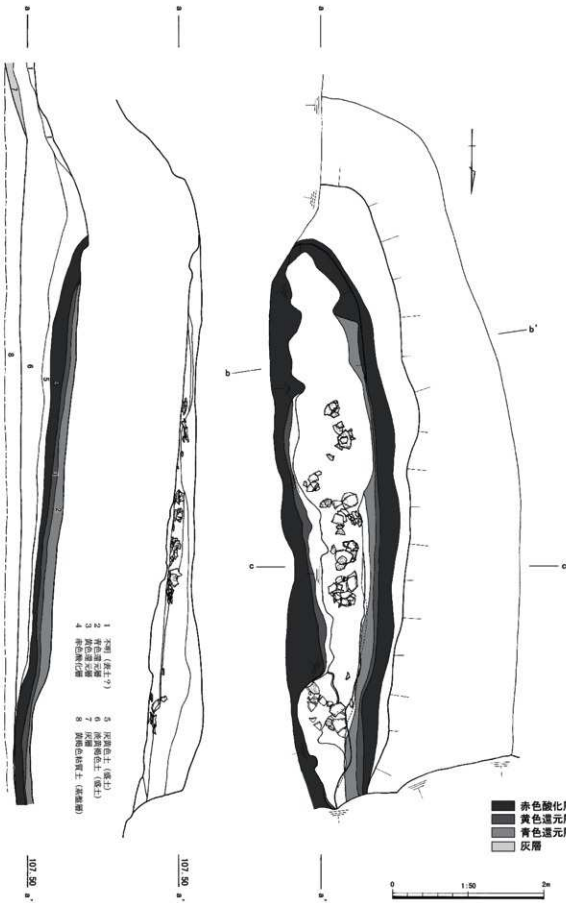


図38　釜ノ口支群　1号窯平面・立面・断面図

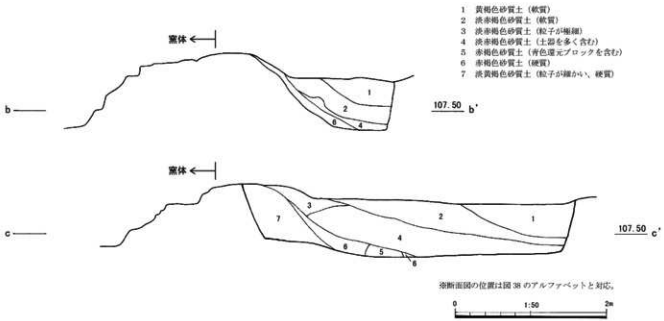


図39　釜ノ口支群　1号窯西側部土層断面図

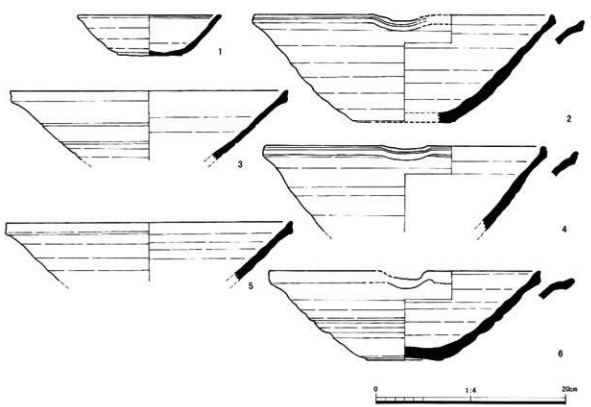


図40　釜ノ口支群　1号窯出土土器

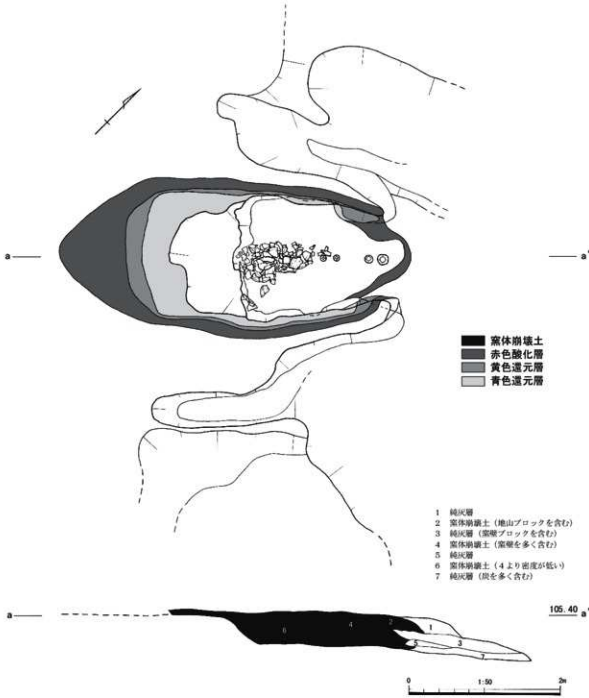


図41　釜ノ口支群　2号窯平面・断面図

同様の構築方法が想定できる。窯体の両側部には溝状の掘り込みが見られ,『昭和56年度年報』では排水溝としている。3号窯の北には西側の排水溝を切る溝が東西に走るが、調査記録には特に記述がなく、性格は不明である。ただし、宮ノ裏1・2号窯の焚口前方にも横切る溝が存在することから、同様の性格を想定できる可能性がある。2～3回の窯体の修復が認められ、焚口付近で窯体を拡張している。

土器は、土師器皿、須恵器鉢・埦・皿が出土している。図44－18～20は須恵器皿である。18は底部に比べ、かなり薄手の体部を持つ。19は分厚い底部を持ち、体部は外反する。20は体部～底部まで厚さが均一であり、体部は直線的に開く。図44－21～23は須恵器埦である。

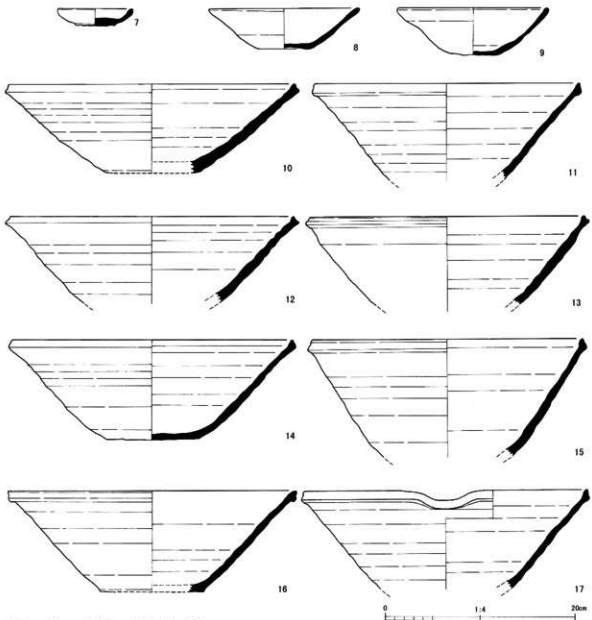


図42　釜ノ口支群　２号窯出土土器

21は体部が内湾する。22は体部が直線的に開く。23は体部が内湾して立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する。図44－24～29は須恵器鉢である。24は口縁部端面を器壁外面に対して直角におさめる。25・26・28は片口を有する。29は口縁部の小片であり、口縁部付近で外面が大きく凹み、端部は上方に拡張する。

（４）４号窯（図45、46、写真２）

４号窯はＣ地点の最も東に存在し、Ｂ・Ｃ地点のほぼ中央に位置する。窯跡は大きく削平され、床面がわずかに残存する程度である。現存長1.7m、最大幅1.15m、現存高0.2m、床面傾斜10度未満を測り、焚口は北を向く。

土器は、窯体内から須恵器鉢・塊が出土している。図46－30・31は須恵器塊である。31は体部がわずかに内湾し、口縁部付近で外反する。図46－32～36は須恵器鉢である。32は底部

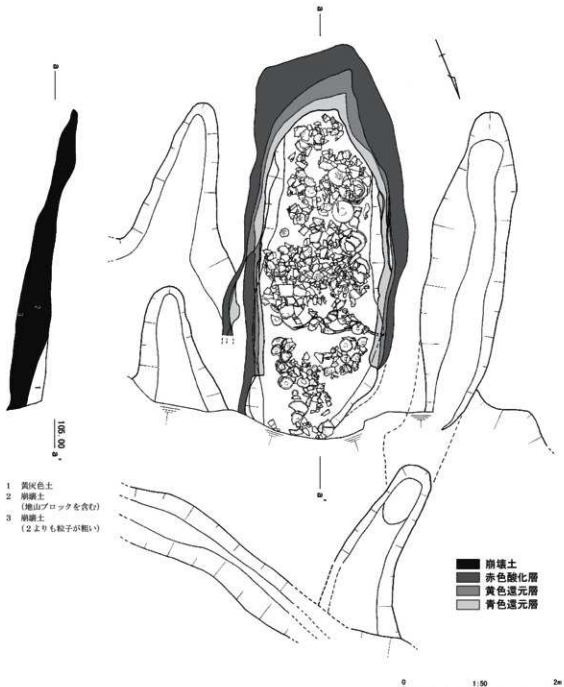


図43　釜ノ口支群　3号窯平面・断面図

で、33～36はいずれも口縁部の小片である。

他に平瓦が少数出土している。前章で記載した通り、調査記録検討の結果、この釜ノ口支群4号窯出土資料は、宮ノ裏支群4号窯出土資料の可能性がある。

（5）5号窯（図47、48）

5号窯はC地点に存在し、6基の窯跡中、西から3番目に位置する。現存長4.5m、最大幅2.5m、現存高1.15m、床面傾斜20度を測り、焚口は北を向く。3号窯同様窯体内にピットなどは確認できないが、窯壁がよく残存しており、2・3号窯同様の構築方法が想定できる。

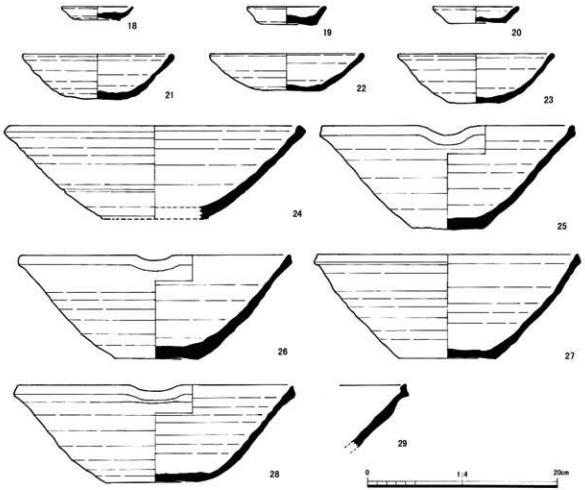


図44　釜ノ口支群　3号窯出土土器

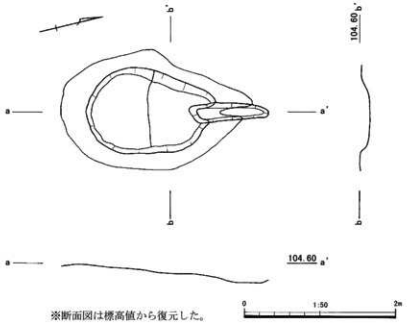
窯体両側に浅い掘り込みがある。他の窯体に比べ、床面傾斜が急である。

調査記録には特に記述がないが、遺構平面図（図37）には5号窯の前庭部に浅い鉤状の落込みとピット2基、さらに調査区外北側に延びる溝もしくは土坑1基が確認できる。焚口前の落込みとピットは簡易な上屋が存在した可能性を示す。北側の溝もしくは土坑については性格が不明である。

土器は、窯体内から須恵器鉢・埦・皿、崩壊土から須恵器鉢・甕が出土している。

窯体内からは須恵器埦・皿を1点ずつ図示した。図48－37は須恵器皿である。全体的に丸みを帯びている。図48－38は須恵器埦で、口縁部が欠損している。体部に沈線を持つ。

「窯内崩壊土」として取り上げた遺物が一定量あり、窯体埋土のことと考えられる。ここから出土した土器のうち、須恵器鉢7点、須恵器甕2点を図示した。図48－39～45は須恵器鉢である。40・42は体部が内湾し、口縁部で外反する。42は40に比べて器壁がかなり厚い。43は底部のみ残存する。45は片口を有するが、半分近く欠損している。図48－46・47は須恵器甕である。46は胴部外面に平行タタキを持つ。頸部は丸く外反し、口縁端部で上方につまみ上げる。47は頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部内面でわずかに凹む。胴部がほとんど残存していない。



※断面図は標高値から復元した。

図45　釜ノ口支群　4号窯平面・断面図

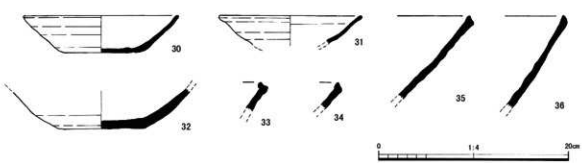


図46　釜ノ口支群　4号窯出土土器

写真2　釜ノ口支群　4号窯出土平瓦

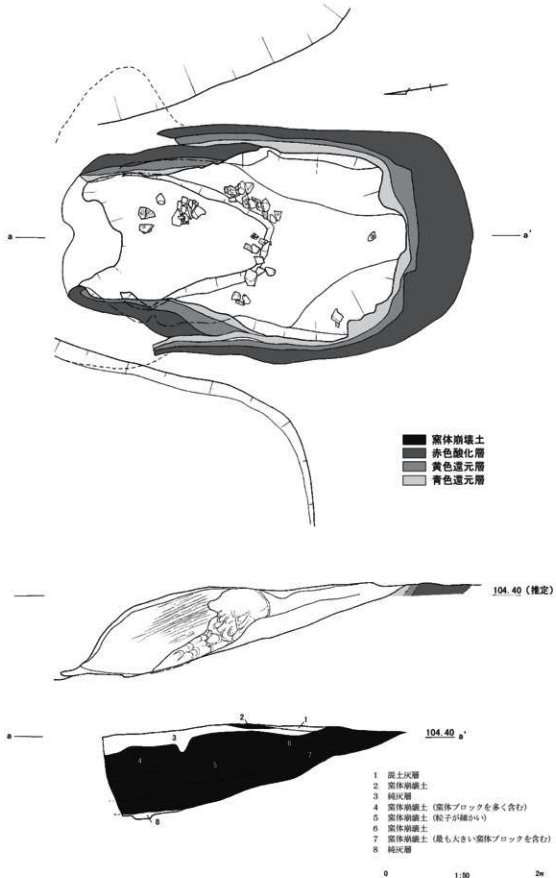


図47　釜ノ口支群　5号窯平面・立面・断面図

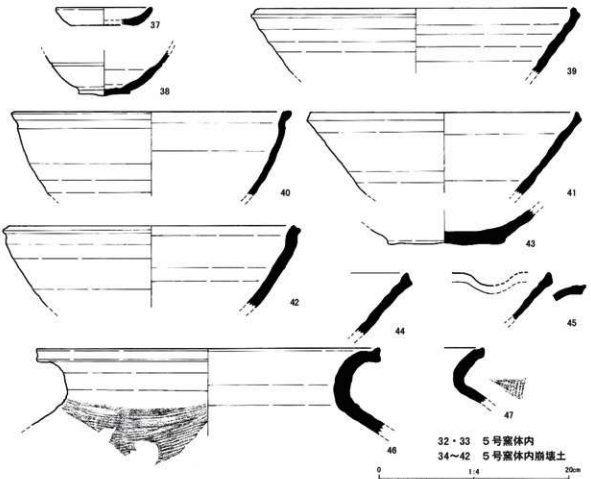


図48　釜ノ口支群　5号窯出土土器

（6）6号窯（図49、50）

6号窯はC地点に存在し、6基の窯跡中、西から2番目に位置する。大きく削平を受けており、ほぼ床面が残存するのみであるが、床面からは多量の遺物が出土している。現存長2.7m、最大幅1.35m、現存高0.4m、床面傾斜10度未満を測り、焚口を北に開く。

窯体内から出土した土器のうち、須恵器鉢・塊・甕を図示した。図50－48～50は須恵器塊である。いずれも直線的に開く体部を持つ。49はわずかに底部が平高台状になっており、体部の粘土紐痕跡がよく残る。50は口縁部を内側に丸く収める。図50－51～59は須恵器鉢である。51は口縁部が内側に拡張し、片口を有する。52は口縁部が内外に肥厚する。53は口縁部端面が凹み、内外にわずかに肥厚する。54は片口を有するが、ほとんど欠損しており図化していない。口縁部はくの字状に内側に屈曲する。55は口縁部が内外に拡張し、T字状を呈する。56は下方に垂れるように拡張する。57・58は口縁部が欠損している。図50－59は須恵器甕の胴部である。外面に平行タタキを施す。

（7）7号窯（図51、52）

7号窯はC地点に存在し、6基中最も西側で検出した。大きく削平され、床面がわずかに残存する。現存長1.9m、最大幅1.45m、現存高0.2m、床面傾斜10度未満を測り、焚口は北に持つ。

土器は須恵器鉢・塊が出土している。図52－60・61は須恵器塊である。61は60に比べ器高が高い。図52－62～65は須恵器鉢であり、62・64・65は片口を有する。

図49　釜ノ口支群　6号窯平面・断面図

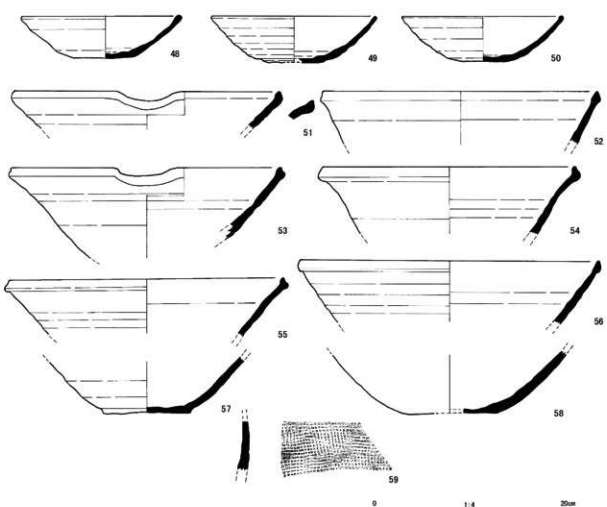


図50　釜ノ口支群　6号窯出土土器

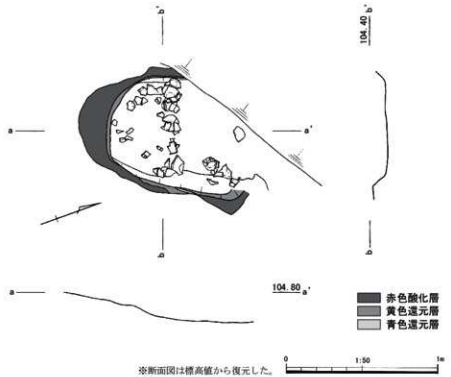


図51　釜ノ口支群　7号窯平面・断面図

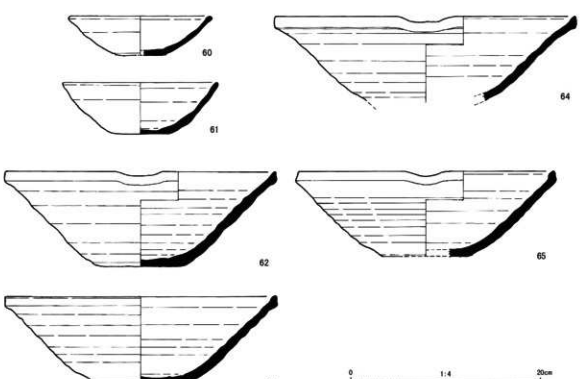


図52　釜ノ口支群　7号窯出土土器

（8）灰原

A地点（1号窯）の灰原に関しては、記録がなく不明である。1号窯より下層に存在する灰層については、（1）1号窯で述べた通りである。

B・C地点の灰原は東西80mにわたり存在し、厚さ約0.3～1.0m堆積している。灰層の範囲は、主に窯跡の中位あたりから北に広がっている。しかし、窯跡と窯跡の間で大きく南側に張り出すように灰層・焼土層を確認した箇所があり、検出した窯跡以外にも、消滅した窯跡があったと考えられる。特に4・5号窯間のEグリッド、5号窯西側のHグリッドでは、焼土層が南側に大きく張り出しており、付近に窯跡が存在していた可能性が高い（図36・37）。なお、今回整理できなかったが、この灰原からは多量の遺物が出土している。

（9）3トレンチ SD01（写真図版18－1）

3トレンチの西側では、長さ10m、幅8m、深さ0.7mの溝状遺構SD01を検出した。同じような堆積状況から4トレンチまで続くと考えられる。埋土は灰色粘質土が堆積しており、西側ほど厚くなる。遺物が多量に出土しており、最も集中する箇所では、土器が重なり合って多量に堆積し、灰や焼土塊、窯壁片もわずかに含む。このことから窯跡と関係する遺構と考えられる。しかし、平面図や土層断面図が存在せず、詳細は不明である。

（10）軒瓦

釜ノ口支群から出土した軒瓦として、軒丸瓦18点、軒平瓦21点を掲載した。出土地点については表5に記載する。鬼瓦を1点出土しており、第13章で他支群において出土した資料と併せて報告する。

①軒丸瓦（図53、54）

NM201～206は唐草文軒丸瓦である。瓦当面の直径が17cm前後と大振りな軒丸瓦である。文様の向きは個体によってバラつきが見られる。すべて唐草文の外側に圏線が巡る。NM201・203・205が同文で、NM202・204・206はそれぞれ笵が異なると考えられる。

NM207・208は複弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中房には蓮子がなく、全体が丸く盛り上がる。蓮弁と子葉は太めの凸線で表現される。宮ノ裏NM107～109と同文であり、鳥羽離宮金剛心院に供給された瓦である。

NM209は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房には蓮子を配し、蓮弁と一体となった圏線で画される。蓮弁は太めの凸線で縁取られ、その周縁には圏線が一条巡る。

NM210～212は左巻き三巴文軒丸瓦である。いずれも凸線の断面形態は扁平である。NM210・211は内区に三巴、外区に大きく楕円形の珠文帯が配され、境界には圏線が巡る。NM212も同様の文様構成であるが、圏線が太く、小さな珠文が密に並ぶなど、違いが見られる。

NM213～216は右巻き三巴文軒丸瓦である。凸線の断面形態は扁平である。NM213は巴の頭部の先端がやや尖っており、尾は細長く延びる。外区には圏線が一条巡る。NM214は笵ズレが著しい。NM215・216は同文であると見られる。

NM217・218は左巻き三巴文軒丸瓦である。凸線の断面形態は蒲鉾形である。

②軒平瓦（図55、56）

NH201・202は均整唐草文軒平瓦である。中心飾には縦方向の凸線が一本入り、そこから左右に形骸化して山形状になった唐草文が展開する。また、枝葉が形骸化したと見られる珠文状

の文様を配する。外区には圏線が巡る。NH202は包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NH203は軒平瓦である。瓦当の右端のみが残存しており、瓦当文様については全く不明である。周縁を圏線が巡る。

NH204～210は偏行宝相華唐草文軒平瓦である。NH204・205がこの中では最も先行する型式と見られ、NH206～208では瓦当面の左端が切り縮められている。NH209・210ではさらに左端が切り縮められており、最も後出する型式であると見られる。NH204は瓦当貼付ｂ技法、NH207・208は包み込みｂ技法、NH209は顎貼付技法によって瓦当を成形している。

NH211は均整唐草文軒平瓦である。これと同意匠の瓦は宮ノ裏支群で出土している。瓦当貼付ｂ技法によって瓦当を成形している。

NH212～214は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はＣ字上向となり、左右に唐草が５転すると考えられる。NH212は顎貼付技法、NH213は瓦当貼付ｂ技法、NH214は包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NH215～221は連巴文軒平瓦である。すべて左巻きの巴文である。NH215・216は８連の連巴文である。NH216では左端の巴文が半分ほど切り縮められている。同じような切り縮めはNH218・219でも見られ、同笵の可能性が高い。NH221はNH215もしくはNH216と同笵の可能性がある。NH217・220は巴の間隔にやや余裕があり、６～７連の連巴だと考えられる。NH220は包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

表４　釜ノ口支群出土軒瓦

軒丸瓦　　※（　）は復元数値

図版	番号	軒丸瓦文様	出土地	瓦当径（cm）	瓦当厚（cm）	外区 外縁幅（cm）	外区 外縁高（cm）	外区 内縁幅（cm）	内区 中房径（cm）	内区 蓮子	内区 弁数	備考
53	NM 201	唐草文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｃ 灰層－１層	16.6	3.0	1.7	0.9	－	－	－	－	『昭和56年度年報』fig.44-52、写真図版38-6
	NM 202	唐草文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｉ 灰層－４層 ６号窯体内	17.6	3.0	1.1	1.1	－	－	－	－	『昭和56年度年報』fig.44-53、写真図版38-7
	NM 203	唐草文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｃ 灰層－１層	(17.6)	2.5	1.15	1.1	－	－	－	－	
	NM 204	唐草文	５トレンチ 緑灰層 ５トレンチ 第２灰層	(17.0)	2.5	1.2	0.8	－	－	－	－	
	NM 205	唐草文	５トレンチ 緑灰層	－	2.2	1.55	0.9	－	－	－	－	
	NM 206	唐草文	５トレンチ ２号窯灰層	(18.2)	2.2	1.25	0.9	－	－	－	－	
	NM 207	複弁蓮華文	３トレンチ拡張区 灰褐色粘質土	(14.2)	－	1.3	0.7	－	4.3	なし	6	『昭和56年度年報』fig.44-54
	NM 208	複弁蓮華文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｆ 上部灰層	－	2.0	1.5	0.75	－	－	－	－	
	NM 209	複弁蓮華文	Ｃ地点 Ⅰ－Ｊ 灰層－１層	(13.0)	－	1.2	0.9	－	－	あり	－	『昭和56年度年報』fig.44-57
54	NM 210	左巻き三巴文		14.4	2.5	0.9	0.3	0.5	－	－	－	写真図版38-10
	NM 211	左巻き三巴文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｉ 灰層－４層	－	－	1.15	0.5	1.4	－	－	－	『昭和56年度年報』fig.44-58
	NM 212	左巻き三巴文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｊ 灰層－３層	－	2.3	0.8	0.5	1.1	－	－	－	写真図版38-11
	NM 213	右巻き三巴文	３トレンチ	－	－	1.1	1.45	－	－	－	－	『昭和56年度年報』fig.44-56、写真図版38-18
	NM 214	右巻き三巴文	３トレンチ SD01（灰褐色粘質土）	14.0	2.8	1.6	0.8	－	－	－	－	『昭和56年度年報』fig.44-54、写真図版38-20
	NM 215	右巻き三巴文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｉ 灰層－４層	－	－	0.8	0.9	－	－	－	－	写真図版38-19
	NM 216	右巻き三巴文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｉ 灰層－４層	－	－	1.1	1.1	－	－	－	－	
	NM 217	左巻き三巴文	３トレンチ SD01（灰褐色粘質土）	(13.0)	－	1	0.75	－	－	－	－	写真図版38-15
	NM 218	左巻き三巴文	Ｃ地点 Ⅰ－Ｋ 灰層－１層	－	－	0.9	0.6	－	－	－	－	

軒平瓦

図版	番号	軒平瓦文様	出土地	瓦当幅（cm）	瓦当厚（cm）	外区 上外縁厚（cm）	外区 下外縁厚（cm）	外区 上外縁高（cm）	外区 下外縁高（cm）	脇区幅（cm）	顎深（cm）	備考
55	NH 201	均整唐草文	Ｃ地点 Ⅰ－Ｇ	20.9	5.1	1.1	0.6	0.5	0.4	1.5	1.5	『昭和56年度年報』fig.44-63、写真図版40-4
	NH 202	均整唐草文	Ｃ地点	－	(5.4)	0.7	－	0.4	－	(0.7)	－	
	NH 203	不明		－	－	－	－	－	－	－	－	
	NH 204	偏行宝相華唐草文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｃ 灰層－１層	－	4.6	0.8	0.7	0.5	0.6	1.15	－	
	NH 205	偏行宝相華唐草文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｃ 灰層－１層	23.9	4.6	0.9	0.8	0.6	0.5	1.15	2.2	『昭和56年度年報』fig.44-60、写真図版40-19
	NH 206	偏行宝相華唐草文	５トレンチ ２号窯灰層 ５トレンチ 緑灰層	21.5	3.7	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8	2.5	『昭和56年度年報』fig.44-61、写真図版40-20
	NH 207	偏行宝相華唐草文	５トレンチ ２号窯灰層 ６トレンチ 緑灰層	－	4.0	0.4	0.4	0.7	0.8	1.0	(1.5)	
	NH 208	偏行宝相華唐草文	１層	－	4.2	0.9	0.7	0.4	0.3	0.7	－	
	NH 209	偏行宝相華唐草文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｋ 灰層－３層	－	4.0	0.7	0.6	0.6	－	－	－	
	NH 210	偏行宝相華唐草文	６号窯	－	(4.4)	0.9	0.8	0.3	－	0.6	－	写真図版40-21
	NH 211	均整唐草文	３トレンチ 東方灰層（灰褐色粘質土）	－	(4.9)	0.8	－	0.5	－	(0.6)	－	
	NH 212	均整唐草文	Ｃ地点 Ⅱ－Ｇ 灰層－３層	－	－	－	－	－	－	(1.05)	－	
	NH 213	均整唐草文	３トレンチ 灰褐色粘質土	－	3.5	0.5	0.8	0.3	0.3	－	－	『昭和56年度年報』fig.44-62
	NH 214	均整唐草文		－	4.0	0.9	0.9	0.3	0.2	1.3	－	写真図版41-5
56	NH 215	連巴文（左巻き）	５トレンチ ２層	21.7	3.9	0.7	0.6	0.3	0.4	0.9	1.6	『昭和56年度年報』fig.44-59、写真図版41-18
	NH 216	連巴文（左巻き）	５トレンチ ２層	21.1	3.9	0.8	0.7	0.5	0.3	0.9	1.8	写真図版41-19
	NH 217	連巴文（左巻き）	６トレンチ 緑灰層	－	－	0.75	0.8	0.4	0.5	1.0	(3.0)	写真図版41-21
	NH 218	連巴文（左巻き）	５トレンチ ２層	－	4.1	0.8	0.5	0.4	0.4	0.7	－	
	NH 219	連巴文（左巻き）	５トレンチ ２層	－	3.7	0.6	0.5	0.4	0.5	1.0	－	
	NH 220	連巴文（左巻き）	Ｃ地点 Ⅱ－Ｃ 灰層－１層	－	4.0	0.7	0.65	0.4	0.4	1.2	－	
	NH 221	連巴文（左巻き）	５トレンチ ２層	－	3.7	0.6	0.5	0.4	0.5	0.9	－	

図53　釜ノ口支群出土軒丸瓦①

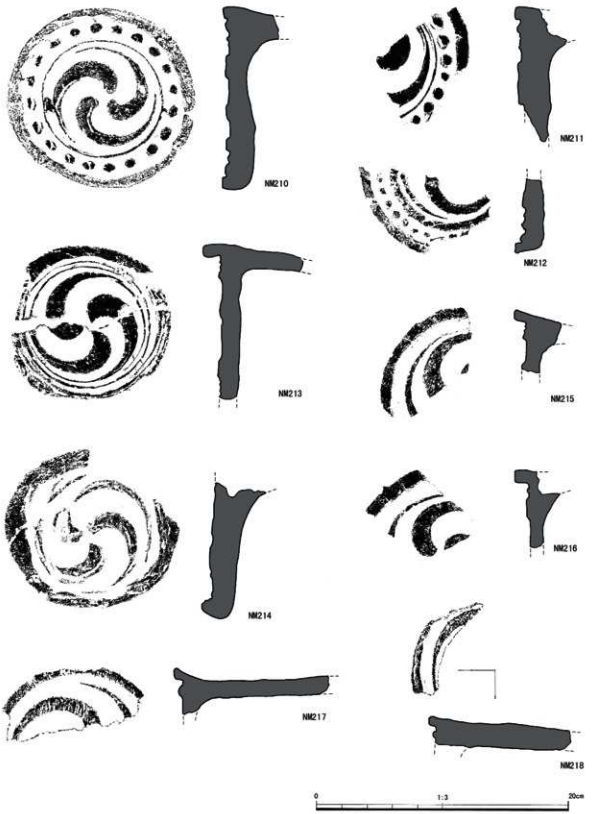


図54　釜ノ口支群出土軒丸瓦②

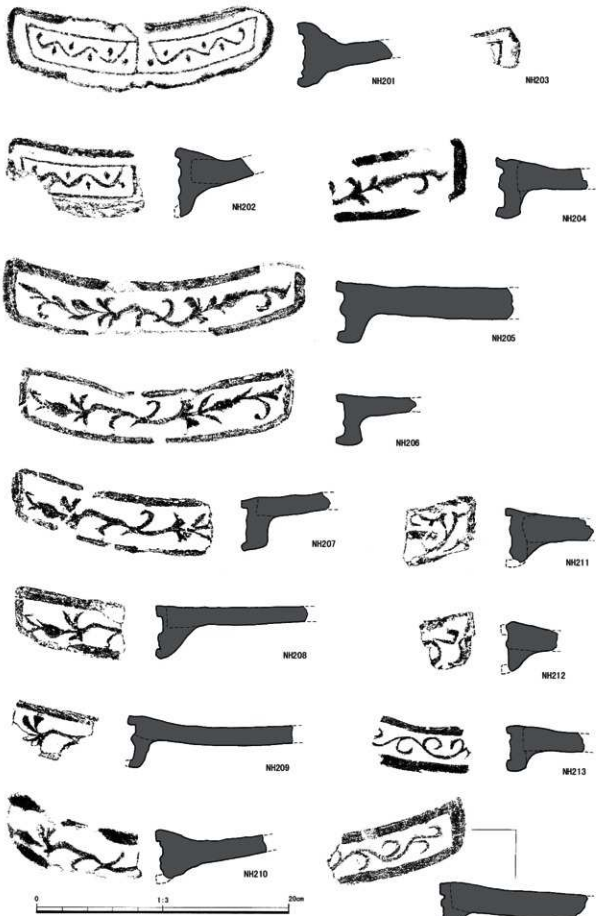


図55　釜ノ口支群出土軒平瓦①

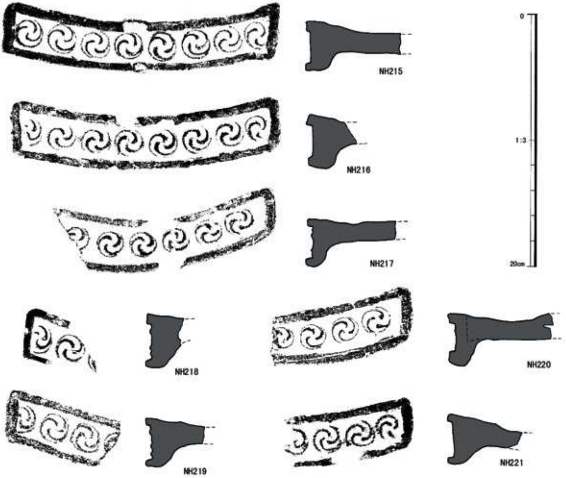


図56　釜ノ口支群出土軒平瓦②

表５　釜ノ口支群出土土器　　※（　）は復元数値

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
40	1	1号窯体内	須恵器 椀	(15.10)	(6.80)	(4.30)	淡灰	淡黒灰	淡灰	良好	7mm以下の小礫わずか	
	2	1号窯体内	須恵器 片口鉢	(31.60)	(10.00)	(11.40)	暗灰	黒灰	暗灰	良好	4mm以下の小礫わずか	
	3	1号窯体内	須恵器 鉢	(29.40)			淡灰	淡灰	淡灰	良好	精良	体部：２ヶ所に沈線上の凹み
	4	1号窯体内	須恵器 片口鉢	(29.60)			暗灰	暗灰	暗灰	良好	1mm以下の砂粒わずか	口縁端部：片口成形後、板ケズリ
	5	1号窯体内	須恵器 片口鉢	(30.20)			淡黒灰	暗灰	暗灰	良好	4mm以下の小礫・砂粒わずか	片口は残存部が少なく、図化できず
	6	1号窯体内	須恵器 片口鉢	(26.60)	(8.00)	(9.40)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5mm以下の小礫わずか	粘土紐痕跡強調 (明石市林崎三本松瓦窯に同様品あり)
42	7	2号窯体内	須恵器 皿	(7.90)	(4.10)	(1.60)	淡青灰	青灰	淡青灰	良好	2mm以下の白色粒まばら	
	8	2号窯体内	須恵器 椀	(16.00)	(5.30)	(4.30)	青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒多い	
	9	2号窯体内	須恵器 椀	(16.80)	(5.10)	(5.00)	灰~暗青灰	灰	灰	やや不良	5m以下の小礫わずか	
	10	2号窯体内	須恵器 鉢	(30.20)	(9.40)	(9.20)	灰	灰	暗灰	良好	7mm以下の小礫わずか、1mm以下の黒色粒わずか	
	11	2号窯体内	須恵器 鉢	(28.10)			暗黄褐	暗灰	暗灰	やや不良	2mm以下の砂粒まばら	
	12	2号窯体内	須恵器 鉢	(30.00)			灰	灰	灰	良好	6mm以下の小礫・砂粒まばら	
	13	2号窯体内	須恵器 片口鉢	(28.90)			灰白~青灰	灰~青灰	灰	良好	2mm以下の黒色粒まばら	片口は残存部が少なく、図化できず
	14	2号窯体内	須恵器 鉢	(29.60)	(9.80)	(10.60)	黒灰	暗青灰	暗青灰~黒	良好	5m以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	
	15	2号窯体内	須恵器 鉢	(28.80)			淡黒褐	黒灰	淡灰	やや不良	3mm以下の砂粒まばら	
	16	2号窯体内	須恵器 鉢	(30.40)	(10.80)	(10.65)	淡黒灰	淡黒灰	淡黒灰	良好	3mm以下の小礫わずか	
	17	2号窯体内	須恵器 片口鉢	(30.00)			暗青灰	淡灰		不良	1mm以下の砂粒を含む	556 年報 fig 42-28
44	18	3号窯体内	須恵器 皿	7.60	4.80	1.40	淡灰緑	淡灰緑	淡灰緑	良好	2mm以下の砂粒多い	
	19	3号窯体内	須恵器 皿	8.30	5.90	1.90	青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	写真図版 35-10
	20	3号窯体内	須恵器 皿	9.10	6.10	1.70	黒灰	暗灰	暗灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	21	3号窯体内	須恵器 椀	15.80	5.00	4.75	淡灰黄	淡灰黄	淡灰黄	良好	5mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	
	22	3号窯体内	須恵器 椀	16.20	7.50	3.90	暗青灰	黒灰	黒灰	良好	3mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
	23	3号窯体内	須恵器 碗	16.40	5.50	5.20	灰白～青灰	灰白～青灰	灰白～青灰	良好	精良	写真図版 34-14
	24	3号窯体内	須恵器 鉢	(30.70)	(11.40)	(9.60)	灰	暗灰	暗灰	良好	2mm以下の砂粒多い	
	25	3号窯体内	須恵器 片口鉢	(26.40)	(7.60)	(10.90)	灰	灰		やや良好	1mm以下の白色粒・マンガン粒わずか	S56 年報 fig. 42-27, 写真図版 33-13
44	26	3号窯体内	須恵器 片口鉢	(28.40)	(8.80)	(11.00)	緑灰	緑灰		やや不良	精良	S56 年報 fig. 42-30, 写真図版 33-6
	27	3号窯体内	須恵器 鉢	(27.60)	(10.20)	(11.00)	暗灰	暗灰	暗灰	やや不良	1mm以下の砂粒まばら	
	28	3号窯体内	須恵器 片口鉢	(29.10)	(9.60)	(10.30)	灰	灰		やや不良	精良	S56 年報 fig. 42-29
	29	3号窯体内	須恵器 鉢									
	30	4号窯体内	須恵器 碗	(16.40)	(7.00)	(3.90)	灰白	灰白	灰白	やや不良	1mm以下の砂粒わずか	
	31	4号窯体内	須恵器 碗	(15.00)			淡灰褐	淡灰褐	淡灰褐	不良	4mm以下の小礫わずか	
	32	4号窯体内	須恵器 鉢底部		(9.00)		淡黄灰	淡灰	淡黄灰	やや不良	1mm以下の砂粒わずか	底部：ヘラオコシあり
46	33	4号窯体内	須恵器 鉢				灰	灰	灰	良好	精良	
	34	4号窯体内	須恵器 鉢				灰白	灰白	灰白	やや不良	1mm以下の砂粒わずか	
	35	4号窯体内	須恵器 鉢				淡黒灰	青灰	淡黄灰	良好	2mm以下の黒色粒多い	
	36	4号窯体内	須恵器 鉢				黒褐灰	褐灰	黒灰	良好	2mm以下の砂粒多い	写真図版 34-6
	37	5号窯体内	須恵器 皿	(10.10)	(7.00)	(1.60)	淡灰	淡灰	淡灰	良好	精良	
	38	5号窯体内	須恵器 碗底部		5.40		淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	14mm以下の白色粒わずか	体部：沈線
	39	5号窯体内　崩壊土	須恵器 鉢	(33.20)			淡灰	淡褐灰	淡褐灰	良好	5mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	
	40	5号窯体内　崩壊土	須恵器 鉢	(29.60)			暗灰	黄灰	黄灰	良好	2mm以下の白色粒多い(石英)	写真図版 33-1
	41	5号窯体内　崩壊土	須恵器 鉢	(26.20)			暗灰	暗灰	暗灰	良好	1mm以下の黒色粒まばら	
48	42	5号窯体内　崩壊土	須恵器 鉢	(30.00)			淡灰	灰	淡黄灰	良好	5mm以下の小礫わずか、1mm以下の白色粒多い	
	43	5号窯体内　崩壊土	須恵器 鉢底部		11.50		暗灰	暗灰	暗灰	良好	3mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	
	44	5号窯体内　崩壊土	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	45	5号窯体内　崩壊土	須恵器 片口鉢				灰	灰	灰	良好	4mm以下の黒色粒わずか	
	46	5号窯体内　崩壊土	須恵器 甕	(36.20)			黒灰	暗灰	暗灰	良好	4mm以下の小礫わずか	外面：平行タタキ4本/cm
	47	5号窯体内　崩壊土	須恵器 甕				淡黒灰	淡黒灰	淡黒灰	良好	4mm以下の小礫多い	外面：平行タタキ3本/cm
	48	6号窯体内	須恵器 碗	16.60	6.50	4.40	青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	49	6号窯体内	須恵器 碗	(17.30)	(6.50)	(4.90)	青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	50	6号窯体内	須恵器 碗	(16.90)	7.00	4.80	黒灰～淡灰	暗灰	暗灰	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	51	6号窯体内	須恵器 片口鉢	(27.80)			灰白	暗灰白	暗灰白	良好	4mm以下の小礫わずか	
	52	6号窯体内	須恵器 鉢	(29.00)			暗灰	黒	淡灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
50	53	6号窯体内	須恵器 片口鉢	28.40			淡灰～暗灰	淡灰	淡灰	良好	6mm以下の小礫わずか	
	54	6号窯体内	須恵器 片口鉢	(26.60)			暗青灰	灰白～黒灰	淡灰	良好	3mm以下の白色粒多い	片口は残存部が少なく、図化できず
	55	6号窯体内	須恵器 鉢	29.10			淡灰	暗灰褐	暗灰褐	良好	6mm以下の小礫わずか、2mm以下の白色粒まばら	
	56	6号窯体内	須恵器 鉢	(31.60)			暗灰	淡灰	暗灰	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	57	6号窯体内	須恵器 鉢底部		(9.20)		暗灰	暗灰	暗灰	良好	1mm以下の黒色粒まばら	
	58	6号窯体内	須恵器 鉢底部		(10.00)		淡灰	淡灰	淡灰	良好	精良	
	59	6号窯体内	須恵器 甕				灰	灰	灰	良好	精良	外面：平行タタキ3～4本/cm 天地・傾き不明
	60	7号窯体内	須恵器 碗	(15.00)	(5.40)	(4.10)	暗灰	暗灰	暗灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	61	7号窯体内	須恵器 碗	(16.90)	6.30	5.40	灰	黒灰	黒灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
52	62	7号窯体内	須恵器 片口鉢	(28.80)	(9.00)	(10.10)				良好	精良	S56 年報 fig. 42-35
	63	7号窯体内	須恵器 鉢	(28.70)	10.30	7.30	淡青灰	暗青灰	暗青灰	良好	7mm以下の小礫わずか	
	64	7号窯体内	須恵器 片口鉢	(31.70)			紫灰	紫灰	紫灰	やや良好	2mm以下の砂粒含む	S56 年報 fig. 42-33
	65	7号窯体内	須恵器 片口鉢	(26.80)	(7.90)	(9.00)	灰褐	灰褐	灰褐	不良	2mm以下の砂粒多い	S56 年報 fig. 42-36
	66	3号窯体内	須恵器 鉢									写真図版 33-11
	67	1号窯体内	須恵器 鉢									写真図版 34-3
	68	5号窯体内　崩壊土	焼台									写真図版 36-2

第５章　昭和57年度　第７－２次調査（堂ノ前支群）の成果

第１節　調査区の設定と基本層序

（１）調査区の設定（図57）

堂ノ前支群は、試掘調査の結果を受け、窯跡が存在すると想定された地点に南北４ｍ×東西60ｍの調査区を設定するとともに、灰層の堆積状況を知るために調査地北側の崖面の精査を60ｍにわたり実施した。また調査区の南側に断割り調査を実施し、土層断面の観察をおこなった。遺物取り上げ時の記録から、調査区をグリッドに区分したと考えられるが、グリッド位置を記録した図面は確認できなかった。そのため、土層断面図と調査区平面図を照合し、グリッド位置を復元した。土層断面図からグリッドは、東から基本的に５ｍごとにＡ～Ｌまで設定し、さらにトレンチを南北に二分して、南をⅠ区、北をⅡ区と称したと考えられる。ただし、南北の区分位置は不明である。グリッド名は「Ⅰ－Ａ」「Ⅱ－Ｂ」のように表記する。

（２）基本層序（図58）

調査地の圃場整備前地表面の標高は107.51ｍであり、すぐ北に崖面がある。圃場整備前地表面から約0.2～0.6ｍは盛土・耕土層であり、その下層に灰層・焼土層が何層も重なり合って堆積している。圃場整備前地表面から0.2～2.0ｍの深さで基盤層上面となる。基盤層上面は、調査区中央に向かって緩やかに傾斜し、中央部が最も低くなっている。

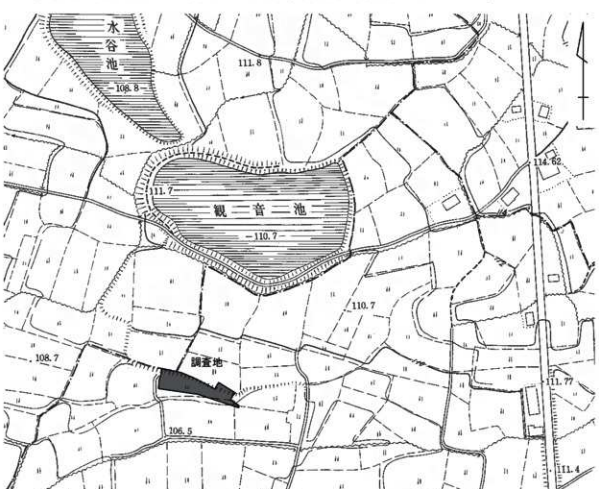
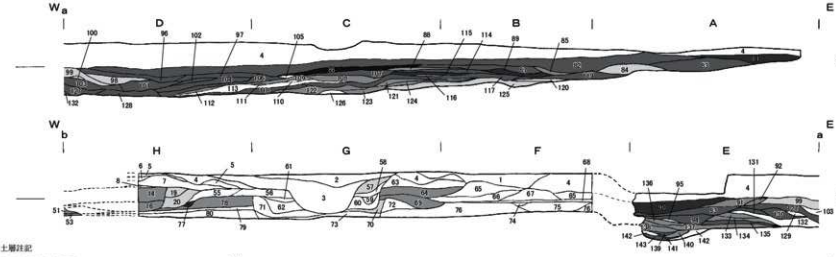


図57　堂ノ前支群　トレンチ配置図（S=1：3,000）



土層註記

盛土・耕作土・攪乱土
1　黄灰褐色粘質土（礫・灰色粘土ブロックを含む）
2　黄灰褐色砂質土（礫を含む）
3　礫層（5～10 cm小礫）
4　灰褐色粘質土（礫を含む）
5　黄褐色粘質土
6　不明
7　灰褐色粘質土
8　不明

9　焼土炭層（土器・灰褐色粘質土を含む）
10　淡灰色粘質土
11　炭灰褐色粘質土
12　黄褐色粘質土（礫を含む）
13　褐色粘質土
14　焼土炭層
15　焼土ブロック
16・47　不明
17　焼土ブロック炭層（土器を多く含む）
18　黄褐色粘土層
19　炭灰褐色粘質土
20　炭灰褐色粘質土（礫を含む）
21・22　炭焼土層
23　焼土炭層（地山ブロックを含む）
24　炭灰赤色焼土層
25　炭灰土器層
26　焼土炭層（土器を含む）
27　焼土炭層
28　焼土炭層（土器を含む）
29　焼土炭層
30　焼土炭層（地山ブロックを含む）
31　赤色焼土炭層
32　焼土炭層（土器を含む）
33　焼土ブロック層
34　焼土炭層（青色緻子光ブロックを含む）
35　不明
36　焼土粒炭層
37　焼土炭層（土器を含む）
38　焼土炭層（土器・褐色粘土を含む）
39　炭赤色焼土粒炭層
40　炭黄色粘土炭層
41　炭焼土粒炭層（礫を含む）
42　炭炭焼土層
43　黄褐色粘土
44　灰褐色粘質土（礫を含む）
45　暗褐色粘質土
46・47　不明
48　炭層
49　灰褐色粘質土（礫を含む）
50　炭灰褐色粘質土
51　炭灰土器層
52　炭層
53　炭層（土器を含む）
54　褐灰層
55　炭褐色礫層
56　炭灰色粘質土
57　炭灰灰褐色粘質土（礫を含む）
58　炭灰褐色粘質土（礫を含む）
59　炭灰色粘質土（礫を含む）
60　炭灰褐色粘質土
61　黄褐色粘質土
62　炭褐色粘質土（礫を含む）
63　暗灰褐色粘質土
64　炭焼土炭層
65　炭灰褐色粘質土（礫を含む）
66　炭褐色粘質土（礫を多く含む）
67　炭色粘土
68　炭焼色粘土
69　炭焼土炭層（礫を含む）
70　炭灰褐色粘質土
71　灰褐色粘質土
72　炭灰褐色粘質土
73　暗褐色粘質土
74　淡灰色粘土（礫を含む）
75　炭褐色粘土
76　黄褐色粘質土
77　青色緻子ブロック層
78　炭焼土炭層
79　炭灰色粘土
80　炭灰色粘土（2～5 cm大の礫を多く含む）
81　赤褐色焼焦土層
82　褐灰層（小礫を含む）
83　褐炭層（焼土を含む）
84　炭灰色粘土炭層
85　黄色粘土層（焼土塊を含む）
86　炭赤褐色粘土
87　炭層（焼土微粒を多く含む）
88　不明
89　炭焼土層（黄色粘土を含む）
90　炭赤褐色焼土層
91　炭焼土炭層
92　炭炭焼土層
93・94　炭層
95　炭粘土炭層
96・97　炭層
98　炭炭黄色粘土層
99　炭炭色微粒炭層
100　炭黄色粘土炭層
101～103　炭層
104　炭層（土器を多く含む）
105　不明
106　褐炭層
107　炭層（土器が層をなす）
108　炭焼土炭層
109　炭赤色焼土微粒炭層
110　黄色土
111　炭黄色粘土炭層
112　黄色粘土・赤色焼土累積層
113　不明
114　炭層
115　赤色焼土層
116　炭赤色焼土微粒炭層
117　炭層（炭と赤色微粒が層をなす）
118　褐炭層
119　褐炭層（焼土・土器を含む）
120　炭層
121　炭灰赤色焼土層（黄色粘土を含む）
122　炭黄色粘土赤色焼土層
123　炭焼土黄色粘土層
124　炭炭焼土層
125　炭灰褐色炭灰小礫層
126　黄色粘土層
127・128　炭層
129　黄色粘土
130・131　炭層
132　不明
133　焼土・炭黒積層
134　炭焼土炭層
135　炭層
136　炭黄色焼土炭層
137　炭赤色焼土炭層
138　炭焼土炭層
139　炭層
140　炭赤色焼土炭層
141　炭層
142　黄色粘土
143　褐炭層
144　基盤層

窯体崩壊土
焼土
灰層・灰灰土器層
混焼土層・灰灰焼土層
混土灰層・灰灰土層

0　1:100　5m

第２節　調査成果（図59）

堂ノ前支群では、８基の窯体とそれに伴う灰原を検出した。

現状保存を図るため窯跡内の調査は１基を除いて実施していない。各窯跡とも焚口は南を向くが、それぞれ焼成部の一部と煙道部が開墾により失われている。灰層の堆積状況から、検出した８基の他に１基以上は存在すると調査当時考えられていた。それは灰原が北側に大きく張り出している６号窯と７号窯の間を指すと考えられる[1]。

灰層は、東西60mの範囲に広がり、保存状況も良好である。窯跡の前庭部付近は約60cm、地山が掘り窪められており、その付近に最も厚く堆積する。中には堆積が１mを超す部分もあり、窯壁片や焼土が互層をなし、窯体の修復が繰り返されたことがわかる。

『昭和57年度年報』（1984）において、唯一発掘調査した窯体を４号窯、その隣に位置する窯体を２号窯として報告している。これらの窯体の検出位置から、本書では年報の４号窯を１号窯として、東から順に１～８号窯とする。以下に対応表を掲載する。

表６　堂ノ前支群　遺構名対応表

本　書	年報（1984）	年報（1985）	備　考
１号窯	４号窯（写真）	—	遺物収納コンテナ表記の「６号」はこの窯か？
２号窯	２号窯（写真）	—	
３号窯	—	—	
４号窯	—	—	
５号窯	—	—	
６号窯	—	—	
７号窯	—	—	
８号窯	—	—	

（１）１号窯（『昭和57年度年報』（1984）４号窯）（図60、61）

１号窯は、調査区の最も東に位置する。他の窯跡は窯体内の調査を実施していないため、堂ノ前支群において唯一発掘調査した窯跡である。

現存長2.15m、最大幅1.5m、現存高0.5m、床面傾斜角度15度前後で、焚口は南を向く。焼成部の一部と煙道部は、開墾により大きく削平されている。

土器は、須恵器鉢・埦・甕・壺が出土している。図61－１・２は須恵器埦である。１は体部に沈線を持つ。２は体部が内湾し、口縁部でわずかに外反する。図61－３は須恵器壺口縁部である。小片のため、口径は不明である。図61－４～６は須恵器鉢である。４は体部が内湾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。５も同様であるが、４より強く外反する。６は口縁端部で外側に肥厚する。図61－７・８は須恵器甕である。７は頸部で強く外反し、口縁端部を鋭く上方につまみ上げる。８は頸部で緩く屈曲し、口縁端部をわずかに内側につまむ。

この窯跡出土の可能性がある土器が28Ｌ入コンテナ１箱分あったため、併せて図示した。コンテナの表記は「６号」となっていたが、遺物の様相が１号窯出土のものと類似しているため、併せて報告する。堂ノ前支群から出土した土器であることは確実だが、正確な出土地は不明である。

「６号」からは土師器坏・皿、須恵器鉢・埦・皿・甕が出土している。図61－９・10は須恵器皿である。９は体部がやや内湾し、10は直線的に開く。図61－11・12は須恵器埦である。11は、体部に沈線を持ち、底部が欠損している。12は、体部が内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。図61－13・14は須恵器鉢である。いずれも体部が内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。13は口縁端部をつまむように外側に突出するのに対し、14は器壁が外反する。図61－15は須恵器甕胴部である。外面に平行タタキを施す。

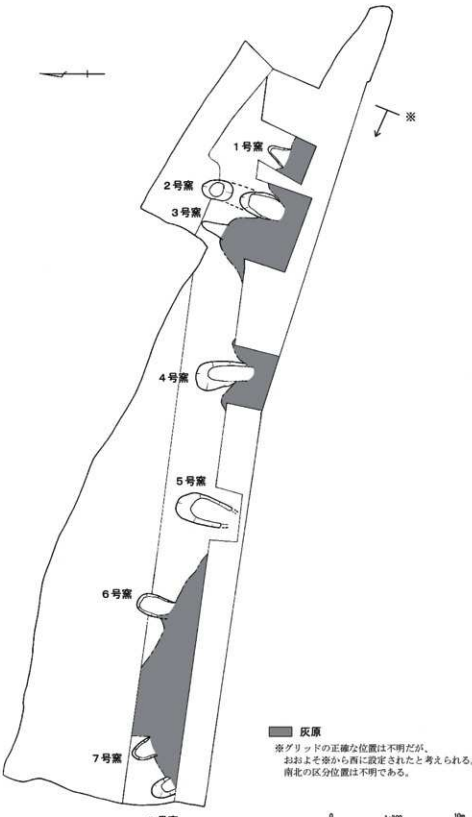


図59　堂ノ前支群　遺構平面図

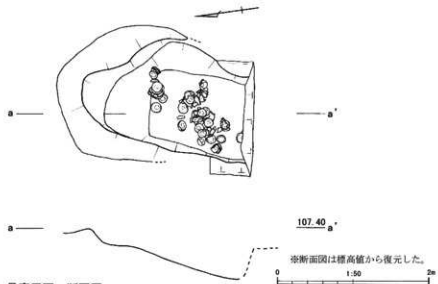


図60　堂ノ前支群　1号窯平面・断面図

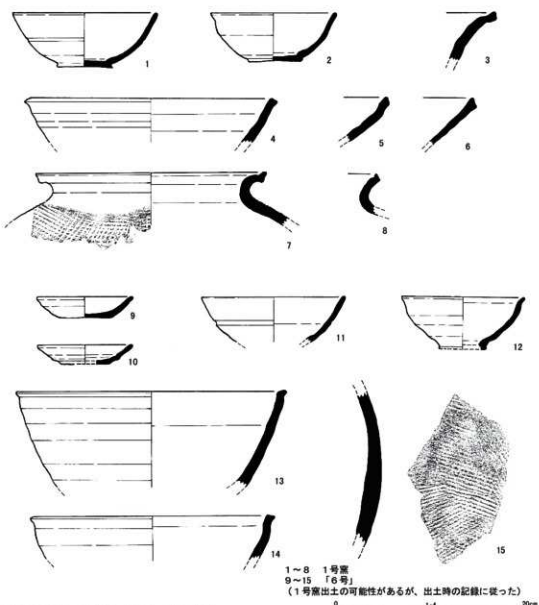


図61　堂ノ前支群　1号窯・「6号」出土土器

（2）灰原

遺物取り上げ時の出土層位名と土層断面図の土層名が一致しておらず、正確な対応関係は不明である。検討の結果、以下のように解釈して整理した。遺物取り上げ時の出土層位名は主に、「灰層」「上部灰層」「下部灰層」に分けられる。土層断面図においては、灰層が細かく分層されているが、「灰層」はその細かい分層を区別しておらず、「上部灰層」「下部灰層」は、焼土層や間層を挟んで、相対的に上半部の灰層と下半部の灰層をそれぞれ指すと考えた。

①Ⅰ－Ａグリッド（図62）

トレンチの南東に設定されたと考えられるグリッドである。

土器は「上部灰層」から須恵器鉢・塊が出土している。図62－16～18は須恵器塊である。16・17は明確な平高台を持つ。図62－19～22は須恵器鉢である。19は口縁部で外反する。20は口縁部端面と器壁外面とを直角で収め、わずかに内外に拡張する。21は片口を有する。22は口縁部が外側に肥厚する。

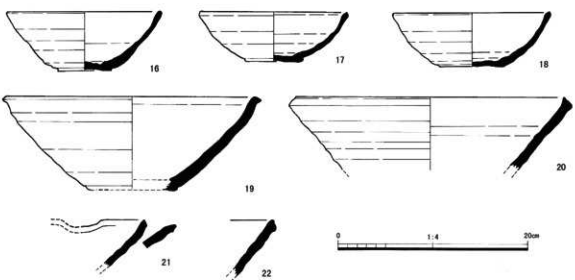


図62　堂ノ前支群　Ⅰ－Ａグリッド出土土器

②Ⅱ－Ｂグリッド（図63）

１号窯の北側に設定されたと考えられるグリッドである。「灰層」の遺物として取り上げられているが、このあたりに灰原は分布していないため、グリッドの位置が異なる可能性がある。

図63－23は須恵器塊底部である。図63－24～26は須恵器鉢口縁部の小片である。ただし、これらの中にはⅠ－Ｄグリッドの資料が混入している可能性がある。

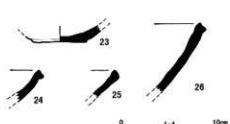


図63　堂ノ前支群　Ⅱ－Ｂグリッド出土土器

③Ⅰ－Cグリッド（図64）

2号窯の南半に設定されたと考えられるグリッドである。

遺物の取り上げは「上部灰層」、「下部灰層」でおこなっている。

「上部灰層」からは須恵器鉢・塊・甕、硯を図示した。図64－27・28は須恵器塊である。27は平高台を持つ。28は口縁部を欠損し、高台を持たない。図64－29・30は須恵器甕である。いずれも口縁部から頸部の小片であり、口径は復元できない。29は口縁端部内面を回ませ、段状にしている。30は口縁端部を下方に大きく肥厚させる。図64－31～34は須恵器鉢である。31は口縁部を欠損する。32～34はいずれも口縁部で外反する。32は折り曲げるように外反している。33は器壁が厚く、わずかに外反する。34は外側に端部をつまみ出す。図64－35は風字硯と考えられる。下半の一角が残存するのみである。脚部は右側のみ確認でき、側面際にヘラ状工具を用いて貼り付けられている。脚部下半が欠損するため、正確な高さは不明である。表面は丁寧なナデが施されている。裏面はヘラケズリと一部ヘラミガキが施され、中央あたりは黒灰色の自然釉が付着する。

「下部灰層」からは須恵器鉢・塊・甕・皿・壺が出土している。図64－36は須恵器双耳壺である。図64－37は須恵器塊である。口縁部を欠損する。図64－38は須恵器甕の口縁部である。図64－39・40は須恵器鉢である。39は口縁部の小片であるが、端部を外側につまみ出している。40は口縁部でわずかに外反する。内面の粘土紐痕跡が明瞭である。

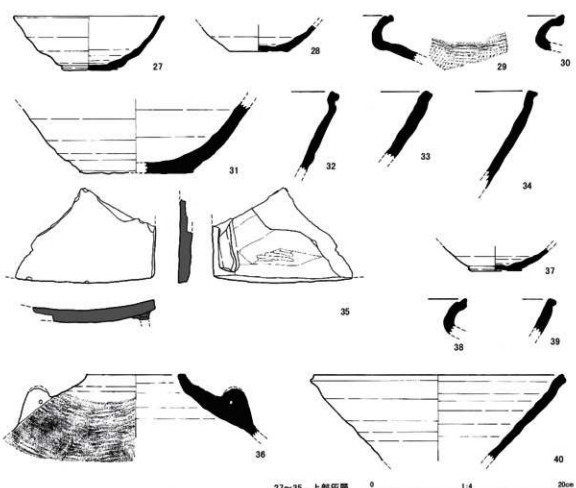


図64　堂ノ前支群　Ⅰ－Cグリッド出土土器

④Ⅰ－Dグリッド（図65）

3号窯の南側に設定されたと考えられるグリッドである。

「上部灰層」と「下部灰層」で遺物を取り上げている。

「上部灰層」から土器は、須恵器鉢・塊・甕が出土している。図65－41は須恵器塊である。体部が内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。図65－42は須恵器甕口縁部である。図65－43～45は須恵器鉢である。43は片口を有するが、ほとんど欠損している。器壁外面と口縁部端面が直角を成し、内側に肥厚する。44は片口を有し、口縁端部を外側につまみ出す。

「下部灰層」から土器は、土師器坏、須恵器鉢・塊・皿・甕が出土している。図65－46は須恵器皿である。口縁部を欠損している。図65－47・48は須恵器塊である。48は口縁部が外反する。図65－49・50は須恵器甕である。いずれも外面に平行タタキを施す。49は頸部で強く屈曲し、端部内面・端面がわずかに凹む。50は緩く外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。図65－51～56は須恵器鉢である。51はやや小さめの口径を持ち、外面と口縁部端面が直角で、端部を拡張しない。52は片口を有するが、ほぼ欠損している。口縁端部を外側に大きくつまみ出す。53は体部が内湾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。54は53と同様だが、53よりも強く外反する。55は器壁外面と口縁部端面が直角を成し、内外ともに拡張し、片口を有する。56は口縁部の小片であり、体部の傾きがやや急であるのは焼き歪みによると考えられる。口縁部で折り曲げるように外反する。

⑤Ⅰ－Eグリッド（図66）

4号窯の南半に設定されたと考えられるグリッドである。

主に「灰層」と「下部灰層」で遺物を取り上げている。本書では遺物取り上げ時の土層名に応じて、「灰層」と「下部灰層」を分けているが、実際は同一層を指す可能性がある。あるいは、「灰層」は隣接するⅠ－Dグリッドの「上部灰層」と同一層の可能性もある。

土器は、「灰層」から須恵器鉢・塊・甕が出土している。図66－57は須恵器塊の底部である。底部はわずかに平高台を成す。図66－58は須恵器甕である。外面に平行タタキを施す。頸部は強く外反し、口縁端部で上方にわずかにつまみ上げる。図66－59～61は須恵器鉢口縁部である。いずれも小片である。

「下部灰層」からは須恵器鉢・塊が出土している。そのうち須恵器鉢を図示した。図66－62は器壁外面と口縁部端面が直角を成し、端面が凹み、内外に拡張する。図66－63は体部が内湾して立ち上がり、端部を外側につまみ出す。図66－64は体部が内湾して立ち上がり、口縁端部は拡張しない。図66－65も63・64と同じく体部が内湾して立ち上がるが、口縁部外面を強くナデることで段差をつくる。図66－66～68は口縁部の小片である。

また、出土層位は不明だが、Ⅰ－Eグリッドから出土した遺物として、特筆すべきものを図示した。図66－69は須恵器片口鉢である。小型で、輪高台を持つ。片口部分に別個体の細片が付着する。歪みが大きいため、口径は若干大きくなる可能性がある。口縁端部を外側につまみ出す。図66－70は風字硯である。下半が残存しており、脚部も左右とも残存する。表面はナデで、裏面はヘラケズリを施す。端面はすべてヘラケズリである。表面には中央に楕円状に自然釉がかかる。図66－71は須恵器壺である。肩部に突帯を一条貼り付けている。

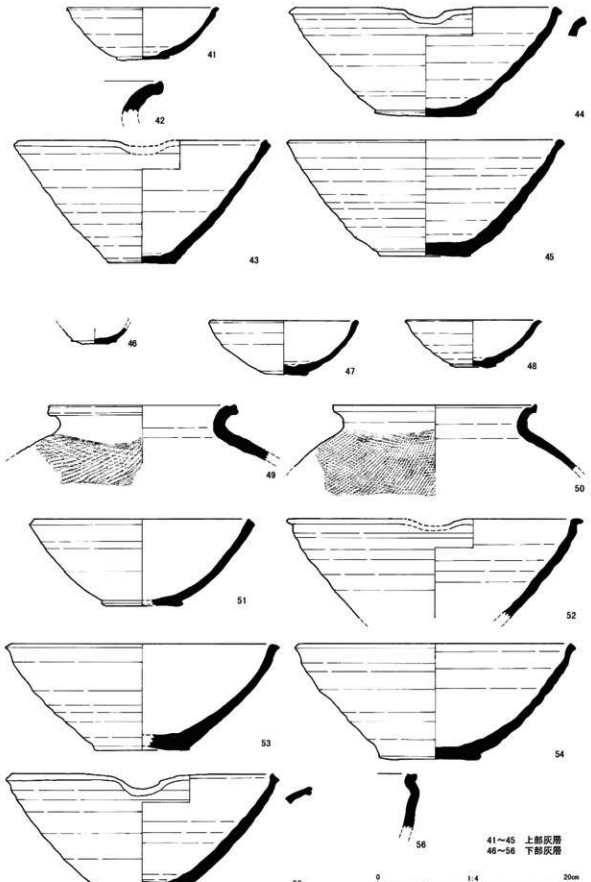


図65 堂ノ前支群 Ⅰ－Dグリッド出土土器

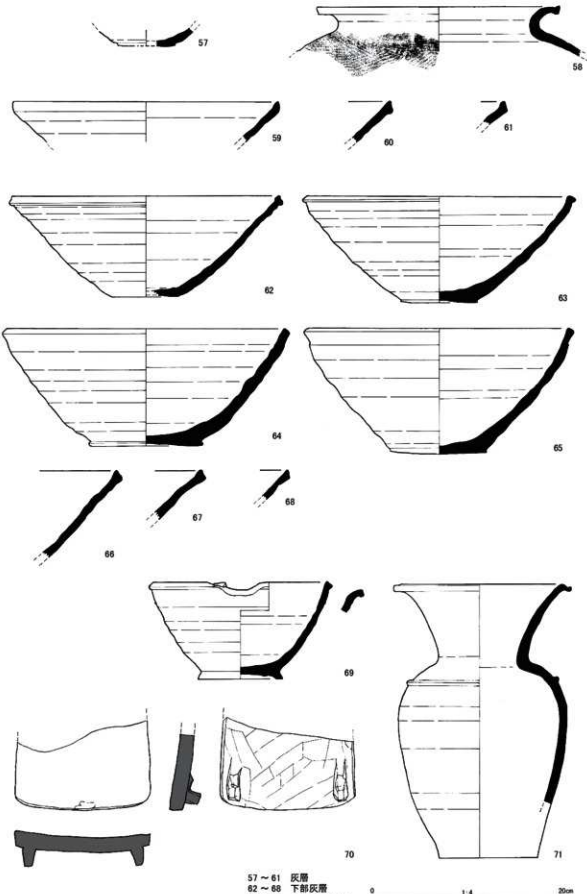


図66 堂ノ前支群 Ⅰ－Eグリッド出土土器

⑥Ⅰ－Ｆグリッド（図67）

５号窯の南東に位置すると考えられるグリッドである。

「灰層」から土師器鍋、須恵器甕・壺が出土している。図67－72は土師器鍋である。口縁部よりわずかに下がった外面に突出部を持つ。図67－73は須恵器甕である。図67－74は須恵器壺の底部である。断面に粘土板、粘土紐の痕跡が確認できる。いずれも小片で、このグリッドにおける遺物の出土量は少ない。

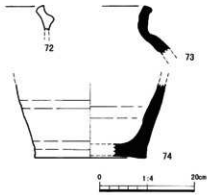


図67　堂ノ前支群　Ⅰ－Ｆグリッド出土土器

⑦Ⅰ－Ｇ・Ⅱ－Ｇグリッド（図68）

５号窯の西半に位置すると考えられるグリッドである。

図68－75は須恵器甕である。Ⅰ－Ｇの「灰層」から出土した。頸部はくの字状に屈曲し、短い口縁部を持つ。口縁部は四角く収め、拡張しない。図68－76・77は須恵器塊であり、いずれも口縁部を欠く。Ⅱ－Ｇの「灰層」から出土した。76は体部に沈線を持つ。

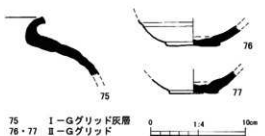


図68　堂ノ前支群　Ｇグリッド出土土器

⑧Ⅰ－Ｈグリッド（図69）

５号窯と６号窯の間に位置すると考えられるグリッドである。

図69－78は須恵器甕である。「灰層」から出土した。胴部外面に平行タタキを施す。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部が上方に立ち上がる。端部は上方につまみ上げる。

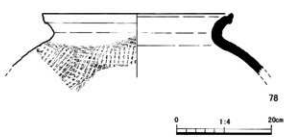


図69　堂ノ前支群　Ⅰ－Ｈグリッド出土土器

⑨Ⅰ－Ｊグリッド（図70）

６号窯と７号窯の間に位置すると考えられるグリッドである。

「灰層」から須恵器鉢・埦・甕・皿が出土した。図70－79・80は須恵器皿である。いずれも器高が高く、体部が内湾して立ち上がる。図70－81～83は須恵器塊である。いずれも口縁部を欠く。82は底部に輪高台を持つ。図70－84は須恵器甕である。図70－85～88は須恵器鉢である。85は片口を有するが、大きく欠損する。外面と口縁部端面が直角で、端部は内外ともにほとんど拡張しない。86～88は口縁部の小片である。87は端部で内側にくの字状に屈曲する。88は片口を有するが、大きく欠損する。

⑩Ⅰ－Ｋ グリッド（図72）

７・８号窯のあたりに位置すると考えられるグリッドである。

「灰層」、「下部灰層」から須恵器鉢・塊・皿・壺が出土した。「灰層」からは須恵器塊・

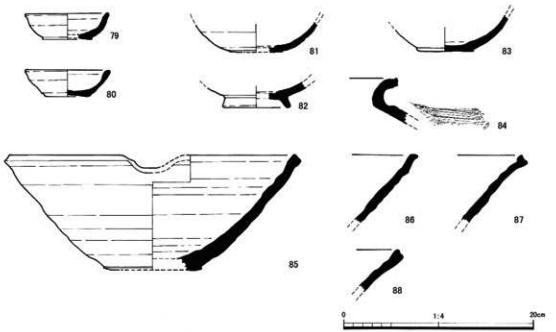
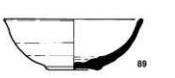


図70　堂ノ前支群　Ⅰ－Ｊグリッド出土土器

皿を図示した。図72－90～92は須恵器皿である。90は体部が直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。91は体部がわずかに内湾し、底部と体部の境が明瞭である。92は体部が内湾して立ち上がる。底部と体部の境が不明瞭である。図72－93・94は須恵器塊である。

「下部灰層」からは須恵器鉢・塊・壺を図示した。図72－95は須恵器塊である。２個体が溶着した状態で出土した。規格はほぼ同じだが、内側の塊は外側の塊に比べて器壁が薄い。図72－96は須恵器壺肩部である。突帯を一条貼り付けている。図72－97～102は須恵器鉢である。97・99は口縁端部を外方につまみ出す。98は口縁部付近で器壁が薄くなることで、端部が拡張したように見える。100は外面によく粘土紐の痕跡を残す。101は口縁部の小片で、端部は強く外反する。102は輪高台を持つ底部である。口縁部から体部を大きく欠損する。



⑪Ⅰ－Ｌグリッド（図71）

トレンチの西端に位置するグリッドである。

須恵器鉢・塊が出土している。図71－89は須恵器塊である。灰層から出土した。わずかに平高台を呈し、体部が内湾して立ち上がる。

図71　堂ノ前支群　Ⅰ－Ｌグリッド出土土器

（３）軒瓦

堂ノ前支群から出土した軒瓦として、軒丸瓦29点、軒平瓦21点、鬼瓦３点を図示した。また、参考資料として、現在所在不明である軒瓦の拓本17点を掲載した。出土地点については、表８に記載している。鬼瓦については、第13章で他支群出土のものと併せて報告する。

①軒丸瓦（図73～76）

NM301・303～305は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋８の蓮子が配され、周囲には圏線が巡る。蓮弁は幅広の凸線で縁取りして表現される。先端が凹んだM字形を呈し、その

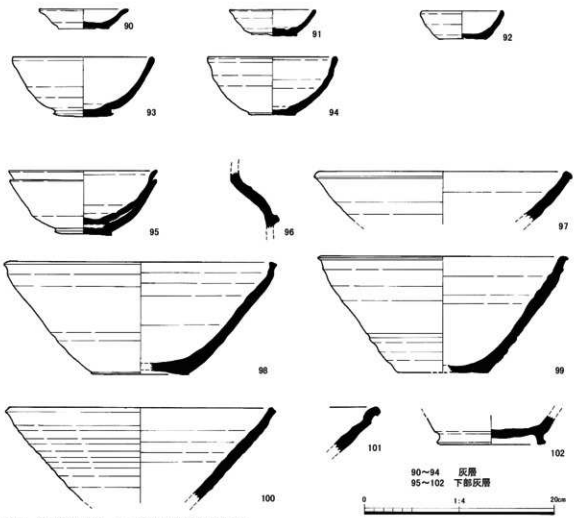


図72　堂ノ前支群　Ⅰ－Kグリッド出土土器

内側に子葉が２つ突出している。各蓮弁の間には、縦長の間弁が配置される。蓮弁の周囲には、形に沿った圏線が巡る。

NM302は複弁八葉宝相華文軒丸瓦である。中房には１＋８の蓮子が配され、周囲には圏線が巡る。花弁は、弁面を盛り上げて表現しており、切れ込みを２つ入れて花弁を３つに分割する。子葉は花弁より一段窪ませており、花弁ごとに２つずつ表現される。また、縦長の間弁を伴っている。周囲には、花弁の形に沿った圏線が巡る。瓦当面の直径が20cm近くある大振りな瓦である。

NM306～312は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋５の蓮子が配され、周囲には圏線が巡る。蓮弁は中心近くが高く盛り上がっており、周縁に向かって低くなる。子葉の表現はなく、外側には間弁が配置される。蓮弁の周囲には圏線が巡る。NM306・309・310の外区圏線は他に比して太い。NM309は１号窯出土である。

NM313～320は単弁蓮華文軒丸瓦である。NM313・314については十葉蓮華文であることがわかるが、それ以外については、十一葉蓮華文の可能性もある。中房には１＋５の蓮子が配され、周囲には圏線が巡る。蓮弁は凸線で四角く区画され、その内側を丸く盛り上げて表現する。かなり簡略化された表現である。外区には内外の圏線の間に珠文帯が巡る。珠文の数は、NM313で21を数える。NM314については、瓦当裏面が全面剥離しており、本来はもっと厚手の瓦当部であったと考えられる。NM317の蓮弁の形状は他に比してやや扁平で、大きい。NM320は、

蓮子が他の個体よりも扁平であることから型式が異なる。また、切り縮めがおこなわれており、外側の外区圏線が消失していることから、後出するタイプであると考えられる。NM315は１号窯出土である。

NM321・322は単弁蓮華文軒丸瓦である。NM321の中房には１＋８の蓮子が配され、周囲には圏線が巡る。各蓮弁は凸線で区画される。子葉の表現はない。蓮弁の外側を区画する凸線は無く、蓮弁を区切る凸線が外区に接続する。NM322は欠損が大きく、中房の表現は不明である。蓮弁はNM321同様である。太い外区圏線が巡る点がNM321とは異なる。

NM323～327は複弁九葉蓮華文軒丸瓦である。中房には蓮子を持たず、丸く盛り上がった表現となっている。その外周に圏線が巡る。蓮弁ごとに凸線で区画されており、間弁状の表現がなされる。蓮弁には子葉の表現がない。外区には２本の圏線の間に珠文帯が巡る。NM323で珠文は21を数える。個体によって珠文の形に違いが見られ、NM323・324では径が大きく扁平で楕円形のもの、NM325では径が大きく円形のもの、NM326・327では径が小さく円形のものとなっている。NM327は１号窯出土である。

NM328は複弁蓮華文である。蓮弁は先端が凹んでおり、ハート形に近いと考えられる。蓮弁の形に沿った外区圏線が巡る。宮ノ裏支群・池ノ下支群などで同意匠の瓦が出土している。

NM329は単弁蓮弁文軒丸瓦である。蓮弁は先端が丸く、凸線で縁取りがされている。間弁状の表現も見られる。「６号」出土であり、上記で触れたように１号窯出土の可能性がある。

NM330～343は所在不明で、調査当時の拓本のみが現存する資料である。

NM330・331は複弁蓮華文軒丸瓦である。NM301・303～305と同系統の文様を持つが、外区圏線は二重である。

NM332～334は単弁蓮華文軒丸瓦である。NM306～312と同系統だと考えられる。

NM335～338は単弁蓮華文軒丸瓦である。NM313～320と同系統だと考えられる。ただし、NM335・338の蓮弁は扁平で、凸線でやや丸く区画され、間弁状の表現も見られる。外区には内外の圏線の間に珠文帯が巡る。珠文は小さい。NM336はNM313・314と近い文様表現である。NM337はNM320と近い表現がなされ、外区にある珠文帯外側の圏線がないと考えられる。

NM339・340は複弁蓮華文軒丸瓦である。NM323～327と同系統と考えられるが、珠文の形からNM326・327に類似すると考えられる。

NM341～343は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房に蓮子を配し、その周囲を圏線が巡る。蓮弁は凸線で区画し、内側はおそらく膨らんだ表現をしていると考えられる。同様の文様を持つものは神出窯跡群の中では出土していない。

②軒平瓦（図77、78）

NH301～304は均整唐草文軒平瓦である。内区には細かい唐草文が展開し、外区には珠文帯が巡っている。珠文は小さいものが密に並ぶ。脇区を丸く張り出して収めるのが特徴である。NH304から、中心飾はＣ字背向を上下の山形でつないだものであることがわかる。NH301・303は包み込みａ技法、NH302・304は瓦当貼付ａ技法によって瓦当を成形している。

NH305は均整唐草文軒平瓦である。樹状中心飾から左右に唐草文が３転し、上下には圏線が巡る。右端は切り縮められている。

NH306～310は均整唐草文軒平瓦である。Ｃ字背向中心飾から左右に唐草文が２転展開する。Ｃ字背向中心飾は上側の山でつながっている。NH306は唐草の上下に圏線が巡り、両端は切り縮められている。NH307・308は圏線が巡らない。NH309・310は唐草文が簡略化されている。

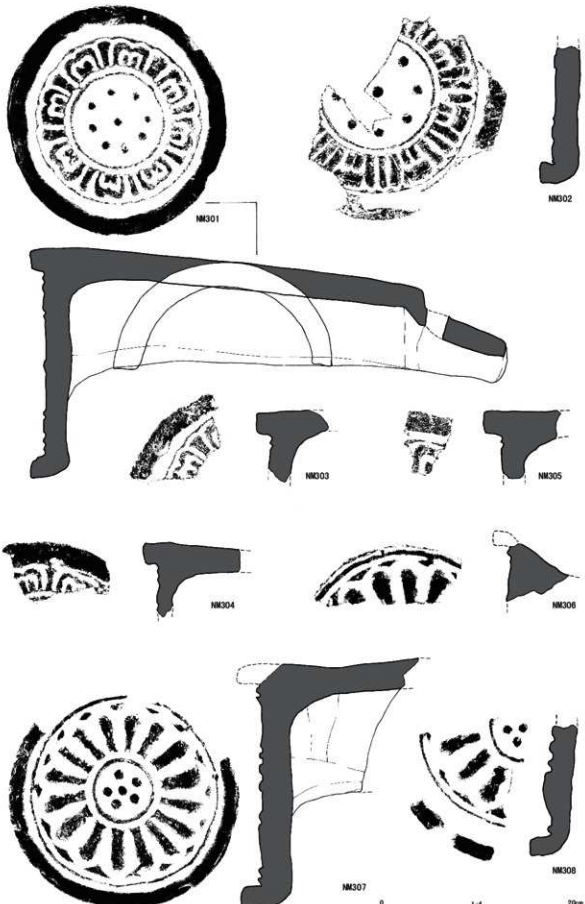


図73　堂ノ前支群出土軒丸瓦①

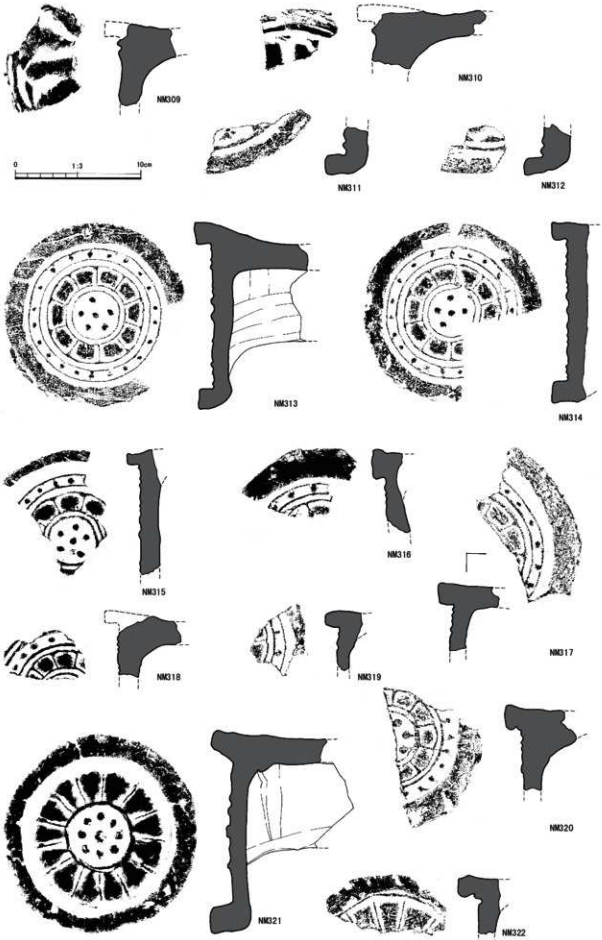


図74　堂ノ前支群出土軒丸瓦②

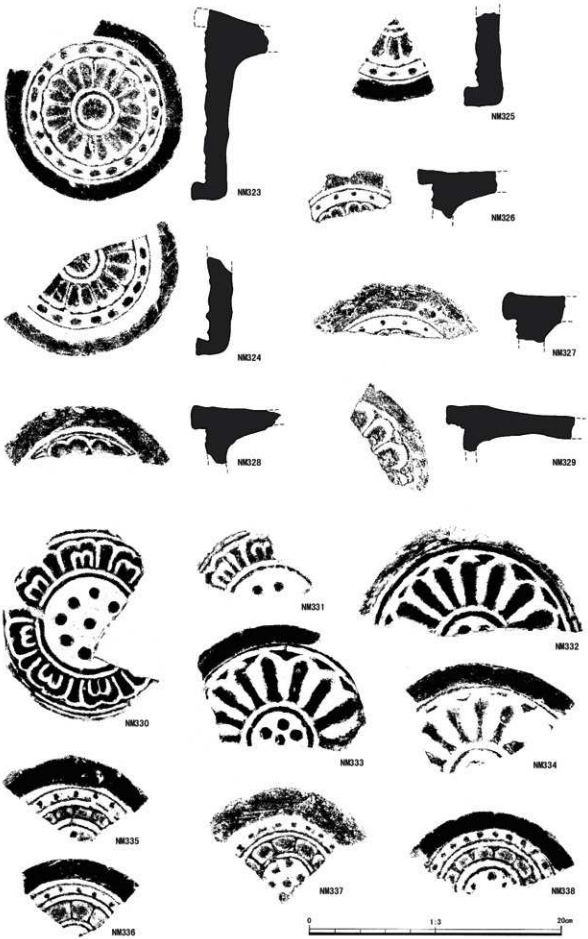


図75　堂ノ前支群出土軒丸瓦③

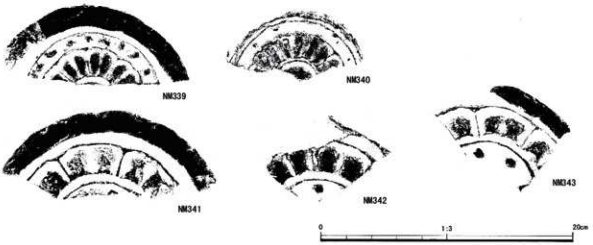


図76　堂ノ前支群出土軒丸瓦④

NH309には圏線があり、NH310にはない。NH309は包み込みｂ技法、NH310は顎貼付技法によって瓦当を成形している。

NH311・312は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はＣ字対向で、左右に唐草が展開する。周囲には圏線が巡り、外区には珠文帯が配置される。NH311は瓦当貼付ａ技法によって瓦当を成形している。

NH313～315は均整唐草文軒平瓦である。Ｃ字下向中心飾で、左右に巻きの強い唐草が展開する。唐草の周囲には圏線が巡る。NH313は包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。NH316・317・319・320は唐草文軒瓦である。いずれも瓦当面の残存率が悪く、文様構成は判然としない。NH316・317は唐草の周囲に圏線が巡り、外区には珠文帯が見られる。NH319・320は唐草の周辺に圏線は巡るが、珠文帯はない。NH320は調査記録によると「３号窯」出土であるが、前述したように１号窯以外の窯体は調査していない。また、調査当時の窯体名が不明であるため、どの窯を指すかは不明である。NH317・320は包み込みｂ技法、NH319は顎貼付技法によって瓦当を成形している。

NH318は均整唐草文軒平瓦である。Ｃ字背向中心飾を持つ。唐草の展開については残存しておらず不明である。包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NH321は宝相華文道具瓦であると見られる。凸線で宝相華文を縁取りする。調査記録によると「２号窯？」出土とあるが、どの窯を指すかは判断できない。

NH322～324は現在所在不明で、調査当時の拓本のみ残存するものである。

NH322は均整唐草文軒平瓦である。樹状中心飾は下向の蕨手が３本延び、その外側に唐草が展開する。周縁には圏線が巡る。

NH323・324は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はおそらくＣ字下向で、左右に巻きの強い唐草が展開する。唐草の周囲には圏線が巡るが、右脇は切り縮められており、圏線が欠落しているようである。

---

[1] 脱構後、磁気探査の結果から窯跡の位置を想定した略図の存在を確認した。それによると、４号窯の東隣に窯跡を１基想定している。

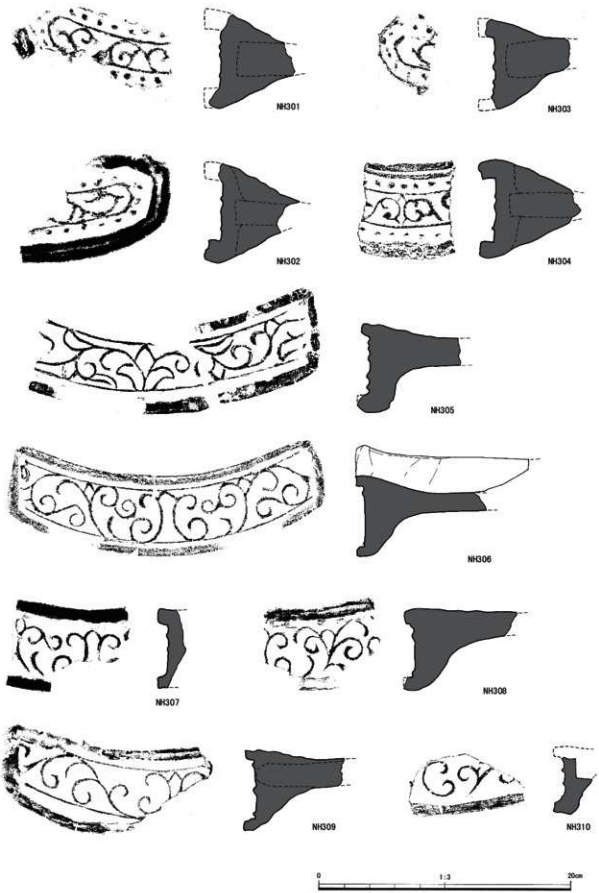


図77　堂ノ前支群出土軒平瓦①

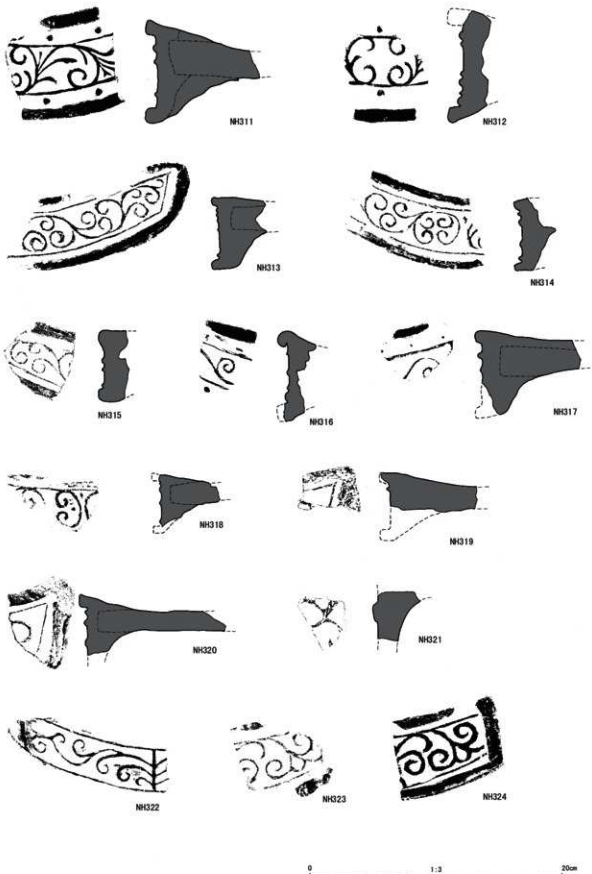


図78　堂ノ前支群出土軒平瓦②

表７　堂ノ前支群出土土器

※（　）は復元数値

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
61	1	1号窯	須恵器 碗	15.30	5.60	5.60	赤褐	褐灰	淡橙	やや不良	2mm以下の砂粒多い	ほぼ完形、写真図版34-10
	2	1号窯	須恵器 碗	13.20	5.70	5.20	淡褐灰	褐灰	淡橙	やや不良	2mm以下の砂粒まばら	ほぼ完形
	3	1号窯	須恵器 壺				灰白	灰白～暗灰	灰白～暗灰	やや不良	2mm以下の砂粒まばら、粗い	
	4	1号窯	須恵器 鉢	(25.40)			灰	灰	灰	良好	3mm以下の小礫わずか	
	5	1号窯	須恵器 鉢				淡灰褐	灰	灰	やや不良	1mm以下の砂粒まばら	
	6	1号窯	須恵器 鉢				灰	暗灰	暗灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	7	1号窯	須恵器 甕	(24.40)			暗灰	暗灰	暗灰	良好	2mm以下の白色粒まばら	
	8	1号窯	須恵器 甕				暗灰	灰	灰	良好	2mm以下の小礫わずか	傾き推定
	9	6号	須恵器 皿	(10.10)	(5.00)	(2.00)	淡黄灰	淡黄灰	淡黄灰	不良	1mm以下の砂粒多い、やや粗い	
	10	6号	須恵器 皿	10.20	5.40	7.20	淡灰黄	淡灰黄	淡灰黄	やや不良	1mm以下の砂粒まばら	
	11	6号	須恵器 碗	(15.10)			淡赤褐	淡褐灰	淡赤褐	酸化還元	2mm以下の砂粒まばら	体部：沈線
	12	6号	須恵器 碗	12.90	4.90	5.50	褐灰	褐灰	暗褐	やや良好	1mm以下の黒色粒わずか	
	13	6号	須恵器 鉢	(28.70)			青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫・砂粒多い	
	14	6号	須恵器 鉢	(26.00)			淡褐灰	淡灰褐	淡褐灰	不良	2mm以下の砂粒多い	
	15	6号	須恵器 壺				灰	灰	灰	良好	10mm以下の礫わずか、2mm以下の砂粒わずか	
62	16	Ⅰ-A　上部灰層	須恵器 碗	16.20	5.60	6.20	暗灰～黒灰	暗灰～黒灰	暗灰～黒灰	良好	4mm以下の小礫まばら	
	17	Ⅰ-A　上部灰層	須恵器 碗	(15.60)	6.20	5.20	暗褐灰	暗褐灰	暗褐灰	良好	5mm以下の小礫わずか、2mm以下の砂粒多い	
	18	Ⅰ-A　上部灰層	須恵器 碗	(16.60)	(6.70)	(5.70)	淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	
	19	Ⅰ-A　上部灰層	須恵器 鉢	(27.40)	(9.00)	(9.90)	淡褐	淡灰褐～淡灰	淡灰褐～淡灰	やや不良	6mm以下の小礫わずか	
	20	Ⅰ-A　上部灰層	須恵器 鉢	(28.20)			淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	3mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	
	21	Ⅰ-A　上部灰層	須恵器 片口鉢				紫灰	紫灰	紫灰	良好	3mm以下の小礫わずか	
	22	Ⅰ-A　上部灰層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
63	23	Ⅱ-B　1号窯灰原	須恵器 碗底部		5.50		黒灰	黒灰	黒灰	良好	精良	Ⅰ-D混入
	24	Ⅱ-B　1号窯灰原	須恵器 鉢				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	Ⅰ-D混入
	25	Ⅱ-B　1号窯灰原	須恵器 鉢				灰	灰	灰	良好	2mm以下の砂粒多い、やや粗い	Ⅰ-D混入
	26	Ⅱ-B　1号窯灰原	須恵器 鉢				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	Ⅰ-D混入
64	27	Ⅰ-C　上部灰層	須恵器 碗	15.60	5.90	5.70	青灰	青灰	青灰	良好	8mm以下の小礫わずか	写真図版34-11
	28	Ⅰ-C　上部灰層	須恵器 碗底部		(6.20)		青灰	淡青灰	淡青灰	良好	1mm以下の黒色粒多い	
	29	Ⅰ-C　上部灰層	須恵器 甕				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2mm以下の砂粒多い	
	30	Ⅰ-C　上部灰層	須恵器 甕				青灰	灰	灰	良好	3mm以下の小礫わずか	外面：平行タタキ3本/cm
	31	Ⅰ-C　上部灰層	須恵器 鉢底部		(12.00)		黒灰	黒灰	黒灰	良好	7mm以下の小礫わずか	
	32	Ⅰ-C　上部灰層	須恵器 鉢				灰～青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の砂粒まばら、やや粗い	
	33	Ⅰ-C　上部灰層	須恵器 鉢				青灰	暗青灰	青灰	良好	精良	
	34	Ⅰ-C　上部灰層	須恵器 鉢				淡青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の砂粒まばら	
	35	Ⅰ-C　上部灰層	風字硯				暗灰	―	―	良好	3mm以下の砂粒わずか	裏面：ヘラケズリ、一部ヘラミガキ 脚部：貼付はナデ、写真図版35-20
	36	Ⅰ-C　下部灰層	須恵器 双耳壺	(10.40)			暗灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫わずか	外面：平行タタキのちナデ消し 耳は貼付。『昭和57年度年報』fig.33-3 写真図版34-15
	37	Ⅰ-C　下部灰層	須恵器 碗底部		5.70		淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	3mm以下の小礫わずか	
	38	Ⅰ-C　下部灰層	須恵器 甕				淡褐	赤褐	赤褐	不良	4mm以下の小礫まばら（石英）	
	39	Ⅰ-C　下部灰層	須恵器 鉢				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	1mm以下の砂粒わずか	写真図版33-5
	40	Ⅰ-C　下部灰層	須恵器 鉢	(26.20)			暗灰	暗灰	暗灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
65	41	Ⅰ-D　上部灰層	須恵器 碗	(16.10)	5.50	5.50	灰黄	灰黄	灰黄	良好	4mm以下の小礫・黒色粒多い	
	42	Ⅰ-D　上部灰層	須恵器 甕				暗灰	淡青灰	淡青灰	良好	5mm以下の小礫・白色粒まばら	
	43	Ⅰ-D　上部灰層	須恵器 片口鉢	(26.40)	(7.00)	(12.95)	青灰	暗青灰	青灰	良好	7mm以下の小礫・黒色粒まばら	
	44	Ⅰ-D　上部灰層	須恵器 片口鉢	27.70	10.80	11.50	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5mm以下の小礫わずか	写真図版33-3
	45	Ⅰ-D　上部灰層	須恵器 鉢	28.80	9.70	12.30	青灰	青灰	青灰	良好	10mm以下の礫わずか	
	46	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 皿底部		(4.80)		青灰	灰褐	灰褐	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	47	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 碗	(15.50)	5.20	5.75	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3mm以下の小礫・砂粒多い	
	48	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 碗	(14.40)	(4.90)	(5.00)	青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	49	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 甕	(21.40)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	7mm以下の小礫わずか	
	50	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 甕	(21.60)			青灰	灰～青灰	灰～青灰	良好	7mm以下の小礫まばら	写真図版34-22
	51	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 鉢	(22.60)	(8.00)	(9.20)	灰	灰	灰	良好	7mm以下の小礫わずか	
	52	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 片口鉢	(29.20)			青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	良好	5mm以下の小礫まばら（石英）	
	53	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 鉢	(27.40)	(9.70)	(11.25)	青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫まばら	
	54	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 鉢	(28.90)	(10.50)	(12.30)	青灰	青灰	青灰	良好	5mm以下の小礫わずか	
	55	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 片口鉢	(27.60)	(9.90)	(13.45)	褐灰～青灰	灰～灰褐	灰～灰褐	良好	5mm以下の小礫まばら	
	56	Ⅰ-D　下部灰層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	8mm以下の小礫まばら、2mm以下の黒色粒多い	

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
66	57	Ⅰ-E 灰層	須恵器 碗底部		(6.10)		青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	58	Ⅰ-E 灰層	須恵器 甕	(25.80)			暗青灰	青灰～暗青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の白色粒多い	外面：平行タタキ3～4本／㎝
	59	Ⅰ-E 灰層	須恵器 鉢	(28.00)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	精良	
	60	Ⅰ-E 灰層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の小礫わずか	
	61	Ⅰ-E 灰層	須恵器 鉢				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
	62	Ⅰ-E 下部灰層	須恵器 鉢	(28.20)	(7.00)	10.60	灰	灰	灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	63	Ⅰ-E 下部灰層	須恵器 鉢	(27.60)	(8.20)	(11.30)	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	64	Ⅰ-E 下部灰層	須恵器 鉢	(29.20)	12.00	12.40	淡灰	青灰	淡灰	やや不良	4㎜以下の小礫まばら	
	65	Ⅰ-E 下部灰層	須恵器 鉢	(27.50)	10.20	13.30	灰～淡青灰	灰～淡青灰	灰～淡青灰	良好	7㎜以下の小礫わずか	
	66	Ⅰ-E 下部灰層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫・白・黒色粒まばら	
	67	Ⅰ-E 下部灰層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の白・黒色粒わずか	
	68	Ⅰ-E 下部灰層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	69	Ⅰ-E	須恵器 片口鉢	(18.40)	(8.60)	(10.20)	青灰	青灰	青灰	良好	1㎜以下の白色粒まばら	歪み、写真図版34-8
	70	Ⅰ-E	風字硯		(13.60)		暗茶褐	暗茶褐	暗茶褐	良好	1㎜以下の白色粒多い	『昭和57年度年報』fig.35－17 写真図版35-17
	71	Ⅰ-E	須恵器 壺	(18.80)	(10.40)	(28.60)	灰	灰	灰	良好	1㎜以下の白色粒まばら	『昭和57年度年報』fig.35－12 写真図版35-12
67	72	Ⅰ-F 灰層	土師器 鍋				赤褐	赤褐	赤褐	不良	1㎜以下の白・黒色粒多い（石英）	
	73	Ⅰ-F 灰層	須恵器 甕				明赤褐	明赤褐	明赤褐	良好	5㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の白色粒まばら	
	74	Ⅰ-F 灰層	須恵器 壺底部		11.80(幅)	1.4(厚)	青灰	淡青灰	青灰	良好	2㎜以下の白・黒色粒多い	
68	75	Ⅰ-G 灰層	須恵器 甕				青灰～暗青灰	青灰	青灰	良好	1㎜以下の白色粒多い	
	76	Ⅱ-G 灰層－Ⅱ層	須恵器 碗底部		5.60		灰	灰	灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	77	Ⅱ-G 灰層－Ⅱ層	須恵器 碗底部		6.20		青灰	青灰	青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	
69	78	Ⅰ-H 上部灰層	須恵器 甕	(20.10)			暗青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の白・黒色粒まばら	
70	79	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 皿	(8.60)	(5.20)	(2.70)	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	
	80	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 皿	(8.80)	(4.60)	(2.60)	灰褐	暗赤褐	灰褐	不良	4㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の白色粒多い	
	81	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 碗底部		(5.60)		青灰	青灰	青灰	良好	1㎜以下の白・黒色粒まばら	
	82	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 碗底部		(6.90)		青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	83	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 碗底部		(5.90)		灰	灰	灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	84	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 甕				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の白色粒多い（石英）	外面：平行タタキ3本／㎝
	85	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 片口鉢	(30.20)	(10.40)	(12.10)	灰	灰	灰	良好	1㎜以下の砂粒多い	
	86	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 鉢				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の白色粒わずか	
	87	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 鉢				青灰	灰褐	青灰	良好	7㎜以下の小礫わずか	
	88	Ⅰ-J 上部灰層	須恵器 片口鉢				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	片口は残存部が少なく、図化できず
71	89	Ⅰ-L 灰層	須恵器 碗	(14.60)	(6.00)	(5.35)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	
72	90	Ⅰ-K 灰層	須恵器 皿	(8.40)	(5.40)	2.10	青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	91	Ⅰ-K 灰層	須恵器 皿	(9.00)	(5.00)	(2.60)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	92	Ⅰ-K 灰層	須恵器 皿	(8.40)	(5.00)	(2.95)	青灰	淡青灰	淡青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	
	93	Ⅰ-K 灰層	須恵器 碗	(14.60)	6.40	(6.30)	紫灰	紫灰	紫灰	良好	1㎜以下の黒色粒わずか	
	94	Ⅰ-K 灰層	須恵器 碗	(13.50)	5.00	(6.10)	灰	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	
	95内	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 碗	15.30	(5.20)	5.70	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の白・黒色粒多い	下と溶着 95の内側の碗
	95外	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 碗	15.30	6.00	5.80	青灰	青灰	青灰	良好	1㎜以下の白・黒色粒多い	上と溶着 95の外側の碗
	96	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 壺				青灰	青灰	青灰	良好	1㎜以下の白色粒まばら	傾き推定、1本突帯
	97	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 鉢	(26.00)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の白色粒まばら	
	98	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 鉢	(27.60)	(10.40)	(11.90)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の黒色粒まばら	
	99	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 鉢	(25.00)	(11.40)	(12.30)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	15㎜の小礫わずか、1㎜以下の白色粒まばら	
	100	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 鉢	(27.50)			灰褐	灰褐	灰褐	良好	2㎜以下の砂粒わずか（石英）	
	101	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 鉢				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	102	Ⅰ-K 下部灰層	須恵器 鉢底部		(10.20)		青灰～暗青灰	暗青灰～黒灰	暗青灰～黒灰	良好	2㎜以下の白色粒多い	輪高台
	103		須恵器 鉢									写真図版34-7

表8　堂ノ前支群出土軒瓦

軒丸瓦

※（　）は復元数値

図版	番号	文様	出土地	瓦当径（cm）	瓦当厚（cm）	外区 外縁幅（cm）	外区 外縁高（cm）	外区 内縁幅（cm）	内区 中房径（cm）	内区 蓮子	内区 弁数	備考
73	NM 301	複弁蓮華文		18.0	3.0	1.7	1.2	—	7.6	1+8	8	『昭和57年度年報』fig.34-1、写真図版 37-17
	NM 302	複弁宝相華文	Ⅰ－E　下部瓦層	(19.8)	3.0	1.55	1.15	—	9.6	1+6	8	写真図版 36-6
	NM 303	複弁蓮華文	Ⅰ－L　瓦層	—	—	1.5	1.2	—	—	—	—	
	NM 304	複弁蓮華文	Ⅰ－C　上部瓦層	—	—	1.7	1.2	—	—	—	—	
	NM 305	複弁蓮華文	Ⅱ－D	—	—	1.7	1.45	—	—	—	—	
	NM 306	単弁蓮華文		—	—	—	—	—	—	—	—	
	NM 307	単弁蓮華文	Ⅰ－F	19.1	4.0	1.6	1.6	—	4.8	—	16	『昭和57年度年報』fig.34-3、写真図版 36-15
	NM 308	単弁蓮華文	Ⅰ－K	—	2.6	1.75	1.7	—	—	あり	—	
74	NM 309	単弁蓮華文	1号窯	—	—	—	—	—	—	—	—	
	NM 310	単弁蓮華文	Ⅰ－K　上部瓦層	—	—	—	—	—	—	—	—	
	NM 311	単弁蓮華文	Ⅰ－L	—	3.3	1.6	1.65	—	—	—	—	
	NM 312	単弁蓮華文		—	3.6	1.65	1.5	—	—	—	—	
	NM 313	単弁蓮華文		14.7	2.2	1.7	1.4	0.8	4.9	1+5	10	
	NM 314	単弁蓮華文		14.2	2.7	1.9	1.3	1.4	4.2	1+5	10	
	NM 315	単弁蓮華文	1号窯	—	—	1.1	1.0	1.05	4.3	1+5	—	写真図版 36-19
	NM 316	単弁蓮華文	Ⅰ－D　下部瓦層	—	—	2.3	1.1	1.4	—	—	—	
	NM 317	単弁蓮華文		(15.6)	—	1.7	1.3	1.4	—	—	—	写真図版 36-21
	NM 318	単弁蓮華文		—	—	—	—	1.7	—	—	—	
	NM 319	単弁蓮華文	Ⅰ－H　下部瓦層	—	—	1.3	1.1	1.35	—	—	—	
	NM 320	単弁蓮華文	Ⅰ－J	—	—	2.0	1.2	—	(4.4)	あり	10か	写真図版 36-18
	NM 321	単弁蓮華文	Ⅰ－C	16.1	3.2	2.5	1.8	—	4.3	1+6	13	『昭和57年度年報』fig.34-4、写真図版 37-7
	NM 322	単弁蓮華文		—	—	1.7	1.8	—	—	—	—	
75	NM 323	複弁蓮華文	Ⅰ－E　下部瓦層	15.1	2.7	1.8	1.1	1.2	3.0	なし	9	『昭和57年度年報』fig.34-2、写真図版 36-1
	NM 324	複弁蓮華文	Ⅰ－C　上部瓦層	(15.0)	2.5	1.3	1.0	1.45	1.65	なし	9か	
	NM 325	複弁蓮華文		(14.0)	3.0	1.5	1.2	1.5	—	なし	—	
	NM 326	複弁蓮華文		—	—	1.2	1.2	1.2	—	—	—	
	NM 327	複弁蓮華文	1号窯	—	—	2.1	1.2	1.35	—	—	—	
	NM 328	複弁蓮華文	Ⅰ－H　下部瓦層	(15.0)	—	1.8	1.3	—	—	—	—	
	NM 329	単弁蓮華文	6号	(15.2)	—	1.4	1.5	—	—	—	—	
	NM 330	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	1+8か	8	拓本のみ現存
	NM 331	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	あり	—	拓本のみ現存
	NM 332	単弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	あり	14か	拓本のみ現存
	NM 333	単弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	1+3～	14か	拓本のみ現存
	NM 334	単弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存
	NM 335	単弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	あり	—	拓本のみ現存
	NM 336	単弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	あり	—	拓本のみ現存
	NM 337	単弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	1+6か	—	拓本のみ現存
	NM 338	単弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	あり	—	拓本のみ現存
76	NM 339	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	なし	—	拓本のみ現存
	NM 340	複弁蓮華文？	—	—	—	—	—	—	—	なし	—	拓本のみ現存
	NM 341	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—		—	拓本のみ現存
	NM 342	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	あり	—	拓本のみ現存
	NM 343	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	あり	—	拓本のみ現存

軒平瓦

図版	番号	文様	出土地区	瓦当幅（cm）	瓦当厚（cm）	外区 上外縁厚（cm）	外区 下外縁厚（cm）	外区 上外縁高（cm）	外区 下外縁高（cm）	脇区幅（cm）	顎深（cm）	備考
77	NH 301	均整唐草文	Ⅰ－D　瓦層	—	—	—	—	—	—	1.8	—	
	NH 302	均整唐草文	Ⅰ－C	—	(7.5)	1.8	1.5	1.2	1.0	2.1	—	
	NH 303	均整唐草文	Ⅰ－J	—	—	—	—	—	—	—	—	
	NH 304	均整唐草文	Ⅰ－C　上部瓦層	—	7.3	1.3	1.2	1.3	1.2	—	—	写真図版 39-2
	NH 305	均整唐草文		—	6.9	1.1	1.5	0.7	—	1.2	—	『昭和57年度年報』fig.34-10、写真図版 39-9
	NH 306	均整唐草文		24.9	6.4	1.0	0.8	0.8	0.8	1.0	2.6	写真図版 39-4
	NH 307	均整唐草文	Ⅰ－K　瓦層	—	6.3	1.3	1.3	0.8	0.7	—	—	写真図版 39-5
	NH 308	均整唐草文	Ⅰ－A　上部瓦層	—	6.2	1.0	1.2	0.2	—	—	—	写真図版 39-6
	NH 309	均整唐草文	Ⅱ－C	—	6.4	0.8	0.9	0.8	0.9	1.35	—	写真図版 39-7
	NH 310	均整唐草文		—	—	—	0.9	—	0.4	—	—	写真図版 39-8
78	NH 311	均整唐草文	Ⅰ－F　下部瓦層	—	8.0	1.2	1.1	0.8	0.9	—	—	
	NH 312	均整唐草文	Ⅰ－F	—	—	—	1.25	—	1.0	—	—	
	NH 313	均整唐草文	Ⅰ－D	—	5.6	0.7	0.7	0.5	0.8	1.25	—	写真図版 41-10
	NH 314	均整唐草文	Ⅰ－E　下部瓦層	—	5.4	0.8	0.7	0.5	0.5	—	—	『昭和57年度年報』fig.34-11、写真図版 41-11
	NH 315	均整唐草文	Ⅰ－G　上部瓦層	—	5.5	1.5	1.2	0.7	0.5	—	—	写真図版 41-6
	NH 316	唐草文		—	(7.1)	1.2	—	0.7	—	—	—	写真図版 42-4
	NH 317	唐草文	Ⅰ－E	—	—	1.0	—	0.5	—	—	—	
	NH 318	均整唐草文	Ⅰ－E　瓦層	—	—	—	—	—	—	—	—	写真図版 40-24
	NH 319	唐草文	Ⅰ－E　下部瓦層	—	—	—	—	—	—	—	—	
	NH 320	唐草文	3号窯	—	—	1.0	—	0.8	—	1.5	—	
	NH 321	宝相華文	2号窯？	—	—	—	—	—	—	—	—	道具瓦か
	NH 322	均整唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『昭和57年度年報』fig.34-8 拓本のみ現存
	NH 323	均整唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存
	NH 324	均整唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存

第６章　昭和57年度　第７－３次調査（田井裏支群）の成果

第１節　調査区の設定と基本層序

（１）調査区の設定（図79）

田井裏支群では試掘調査によって灰層が確認されたため、窯体の位置と灰層の範囲確認を目的としたトレンチを設定した。『昭和57年度年報』(1985) によると「トレンチは、南北に入り込む谷の中心部に１×80mのトレンチ（１トレンチ）を設け、それに直交するトレンチ３本（北より２～４トレンチ・１×15m）を設定した」とある。しかし、現在確認できる平面図では、１トレンチは約62m、２トレンチは約27m、３トレンチは約９m、４トレンチは約13mであり、幅も１mでないところがある。また、調査記録にはないトレンチが平面図上には存在するなど、年報との不合があるが、現在確認できる図面を基に報告する[1]。

また、田井裏支群は昭和58年度にも調査をおこない、灰原を検出している。ただし、遺物と土層断面図が存在するのみで、調査位置を含め詳細は不明である。この調査で出土した軒瓦を第２節で併せて報告する。

（２）基本層序（図80）

調査地の圃場整備前地表面は標高110.00～111.70mであり、南に向かって下がっている。圃場整備前地表面から0.4～1.0mは盛土であり、その下に耕土層と考えられる層が堆積している。耕土層の下層には灰層が0.1～0.2mほどの厚さで数箇所存在する。灰層と耕土層の間には0.2～0.6mの厚さで細かい土層の単位が重なり合っている。調査時作成の土層断面図には、この層についての説明はないが、平面図の灰層の範囲とこの土層の範囲がほぼ一致することから、灰層や焼土層の可能性がある。標高109.40～109.80mで基盤層である灰褐色砂質土～暗黄褐色土となる。

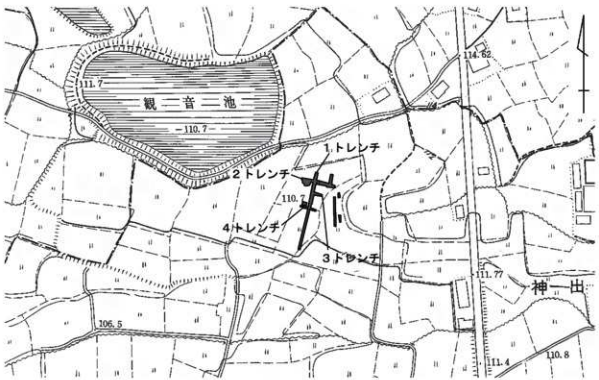
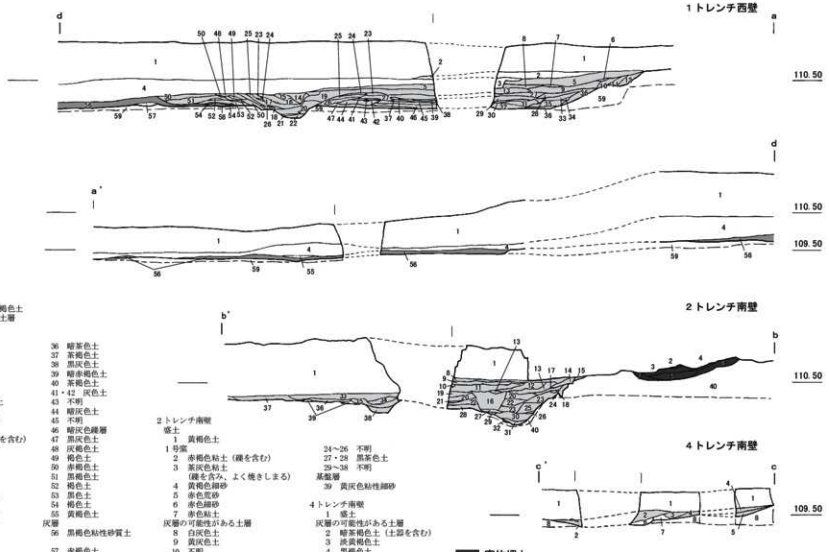


図79　田井裏支群　トレンチ配置図（S=1：3,000）

図90　田井墓支群　土層断面図



1トレンチ西壁
1　盛土
2　白灰色土
3　白灰色礫層
4　白黄灰色～灰褐色土
灰層の可能性がある土層
5　暗灰色土
6　暗茶灰色土
7　暗灰色土
8　暗灰褐色土
9　黒色土
10　暗灰色土
11　白灰色土
12　灰色砂質土
13～15　茶褐色土
16　灰赤褐色土
（土器を含む）
17　黒色土
18　灰色土（土器を含む）
19　黒灰褐色土
20　黄色土
21　暗灰色土
22　灰色土
23　黒色土
24　茶色～褐色土
25　黒色土
26　茶色～褐色土
27　黒褐色土　灰層
28　暗黄褐色土
29　暗褐色土
30　赤褐色土
31　暗赤褐色土
32　黒灰色土　基盤層
33・34　不明
35　黄褐色土
36　暗茶色土
37　茶褐色土
38　黒灰色土
39　暗赤褐色土
40　茶褐色土
41・42　灰色土
43　不明
44　暗灰色土
45　不明
46　暗灰色礫層
47　黒灰色土
48　灰褐色土
49　褐色土
50　赤褐色土
51　黒褐色土
52　褐色土
53　黒色土
54　褐色土
55　黄褐色土　灰層
56　黒褐色粘性砂質土

2トレンチ南壁
盛土
1　黄褐色土
1号窯
2　赤褐色粘土（礫を含む）
3　茶灰色粘土
（礫を含み、よく焼きしまる）
4　黄褐色細砂
5　赤色荒砂
6　赤色細砂
7　赤色粘土　灰層の可能性がある土層
8　白灰色土
9　黄灰色土
10　不明
11　暗黄灰色土
12・13　黄色土
14～18　不明
19～23　黒茶色土
24～26　不明
27・28　黒茶色土
29～38　不明
基盤層
39　黄灰色粘性細砂

4トレンチ南壁
1　盛土
灰層の可能性がある土層
2　暗茶褐色土（土器を含む）
3　灰黄褐色土
4　黒褐色土
5　茶褐色土
6　灰茶褐色土
7　黄褐色土
8　基盤層

第２節　調査成果（図81）

田井裏支群では、窯跡１基、灰原、土器だまりを検出した。

１トレンチにおいて南北30mにわたり灰層を確認した。「灰層の断面観察より、厚くなる部分が３か所あることから３基以上の窯体による堆積である」と『昭和57年度年報』(1985) では報告しているが、土層断面図では、灰層は0.1～0.2mほどの厚さしかなく、窯跡が想定できるほどの堆積とはいえない。灰層の可能性がある土層は２トレンチ周辺で確認したのみである。

２トレンチでは、窯跡、土器だまりの他、東西約10mにわたり灰層を確認した。

３・４トレンチでは、「東から西に傾斜して灰層が堆積する状況を認めた。このことから１号窯同様、東に焚口を向ける窯跡が存在したと想定した」と『昭和57年度年報』(1985) では報告されている。しかし、灰層の可能性がある土層は、４トレンチで厚さ約0.2mの堆積が見られるのみである。このことから、４トレンチ周辺には窯跡が存在したが、３トレンチ周辺には窯跡が存在しなかった可能性がある。ただし、３・４トレンチから遺物はほとんど出土していない。調査地は谷地形であることから、上流から流れてきた灰層が４トレンチ周辺に堆積した可能性も考えられる。

（１）１号窯（図82、写真３）

１号窯は、『昭和57年度年報』(1985) で「第１窯体」として報告した窯跡である。他の支群と名称をそろえるため、本書では「１号窯」として記述する。

この窯跡は、トレンチを設定した谷の西側傾斜面に位置する。２トレンチの南壁に接するように存在したため、２トレンチ西端部を南に拡張して、窯跡全体を検出した。燃焼部上半以上が開墾により削平されている。遺構の詳細な平面図・断面図が存在せず、平板図より窯跡の規模を測ると、現存長約４m、現存幅約２mであると考えられる。２トレンチ土層断面図中に１号窯の断面を一部確認できる（図80）。

土器は窯体内から須恵器埦（写真３）、土師器鍋が出土している。

前庭部の灰層から出土した土器は、須恵器鉢・埦・甕の他に土師器が多く出土している。図82－１～４は土師器皿である。１は底部に比べ、体部の器壁が厚く、急な立ち上がりが見られる。２は体部がわずかに外反する。３は体部が丸みを帯びて立ち上がる。図82－５は土師器托である。図82－６・７は土師器坏である。図82－８～12は土師器鍋である。11は体部に、粘土帯で作った把手を貼り付けている。外面には平行タタキが施される。12は厚手の器壁を持つ体部から口縁部が直線的に立ち上がり、やや内傾する。類例に乏しいが土師器鍋に分類した。図82－13は須恵器甕胴部である。外面に平行タタキを施す。図82－14は須恵器埦である。直線的に開く体部を持つ。図82－15・16は須恵器鉢である。15は体部が直線的に開き、口縁端部で内側に肥厚する。片口を有するが、小片で片口部は半分近く欠損している。16は体部が外反し、口縁端部で内側にくの字状に屈曲する。

前庭部で出土した土器は、土師器が多くを占める。このことから窯体の焚口を欠いて広げ、前庭部で土師器の焼成をおこなったものと考えられる[2]。

写真３　田井裏支群　１号窯出土土器

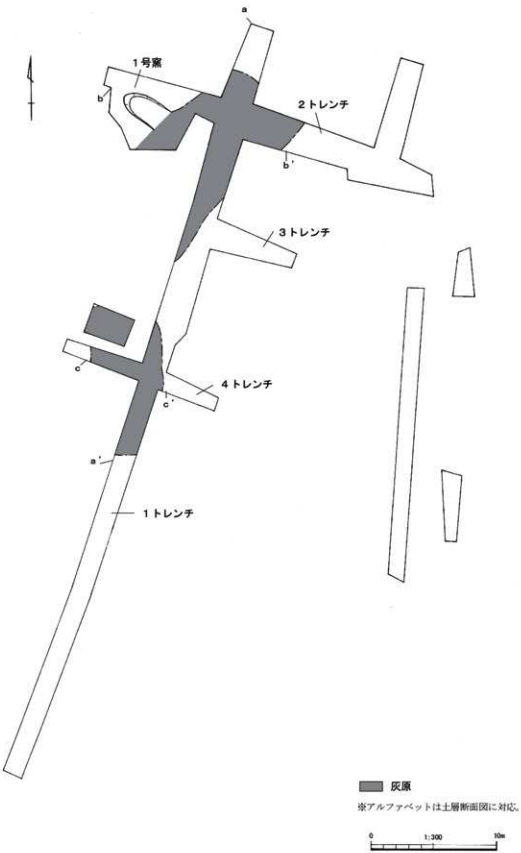


図81　田井裏支群　遺構平面図

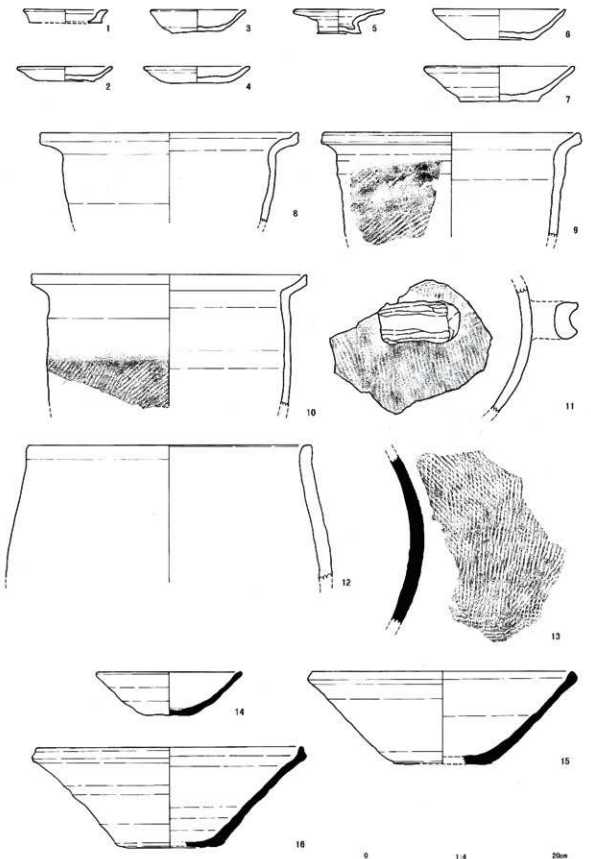


図82　田井裏支群　1号窯前庭部灰層出土土器

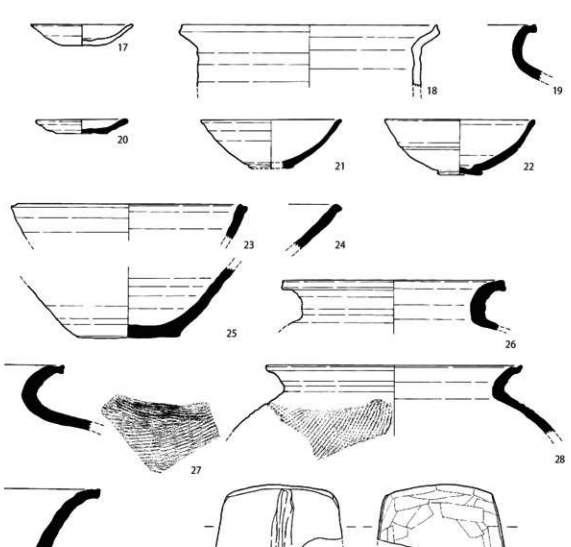


図83　田井裏支群　１号窯灰層出土土器

（２）灰原（図83）

１トレンチにおいて南北30m、２トレンチにおいて東西約10m、４トレンチにおいて東西６mにわたり灰層を確認した。２トレンチの灰層の東端は、旧河道により一部削られていた。

土器は「１号窯灰層」、「１号窯前庭部灰層」出土のものしかない。平面図から、１トレンチ中央部北寄りで５～15mの間灰原を検出していない部分があり、灰原が南北に２分されている。このことから、「１号窯灰層」は北側の灰原から出土した遺物を指すと考えられる。４トレンチの土層断面図では、わずかに遺物と思われるものが記録されており、『昭和57年度年報』(1985) にも遺物が少量出土したと報告されているが、整理時には４トレンチ出土の遺物は確認できなかった。

1号窯灰層からは、土師器坏・皿・鍋、須恵器鉢・埦・皿・甕・壺が出土している。図83－17は土師器皿である。図83－18は土師器鍋である。18は体部が直線的に立ち上がり、頸部で外側に屈曲する。口縁部は内側につまみ上げる。図83-19は須恵器壺である。頸部が直線的に立ち上がる。焼成不良である。図83－20は須恵器皿である。図83－21・22は須恵器埦である。いずれも体部が内湾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。22は体部外面に沈線を持つ。図83－23～25は須恵器鉢である。23・24は口縁部の小片である。25は口縁部を欠損する。図83－26～28は須恵器甕である。26は頸部が直線的に立ち上がり、口縁端部で下方に突出する。27は頸部が大きく外反し、口縁端部は上方に突出する。28は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部内面に凹みをつくる。図83－29は須恵器壺の口縁部である。緩やかに外反して立ち上がる。肩部への屈曲をわずかに残す。図83－30は二面硯である。下半部を欠損する。表面中央あたりに粘土紐を貼り付け、左右に二分する。裏面は周辺部にヘラケズリを施す。側面はナデである。

（3）土器だまり（図84、85）

2トレンチ東側傾斜面で、灰を含まない土器の堆積を厚さ0.2～0.5m、東西約5mにわたり検出した。遺物は「土器だまり」出土として取り上げており、焼成不良品や大型の破損品が多く、廃棄遺構と考えられる。ただし遺構図はない。

図84－31は土師器皿である。図84－32～34は土師器托である。32は他に比べ、体部の屈曲が弱い。34はやや大型品であるが、口縁部を欠損する。図84－35は土師器坏である。体部が直線的に開く。図84－36～38は土師器鍋である。36は甕のように頸部が緩くくの字状を呈し、体部が広がる。38は口縁端部を丸く収める。図84－39～41は須恵器皿である。41は直線的に上方に立ち上がる。図84－42～44は須恵器埦である。42は体部が内湾して立ち上がる。43・44は底部で、43は輪高台を持つ。図84－45～53は須恵器鉢である。45は体部が内湾して立ち上がり、口縁端部を外側につまみ出す。46は体部が内湾して立ち上がり、口縁部の近くで内面は沈線を持ち、外面は強いナデにより段差をつくる。口縁端部は拡張しない。47は口縁端部を折り曲げるように外側に突出させる。50は底部に輪高台をもち、口縁部を欠損する。51は口縁部でわずかに外反し、片口を有する。52・53は口縁部の小片である。図84－54～56は器種不明である。窯道具の可能性もある。54・55は焼成、胎土などから同一個体の口縁部と底部と考えられる。器壁がかなり厚く、口縁部は丸く収める。56は54・55の小型品の底部と考えられる。焼成及び製作技法が類似する。図85－57～62・64・65は須恵器甕である。すべて外面に平行タタキを施す。57は頸部をくの字状に屈曲させ、口縁部内面に凹みをつくる。58は口縁端部をつまむように上方に突出させる。59は頸部が大きく外反し、口縁端部を上方につまむように突出させる。60は器壁が一定して厚く、短い頸部と口縁部を持つ。口縁部は拡張せず、丸みを帯びる。61は頸部が大きく外反し、口縁部内面で凹みをつくる。62は頸部をくの字状に屈曲させるが、口縁部が短く、拡張しない。64は口縁部内面で強く凹ませる。65は頸部が直線的に立ち上がり、口縁部付近で直角に屈曲する。図85－63・66～69は須恵器壺である。63は口縁部であり、ラッパ状に立ち上がる。口縁端部は拡張せず、丸く収める。66は完形である。ラッパ状に開く頸部を持ち、口縁端部はわずかに上下に突出する。焼成が甘い。67は完形の無頸壺である。口縁端部は上方につまみ上げる。68は完形の小型壺である。体部下半は緩やかに外反し、直線的に立ち上がり、口縁部で内側に屈曲する。69は底部である。

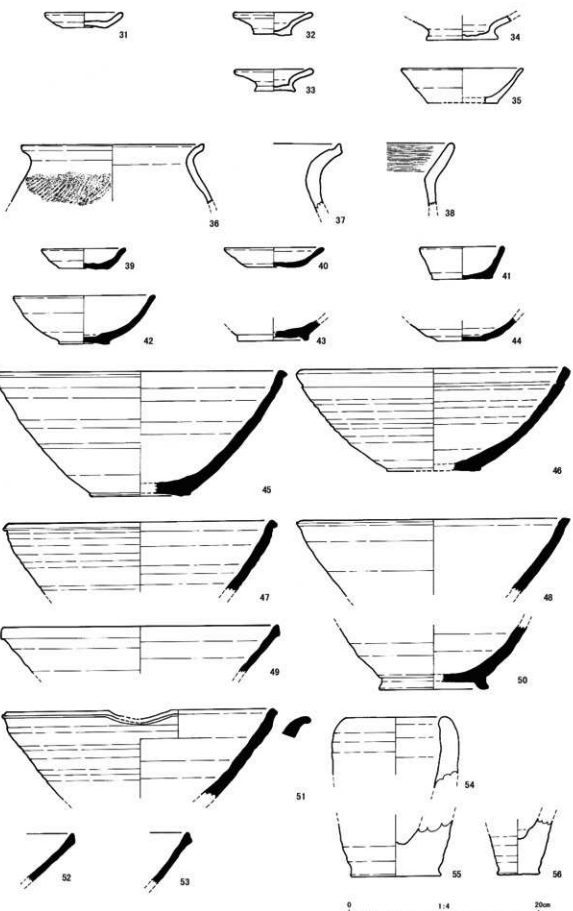


図84　田井裏支群　土器だまり出土土器①

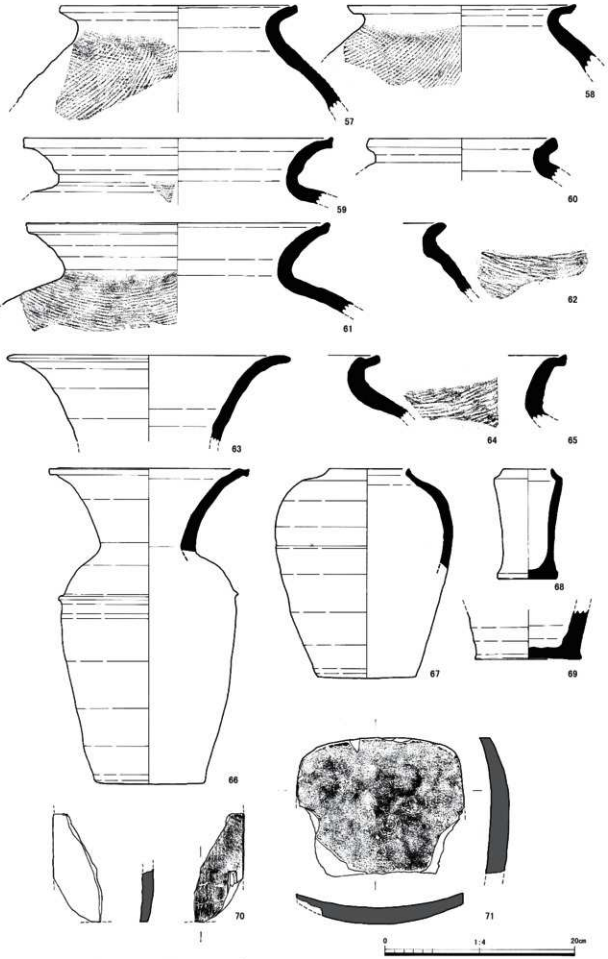


図85　田井裏支群　土器だまり出土土器②

図85－70は硯である。下半部の２辺がわずかに残存し、脚部は片側が一部のみ残存する。表面は丁寧なナデが施され、裏面は平行タタキを施したのち、ナデ消している。そののち脚部を貼り付けている。風字硯と考えられる。図85－71は猿面硯である。下半部を欠損するため、脚部は不明である。表面は直径約2.4㎝の青海波文を縦に６列、並べて押印している。左右の端部付近は、ナデ消しにより不鮮明になっている。裏面は丁寧なナデを施す。周辺で出土した須恵器甕内面には青海波文が認められず、また当硯の青海波文も文様状に施されていることから、甕などに見られる当て具痕とは異なる意図の痕跡と考えられる。須恵器甕の転用品ではなく、硯として作られたものと考えられる。

（４）軒瓦

田井裏支群から出土した軒瓦として、軒丸瓦９点、軒平瓦22点を図示した。また、参考資料として、現在所在不明の軒瓦６点の拓本を掲載した。各瓦の出土地点については表10の通りである。

①軒丸瓦（図86）

NM401・402は複弁蓮華文軒丸瓦である。NM401は中房に蓮子が密に配置され、周囲には雄蕊帯が巡る。蓮弁は弁面を窪ませて表現されており、隣接する蓮弁とつながっている。蓮弁の先端は切り込みがあり、子葉は突出させた表現になっている。外区には珠文帯が巡り、大粒で楕円形の珠文が密に並んでいる。NM401と402では珠文の表現がやや異なっている。またNM402は蓮子や雄蕊帯の有無は不明である。

NM403は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房には蓮子を配し、周囲には圏線が一条巡る。蓮弁は凸線の縁取りで表現されており、先端が切り込まれてM字形になっている。子葉は２枚が突出した表現となっている。各蓮弁の間には間弁が挿入される。蓮弁の形に沿って、外周に圏線が巡る。

NM404・406は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房には大粒の蓮子が配され、周囲を太めの圏線が一条巡る。蓮弁は弁面が盛り上がっており、隣接する蓮弁は凸線で区画される。やや抽象化された表現である。NM404の蓮弁の表現は四角であるのに対し、NM406は先端を丸く収める。また蓮弁の先端側を区画する凸線がなく、すぐ外区となる。

NM405・407は単弁蓮華文軒丸瓦である。NM405は中房に大粒の蓮子が配され、周囲を太めの圏線が一条巡る。蓮弁は細長い盛り上がりで表現され、先端は丸く収める。蓮弁ごとに弁面の形に沿って凸線で区画される。一部、割付に失敗して蓮弁が狭くなっているところがある。NM407も同様であるが、同笵かは不明である。NM405は１号窯体内から出土した可能性がある。

NM408は単弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当面が荒れておりわかりにくいが、蓮弁の周縁に圏線が一条巡る。圏線には間弁状の表現が伴っている。

NM409は蓮華文軒丸瓦である。蓮弁の周縁に圏線が巡る。

NM410～413は所在不明であり、調査当時の拓本のみ現存していた資料である。

NM410は複弁蓮華文軒丸瓦である。NM401と同系統と考えられる。

NM411・412は複弁蓮華文軒丸瓦である。NM403と同系統である。NM412は蓮弁の外側に圏線が二条巡る。

NM413は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は12～13葉の可能性がある。中房には蓮子が配され、周囲を圏線が一条巡る。蓮弁は扁平で、凸線でやや丸く区画され、間弁状の表現も見られる。

外区には内外の圏線の間に珠文帯が巡る。珠文は小さく、密に並ぶ。同じく所在不明の堂ノ前支群NM335・338と類似する。

②軒平瓦（図87、88）

NH401は半截花文軒平瓦である。上下交互に半截花文が配置され、下外区には珠文帯が配置される。珠文は大粒で密に並ぶ。顎面は２条の突帯で区画され、その間に半截花文が上下交互にヘラ描きされる。いわゆる「顎面施文技法」である。顎面や平瓦部はヘラケズリ調整がされている。瓦当貼付ａ技法で瓦当を成形している。

NH402～404は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はＣ字背向で、上側の山でつなげている。左右に唐草が展開し、蕨手状の枝葉が多く派生する。唐草の周縁には圏線が巡る。顎面は分厚く、奥行きがあり段差が小さいのが特徴的である。NH403・404は顎貼付技法で瓦当を成形している。

NH405は均整唐草文軒平瓦である。樹状中心飾からは下向きの蕨手が２本延びる。外側の展開は不明だが、同系統の意匠であるNH406～411と同様もしくは類似すると考えられる。

NH406～411は均整唐草文軒平瓦である。樹状中心飾からは下向きの蕨手が３本延び、外側に上向きの蕨手が５本延びる。周縁には圏線が巡るが、瓦当面の大きさによって、一部のみ圏線が見られるものが多い。NH407・410は包み込みｂ技法、NH408は包み込みａ技法、NH409は瓦当貼付ａ技法で瓦当を成形している。

NH412～416は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はＣ字対向で、唐草文が左右に３転する。その周囲を圏線が囲み、外区には珠文帯が巡る。擬古的な文様である。NH416は凸線がやや太く、唐草文の下端が切れており、異笵である。NH412は瓦当貼付ａ技法である。

NH417は均整唐草文軒丸瓦である。中心飾はＣ字下向で、圏線が巡る。瓦当貼付ａ技法で瓦当を成形している。昭和58年度調査の２トレンチ１号灰原から出土している。

NH418は唐草文軒平瓦である。唐草文の周縁に圏線が巡る。昭和58年度調査の２トレンチ暗灰褐色砂礫層から出土している。前述のとおり、調査の全容が不明のため、この土層と灰原との関係も不明である。

NH419は唐草文である。瓦当面の幅が狭く、細い線で唐草文が表現され、圏線が巡る。瓦当厚が他に比べて薄いのが特徴である。顎貼付技法によって瓦当を成形している。

NH420・421は唐草文軒平瓦である。それぞれ、瓦当面の下半分が残存する。詳細な文様構成は不明であるが、NH420はNH402～404と同意匠であると考えられる。NH420・421ともに昭和58年度調査の２トレンチ１号灰原から出土している。

NH422は唐草文軒平瓦である。瓦当厚が厚く、官ノ裏支群NH150に類似する道具瓦の可能性もある。昭和58年度調査の２トレンチ１号灰原から出土している。

NH423・424は所在不明で、調査当時の拓本のみ現存している資料である。

NH423はＣ字背向中心飾の均整唐草文軒平瓦である。NH402～404と同意匠であると考えられる。

NH424は均整唐草文軒丸瓦である。中心飾はおそらくＣ字下向で、圏線が巡る。NH417と同意匠であると考えられる。

---

[1] 脱槇後、磁気探査の結果から窯跡の位置を想定した略図の存在を確認した。それによると、１号窯以外に５～６基想定されており、その箇所にトレンチを設定している。ただし、窯跡が確認されなかったため、年報では未報告であったと考えられる。

[2] 森内秀造氏にご指摘いただいた。

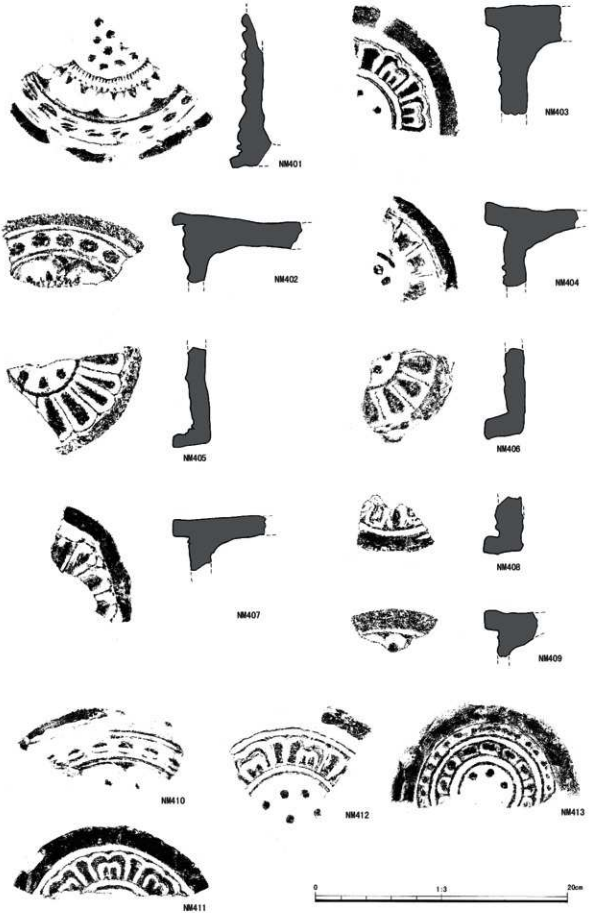


図86　田井裏支群出土軒丸瓦

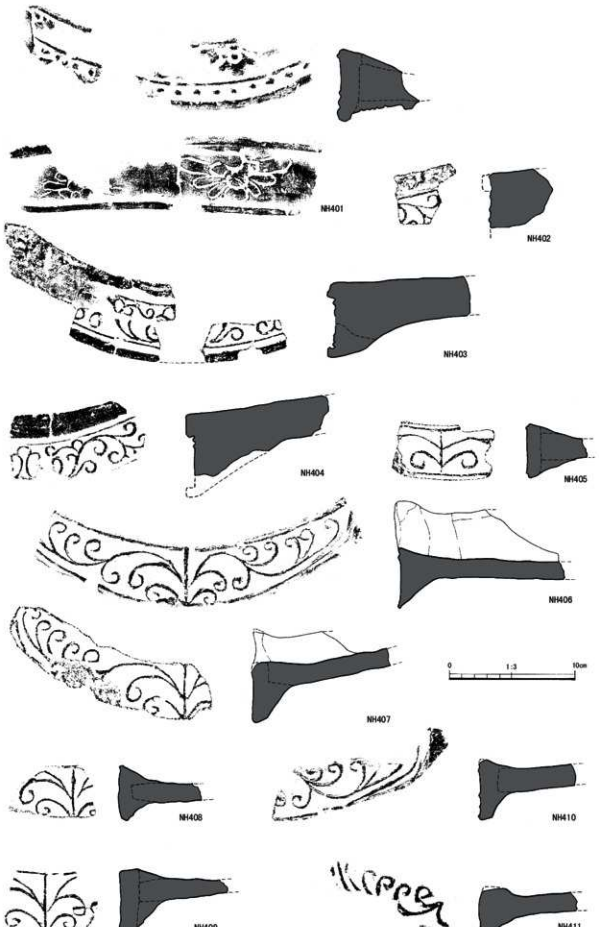


図87　田井裏支群出土軒平瓦①

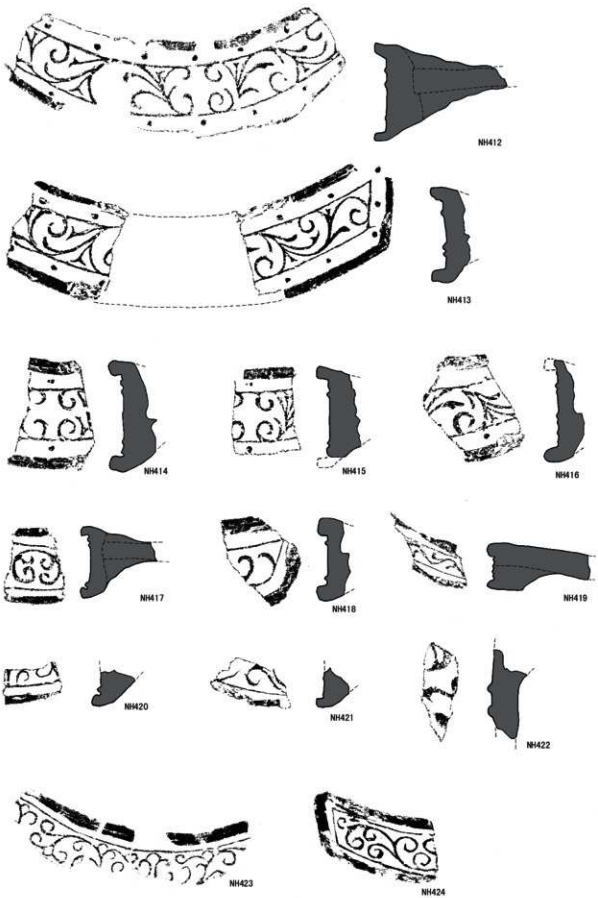


図88　田井裏支群出土軒平瓦②

表9　田井裏支群出土土器

※（　）は復元数値

図版	遺物	出土地	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	色調 外面	色調 内面	色調 断面	焼成	胎土	備考
82	1	1号窯　前庭部灰層	土師器 皿	(8.90)	(7.70)	(1.40)	明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化 良好	3㎜以下の小礫わずか	
	2	1号窯　前庭部灰層	土師器 皿	10.00	6.00	1.60	淡褐～赤褐	淡褐～赤褐	赤褐	酸化 やや不良	1㎜以下の赤色粒わずか	写真図版 36-9
	3	1号窯　前庭部灰層	土師器 皿	10.00	5.40	2.45	淡赤褐	暗褐灰	暗褐灰	酸化 不良	11㎜以下の小礫多い、粗い	両面：スス付着、歪み激しい
	4	1号窯　前庭部灰層	土師器 皿	(11.20)	6.00	1.75	淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 不良	3㎜以下の小礫わずか	
	5	1号窯　前庭部灰層	土師器 托	(9.60)	(4.60)	(2.55)	淡褐	淡褐	淡褐	酸化 やや不良	2㎜以下の砂粒まばら（石英、赤色粒）	
	6	1号窯　前庭部灰層	土師器 杯	(14.10)	1.30	3.20	明赤褐	明赤褐	赤褐	酸化 良好	2㎜以下の砂粒わずか	写真図版 36-6
	7	1号窯　前庭部灰層	土師器 杯	(15.80)	8.30	3.70	淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 やや不良	7㎜以下の小礫わずか、やや粗い	
	8	1号窯　前庭部灰層	土師器 鍋	(27.30)			淡赤褐	淡褐	淡褐	酸化 不良	3㎜以下の小礫多い、かなり粗い	
	9	1号窯　前庭部灰層	土師器 鍋	(27.00)			淡黄褐	淡黄褐	淡黄褐	酸化 やや良好	4㎜以下の小礫・砂粒多い	
	10	1号窯　前庭部灰層	土師器 鍋	(28.80)			淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 やや良好	4㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	11	1号窯　前庭部灰層	土師器 鍋？				淡黄褐	淡黄褐	淡赤褐	酸化 やや良好	3㎜以下の砂粒多い	
	12	1号窯　前庭部灰層	土師器 鍋？	(29.80)			淡褐	淡褐	淡褐	酸化 良好	2㎜以下の砂粒まばら	外面：平行タタキのちナデ消し
	13	1号窯　前庭部灰層	須恵器 甕				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒多い	外面：平行タタキ3本／㎝ 天地・傾き不明
	14	1号窯　前庭部灰層	須恵器 碗	(15.30)	5.00	4.60	灰黄色 自然釉	淡黒灰色 自然釉	灰	良好	精良	
	15	1号窯　前庭部灰層	須恵器 鉢	(27.40)	(10.40)	(9.80)	淡青灰	淡青灰	青灰	良好	9㎜以下の小礫・白色粒多い、粗い	
	16	1号窯　前庭部灰層	須恵器 鉢	(28.00)	(11.60)	(10.75)	青灰		青灰	良好	1㎜以下の砂粒多い	
83	17	1号窯　灰層	土師器 皿	(10.80)	(5.20)	(2.20)	赤褐	赤褐	赤褐	酸化 やや不良	2㎜以下の砂粒まばら	
	18	1号窯　灰層	土師器 鍋	(27.00)			褐	褐	褐	酸化 不良	5㎜以下の小礫多い、やや粗い	
	19	1号窯　灰層	須恵器 壺				橙褐	橙褐	橙褐	酸化 やや不良	4㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の砂粒多い	
	20	1号窯　灰層	須恵器 皿	8.60	5.40	1.50	青灰	青灰	青灰	良好	11㎜の礫わずか、2㎜以下の黒色粒まばら	写真図版 35-6
	21	1号窯　灰層	須恵器 碗	(14.80)	(4.80)	(5.20)	淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	8㎜以下の小礫まばら、1㎜以下の黒色粒多い	体部：沈線
	22	1号窯　灰層	須恵器 碗	(15.80)	(4.80)	(5.65)	青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の白・黒色粒多い	
	23	1号窯　灰層	須恵器 鉢	(23.60)			淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	24	1号窯　灰層	須恵器 鉢				青灰～暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の白色粒わずか	
	25	1号窯　灰層	須恵器 鉢底部		10.80		暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の白色粒わずか	
	26	1号窯　灰層	須恵器 甕	(23.00)			暗青灰	暗灰	暗灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	写真図版 35-1
	27	1号窯　灰層	須恵器 甕				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の白色粒わずか	
	28	1号窯　灰層	須恵器 甕	(27.00)			淡灰	淡灰褐	淡灰褐	不良	7㎜以下の小礫・砂粒多い	外面：平行タタキ3本／㎝
	29	1号窯　灰層	須恵器 壺				青灰	青灰～暗青灰	青灰	良好	1㎜以下の白色粒わずか	
	30	1号窯　灰層	二面硯		13.1(幅)	1.7(厚)	淡灰	淡灰	淡灰	良好	1㎜以下の砂粒わずか	写真図版 35-18
84	31	土器だまり	土師器 皿	(8.00)	4.50	1.55	赤褐	淡赤褐	赤褐	酸化 不良	2㎜以下の砂粒多い（赤色粒）、やや粗い	
	32	土器だまり	土師器 托	8.10	4.00	2.90	赤褐	赤褐	赤褐	酸化 やや不良	7㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒多い、やや粗い	
	33	土器だまり	土師器 托	7.90	4.30	2.30	褐～赤褐	褐～赤褐	褐～赤褐	酸化 やや不良	1㎜以下の白・赤色粒多い	写真図版 36-12
	34	土器だまり	土師器 托底部		(7.60)		褐	褐	褐	酸化 やや不良	4㎜以下の小礫わずか	
	35	土器だまり	土師器 杯	(12.80)	(7.40)	(3.70)	明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化 やや不良	3㎜以下の小礫・砂粒多い	
	36	土器だまり	土師器 鍋	(19.10)			明赤褐～暗赤褐	明赤褐～暗赤褐	明赤褐～暗赤褐	酸化 不良	2㎜以下の砂粒非常に多い	
	37	土器だまり	土師器 鍋				明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化 不良	7㎜以下の小礫・砂粒非常に多い	
	38	土器だまり	土師器 鍋				灰褐	橙褐～黒褐	橙褐～黒褐	酸化 不良	6㎜以下の小礫・砂粒非常に多い（石英、赤色粒、黒雲母）、粗い	
	39	土器だまり	須恵器 皿	8.70	5.30	2.10	淡青灰	灰白～淡青灰	青灰	やや不良	精良	
	40	土器だまり	須恵器 皿	10.50	5.40	2.10	暗褐	暗褐	暗褐	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	41	土器だまり	須恵器 皿	(8.80)	(6.00)	(3.40)	淡灰～青灰	淡青灰	淡青灰	良好	1㎜以下の黒色粒まばら	
	42	土器だまり	須恵器 碗	(14.80)	(5.40)	(5.10)	淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	10㎜以下の小礫まばら	
	43	土器だまり	須恵器 碗底部		7.40		淡青灰	淡青灰	淡青灰	やや不良	1㎜以下の赤色粒多い	輪高台
	44	土器だまり	須恵器 碗底部		5.20		淡褐	淡褐	淡褐	不良	3㎜以下の砂粒多い、やや粗い	
	45	土器だまり	須恵器 鉢	(29.40)	(10.60)	(13.20)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	6㎜以下の小礫まばら	
	46	土器だまり	須恵器 鉢	(27.90)	(5.00)	(11.90)	暗青灰	青灰	暗青灰	良好	精良	口縁部：内面沈線
	47	土器だまり	須恵器 鉢	(27.60)			灰	灰	灰	良好	10㎜以下の小礫わずか	外面：体部の粘土紐痕跡強調
	48	土器だまり	須恵器 鉢	(27.60)			暗青灰	淡青灰	淡青灰	良好	1㎜以下の黒色粒まばら	
	49	土器だまり	須恵器 鉢	(29.00)			淡灰褐	淡灰褐	淡灰褐	良好	3㎜以下の小礫わずか	
	50	土器だまり	須恵器 鉢底部		(11.50)		暗灰	青灰	青灰	やや不良	5㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の砂粒多い	輪高台
	51	土器だまり	須恵器 片口鉢	(28.00)			青灰	灰～青灰	青灰	良好	8㎜以下の小礫わずか	
	52	土器だまり	須恵器 鉢				褐	褐	褐	やや不良	2㎜以下の砂粒まばら	
	53	土器だまり	須恵器 鉢				青灰	暗青灰	青灰	良好	1㎜以下の白色粒わずか	
	54	土器だまり	窯道具？	(10.10)			淡褐～暗灰	淡褐	淡褐～淡赤褐	やや不良	3㎜以下の砂粒非常に多い（石英、赤色粒）	900と同一個体か、写真図版 36-4
	55	土器だまり	窯道具？		9.60		淡褐	淡褐	淡褐～淡赤褐	やや不良	4㎜以下の小礫・砂粒非常に多い（石英、赤色粒）	900と同一個体か、写真図版 36-4
	56	土器だまり	窯道具？		4.50		淡褐	淡褐	淡褐～淡赤褐	やや不良	4㎜以下の小礫・砂粒非常に多い	写真図版 36-4

55	57	土器だまり	須恵器甕	(24.60)			灰白～青灰	明青灰	明青灰	良好	5mm以下の小礫・黒色粒多い	外面：平行タタキ6本／cm
	58	土器だまり	須恵器甕	(24.20)			青灰	青灰	青灰	良好	8mm以下の小礫わずか、1mm以下の黒色粒多い	外面：平行タタキ3本／cm
	59	土器だまり	須恵器甕	(32.60)			青灰	青灰	青灰	良好	6mm以下の小礫わずか	
	60	土器だまり	須恵器甕	(19.60)			灰	灰	灰	良好	精良	写真図版35-2
	61	土器だまり	須恵器甕	(31.80)			青灰～黒灰	明青灰	明青灰	良好	2mm以下の黒色粒多い	外面：平行タタキ3本／cm
	62	土器だまり	須恵器甕				青灰	暗灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	外面：2段の縄目状文様？
	63	土器だまり	須恵器壺	(30.00)			暗褐～暗灰褐	暗褐～暗灰褐	暗褐	不良	3mm以下の小礫・砂粒まばら	
	64	土器だまり	須恵器甕				暗青灰	青灰	青灰	良好	4mm以下の小礫わずか	外面：平行タタキ3～4本／cm 一部ナデ消し
	65	土器だまり	須恵器甕				淡褐	淡褐	淡褐	不良	3mm以下の小礫まばら（石英・長石）	外面：平行タタキ3本／cm
	66	土器だまり	須恵器壺	21.00	11.60	33.30	淡褐	淡褐	淡褐	不良	3mm以下の砂粒まばら	写真図版35-11
	67	土器だまり	須恵器無頸壺	6.40	10.40	22.10	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3mm以下の白色粒多い	写真図版35-14
	68	土器だまり	須恵器壺	5.20	6.00	11.60	淡褐灰	淡褐灰	淡褐灰	やや不良	1mm以下の砂粒まばら	写真図版35-16
	69	土器だまり	須恵器壺底部		(11.20)		黒灰	暗青灰	暗青灰	良好	6mm以下の小礫わずか、2mm以下の黒色粒多い	
	70	土器だまり	硯				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	表面：平行タタキ3本／cmをナデ消し、写真図版35-19
	71	土器だまり	猿面硯				灰色	灰色	灰色	良好	精良	表面：直径約2.4cmの青海波文が縦並びに6列、全体ナデ消しで、両端2列不鮮明、写真図版36-1
	72	1号窯　灰層	焼台									写真図版36-3

表10　田井裏支群出土軒瓦

軒丸瓦

※（　）は復元数値

図版	番号	文様	出土地	瓦当径（cm）	瓦当厚（cm）	外区 外縁幅（cm）	外区 外縁高（cm）	外区 内縁幅（cm）	内区 中房径（cm）	内区 蓮子	内区 弁数	備考
86	NM 401	複弁蓮華文	1号窯灰層	(19.6)	—	1.4	1.0	2.0	—	9～	—	写真図版37-16
	NM 402	複弁蓮華文		—	—	1.0	1.0	2.0	—	—	—	
	NM 403	複弁蓮華文	1号窯灰層	—	—	2.4	1.15	—	—	あり	—	
	NM 404	単弁蓮華文	土器だまり	—	—	2.3	1.8	—	—	あり	—	写真図版37-4
	NM 405	単弁蓮華文	1号窯灰層	(15.6)	2.9	1.5	1.65	—	—	あり	—	写真図版37-1
	NM 406	単弁蓮華文	土器だまり	—	3.0	2.4	1.85	—	—	あり	—	
	NM 407	単弁蓮華文	1号窯灰層	—	—	1.3	1.3	—	—	—	—	
	NM 408	単弁蓮華文		—	3.0	1.4	1.2	—	—	—	—	
	NM 409	複弁蓮華文	土器だまり	—	—	1.7	1.1	—	—	—	—	
	NM 410	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存
	NM 411	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存
	NM 412	複弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	1+4～	—	拓本のみ現存
	NM 413	単弁蓮華文	—	—	—	—	—	—	—	あり	12か	拓本のみ現存

軒平瓦

図版	番号	文様	出土地区	瓦当幅（cm）	瓦当厚（cm）	外区 上外縁厚（cm）	外区 下外縁厚（cm）	外区 上外縁高（cm）	外区 下外縁高（cm）	脇区幅（cm）	顎深（cm）	備考
87	NH 401	宝相花文	土器だまり	—	5.6	0.3	0.9	0.2	0.3	1.1	5.0	『昭和57年度年報』fig.34-7 顎面施文（ヘラ描き）、写真図版40-8
	NH 402	均整唐草文	土器だまり	—	(4.3)	—	—	—	—	—	—	
	NH 403	均整唐草文	土器だまり	—	5.9	1.2	0.7	0.6	0.6	—	—	写真図版39-3
	NH 404	均整唐草文	土器だまり	—	—	1.3	—	0.7	—	—	—	
	NH 405	均整唐草文	1号窯灰層	—	4.7	0.15	0.2	0.0	0.0	—	—	写真図版39-11
	NH 406	均整唐草文	1号窯	—	4.7	0.5	0.2	0.1	0.1	—	—	『昭和57年度年報』fig.34-6、写真図版39-13
	NH 407	均整唐草文	1号窯灰層	—	(4.7)	—	なし	—	0.0	—	2.3	写真図版39-15
	NH 408	均整唐草文	土器だまり	—	4.4	0.3	なし	0.1	0.0	—	—	
	NH 409	均整唐草文	土器だまり	—	4.6	0.3	0.5	0.2	0.15	—	—	
	NH 410	均整唐草文	土器だまり	—	(4.6)	—	0.4	—	0.1	1.8	—	写真図版39-14
	NH 411	均整唐草文	土器だまり	—	—	—	—	—	0.1	0.6	—	
88	NH 412	均整唐草文	1号窯灰層	—	7.7	1.15	0.7	1	0.9	—	—	写真図版40-23
	NH 413	均整唐草文	土器だまり	—	7.4	1.1	1.1	1	1.1	1.1	—	
	NH 414	均整唐草文	土器だまり	—	8.7	1.15	1.1	1	1.2	—	—	
	NH 415	均整唐草文	土器だまり	—	—	1.0	—	0.9	—	—	—	
	NH 416	均整唐草文	土器だまり	—	(8.1)	—	1.2	—	1.1	—	—	
	NH 417	均整唐草文	2トレンチ　1号灰層	—	5.2	0.7	0.8	0.5	0.55	—	—	昭和58年度調査、写真図版41-9
	NH 418	唐草文	土器だまり	—	4.4	1.4	1.2	0.7	0.8		—	写真図版42-7
	NH 419	唐草文	2トレンチ中央　暗灰褐色砂礫	—	3.6	1.1	0.7	0.6	0.5	—	—	昭和58年度調査、写真図版41-26
	NH 420	唐草文	2トレンチ　1号灰層	—	—	—	0.9	—	0.8	—	—	昭和58年度調査
	NH 421	唐草文	2トレンチ　1号灰層	—	—	—	0.7	—	0.6	—	—	昭和58年度調査、写真図版42-5
	NH 422	唐草文	2トレンチ　1号灰層	—	—	—	—	—	—	—	—	昭和58年度調査、写真図版42-6
	NH 423	均整唐草文		—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存
	NH 424	均整唐草文		—	—	—	—	—	—	—	—	拓本のみ現存

第７章　昭和57年度　第７－４次調査（池ノ下支群）の成果

第１節　調査区の設定と基本層序

（１）調査区の設定（図89）

池ノ下支群では試掘調査の結果、釜ノ口谷とその南側段丘面との傾斜面中位の圃場において東西約30mの範囲で灰層を検出した。現状保存が困難な部分、東西約20m、南北10mの約200㎡の調査を実施した。

また、位置は不明だが、「Aトレンチ」を設定している。

（２）基本層序（図90）

土層断面図は、原図に注記が無く確定はできないが、池ノ下支群と推定されるものを次頁に示した。同図では、標高113.20mで床土の上面となり、厚さ0.1m前後の床土を取り除くと厚さ約0.3～0.5mで灰層・焼土層が重なり合って堆積している。標高112.70～113.15mで基盤層上面となる。

設定位置不明のAトレンチでは、圃場整備前地表面は標高114.60mで、盛土・耕土層が0.3mほど堆積している。それを取り除くと厚さ0.1m前後の純灰層が堆積している。その下層には深さ0.3m前後の落込みが基盤層を掘り込んで存在する。標高113.90～114.20mで基盤層上面となる。土層断面図は掲載していない。

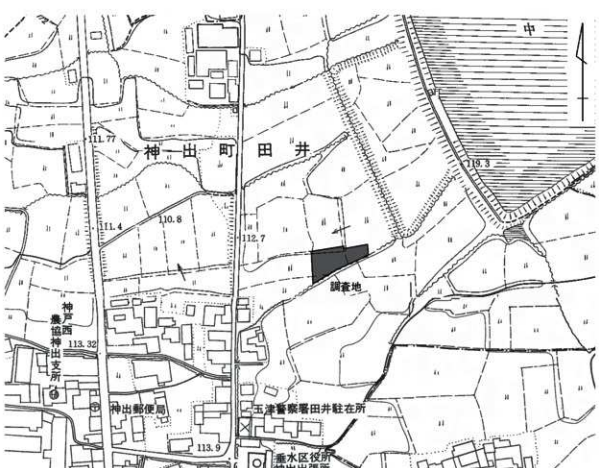


図89　池ノ下支群　トレンチ配置図（S=1：3,000）

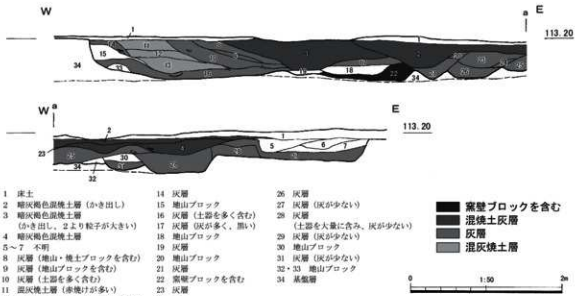


図90　池ノ下支群（推定）　土層断面図

第２節　調査成果

３基の窯跡とその灰原、Ａトレンチにおいて落込みを検出した。窯跡のうち１基は煙管状窯である。

『昭和57年度年報』（1985）では「２基の窯体」と報告しているが、『昭和57年度年報』（1984）では「２基の窯体、キセル窯」とされており、後者が正しい。遺構名対応表は表11の通りである。遺構の配置図がなく、正確な位置が不明のため、名称は年報に準じた。

Ａトレンチでは、南北幅３m以上、東西幅3.7m以上の落込みを検出したと考えられる。南北東側３方向の立ち上がりは調査区外に広がり規模は不明である。落込みの上層には結灰層が堆積し、落込み埋土中にも混灰焼土層が混じるが、窯跡との関連は不明である。遺物は多量に出土しており、土師器坏・皿、須恵器鉢・埦・甕がある。遺構平面図は掲載していない。

表11　池ノ下支群　遺構名対応表

本　書	年報（1984）	年報（1985）	未報告	備　考
１号窯	—	１号窯		調査区西側？
２号窯	２号窯（写真）	２号窯		調査区東側？
３号窯	３号窯（写真）	—		煙管状窯、切り取り保存
Ａトレンチ	—	—	Ａトレンチ	位置不明

（１）１号窯（図91、92）

１号窯は、調査区西側に位置すると考えられる（遺構配置図がないため、正確な位置は不明である）。遺存状態が非常に悪く、燃焼部の床面をわずかに残す程度である。現存長2.1m、最大幅1.3m、最大高0.15m、床面傾斜は約15度を測る。焚口は北を向く。

土器は、須恵器鉢・埦・皿が出土している。図示したものは周辺の灰原から出土したものが主と考えられる。図92－１～３は須恵器皿である。１・２は体部が内湾する。３は底部粘土板の上から体部が直線的に開く。図92－４は須恵器埦である。図92－５は須恵器鉢の口縁部である。口縁端部は外側につまみ出すように突出する。

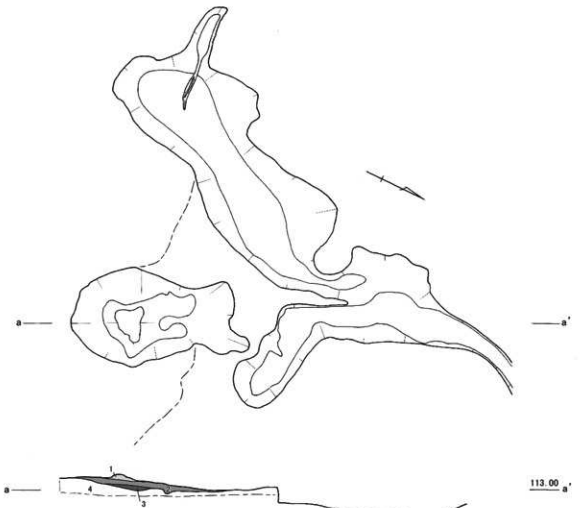


図91　池ノ下支群　1号窯平面・断面図

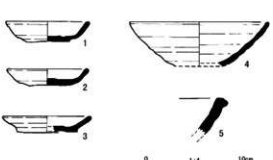


図92　池ノ下支群　1号窯灰原出土土器

（2）2号窯（図93、94）

2号窯は、調査区東側に位置すると考えられるが、1号窯同様、正確な位置は不明である。遺存状態は悪いが、燃焼部、焼成部の一部が残存する。現存長2.8m、最大幅1.3m、最大高0.2mを測り、焚口は北を向く。焼成部床面には、遺物が残存している。ただし、遺物取り上げ時の記録には、床面と灰原の区別がなく、床面の遺物を抽出することはできない。池ノ下支群の遺物の多くは、この窯跡周辺の灰原から出土している。

土器は土師器坏、須恵器鉢・埦・皿・甕が出土している。1号窯同様、図示したものは周辺の灰原から出土したものが主と考えられる。図94－6・9～14は須恵器鉢である。6は片口を有する。口縁端部はわずかに内外に肥厚する。9は口縁部の小片である。口縁端部でくの字状に内側に屈曲する。内外面ともに粘土紐の痕跡を強調するような調整が施されている。特に外面はその痕跡が顕著である。10は片口を有する小型の鉢である。口縁端部は外側に肥厚する。11は口縁端部を内側に、12は斜め上方に肥厚させる。14は口縁端部を外側につまみ出す。図94－7は須恵器皿である。全体に丸みを帯びる。図94－8は須恵器埦である。口縁部から底部まで残存しているが、破片が小さく、全形を復元できない。

（3）3号窯（図95、96）

前述した2基が窖窯であるのに対して、3号窯は煙管状窯である。詳細な検出位置は不明であるが、1・2号窯と並んで出土したと考えられる。

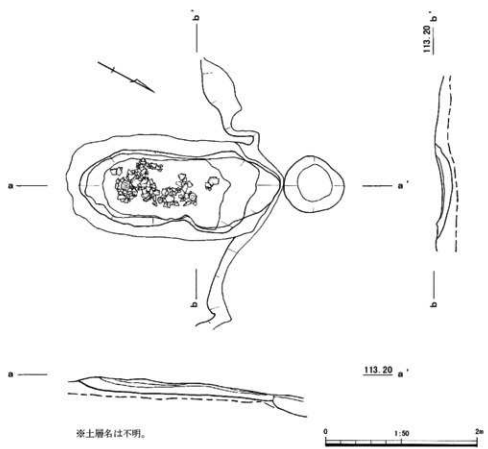


図93　池ノ下支群　2号窯平面・断面図

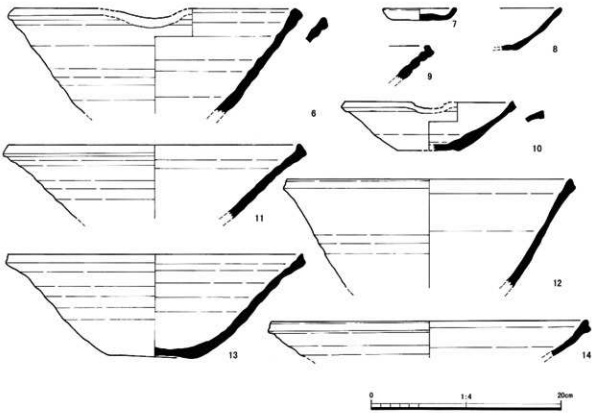


図94　池ノ下支群　２号窯灰原出土土器

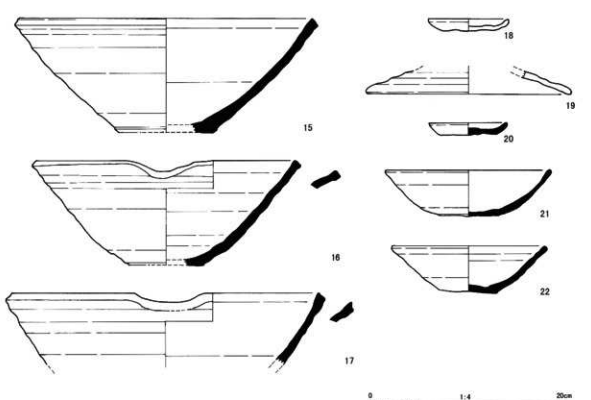


図95　池ノ下支群　３号窯灰原出土土器

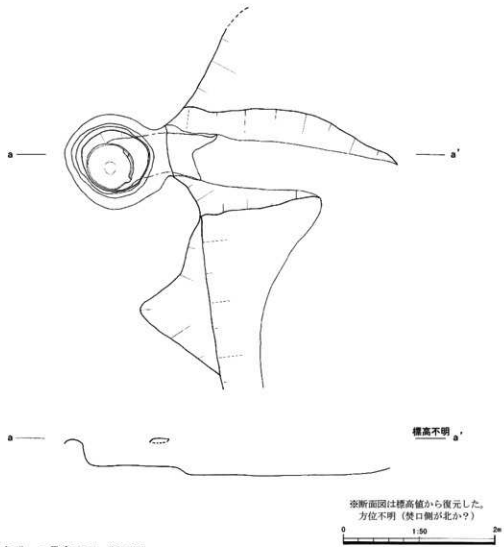


図96　池ノ下支群　3号窯平面・断面図

現存長2.1m、最大幅1.25m、最大高0.3mを測る。『昭和57年度文化財年報』(1984) に掲載された写真によると、焚口は北を向くとあるが、正確な方位は不明である。耕土直下にあり、工事により損壊される恐れがあったため、切り取り保存する措置を講じた。

土器は土師器坏・皿・托・鍋、須恵器鉢・埦・皿が出土している。1・2号窯同様、図示したものは周辺の灰原から出土したものが主と考えられる。遺構平面図や写真によると、窯跡内から完形の須恵器片口鉢を含む土器が数点出土しているが、該当する土器は不明である。図95－15～17は須恵器鉢である。15は体部外面と口縁部端面が直角をなし、口縁部はほとんど拡張しない。16は片口を有し、口縁端部を外側にわずかにつまみ出すように肥厚する。17は片口を有し、口縁端部が外側に肥厚する。図95－18は土師器皿である。図95－19は高坏の脚部である。図95－20は須恵器皿である。図95－21・22は須恵器埦である。21は体部が内湾して立ち上がる。22は体部が直線的に開く。

（4）軒瓦

池ノ下支群から出土した軒瓦として、軒丸瓦10点、軒平瓦5点を図示した。表13に瓦ごとの出土地点について記載している。一部、出土地不明を除いてすべてAトレンチ出土である。

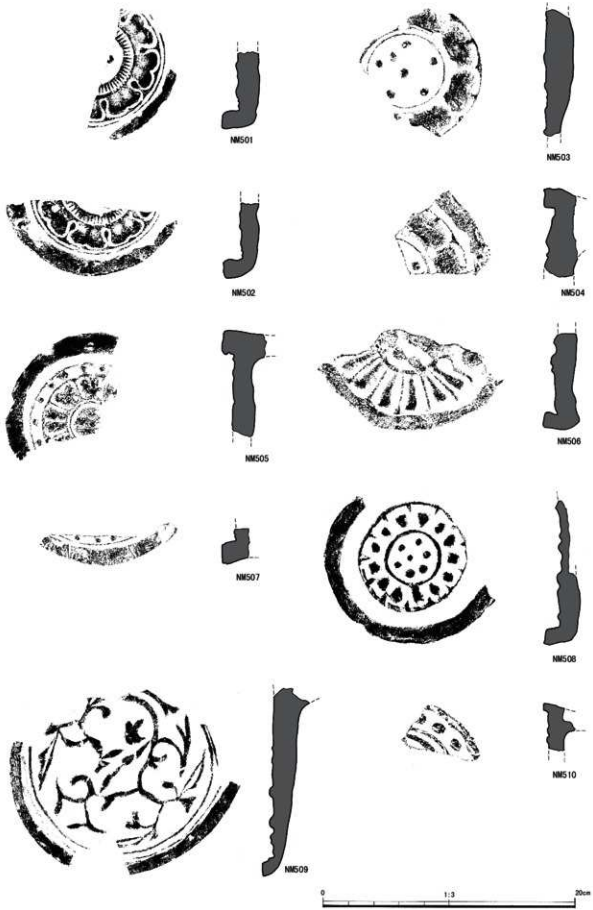


図97　池ノ下支群出土軒丸瓦

①軒丸瓦（図97）

NM501・502は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房に蓮子を配し、周囲には雄蕊帯が巡る。蓮弁は先端が内側に窪んでおり、ハートに近い形をしている。各蓮弁の形に沿って縁取りがされており、蓮弁間には水滴状の形が表現されている。蓮弁の外周には圏線が一条巡っている。

NM503・504は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋５の蓮子が配置され、その外周に圏線が一条巡る。蓮弁は先端が尖った表現がされている。蓮弁の形に沿って圏線が巡り、間弁状の表現が成されている。

NM505は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房には蓮子はなく、丸く盛り上げた表現となっている。蓮弁には子葉はなく、先端を窪ませた形で表現する。各蓮弁は区画線で囲まれる。外区には珠文帯が巡り、外側に圏線が一条巡る。堂ノ前支群で同意匠の瓦が出土している。

NM506は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房に蓮子が配され、周囲には圏線が一条巡る。笵が荒れていたためか、蓮子同士がつながっている。蓮弁は細長い盛り上がりで表現されており、蓮弁ごとに凸線で区切られている。ところどころに間弁状の表現が成される。

NM507は外区に珠文帯が巡り、外側に圏線が一条巡る。

NM508は単弁十三葉蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋６の蓮子が配置され、太めの圏線が一条巡る。蓮弁は丸く盛り上げた表現であり、やや抽象化されている。外側に圏線が一条巡り、間弁状の表現が伴っている。

NM509は唐草文軒丸瓦である。やや大型の軒丸瓦で、唐草文の周囲に圏線が一条巡る。

NM510は巴文軒丸瓦と推測される。左巻きの巴文の周囲には圏線が一条巡り、外区には珠文帯が巡る。珠文は大粒である。

②軒平瓦（図98）

NH501は半截花文軒平瓦である。瓦当面には下外区にのみ珠文帯が巡る。また顎面には、２条の凸帯の間に半截花文がヘラ描きで表現されている。いわゆる「顎面施文」軒平瓦である。瓦当貼付ａ技法によって瓦当を成形している。田井裏支群で同意匠の瓦が出土している。

NH502・503は「四天王寺」銘軒平瓦である。瓦当面が完全に残った資料は出土していないが、四天王寺出土の同笵瓦より「(四天）王寺瓦　（長久）年中」という銘文が表されていると考えられる。NH503は包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NH504は偏行唐草文軒平瓦である。細い凸線で左から右へと唐草が展開する。かなり簡略化した文様となっている。瓦当端部は丸く収めており、脇区が欠落している。包み込みａ技法によって瓦当を成形している。

NH505は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はＣ字背向で、上側の山でつながっている。

表12　池ノ下支群出土土器　　※（　）は復元数値

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
92	1	1号窯　灰原	須恵器皿	8.60	4.60	2.10	灰	灰	灰	良好	1㎜以下の白色粒まばら	写真図版 35-4
	2	1号窯　灰原	須恵器皿	(8.40)	4.50	(1.80)	灰	灰	灰	良好	1㎜以下の白色粒多い	
	3	1号窯　灰原	須恵器皿	(9.20)	(6.40)	(1.70)	淡灰	暗灰	暗灰	良好	1㎜以下の黒色粒多い	
	4	1号窯　灰原	須恵器椀	(14.60)	(5.60)		灰	灰	灰	良好	1㎜以下の白色粒まばら	
	5	1号窯　灰原	須恵器鉢				黄灰色自然軸	灰	灰	良好	1㎜以下の砂粒多い	
94	6	2号窯　灰原	須恵器片口鉢	(29.80)			灰	灰白	淡黄灰	良好	4㎜以下の小礫多い	
	7	2号窯　灰原	須恵器皿	(7.70)	(6.25)	(1.20)	黒～黄灰色自然軸	灰黒	灰黒	良好	礫良	
	8	2号窯　灰原	須恵器椀			(4.35)	青灰	青灰	青灰	良好	1㎜以下の黒色粒まばら	
	9	2号窯　灰原	須恵器鉢				黒色自然軸	灰暗	淡桃灰	良好	2㎜以下の砂粒多い、やや細い	

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
94	10	2号窯　灰原	須恵器 片口鉢	(17.80)	(6.50)	(5.15)	淡青灰	青灰	青灰	良好	6mm以下の小礫わずか	
	11	2号窯　灰原	須恵器 鉢	(30.80)			灰	青灰	灰	良好	7mm以下の小礫まばら	
	12	2号窯　灰原	須恵器 鉢	(30.10)			淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	5mm以下の小礫わずか	
	13	2号窯　灰原	須恵器 鉢	(31.00)	9.80	(10.90)	青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の黒色粒多い	両面：斑状の黒色釉痕あり
	14	2号窯　灰原	須恵器 鉢				淡灰	淡灰	淡灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
95	15	3号窯　灰原	須恵器 鉢	(30.00)	(10.00)	(12.10)	淡褐灰	淡赤褐	淡赤褐	不良	3mm以下の小礫・砂粒まばら	
	16	3号窯体内	須恵器 片口鉢	(27.40)	(9.90)	(11.00)	青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫まばら	
	17	3号窯　灰原	須恵器 片口鉢	(32.60)			灰白～暗灰	赤灰	赤灰	良好	3mm以下の砂粒多い	写真図版36-11
	18	3号窯体内	土師器 皿	8.50	5.60	1.35	明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化、不良	1mm以下の砂粒まばら	
	19	3号窯体内	土師器 高坏脚部		(21.80)		明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化、不良	2mm以下の砂粒多い（石英）	
	20	3号窯体内	須恵器 皿	8.30	5.40	1.30	灰	灰	灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	写真図版35-9
	21	3号窯体内	須恵器 椀	(17.50)	(8.20)	(4.85)	灰	灰	灰	良好	4mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	
	22	3号窯体内	須恵器 椀	16.20	6.10	4.95	灰	灰	灰	良好	5mm以下の小礫・砂粒多い	写真図版34-13

表13　池ノ下支群出土軒瓦

軒丸瓦

※（　）は復元数値

図版	番号	文様	出土地	瓦当径（cm）	瓦当厚（cm）	外区			内区			備考
						外縁幅（cm）	外縁高（cm）	内縁幅（cm）	中房径（cm）	蓮子	弁数	
97	NM501	複弁蓮華文	Aトレンチ	—	2.8	1.6	1.4	—	—	あり	8？	写真図版37-19
	NM502	複弁蓮華文	Aトレンチ	—	2.8	1.65	1.5	—	—	—	8？	
	NM503	単弁蓮華文	Aトレンチ	—	—	—	—	—	6.3	1+5	8？	写真図版37-11
	NM504	単弁蓮華文		—	—	1.55	0.9	—	—	あり	—	
	NM505	複弁蓮華文	Aトレンチ	—	—	2.0	1.0	1.2	(3.4)	1+3～	—	写真図版37-22
	NM506	単弁蓮華文	Aトレンチ	—	2.8	1.2	1.1	—	(4.2)	あり	—	写真図版37-5
	NM507	不明		—	2.1	1.4	1.1	—	—	—	—	
	NM508	単弁蓮華文	Aトレンチ	13.0	2.9	1.5	1.5	—	3.8	1+6	13	写真図版37-8
	NM509	唐草文	Aトレンチ	—	1.5	1.6	1.0	—	なし	—	—	写真図版37-9
	NM510	巴文	Aトレンチ	—	—	0.7	0.4	1.15	—	—	—	左巻きか

軒平瓦

図版	番号	文様	出土地区	瓦当幅（cm）	瓦当厚（cm）	外区				脇区幅（cm）	顎深（cm）	備考
						上外縁厚（cm）	下外縁厚（cm）	上外縁高（cm）	下外縁高（cm）			
98	NH501	半截花文	Aトレンチ	—	5.0	0.7	0.7	0.2	0.3	—	—	顎面施文（ヘラ描き）、写真図版40-5
	NH502	銘文	Aトレンチ	—	4.6	0.5	0.6	0.2	0.15	0.7	—	『昭和57年度年報』fig.34-5
	NH503	銘文		—	(4.7)	0.55	0.7	0.2	0.3	0.9	—	写真図版40-16
	NH504	偏行宝相華唐草文		—	3.6	0.5	0.65	0.2	0.3	なし	—	写真図版41-23
	NH505	均整唐草文	Aトレンチ	—	5.6	0.75	0.95	0.55	0.65	—	—	

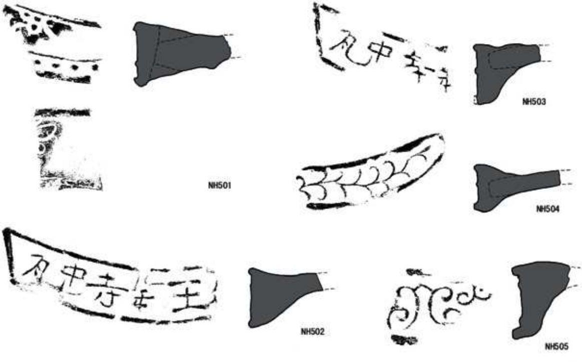


図98　池ノ下支群出土軒平瓦

第８章　昭和57年度　第７－１次調査（南下地区）の成果

第１節　調査区の設定（図99）

南下地区における試掘調査の結果、東西80m、南北40mの範囲にわたって、柱穴、溝、土坑と、その上部に堆積する遺物包含層を確認した。この地区は池ノ下支群の南東約500mの段丘頂部付近に位置し、池ノ下支群の窯を築いた工人集団の集落跡と考えられた。そのため、圃場面については計画変更し、現状保存を図った。しかし、排水路の計画変更は困難であったため、この部分について調査を実施した。

トレンチは幅３mとし、南北方向の１トレンチ（40m）と東西方向の２トレンチ（30m）及び２トレンチの南側に南北方向の３トレンチ（60m）の計３本を設定した。

各トレンチの土層断面図は確認できず、土層の堆積状況は不明である。

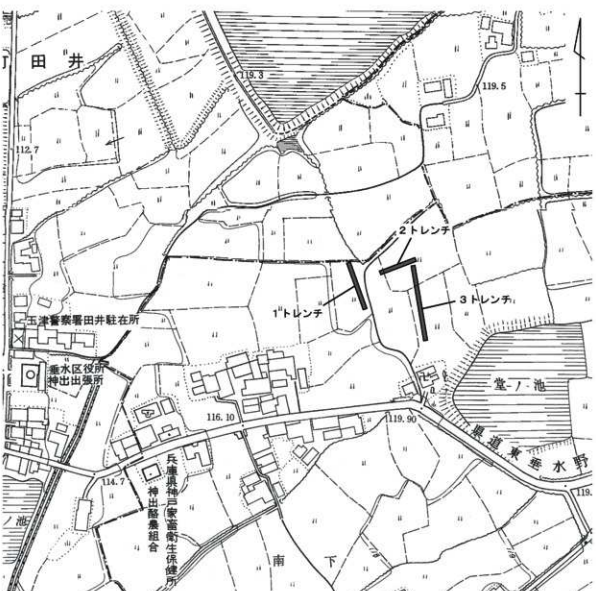


図99　南下地区　トレンチ配置図（S=1：3,000）

第２節　調査成果

（１）調査区概要（図100、101）

１トレンチでは溝２条、土坑４基を検出した。溝内からは多数の須恵器、瓦、青磁、白磁が出土した。土坑はすべて隅丸方形で、近接して並んでいる。『昭和57年度年報』(1985) では特に記述はないが、溝内にも土坑を検出しており、これらの土坑は粘土採掘坑の可能性がある。土器の掲載は見送った。

２トレンチは一部で遺物包含層がわずかに認められる他、遺構は認められなかった。

３トレンチでは柱穴、溝、土坑を検出した。柱穴は規則的に並び、建物を構成すると考えられるが、トレンチ外に延びるため、規模は不明である。

（２）軒瓦

南下地区から出土した軒瓦として軒丸瓦16点、軒平瓦10点を図示した。出土地点は表14の通りである。一部を除きすべて１トレンチ出土であり、多くはＳＤ01から出土している。

①軒丸瓦（図102、103）

NM601～608は左巻き三巴文軒丸瓦である。いずれも、巴の断面は扁平な台形を呈している。NM601・602は巴文の周縁に大粒でやや楕円形を呈する珠文帯が密に並ぶ。NM603・604は互当面の直径が12cm程と、やや小振りである。巴の尾が長く延び、半周以上回っている。NM605・606は巴の尾が長く延び、隣り合う巴とつながっている。

NM609は右巻き三巴文軒丸瓦である。巴の断面は扁平な台形を呈している。

NM610は左巻き三巴文軒丸瓦である。それぞれの巴の頭部がつながっており、頭部はあまり太くならずに尾が延びている。

NM611は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は13葉もしくは14葉と考えられる。中房には左巻きの巴文が配され、蓮弁はU字形の凸線で表現される。周縁には圏線が一条巡る。

NM612は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋８の蓮子が配され、その周囲を圏線が一条巡る。蓮弁は凸線の縁取りで表現されており、隣り合う蓮弁はつながっている。子葉は３本の凸線で表現される。周縁には圏線が一条巡る。

NM613は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋８の小粒な蓮子が配され、周囲には蓮弁と一体となった圏線が一条巡る。蓮弁は凸線の縁取りで表現されており、内側にはわずかに膨らみが見られる。周縁には圏線が一条巡る。

NM614・615は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は高く盛り上がっており、大粒の扁平な蓮子が配される。周囲には雄蕊帯が巡る。蓮弁は凸線の縁取りで表現されており、内側に珠文状の盛り上がりが見られる。

NM616は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房は低く下がっており、大粒の蓮子が配されている。蓮弁は区画線で囲まれており、簡略化した表現となっている。

②軒平瓦（図104）

NH601～604は均整唐草文軒平瓦である。中心部分にC字下向を２個配し、左右には蕨手が３本展開する。周縁には圏線が巡る。NH602は右端が切り縮められている。NH601は瓦当貼付ｂ技法、NH604は包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NH605は均整唐草文軒平瓦である。NH601～604と同意匠であるが、やや簡略化が見られ、後出するものであると考えられる。右端は切り縮められており、中心飾間の凸線が２本である。

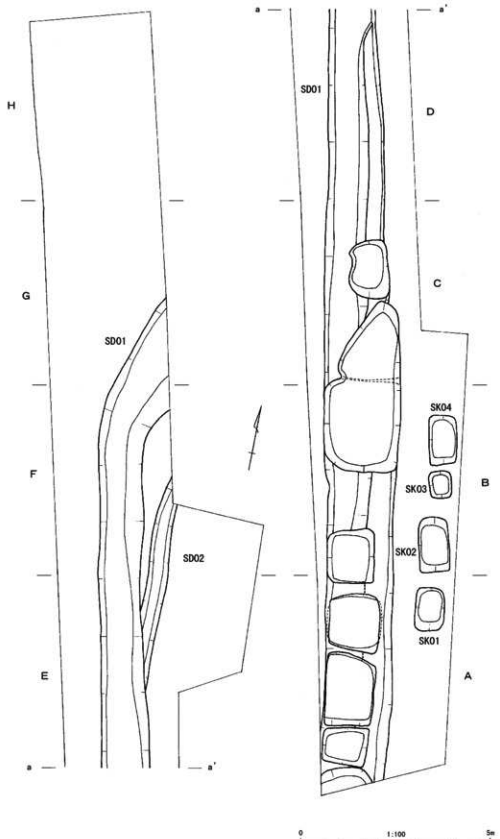
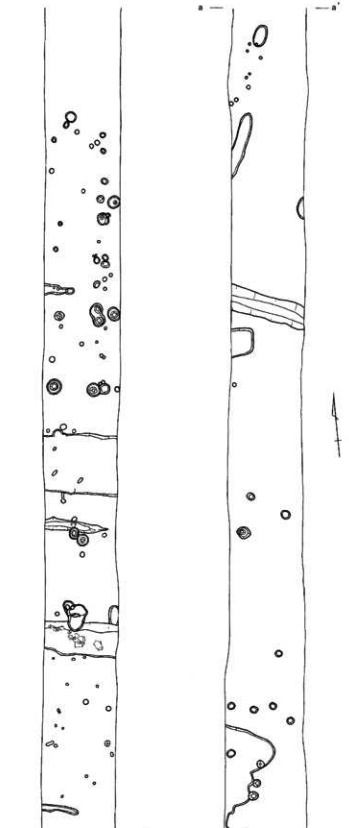


図100　南下地区　１トレンチ遺構平面図



※方位はおおよそである。

0 1:100 2m

図101　南下地区　３トレンチ遺構平面図

図102　南下地区出土軒丸瓦①

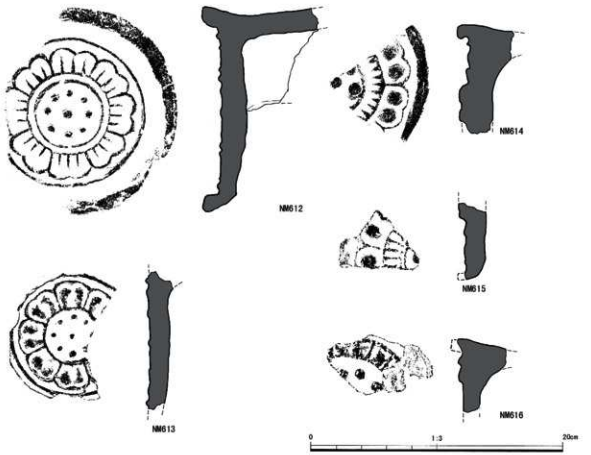


図103　南下地区出土軒丸瓦②

表14　南下地区出土軒瓦

軒丸瓦

※（ ）は復元数値

図版	番号	文様	出土地区	瓦当径（cm）	瓦当厚（cm）	外区				内区			備考
						外縁幅（cm）	外縁高（cm）	内縁幅（cm）	中房径（cm）	蓮子	弁数		
102	NM 001	左巻き三巴文	1トレンチ－B　SD 01	－	2.4	1.0	0.6	1.5	－	－	－		
	NM 002	左巻き三巴文	1トレンチ－B	－	2.5	1.4	0.7	1.5	－	－	－		
	NM 003	左巻き三巴文	1トレンチ－F・G　SD 01	11.8	2.0	1.65	1.2	－	－	－	－		
	NM 004	左巻き三巴文	1トレンチ－D	11.8	2.3	1.7	1.1	－	－	－	－		写真図版 38-13
	NM 005	左巻き三巴文	1トレンチ－B　SD 01	(12.7)	2.5	1.6	0.95	－	－	－	－		写真図版 38-14
	NM 006	左巻き三巴文	1トレンチ－B　SD 01	－	2.0	1.7	0.8	－	－	－	－		
	NM 007	左巻き三巴文	1トレンチ－G　SD 01	－	－	1.9	0.7	－	－	－	－		
	NM 008	左巻き三巴文	1トレンチ－E　SD 01	－	－	－	－	－	－	－	－		
	NM 009	右巻き三巴文	1トレンチ－A　SD 01	－	－	－	－	－	－	－	－		
	NM 010	左巻き三巴文	1トレンチ－A　SD 01	－	－	－	－	－	－	－	－		
	NM 011	単弁蓮華文	1トレンチ－B	－	2.1	1.2	0.5	－	(4.6)	なし	14か		写真図版 37-13
103	NM 012	複弁蓮華文	3トレンチ	16.1	2.6	1.4	1.3	－	5.15	1+8	8		
	NM 013	複弁蓮華文	1トレンチ－B	－	－	－	－	－	4.1	1+8	8		写真図版 38-3
	NM 014	複弁蓮華文	1トレンチ－B　SD 01	－	－	1.2	0.9	－	－	あり	－		写真図版 38-4
	NM 015	複弁蓮華文	1トレンチ－B	－	－	－	－	－	－	あり	－		
	NM 016	単弁蓮華文	1トレンチ－A　SD 01	－	－	－	－	－	－	あり	－		写真図版 37-3

軒平瓦

図版	番号	文様	出土地区	瓦当幅（cm）	瓦当厚（cm）	外区				顎部幅（cm）	顎厚（cm）	備考
						上外縁厚（cm）	下外縁厚（cm）	上外縁高（cm）	下外縁高（cm）			
104	NH 001	均整唐草文	1トレンチ－B	－	4.6	0.7	0.7	0.5	0.4	0.65	2.1	写真図版 41-14
	NH 002	均整唐草文		－	4.6	1.1	0.95	0.4	0.6	1.3	－	写真図版 41-13
	NH 003	均整唐草文	1トレンチ－C	－	4.5	1.0	0.7	0.35	0.4	－	－	
	NH 004	均整唐草文	1トレンチ－B　SD 01	－	(4.4)	－	0.8	－	0.45	－	－	
	NH 005	均整唐草文	1トレンチ－C	20.0	4.1	0.7	0.7	0.4	0.6	0.8	2.7	『昭和 57 年度年報』Fig. 34-9，写真図版 41-16
	NH 006	均整唐草文	1トレンチ－D	－	4.3	0.6	0.6	0.6	0.9	0.65	－	写真図版 40-26
	NH 007	半截花文	1トレンチ－B　SD 01	21.0	4.6	0.8	0.9	0.5	0.8	0.9	2.3	写真図版 40-7
	NH 008	半截花文	1トレンチ－B　SD 01	－	5.1	1.1	0.95	0.6	0.6	1.4	2.2	
	NH 009	半截花文	1トレンチ－B　SD 01	－	4.7	1.0	0.8	0.6	0.7	1.1	2.5	
	NH 010	均整唐草文	1トレンチ－C	－	4.0	0.8	0.8	0.5	0.4	－	－	

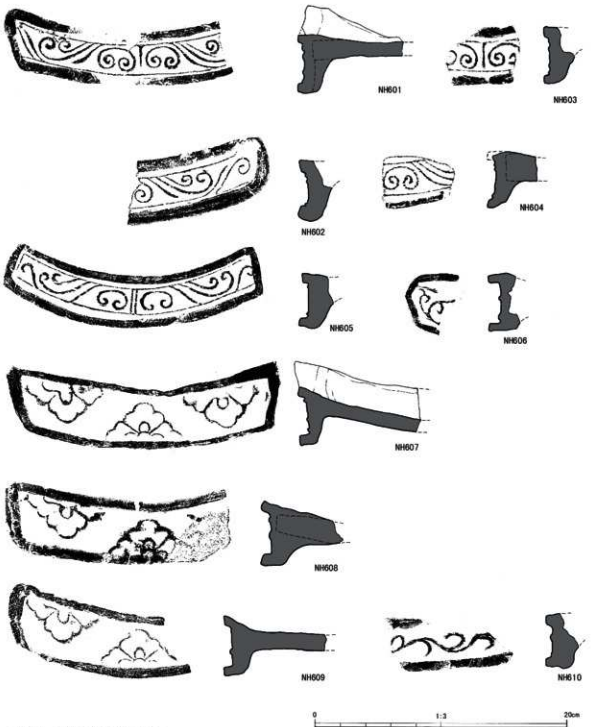


図104　南下地区出土軒平瓦

NH606は唐草文軒平瓦である。唐草文の上下には圏線が巡る。左端は切り縮められており、脇区に圏線はない。神出窯跡群・垣内支群や明石市林崎三本松瓦窯で同意匠が出土しており、それらからC字背向中心飾を持つと考えられる。

NH607～609は半截花文軒平瓦である。凸線で表現された半截花文が上下交互に３個配置される。NH608は包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NH610は均整唐草文軒平瓦である。C字上向中心飾を持つと考えられる。やや簡略化した文様である。

第９章　昭和58年度　第８次調査（老ノ口支群（1983））の成果

第１節　調査区の設定と基本層序

（１）調査区の設定（図105）

老ノ口支群（1983）では試掘調査で灰原を確認した地点に、11×22mの１トレンチを設定した。また１トレンチの北に並行して、東西22mの２トレンチを設定した。その西端北側に南北８mの３トレンチ、東端北側に長さ10mの４トレンチを設定した。当時の記録から５トレンチも設定されていたことがわかるが、位置は不明である。平面図が確認できたのは１トレンチのみで、２～５トレンチは土層断面図と写真で存在が確認できるのみである。そのため、下記のトレンチ配置図は写真などから推定復元したものである。

（２）基本層序（図106）

１トレンチの圃場整備前地表面は標高約110.40m～110.50mで、比較的平坦な場所に位置する。圃場整備前地表面から0.2～0.4mは耕作土であり、それを取り除くと灰層が検出された。灰層は0.2～0.6mの厚さで堆積しており、その下は標高約109.90～110.30mで基盤層となる。

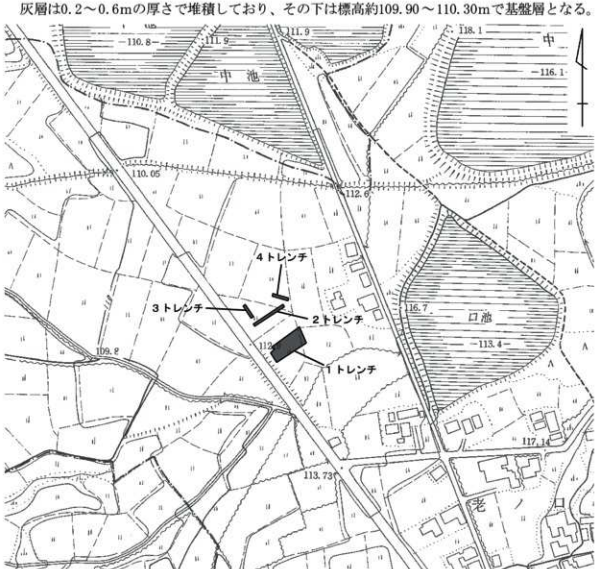
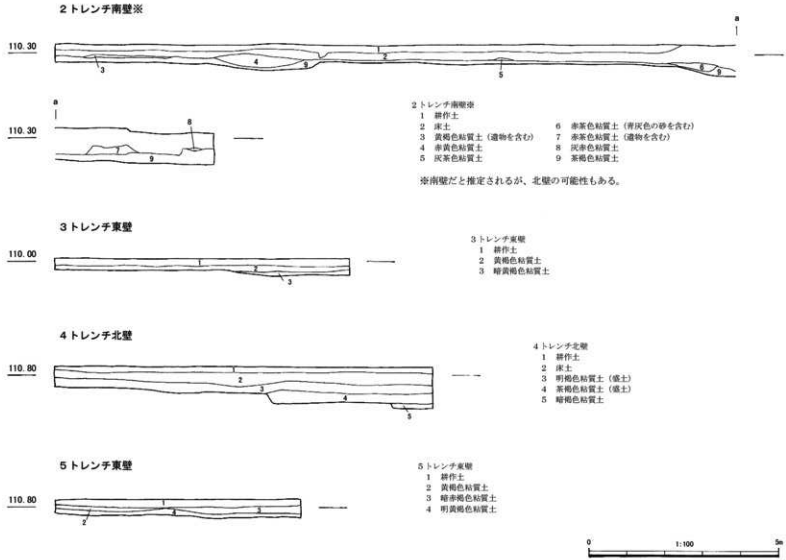


図105　老ノ口支群（1983）　トレンチ配置図（S＝1：3,000；２～５トレンチは推定復元）

図106　老ノ口支群（1983）2～5トレンチ土層断面図



第２節　調査成果（図107）

１トレンチにおいて２基の窯跡とそれに伴う灰原、不明遺構１基を検出した。窯跡は２基とも、残存状況が極めて悪い。

２トレンチでは、土器を含む落込み２基（SX02・SX03）を検出した。

SX02は２トレンチ西端で確認しており、西側に落ちる落込みである。西側の立ち上がりと南北端は調査区外にあり、規模は不明である。埋土中に焼土を含み、付近に窯跡が存在した可能性も考えられる。２トレンチ付近に窯跡が存在した場合、この調査地が位置する谷の傾斜から、焚口は南を向いていると考えられ、灰原は１トレンチ北部に広がる可能性が高い。ただし、その周辺では灰原は確認されておらず、SX02は窯に関連する遺構ではあるが、窯跡ではないと考えられる。

SX03は２トレンチ中央で検出した落込みである。南側は調査区外に延びており、平面図も存在しないため規模は不明である。土器を多量に含むことは写真から確認できるが、遺構の性格は不明である。

２トレンチからは遺物が一定量出土しているが、遺構ごとに取上げられておらず、遺構の時期や性格は不明である。

３～５トレンチでは遺構・遺物は確認されていない。

他支群と窯番号の付与方法を統一するため、『昭和58年度年報』における当支群の調査概要とは窯番号を変更し、本書では東側から番号を付与する。『昭和58年度年報』との対応は表15の通りである。

また、昭和59年度に実施した９次調査（老ノ口地区（1984））で検出した窯跡２基は、８次調査（老ノ口支群（1983））で検出した窯跡と同じ谷に構築され、一連のものと考えられる。そのため、９次調査の窯跡も連続して窯番号を付す。９次調査については表18に掲載する。

表15　老ノ口支群（1983）遺構名対応表

本　書	年報	未報告	備　考
１トレンチ　１号窯	２号窯	—	
１トレンチ　２号窯	１号窯	—	
１トレンチ SX01	SX01	—	
１トレンチ 西部灰原	—	１tre ④	
２トレンチ SX02	—	２tre 西側落込み	焼土・土器を含む、図面なし
２トレンチ SX03	—	２tre 中央落込み	土器を含む、図面なし

（１）１号窯（『昭和58年度年報』「２号窯」）（図108、109）

１号窯は１トレンチ東端で検出された窯跡である。残存長2.75m、最大幅1.6m、現存高0.15mを測る。残存状況が悪く、焼成部下半、燃焼部および焚口を検出したのみである。床面は２面検出されたが、第１床面は窯体の途中で段を持っているのに対し、第２床面では段を設けず補修されている。この段は釜ノ口支群２号窯で検出したものと同様である。段の下の地点から焚口に向けて排水溝が設けられており、燃焼部と焼成部を画する段と考えられる。前庭部は焚口と同一面で緩やかに傾斜している。焚口から南方に向けてさらに溝が延びるが、窯体内の溝とは位置がズレており、つながっていない。

土器は周辺の灰原から須恵器鉢・埦・甕もしくは壺・皿が出土している。図109－１・２は須恵器皿である。１は口縁部が外反する。図109－３は須恵器甕か壺の口縁部である。小片のため、器種を確定できない。図109－４～７は須恵器埦である。４は体部が直線的に立ち上がる。５は体部が内湾して立ち上がり、口縁部付近で外反する。６は底部と体部の境が明瞭である。

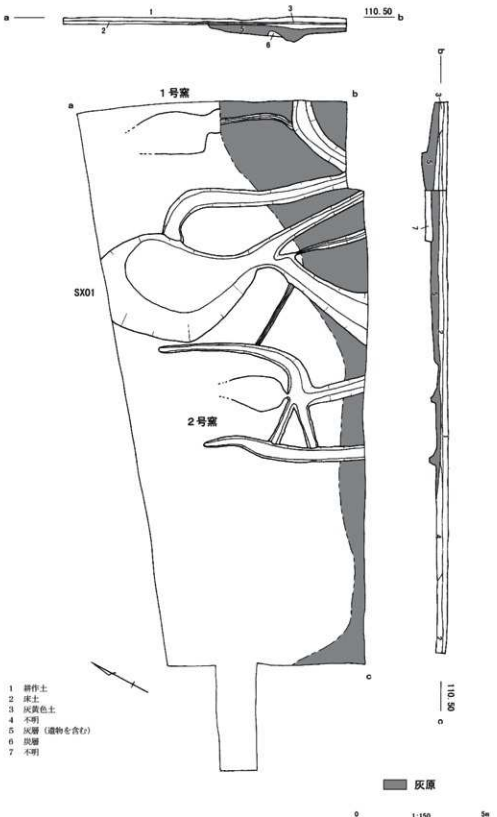


図107　老ノ口支群（1983）1トレンチ遺構平面・断面図

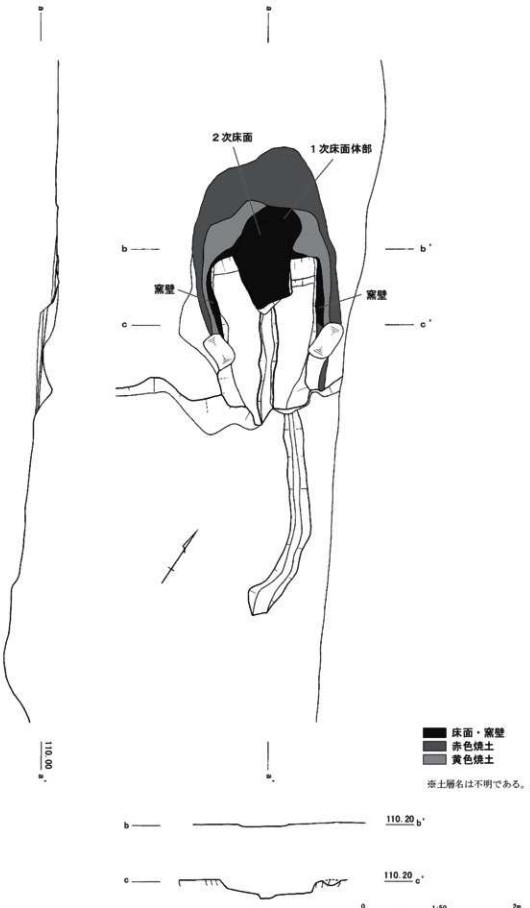


図108　老ノ口支群（1983）1号竈平面・断面図

7は体部が直線的に開く。図109－8～12は須恵器鉢である。9は片口を有するが、そのほとんどは欠損する。口縁端部は外側に肥厚する。10も片口を有し、口縁部は外側にわずかにつまむように突出する。11は口縁端部が外側に大きく拡張し、内面はわずかに凹む。片口を有する。12は口縁端部を内外にわずかに肥厚させる。

（2）2号窯（『昭和58年度年報』「1号窯」）（図110～112）

2号窯は1トレンチ中央で検出した。規模は残存長1.2m、最大幅0.9m、現存高0.1mを測る。1号窯同様、非常に残存状況が悪く、焼成部下半、燃焼部、および焚口を検出したのみである。床面は、燃焼部の一部のみが残存しており、窯体補修の痕跡は認められない。焚口は前庭部に設けられた排水溝に取りついており、前庭部作業面より低い。また、排水溝は前庭部から南に伸びているものと、窯体両側部に続くものがあり、釜ノ口支群2・3号窯と同じ形態を示す。

土器は、窯跡内から土師器皿、須恵器鉢・埦・皿が出土している。図111－13は須恵器皿である。底部を欠損する。図111－14は須恵器埦である。体部と底部の境が明瞭で、体部は直線的に開く。図111－15～18は須恵器鉢である。いずれも小片である。

周辺の灰原出土の資料として、須恵器鉢・埦・皿を図示した。図112－19・20は須恵器皿である。19は体部が内湾して立ち上がり、口縁部近くで外反する。20は底部と体部の境が明瞭で、体部は内湾する。図112－21・22は須恵器埦である。21は体部外面で粘土紐を強調

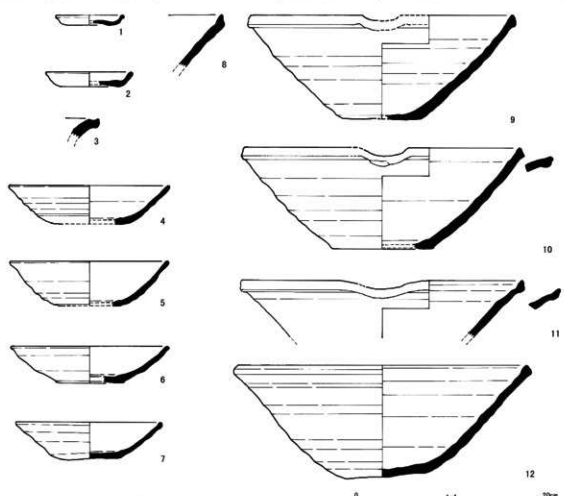


図109　老ノ口支群（1983）1号窯灰原出土土器

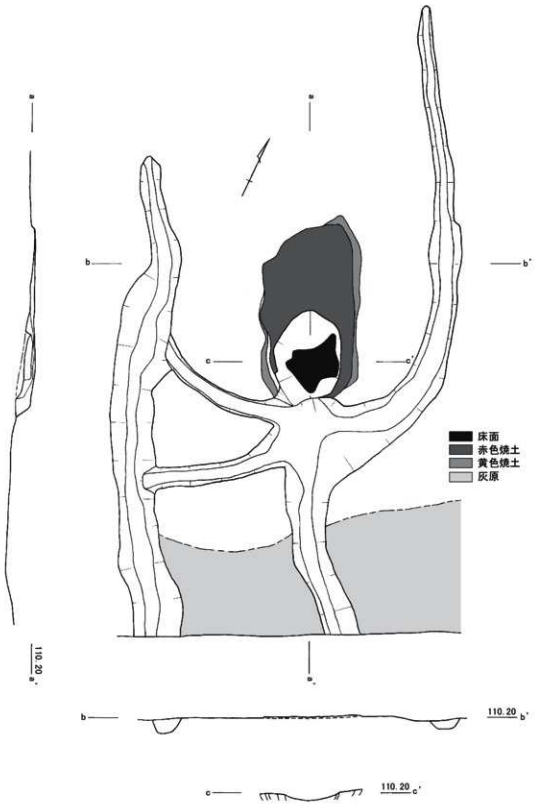


図110　老ノ口支群（1983）２号窯平面・断面図

するように調整が施されている。22は体部と底部の境が不明瞭で全体に丸みを帯びる。図112－23～29は須恵器鉢である。23は片口を有し、口縁端部が内外に拡張する。24は口縁端部を上方につまみ上げるように屈曲させる。25は口縁端部を外側につまみ出すように突出させる。片口を有する。26は上方に拡張した口縁部を持つ。27は口縁端部が下方に垂れ下がるように拡張する。28は体部外面と口縁部端面が直角をなすが、端面が強いナデにより凹み、端部は内外に突出する。29は片口を有する。図112－30は須恵器甕である。口縁部のみ残存し、体部調整などは不明である。口縁端部は拡張しない。図112－31は土師器托の完形品である。大型で、底部に焼成前穿孔が見られる。

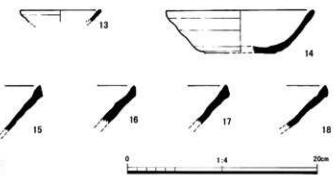


図111　老ノ口支群（1983）２号窯出土土器

（３）SX01・灰原

①SX01（図113）

SX01は１トレンチの１・２号窯の間に設けられており、長辺5.1×短辺3.75mの長方形を呈した土坑で、埋土から多量の須恵器と瓦が出土した。３本の溝が取りついているが、その性格は不明である。

土器は須恵器鉢・塊・皿が出土した。図113－32は須恵器皿である。図113－33～36は須恵器塊である。33は内湾して体部が立ち上がる。34は体部が直線的に立ち上がり、口径の割に器高が低い。歪みにより、口径が広がっている可能性がある。35は体部と底部の境が明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。図113－37～42は須恵器鉢である。37は口縁端部を外側にわずかに拡張する。38は内側にわずかに屈曲する丸みを帯びた口縁部を持つ。39は片口を有し、口縁端部をわずかに内側に肥厚させる。40は片口を有するが、ほとんど欠損している。41は体部外面と口縁部端面がなす角は鈍角で、端部を拡張しない。42は口縁端部を内外両方に拡張する。32・33・39はSX01出土だが、それ以外はSX01もしくは周辺の灰原の土器も含んでいる可能性がある。

②１トレンチ西部灰原（図114）

灰原は１トレンチの南側に広がる。調査区外に続いており、全体の範囲は確認できていない。また２号窯より西側に延びた部分では、窯跡近辺の灰原とは分けて遺物の取り上げをおこなっている。そのため西部灰原として、遺物を掲載する。土器は一定量出土しており、１トレンチより西側に別の窯跡が存在した可能性がある。

出土した土器は須恵器鉢・塊である。図114－43～47は須恵器鉢である。43は片口を有する。体部外面と口縁部端面が鈍角で、端部は拡張しない。44も片口を有する。口縁端部で外側に突出する。45は口縁端部を内外に肥厚させる。46は口縁部片で、端部で内側に屈曲する。47は口縁部片で、口縁端部以外は薄い器壁を持つ。口縁端部を外側につまみ出すように突出させる。図114－48は須恵器塊の底部である。輪高台を持つ。

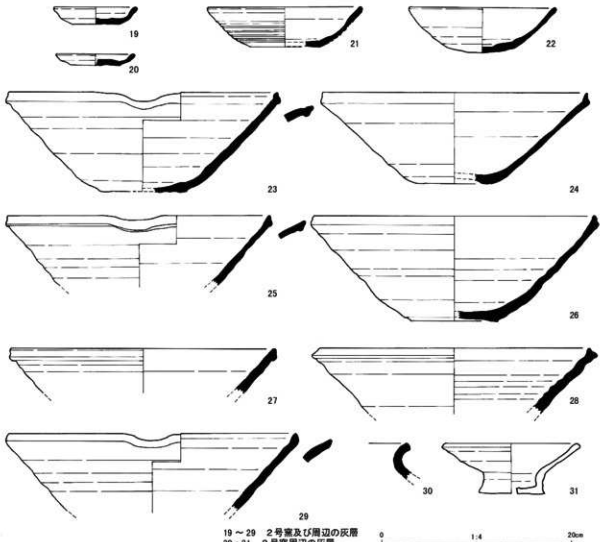


図112　老ノ口支群（1983）２号窯灰原出土土器

（４）軒瓦（図115、116）

老ノ口支群（1983）から出土した軒瓦として、軒丸瓦６点、軒平瓦24点を図示した。また、昭和57年度の試掘調査で出土した軒丸瓦１点も合わせて示した。出土地点は表17の通りである。

①軒丸瓦

NM701・702は三巴文軒丸瓦である。中房に左巻きの三巴文を配し、周囲に圏線を巡らせる。外区には珠文帯が巡る。珠文の数はいずれも13である。珠文の間隔にはバラつきがある。

NM703・704は形骸化した木瓜文と考えられる。中房は10本の凸線で木瓜文の中心を表現する。周縁は切れ目のない圏線となっている。外区に珠文帯が巡る。珠文の数は11である。

NM705は複弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁の間を凸線で区切る。

NM706は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は細長い盛り上がりで表現され、先端は丸く収める。蓮弁ごとに弁面の形に沿って凸線で区画される。

NM707は複弁蓮華文軒丸瓦である。昭和57年度におこなった試掘調査において出土した瓦だが、出土位置については不明である。中房の周縁には雄蕊帯が巡る。蓮弁は窪んだ表現と

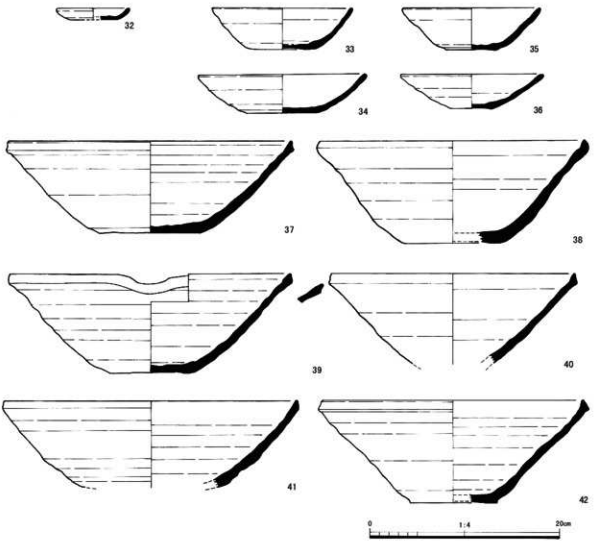


図113　老ノ口支群（1983）ＳＸ01出土土器

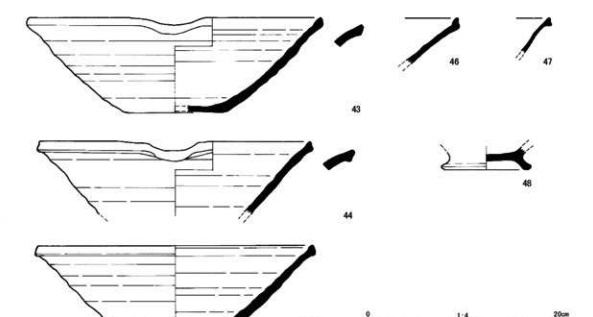


図114　老ノ口支群（1983）１トレンチ西部灰層出土土器

なっており、子葉が２つ突出する。外区には珠文帯が巡り、その内外に圏線が巡る。珠文は大粒で楕円形を呈している。顎面にはヘラケズリにより浅い段差を作り、そこに半截花文がヘラ描きで表現される。

②軒平瓦

NH701は均整唐草文軒平瓦である。樹状中心飾は下向の蕨手が左右に３本ずつ延びる。周縁には圏線が巡る。

NH702は均整唐草文軒平瓦である。Ｃ字下向が２個並んだ中心飾である。周縁には圏線が巡る。包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NH704・705は均整唐草文軒平瓦である。唐草は２転するが、最後は巻き込まずに終わる。中心飾はＣ字上向だと考えられる。NH704は包み込みａ技法によって瓦当を成形している。

NM706～710は均整唐草文軒平瓦である。Ｃ字上向の中心飾で、左右に唐草が３転する。先端は唐草があまり巻き込まずに、２手に分かれる。NH707と710は唐草の巻き具合が異なり、異笵であることがわかるが、NH706・708・709とそれぞれが同笵であるかどうかは不明である。NH706・707は包み込みｂ技法、NH709は瓦当貼付ｂ技法によって瓦当を成形している。

NM711～714は連珠文軒平瓦である。珠文が２つ並び、間に十字文が配置される。NH712・713は瓦当貼付ｂ技法によって瓦当を成形している。

NH715～724は均整唐草文軒平瓦である。五弁花中心飾であり、左右に２葉の唐草が１転展開する。NH715は文様が浅く、磨滅も著しいが、NH722と同文と考えられる。NH721・723・724は右端が切り縮められていると考えられる。NH721は脇区が上下外区よりも一段低くなっており、その脇区上に文様が続いている。NH724は磨滅が著しく、他の資料と同笵かは不明である。NH715～717・720は瓦当貼付ｂ技法、NH718は顎貼付技法によって瓦当を成形している。また提示資料以外にもう１点同意匠の軒平瓦が１トレンチから出土している。ただし、文様が浅く、ほとんど磨滅していることから、図示しなかった。

表16　老ノ口支群（1983）出土土器

※（　）は復元数値

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
109	1	1号窯　灰原	須恵器 皿	(7.20)	(4.60)	(1.05)	青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の黒色粒まばら	
	2	1号窯　灰原	須恵器 皿	(9.10)	(6.50)	(1.55)	暗青灰	暗灰	暗灰	良好	10mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	写真図版35-5
	3	1号窯　灰原	須恵器 蓋				明赤褐	明赤褐	明赤褐	不良	1mm以下の砂粒わずか	皿もしくは蓋である
	4	1号窯　灰原	須恵器 坏	(17.00)	(9.00)	(4.10)	青灰	灰	灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	5	1号窯　灰原	須恵器 坏	(16.70)	(6.90)	(4.70)	青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	6	1号窯　灰原	須恵器 坏	(16.40)	(7.20)	(3.85)	暗青灰	黒灰色 白色粒	暗青灰	良好	1mm以下の黒色粒多い	歪みにより口径開き気味か
	7	1号窯	須恵器 坏	(15.20)	(6.40)	(3.90)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2mm以下の白色粒多い	歪みにより口径開き気味か 底部に[illegible]
	8	1号窯　灰原	須恵器 鉢				淡灰	灰褐	灰褐	良好	2mm以下の白色粒多い	
	9	1号窯　灰原	須恵器 片口鉢	(27.80)	(8.40)	(11.00)	青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫まばら	
	10	1号窯　灰原	須恵器 片口鉢	(29.20)	(10.60)	(10.60)	明青灰	明青灰	明青灰	良好	5mm以下の黒色粒まばら	
	11	1号窯　灰原	須恵器 片口鉢	(28.70)			灰～青灰	灰～青灰	灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	12	1号窯　灰原	須恵器 鉢	(30.70)	(9.05)	(12.00)	青灰	青灰	青灰	良好	5mm以下の黒色粒多い	
111	13	2号窯体内	須恵器 皿	(8.40)			青灰	青灰	淡青灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	14	2号窯体内	須恵器 坏	(15.50)	(7.40)	(4.70)	青灰	青灰	青灰	良好	10mm以下の小礫・砂粒まばら	
	15	2号窯体内	須恵器 鉢				淡灰	淡灰	淡灰	やや不良	2mm以下の砂粒多い	
	16	2号窯体内	須恵器 鉢				灰褐	灰褐	褐灰	良好	1mm以下の黒色粒まばら	
	17	2号窯体内	須恵器 鉢				灰	灰	灰	良好	1mm以下の砂粒わずか	
	18	2号窯体内	須恵器 鉢				淡青灰～暗青灰	淡青灰～暗青灰	淡青灰～暗青灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
112	19	2号窯　灰原	須恵器 皿	(8.00)	4.80	1.65	灰	灰	灰	やや良好	3mm以下の小礫わずか	
	20	2号窯　灰原	須恵器 皿	(8.10)	(5.40)	(1.20)	青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の砂粒わずか	
	21	2号窯　灰原	須恵器 坏	(16.20)	(7.20)	(4.20)	暗青灰	暗青灰	青灰	良好	1mm以下の白色粒多い（石英）	
	22	2号窯　灰原	須恵器 坏	(15.60)	(6.20)	(4.60)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	23	2号窯　灰原	須恵器 片口鉢	(28.40)	(9.30)	(10.50)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5mm以下の小礫わずか	
	24	2号窯　灰原	須恵器 片口鉢	(28.00)	(7.80)	(9.60)	青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の黒色粒まばら	片口は残存部が少なく、図化できず

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
112	25	2号窯　灰原	須恵器片口鉢	(27.60)			灰～明橙褐	明赤褐	灰～明橙褐	良好	5mm以下の黒色粒多い	
	26	2号窯　灰原	須恵器鉢	(29.70)	9.20	12.10	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	7mm以下の小礫わずか	
	27	2号窯　灰原	須恵器鉢	(29.00)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	1m以下の黒色粒わずか	
	28	2号窯　灰原	須恵器鉢	(29.60)			暗青灰	灰褐	灰褐	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	29	2号窯　灰原	須恵器片口鉢	(30.30)			淡青灰	淡灰黄	淡灰黄	良好	1mm以下の白色粒多い	
	30	2号窯　灰原	須恵器甕				暗灰褐	暗灰褐	暗灰褐	不良	1mm以下の砂粒多い、やや粗い	
	31	2号窯　灰原	土師器托	(13.60)	6.90	5.35	明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化不良	2mm以下の砂粒多い	底部：焼成前穿孔、写真図版 36-14
113	32	SX01	須恵器皿	(7.60)	(6.00)	(1.20)	明青灰	明青灰	明青灰	良好	精良	
	33	SX01	須恵器椀	(14.80)	(7.60)	(4.40)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3mm以下の小礫わずか	歪みにより口径開き気味か
	34	SX01	須恵器椀	(17.80)	(7.40)	(4.00)	青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の砂粒多い	歪みにより口径開き気味か
	35	SX01	須恵器椀	(14.00)	(5.60)	(4.40)	青灰	青灰	青灰	良好	5mm以下の小礫まばら	
	36	SX01	須恵器椀	(15.00)	(4.40)	(3.60)	濃紫灰	濃紫灰	暗灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	37	SX01	須恵器鉢	(28.90)	(10.60)	(9.70)	青灰	青灰	青灰	良好	5mm以下の小礫わずか、1mm以下の白色粒多い	
	38	SX01	須恵器鉢	(28.00)	10.10	10.80	赤褐	赤褐	赤褐	不良	3mm以下の小礫・砂粒まばら（石英）	
	39	SX01	須恵器片口鉢	(29.60)	8.40	8.60	暗青灰	黒黄色自然釉	暗青灰	良好	1mm以下の砂粒わずか	
	40	SX01	須恵器片口鉢	(25.70)			黒灰色自然釉	淡黒灰	紫灰	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	41	SX01	須恵器鉢	(30.90)			褐灰	淡灰黄	淡灰黄	やや不良	2mm以下の砂粒まばら（黒色粒）	
	42	SX01	須恵器鉢	(27.60)	(9.20)	(10.60)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5mm以下の小礫わずか	
114	43	1トレンチ　西部灰原	須恵器片口鉢	(31.00)	(11.00)	(10.00)	青灰	青灰	青灰	良好	6mm以下の黒色粒まばら	
	44	1トレンチ　西部灰原	須恵器片口鉢	(26.60)			青灰	青灰	青灰	良好	5mm以下の黒色粒多い	
	45	1トレンチ　西部灰原	須恵器鉢	(29.20)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3mm以下の黒色粒まばら	
	46	1トレンチ　西部灰原	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の砂粒まばら	
	47	1トレンチ　西部灰原	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	48	1トレンチ　西部灰原	須恵器鉢底部		(8.60)		青灰	青灰	青灰	良好	5mm以下の小礫わずか、1mm以下の白色粒多い	

表17　老ノ口支群（1983）出土軒瓦

軒丸瓦

※（　）は復元数値

図版	番号	文様	出土地	瓦当径（cm）	瓦当厚（cm）	外区			内区			備考
						外縁幅（cm）	外縁高（cm）	内縁幅（cm）	中房径（cm）	蓮子	弁数	
115	NM701	左巻き三巴文	1トレンチ　1号窯灰原	10.6	1.2	1.5	0.7	1.3	—	—	—	『昭和58年度年報』fig.59-32、写真図版36-12
	NM702	左巻き三巴文	1トレンチ　1号窯灰原	10.3	1.4	1.1	0.7	1.4	—	—	—	『昭和58年度年報』fig.59-33
	NM703	木瓜文	1トレンチ　1号窯灰原	11.2	2.4	1.0	0.95	1.65	—	—	—	『昭和58年度年報』fig.59-30、写真図版34-1
	NM704	木瓜文	1トレンチ　SX01	(10.8)	1.5	1.1	1.05	1.5	—	—	—	『昭和58年度年報』fig.59-31
	NM705	複弁蓮華文	1トレンチ　窯状遺構	—	3.3	1.0	0.8	—	—	—	—	写真図版37-25
	NM706	単弁蓮華文	1トレンチ	—	—	—	—	—	—	—	—	写真図版37-2
116	NM707	複弁蓮華文	試掘　4－G	—	3.9	1.15	0.7	2	—	—	—	昭和57年度試掘、写真図版37-15

軒平瓦

図版	番号	文様	出土地	瓦当幅（cm）	瓦当厚（cm）	外区				脇区幅（cm）	顎深（cm）	備考
						上外縁厚（cm）	下外縁厚（cm）	上外縁高（cm）	下外縁高（cm）			
115	NH701	均整唐草文	1トレンチ　2号窯	—	—	—	0.5	—	0.1	—	—	
	NH702	均整唐草文	1トレンチ　SX01	—	4.1	1.0	0.7	0.4	0.45	—	—	
	NH703	唐草文	1トレンチ　2号窯	—	3.8	0.7	0.65	0.7	0.9	1.4	—	
	NH704	均整唐草文	1トレンチ　1号窯灰原	—	5.1	1.1	0.4	0.2	0.3	0.85	—	『昭和58年度年報』fig.59-41、写真図版40-27
	NH705	均整唐草文	1トレンチ　窯状遺構	—	5.0	0.6	0.6	0.45	0.45	—	—	
	NH706	均整唐草文	1トレンチ　1号窯灰原	—	4.9	0.9	1.1	0.4	0.6	—	—	『昭和58年度年報』fig.59-42、写真図版41-1
	NH707	均整唐草文	1トレンチ　1号窯灰原	—	4.9	1.1	0.7	0.4	0.55	1.1	—	『昭和58年度年報』fig.59-43、写真図版41-2
	NH708	均整唐草文	1トレンチ　1号窯灰原	—	4.7	0.9	0.7	0.2	0.5	—	—	『昭和58年度年報』fig.59-38
	NH709	均整唐草文	1トレンチ　窯状遺構	—	4.1	1.0	0.8	0.4	0.8	—	—	
	NH710	均整唐草文	1トレンチ	—	4.7	1.0	—	0.3	—	0.2	—	
116	NH711	連珠文	1トレンチ　2号窯	—	3.1	0.95	—	0.3	—	1.0	—	
	NH712	連珠文	1トレンチ　1号窯灰原	—	3.2	0.5	1.2	0.2	0.45	0.65	—	『昭和58年度年報』fig.59-40、写真図版42-1
	NH713	連珠文	1トレンチ　2号窯	—	3.7	—	1.0	—	0.5	—	—	
	NH714	連珠文	1トレンチ拡張	—	—	—	0.8	—	0.6	—	—	
	NH715	均整唐草文	1トレンチ　SX01	—	3.2	1.0	0.55	0.8	0.5	1.0	—	
	NH716	均整唐草文	1トレンチ　窯状遺構	—	3.3	0.8	0.8	0.6	0.7	1.0	—	
	NH717	均整唐草文	1トレンチ　1号窯	—	3.5	0.9	0.7	0.6	0.6	1.0	—	
	NH718	均整唐草文	1トレンチ　1号窯灰原	—	4.2	1.4	—	0.7	—	1.0	—	『昭和58年度年報』fig.59-37
	NH719	均整唐草文	1トレンチ　SX01	—	—	—	0.8	—	0.55	1.05	—	
	NH720	均整唐草文	1トレンチ　1号窯灰原	—	3.5	1.0	0.5	0.6	0.6	—	—	『昭和58年度年報』fig.59-35
	NH721	均整唐草文	1トレンチ	—	3.5	0.8	0.8	0.4	0.6	(1.05)	—	
	NH722	均整唐草文	2トレンチ		3.3	0.7	—	0.6	—	0.95	1.0	『昭和58年度年報』fig.59-34、写真図版41-29
	NH723	均整唐草文	2トレンチ	—	3.1	0.8	0.3	0.5	0.6	0.8	1.4	『昭和58年度年報』fig.59-36
	NH724	均整唐草文	2トレンチ	—	3.3	0.8	0.5	0.5	0.25	0.7	—	

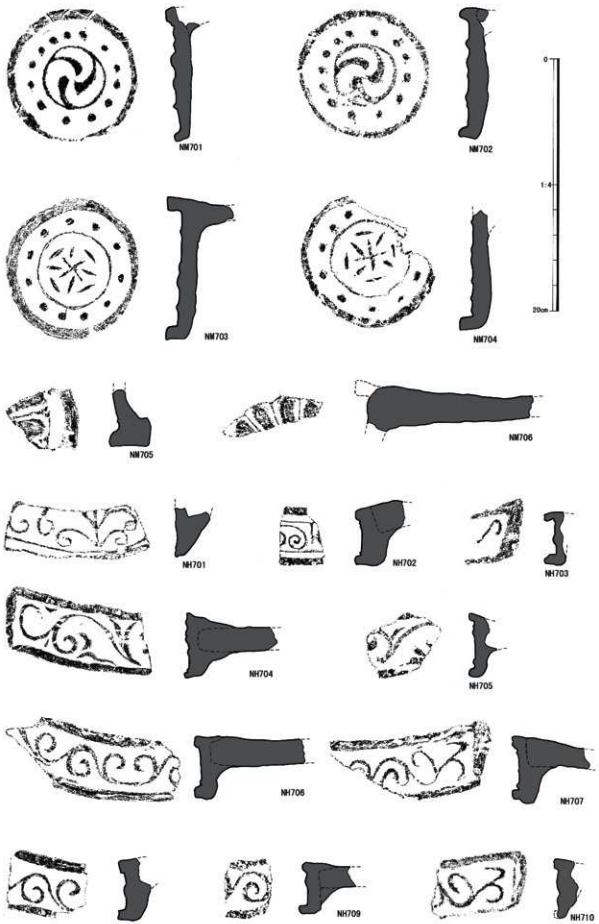


図115　老ノ口支群（1983）出土軒瓦①

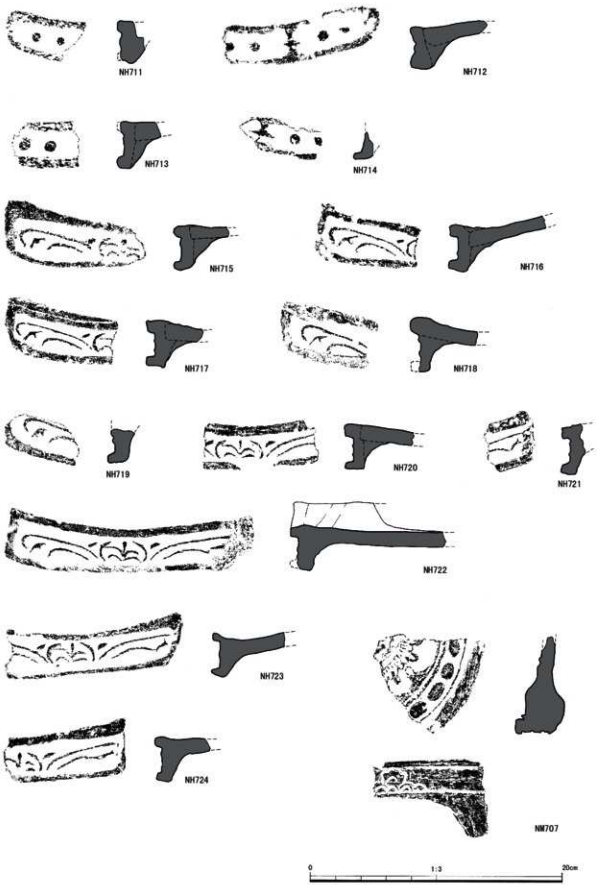


図116　老ノ口支群（1983）出土軒瓦②

第10章　昭和59年度　第９次調査（老ノ口地区（1984））の成果

第１節　調査区の設定（図117）

老ノ口地区（1984）は、昭和57・58年度に実施した試掘調査の結果、遺跡の存在が想定された地点に調査地を設けた。工事により遺物包含層と遺構面に影響のある範囲に限定し、発掘調査を実施した。

トレンチは０～54トレンチまでの計55本設定した（23トレンチは設定位置不明）。このうち遺物包含層や遺構が確認できたトレンチは０、１、３、８、11、24～34、36～44、46、48、51～54トレンチである。

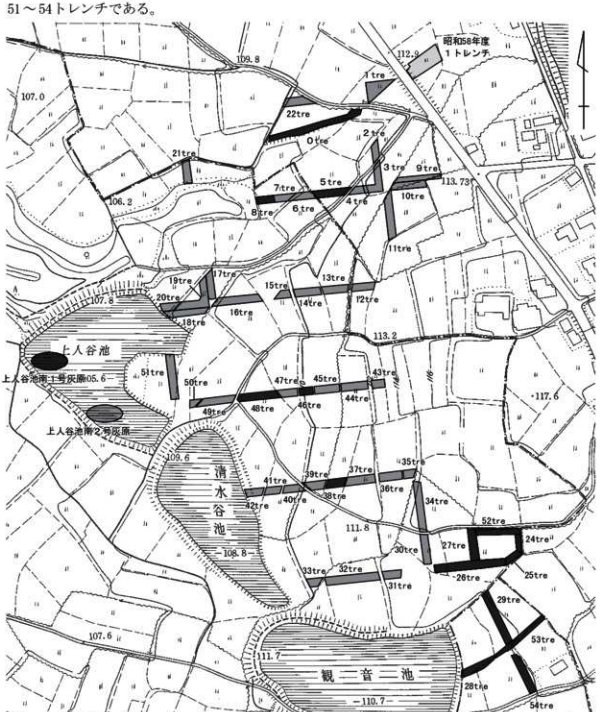


図117　老ノ口地区（1984）　トレンチ配置図（S=1：3,000）

第２節　調査成果

多くのトレンチで溝、土坑、ピットなどの遺構と遺物が検出された。また窯跡、粘土採掘坑も見つかり、窯業生産の実態を復元するための資料が得られた。

０トレンチを設定した小浸食谷では、昭和59年度までに十数基の窯跡の存在が確認された[1]。谷入口に位置する８トレンチ付近では、昭和56年度の分布調査で12世紀前半の窯跡（現状保存・未調査）が確認されている。これから谷最奥部に立地する昭和58年度に調査をおこなった２基まで、この小浸食谷内において連綿と生産が継続されていたと考えられる。

本書では主に窯跡や灰層が見つかった地点と軒瓦が出土した地点、並びに関連する０、５、８、24～27、28、29、38、48、52～54トレンチの計14本についてのみ報告する。ただし、灰層が出土した地点においても、窯跡に関連しない遺構については省略する。

『昭和59年度年報』では、55本のトレンチのうち、遺構などが顕著な８箇所のトレンチのみ報告した。その際、調査時とはトレンチ番号を変更して報告しているが、本書では調査時のトレンチ番号に準じて報告する。『昭和59年度年報』のトレンチ番号との対応は表18の通りである。また、０トレンチで検出した窯跡２基は『昭和59年度年報』において、当調査内で検出した灰原と併せて番号を付与しており、昭和58年度に調査した８次調査（老ノ口支群（1983））の窯跡と名称が一部同じであった。８次調査の窯跡と同一支群の窯跡であることから、混同を避けるため、８次調査の窯跡に続く番号を付与した。

また調査地点の西側にある上人谷池南半において、灰原を２箇所発見し、遺物を採集したため、併せて報告する。

表18　老ノ口地区（1984）　トレンチ名・遺構名対応表

本　書	昭和59年度年報	未報告	備　考
０トレンチ１区灰層	８トレンチ　１号灰原	—	
０トレンチ　３号窯	８トレンチ　２号窯	—	
０トレンチ　３号窯西側溝	—	０tre １区　SK １	
０トレンチ２区　SD01	—	０tre ２区　SD １	
０トレンチ２区　SD02	—	—	
０トレンチ２区灰層	８トレンチ　３号灰原	—	
０トレンチ３区灰層	８トレンチ　４号灰原	—	
０トレンチ　４－１号窯	８トレンチ　５号窯	—	
０トレンチ　４－２号窯	８トレンチ　５-B号窯	—	
０トレンチ４区　SD03	—	０tre ４区　SD １	
０トレンチ４区灰層	８トレンチ　６号灰原	—	
８トレンチ　灰層	—	８tre	図面なし、焚口を北に向けた窯跡を想定
24～26 トレンチ　灰層	１～３トレンチ	24tre　灰層、上部灰層 25tre　灰層、上部灰層、下部灰層 26tre 東端　灰層	
27・52 トレンチ	４・５トレンチ	—	
28 トレンチ	６トレンチ	—	
29・53・54 トレンチ	—	29・53・54tre	
32 トレンチ	７トレンチ	—	本書ではトレンチ位置のみ
36 トレンチ	—	36tre	
46 トレンチ	—	46tre	
48 トレンチ　灰層	—	48tre　灰層	
上人谷池南１号灰原	—	上人谷池南１号	
上人谷池南２号灰原	—	上人谷池南２号	

（１）０トレンチ（『昭和59年度年報』「８トレンチ」）（図118）

試掘調査の結果、窯跡の存在が想定された地点に０トレンチとして東西約68m×南北１～３mのトレンチを設定し、東より畦畔などを境に１～４区とした。調査の結果、窯跡２基、灰原、溝４条が検出された。

灰層は複数の単位が確認され、少なくとも４基分の窯に相当すると考えられる。溝のうち３号窯西側で検出したものは３号窯に伴う排水溝と考えられる。SD01は、２区西側で検出した溝であり、幅50cmで南北方向に流れる。調査区外に延びるため、その全容は不明である。SD02は２区西端に位置し、SD01と並んで検出した。幅1.3mを測るが、その大半は未調査であり、性格は不明である。SD03は４号窯のすぐ西側で検出した。幅2.4～4.1mを測り、南北は調査区外に延びる。４号窯に伴う排水溝としては幅が広く、性格は不明であるが、南半部には灰層が含まれる。以上の溝については遺物整理を実施していないため、窯跡との時期差については不明である。

①３号窯（『昭和59年度年報』「２号窯」）（図119、120）

３号窯は調査区東端で検出された。焼成部は後世の削平を受け、燃焼部下半のみ検出した。燃焼部、焚口は水路のため一部削られているが、残りは南側圃場内に残存しているものと思われる。検出長約1.75m、最大幅1.75m、最大高0.4m、床面傾斜角16度を測り、焚口は南を向く。床面は計６面確認できる。また窯壁もよく残存しており、２回の修復が確認できる。

床面からはほとんど遺物が出土せず、操業時期の決定は困難である。この窯の時期を示す可能性がある資料として、３号窯に伴うと考えられる３号窯西側の溝から出土した土器がある。この溝からは土師器坏、須恵器鉢・塊・甕が出土している。図120－１・２は須恵器塊である。１は体部が直線的に開き、口縁部は内側に巻き込むように丸く収める。２は底部に平高台を持ち、体部はわずかに内湾して立ち上がる。口縁部内面に沈線が見られる。図120－３は須恵器甕の口縁部片である。口縁端部を上方につまみ上げている。図120－４～11は須恵器鉢である。４は口縁部が外側に突出する。５は体部外面と口縁部端面が直角をなし、拡張せずに収める。６は口縁端部直下の外面が強いナデによって凹む。片口を有する。７は両面ともに粘土紐痕跡がよく残る。口縁部は内側にわずかに突出する。８は片口を有する。９は輪高台を持つ。10は片口を有する。口縁端部を外側につまみ出すように突出させる。11は口縁部片である。

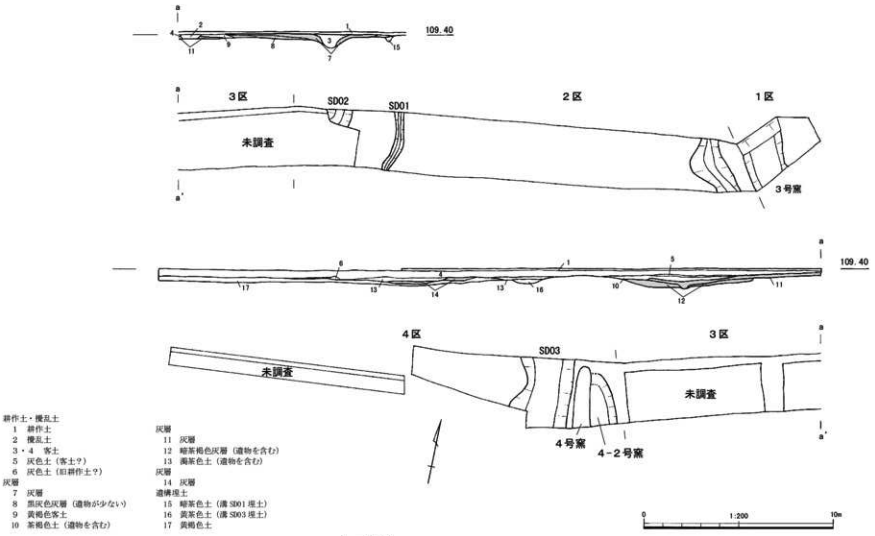
②４－１・４－２号窯（『昭和59年度年報』「５・５－８号窯」）（図121、122）

４－１号窯は調査区西半部で検出した。焼成部上半と煙道部は削平されていたが、焼成部下半・燃焼部・焚口は天井部を除いてほぼ残存していた。検出長3.75m、燃焼部検出長1.4m、焼成部残存長2.25m、最大幅1.75m、焚口幅0.9m、残存高0.35m、燃焼部床面傾斜角約０～12度、焼成部床面傾斜角約16度を測る。焚口は南を向く。燃焼部と焼成部の境には0.1m程度の段差が存在し、瓦窯の影響と考えられる。

窯跡内には大量の未製品が残存しており、特に燃焼部には、焼成部から倒れ落ちた状態で多量の塊が出土した。他に須恵器鉢・甕・皿が出土した。

図122－12～22は窯体充填土の西半部から出土した。図122－12・13は須恵器皿である。12は体部と底部の境が明瞭で、体部が外反する。13は器高が低い。図122－14～17は須恵器塊である。14～16は体部がやや内湾し、17は体部が外反気味に立ち上がる。図122－18～21は須恵器鉢である。18・19は片口を有する小型の鉢である。19は片口の外面にユビオサエが見られる。

図118　老ノ口地区（1984）Ｏトレンチ遺構平面・断面図



耕作土・攪乱土
1　耕作土
2　攪乱土
3・4　客土
5　灰色土（客土？）
6　灰色土（旧耕作土？）
灰層
7　灰層
8　黒灰色灰層（遺物が少ない）
9　黄褐色客土
10　茶褐色土（遺物を含む）
灰層
11　灰層
12　暗茶褐色灰層（遺物を含む）
13　褐茶色土（遺物を含む）
灰層
14　灰層
遺構埋土
15　暗茶色土（溝 SD01 埋土）
16　黄茶色土（溝 SD03 埋土）
17　黄褐色土

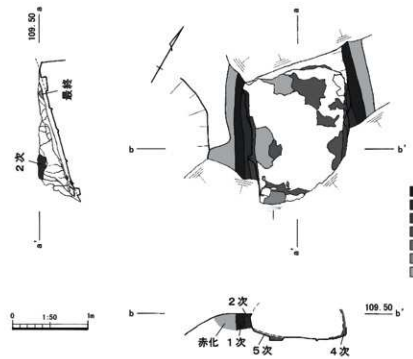


図119　老ノ口地区（1984）　3号窯平面・断面図

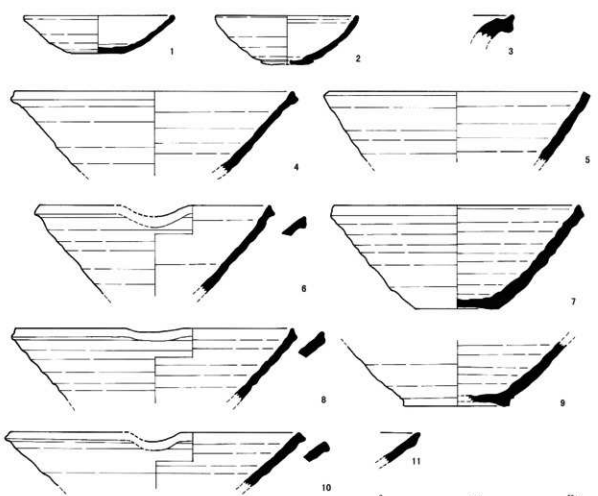


図120　老ノ口地区（1984）　3号窯西側溝出土土器

20は口縁端部が外側に肥厚する。図122－22は須恵器甕胴部である。外面は平行タタキ、内面はナデを施す。

図122－23～28は窯体充填土の東半部から出土した。図122－23は須恵器塊である。図122－24は須恵器甕胴部である。外面は平行タタキ、内面はナデを施す。図122－25～28は須恵器鉢である。25・26は口縁部片である。27は片口を有する。体部外面と口縁部端面が鈍角をなし、口縁端部はほとんど拡張しない。28は口縁端部が外側につまみ出すように突出する。図122－29～32は窯体床面から出土した須恵器鉢である。29は28と同様の口縁部形態を持つ。32は底部片である。

4－1号窯検出中に、その東側で半分重なり合うように窯跡を確認した（4－2号窯）。主軸は南北方向で、検出長2.9mを測る。4－1号窯の保存を図るため調査はおこなっておらず、全容は不明である。4－2号窯廃絶後、盛土をして4－1号窯を構築したことがわかる。

③灰原（図123～126）

2基の窯跡以外に、少なくとも4基分の灰原を確認した。3号窯の東側に最低1基分の灰原（1区灰原）、3・4号窯の間におそらく2基分の灰原（2区灰原・3区灰原）、4号窯より西側に最低1基分の灰原（4区灰原）を検出した。

0トレンチ1区灰原は、『昭和59年度年報』で「1号灰原」と報告したものである。須恵器鉢・塊・甕・壺が出土している。図123－33は須恵器塊である。体部がやや外反して立ち上がる。図123－34は須恵器壺口縁部である。口縁端部は上下共に突出する。図123－35は須恵器甕胴部である。外面は平行タタキ、内面はナデを施す。図123－36～42は須恵器鉢である。36は片口を有し、口縁端部はほとんど拡張しない。37は口縁端部を外側に肥厚させる。38は内側に屈曲する口縁部を持つ。40は片口を有し、口縁端部は外側につまみ出すように突出する。

0トレンチ2区灰原は、『昭和59年度年報』において「3号灰原」と報告したものである。3号窯の西側に広がる。図124－43は須恵器塊である。図124－44・45は須恵器鉢口縁部である。図124－46は須恵器甕胴部である。内面はナデ、外面は平行タタキを施す。以上は「2区 上部灰層」として取り上げたものである。図124－47～49は「3号灰原」として取り上げた土器である。「2区 上部灰層」と同一の層を指すと考えられる。図124－47は須恵器塊である。口縁部付近でわずかに外反する。図124－48・49は須恵器鉢である。49は片口を有するが、ほとんど欠損しているため、図示していない。

0トレンチ3区灰原は、『昭和59年度年報』で「4号灰原」と報告したものである。2区灰原よりも下層に堆積し、4号窯の東側に位置する。この灰原から出土した遺物は、「3区 4号灰原 茶褐色土」、「3区 4号灰原（下部灰層）」、「3区 下部灰層」、「3－4区 下部灰層」と複数の層名で取り上げがおこなわれている。これらは同一の灰層を指すと考えられるが、本書では取上げ層名ごとに図示する。図125－50は白磁碗底部である。「3区 4号灰原 茶褐色土」として取り上げた。図125－51～56は「3区 4号灰原（下部灰層）」として取り上げた土器である。図125－51は須恵器甕胴部である。外面は平行タタキ、内面はナデを施す。図125－52～54は須恵器塊である。52は体部が直線的に立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデが施され、ほとんど粘土紐痕跡が残らない。53は底部に平高台を持つ。図125－55・56は須恵器鉢口縁部である。図125－57・58・62～64は「3区 下部灰層」から、図125－59～61は「3－4区 下部灰層」から取り上げた土器である。図125－57は土師器皿である。図125－58は須恵器皿である。図125－59～64は須恵器鉢である。59は口縁端部を内側に肥厚させる。

口径がかなり大きく、歪みにより広がっている可能性がある。60・61は体部がやや内湾して立ち上がり、60の口縁端部は拡張しない。61は口縁部でわずかに外側に拡張する。62は口縁端部が外側につまみ出すように突出する。体部が大きく開き、歪みの影響と考えられる。図125－65は「４区　４号灰原下」から取り上げた須恵器甕である。灰原より下層から出土したと考えられる。外面は平行タタキ、内面はナデを施す。頸部は緩く外反し、口縁部は拡張せずに収める。口縁部内面でわずかに段差が見られる。

０トレンチ４区灰原は、『昭和59年度年報』で「６号灰原」と報告したものである。５号窯の西側に広がる。調査では、「４区　灰層」と「４区　６号灰原」として取り上げているが、同一の灰層を指すと考えられる。他の灰原と同じく、本書では層名ごとに図示する。

図126－66～71は「４区　灰層」出土である。図126－66は須恵器皿である。やや外反する体部を持つ。図126－67・68は須恵器塊である。67は体部が直線的に広がる。68は体部が内湾して立ち上がる。平高台の底部を持つ。図126－69～71は須恵器鉢である。69はわずかに外反する口縁部を持つ。70は体部外面と口縁部端面が直角をなし、口縁端部は拡張しない。

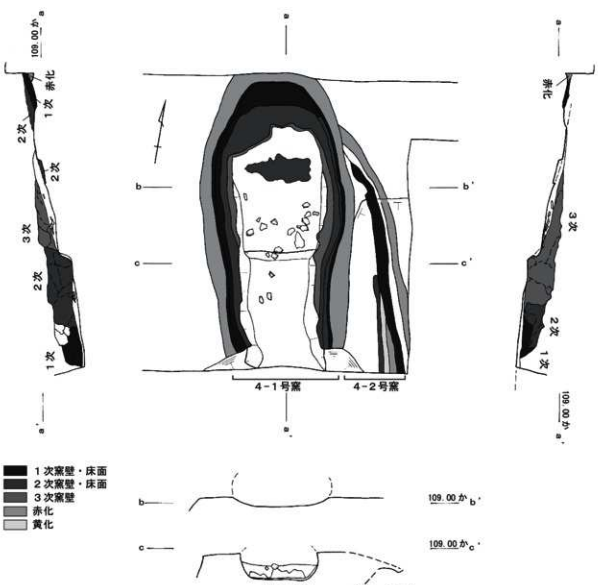


図121　老ノ口地区（1984）　４号窯平面・断面図

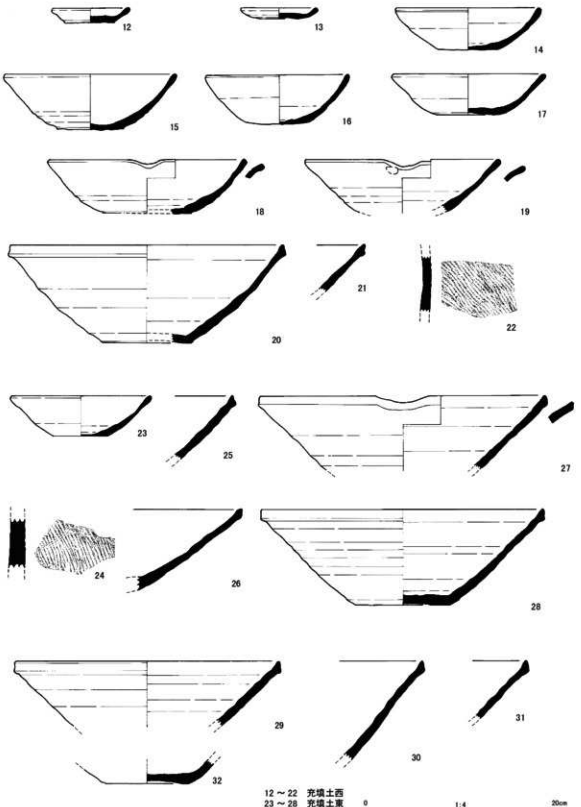


図122 老ノ口地区（1984） 4号窯出土土器

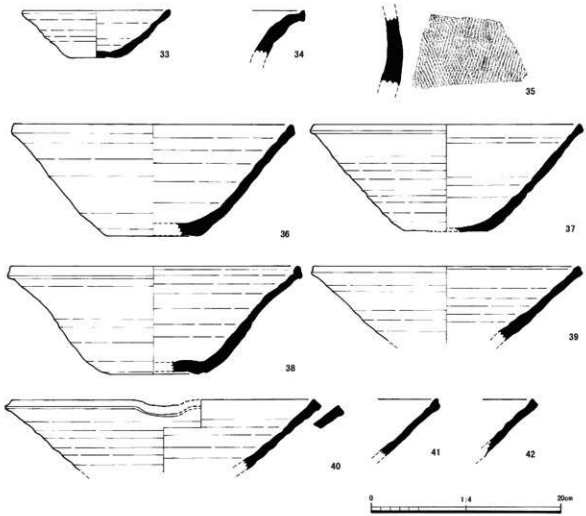


図123　老ノ口地区（1984）　Oトレンチ１区灰層出土土器

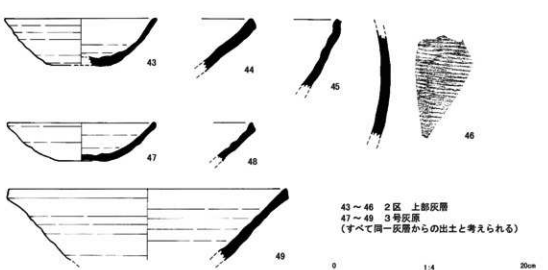


図124　老ノ口地区（1984）　Oトレンチ２区灰層出土土器

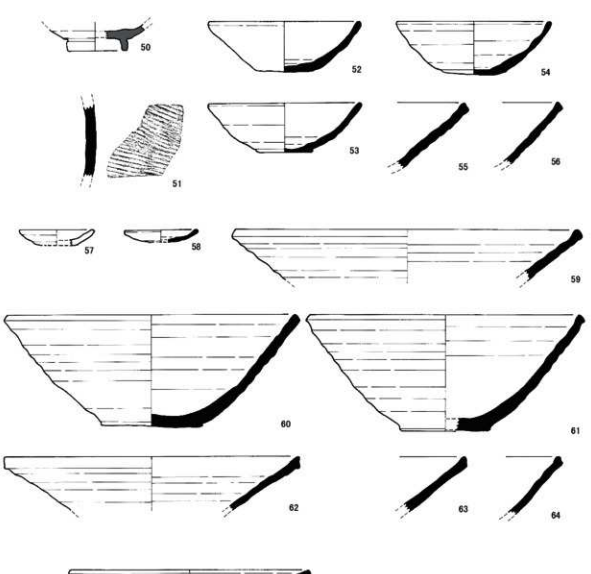


図125　老ノ口地区（1984）　0トレンチ3区灰層出土土器

体部外面の下半は丁寧なナデを施し、粘土紐痕跡を消しているのに対し、上半は粘土紐痕跡がよく残存する。内面は全面、粘土紐痕跡をよく残す。71は外面口縁端部直下に強いナデにより凹みをつくる。

図126－72～84は「4区　6号灰原」から取り上げた土器である。図126－72は須恵器皿である。器壁の厚い底部を持つ。図126－73・74は須恵器塊である。73は底部に平高台を持ち、体部は内湾して立ち上がる。体部外面に沈線を持つ。74は体部が直線的に開く。図126－75～84は須恵器鉢であり、75～77は小型品である。81・82は片口を有する。78は口縁端部を内側にわずかに肥厚させる。内面は丁寧なナデを施し、上半で沈線状を呈す。79は口縁端部が内外両方に突出する。図126－85は須恵器甕もしくは壺の口縁部である。頸部が直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。口縁部内面に段差を持つ。

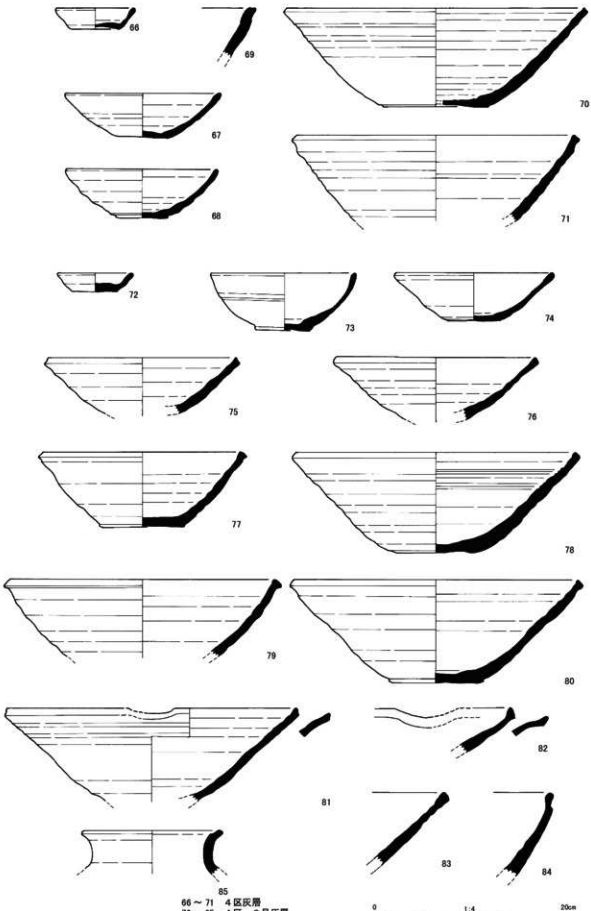


図126　老ノ口地区（1984）　Oトレンチ4区灰層出土土器

（2）５・８トレンチ

５トレンチでは、遺構は検出していない。遺物は、わずかに土器と瓦が出土しているが、土器は本書では省略し、軒瓦についてのみ（８）で報告する。

８トレンチは灰原を検出し、遺物が多く出土した。０トレンチ南西に位置するトレンチである。土層断面図などは確認できなかったが、調査記録によると、灰原はトレンチ南壁で幅１m、厚さ0.2mで検出した。小浸食谷の南側斜面に立地し、北に焚口を持つ窯跡の灰原末端部と考えられる。出土土器については本書では省略する。

（3）24～27・52トレンチ（『昭和59年度年報』「１～５トレンチ」）（図127～129）

観音池の北東に位置する「q」字状を呈する５本のトレンチである。24・27トレンチの北半と52トレンチは削平により、遺構は散在的だが、25・26トレンチを中心に多くの遺構が残存している。

これらのトレンチで掘立柱建物跡、溝、土坑、柱穴と思われるピット多数を検出した。しかし、トレンチ幅が1.7～2.1mと限定されたため、掘立柱建物跡はその全体像を解明することはできなかった。以下、軒瓦が出土した遺構についてのみ報告する。

SP03は24トレンチで検出された掘立柱建物跡 SB01の北側に位置するピットである。長軸44cm、短軸38cm、深さ16.5cmを測る。掘形から軒平瓦が出土している。

SK02は26トレンチ東端で検出した土坑である。直径約1.2m、深さ約0.2mの規模を持つ。軒丸瓦が出土している。

24～26トレンチにかけて、灰層を検出した。最も厚いところで0.3m近く堆積している。24・26トレンチに比べて25トレンチ灰層の堆積状況や遺物量・器種が多いことから、この灰層の帰属する窯跡は25トレンチの北側に存在すると推定される。

遺物の取り上げは、「上部灰層」・「下部灰層」などに分けられているため、本書ではそれに従って区分した。しかし、土層断面図では上下の区別は表現されておらず、土層断面図中の「遺物包含層」に灰層が含まれると考えられる。灰層から出土した土器の一部を図129－86～112として図化した。

図129－86～88は24トレンチ「上部灰層」から取り上げた土器である。図129－86は土師器皿である。図129－87は須恵器塊である。平高台を持ち、体部は内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。下半が強く張り出している。図129－88は須恵器鉢口縁部である。大きく外反する口縁を持つ。

図129－89・90は24トレンチ「灰層」から出土した。「上部灰層」と同一層かは不明である。図129－89は土師器托底部である。図129－90は土師器皿である。

図129－91は24トレンチ「灰層＋暗灰色土」から取り上げた土師器皿である。器高が低く、体部は内湾している。「暗灰色土」は灰層下層の基盤層もしくは遺構埋土と考えられる。

図129－92～97は25トレンチ「上部灰層」から取り上げた土器である。図129－92は土師器皿である。体部は直線的に開く。図129－93は土師器鍋口縁部である。口縁端部を内側につまみ上げる。図129－94～96は須恵器塊である。94は平高台を持ち、体部は内湾して立ち上がる。95は口縁部から底部まで残存するが、小片のため口径を復元できない。体部に沈線を持つ。96は器高が低い。図129－97は須恵器甕口縁部である。小片のため、傾きは推定である。上方につまみ上げるように突出する口縁端部を持つ。

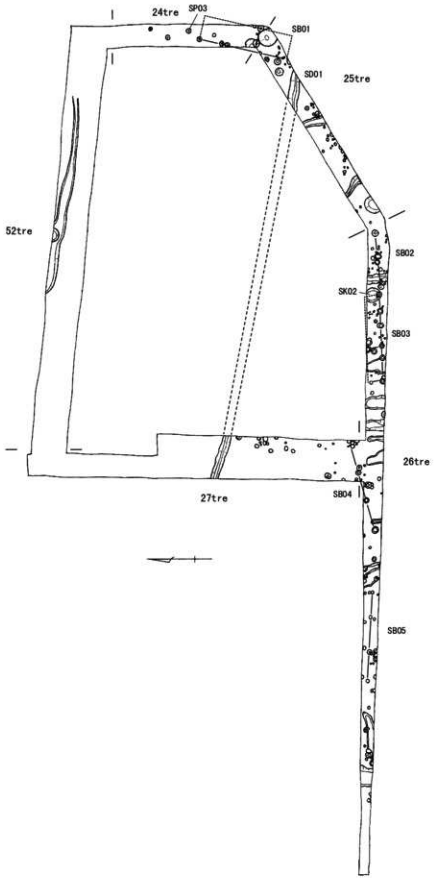


図127　老ノ口地区（1984）　24～27・52トレンチ遺構平面図

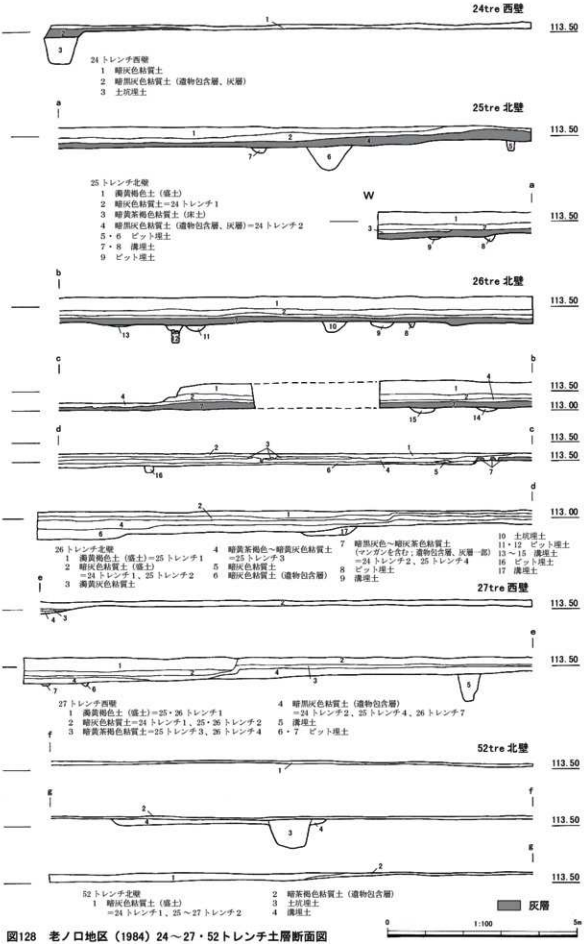


図128　老ノ口地区（1984）24～27・52トレンチ土層断面図

図129－98～105は25トレンチ「下部灰層」から取り上げた土器である。調査記録によると、「灰の固まった層を境に上下に分かれる」とあるが、土層断面図では不明である。図129－98は土師器托底部である。図129－99は土師器鍋の口縁部である。端部は鋭く尖って収める。図129－100は土師器鍋体部である。外面に突帯とつまみを貼り付けている。全体的に摩滅しており、調整は不明である。図129－101～103は須恵器塊の底部である。101は輪高台を、102は平高台を持つ。103は高台を持たないが、底部と体部の境が明瞭である。図129－104は須恵器鉢の口縁部である。外反する口縁部を持つ。図129－105は須恵器甕の口縁部である。傾きは推定である。25トレンチ「下部灰層」から取り上げた須恵器はいずれも小片で全体を窺える資料はない。

図129－106～112は25トレンチ「灰層＋暗茶灰色土」から取り上げた土器である。24トレンチ同様、「暗茶灰色土」は基盤層もしくは遺構埋土と考えられる。図129－106は土師器皿である。器高が低く、体部は直線的に開く。図129－107は土師器塊である。平高台を持ち、体部は内湾する。図129－108・109は須恵器塊である。108は器壁の薄い輪高台を持ち、高台の端部はつまむように尖らせて収める。図129－110は須恵器盤と考えられる。口径は15cmとかなり小さい。底部からほぼ直角に体部が立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。図129－111は須恵器壺の口縁部である。口縁端部内面を強いナデにより凹ませる。図129－112は須恵器鉢の口縁部である。口縁端部は内側に屈曲する。

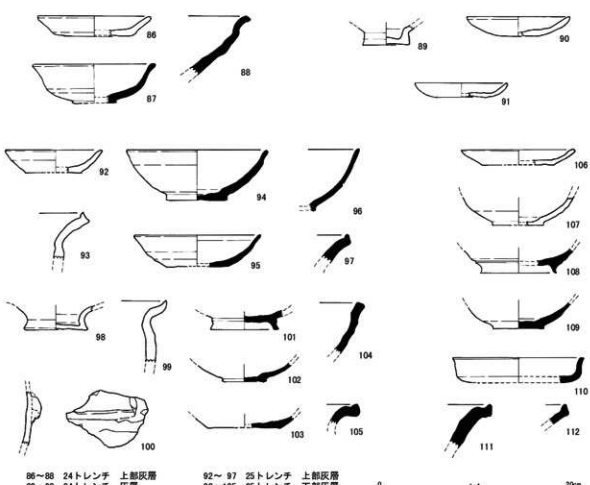


図129　老ノ口地区（1984）　24～25トレンチ灰層出土土器

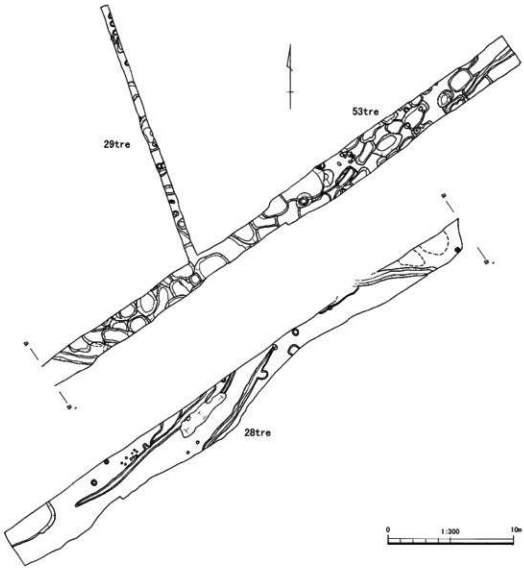
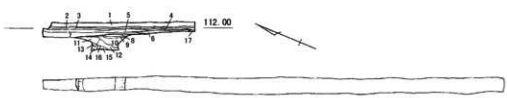


図130　老ノ口地区（1984）　28・29・53トレンチ遺構平面図



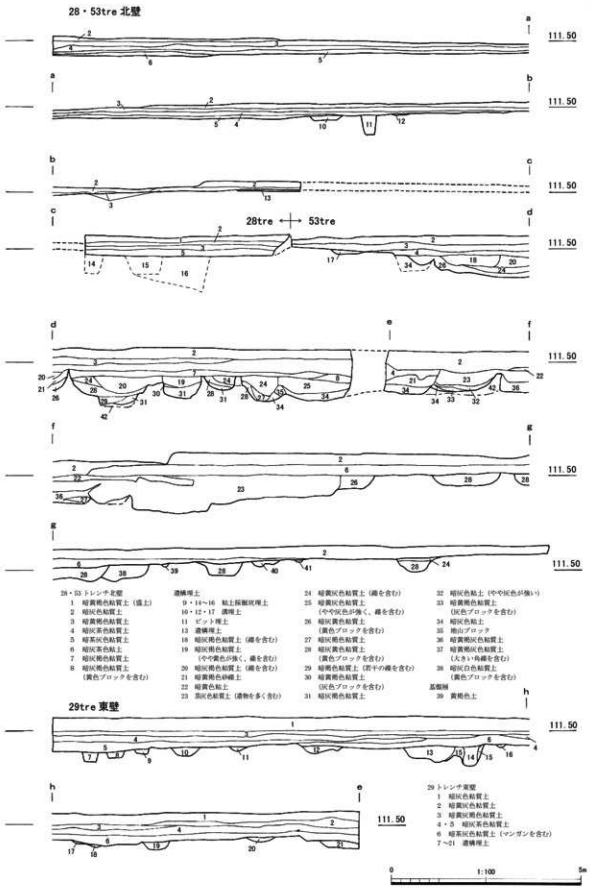
1　暗黄茶灰色粘質土（マンガンを含む）
2　暗灰色粘質土
3　暗茶灰色粘質土
4　暗灰褐色粘質土（マンガンを含む）
5　暗灰茶色粘質土
6　暗灰褐色粘質土
7　暗灰茶色粘質土（小さい円礫を含む）

遺構埋土
8　暗茶灰色粘質土（黄色ブロックを含む）
9　暗茶灰褐色粘質土
10　黄褐色粘質土（円礫含む）
11　暗灰色粘質土（茶色ブロックを含む）
12　暗灰色粘質土（灰色ブロックを含む）
13　黄褐色粘土
14　暗青灰色粘土
15　黄褐色粘土（灰色ブロックを含む）

基盤層
16　黄褐色粘土
17　黄褐色粘質土（マンガンを含む）

0　1:300　20m

図131　老ノ口地区（1984）　54トレンチ遺構平面・断面図



28・53トレンチ北壁
1 暗黄褐色粘質土（盛土）
2 暗灰色粘質土
3 暗黄褐色粘質土
4 暗灰黒色粘質土
5 暗茶灰色粘質土
6 暗灰茶色粘土
7 暗灰褐色粘質土
8 暗灰褐色粘質土（黄色ブロックを含む）
遺構埋土
9・14～16 粘土採掘坑埋土
10・12・17 溝埋土
11 ピット埋土
13 遺構埋土
18 暗灰褐色粘質土（礫を含む）
19 暗灰褐色粘質土（やや黄色が強く、礫を含む）
20 暗灰褐色粘質土（礫を含む）
21 暗黄褐色砂礫土
22 暗黄色粘土
23 黒灰色粘質土（遺物を多く含む）
24 暗黄灰色粘質土（礫を含む）
25 暗黄灰色粘質土（やや灰色が強く、礫を含む）
26 暗灰黄色粘質土（黄色ブロックを含む）
27 暗灰褐色粘質土
28 暗灰黄色粘質土（黄色ブロックを含む）
29 暗褐色粘質土（若干の礫を含む）
30 暗黄褐色粘質土（灰色ブロックを含む）
31 暗灰褐色粘質土
32 暗灰色粘土（やや灰色が強い）
33 暗黄褐色粘質土（灰色ブロックを含む）
34 暗灰色粘土
35 地山ブロック
36 暗黄褐灰色粘質土
37 暗黄褐灰色粘質土（大きい礫を含む）
38 暗灰白色粘質土（黄色ブロックを含む）
基盤層
39 黄褐色土

29トレンチ東壁
1 暗灰色粘質土
2 暗黄灰色粘質土
3 暗黄灰色粘質土
4・5 暗灰茶色粘質土
6 暗茶灰色粘質土（マンガンを含む）
7～21 遺構埋土

図132 老ノ口地区（1984） 28・29・53トレンチ土層断面図

（４）28・29・53・54トレンチ（図130～132）

観音池の東側に位置する十字に配した４本のトレンチである。このうち53トレンチは『昭和59年度年報』で「６トレンチ」として報告している。

溝13条、土坑3基、落込み1基、ピット多数、粘土採掘坑と考えられる土坑50基を検出した。粘土採掘坑は29･53トレンチで多く検出しているが、28･54トレンチではほとんど存在しない。このことから、29・53トレンチ付近の南北23m×東西50mの範囲で粘土の採掘がおこなわれたと考えられる。

粘土採掘坑は、円形もしくは楕円形が多いが、規模は径0.８～3.0mと一定しない。断面形もU字状や袋状のものがあり、規則性は認められない。53トレンチ西側においては、その切り合いが著しく、かなり大量の粘土が採掘されたものと考えられる。軒瓦についてのみ（８）で報告する。53トレンチから出土した軒瓦のほとんどは「落込み」、「落込み１」、「落込み２」出土としている。ただし、これが平面図上のどの遺構を表しているかは不明である。

（５）38トレンチ（図133）

35～42トレンチは、現在は埋められている清水谷池の東側に位置する一連のトレンチである。そのうち35トレンチは最も東に位置する。遺構は検出されず、遺物もほとんど出土していない。36～42トレンチでは遺構を検出した。

本書では軒瓦が出土した38トレンチの遺構について報告する。38トレンチは一連のトレンチのほぼ中央に位置する。溝２条、土坑２基、ピット多数を検出した。土器は本書では省略する。

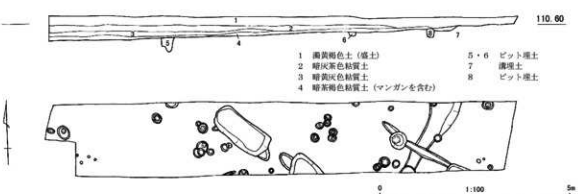


図133　老ノ口地区（1984） 38トレンチ遺構平面・断面図

（６）46・48トレンチ（図134～136）

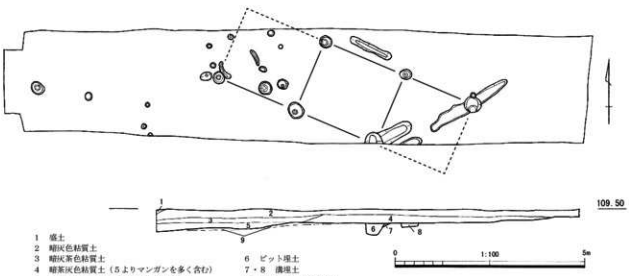
43～50トレンチは上人谷池の東側に位置する一連のトレンチである。35～42トレンチの北側に並行して設定した。軒瓦が出土した46トレンチと、灰層を検出した48トレンチのみ報告する。

46トレンチは溝３条と１間×３間以上の掘立柱建物跡１棟、ピット多数を検出した。掘立柱建物跡は調査区外に延びるため全体の規模は不明である。

48トレンチは東西25mのトレンチである。表土下0.２～0.６mで灰層を確認した。基盤層上面は圃場整備前地表下1.５mである。上人谷池を起点に南北に分岐する小浸食谷の東側斜面に

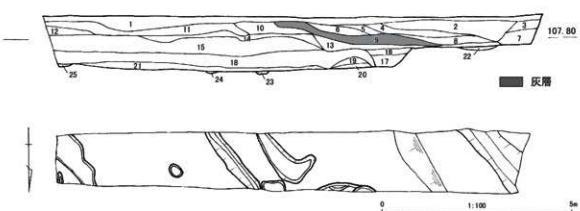
このトレンチが位置することから、48トレンチより東に、焚口を西に向けた窯跡が存在すると考えられる。また48トレンチ周辺では、昭和57年度の試掘調査において灰原を検出しており、この周辺に数基の窯跡の存在が想定される。当トレンチの遺構は溝４基、土坑１基、ピット２基を検出した。

灰層から出土した土器は、須恵器鉢１点、須恵器甕１点を図示した（図136－113・114）。いずれも口縁部の小片で、全体は窺えない。



1　盛土
2　暗灰色粘質土
3　暗灰茶色粘質土
4　暗茶灰色粘質土（５よりマンガンを多く含む）
5　暗茶灰色粘質土（マンガンを多く含む）
6　ピット埋土
7・８　溝埋土
9　暗黄褐色土（基盤層）

図134　老ノ口地区（1984）　46トレンチ遺構平面・断面図



1　床土
2　暗赤褐色粘質土（礫を含む）
3　暗灰茶色粘質土（カーボン・礫を含む）
4　暗灰茶色粘質土（暗赤褐色ブロックを含む）
5　暗黄灰色粘質土（黄色ブロック・礫を含む）
6　不明
7　暗赤褐色粘質土（２より大きい礫を含む）
8　暗灰褐色粘質土
9　灰層
10　暗灰褐色粘質土（マンガンブロックを含む）
11　暗灰茶色土（礫を含む）
12　暗赤褐色粘質土（礫を含む）
13　暗灰褐色粘質土
14　暗茶灰色粘質土
15　暗茶色粘質土
16　暗灰茶色砂層
17　暗灰色砂礫土
18　暗茶灰色砂質土
19　暗灰黄色砂礫土
20　暗黄褐色粘質土
21　暗茶褐色砂質土
22～25　溝埋土

図135　老ノ口地区（1984）　48トレンチ遺構平面・断面図

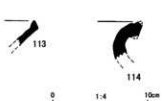


図136　老ノ口地区（1984）　48トレンチ灰層出土土器

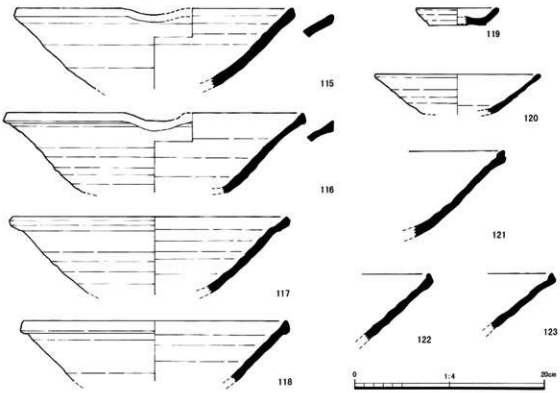


図137　上人谷池南　１号灰原採集土器

（７）上人谷池南　１号灰原・２号灰原（図137）

上人谷池の南半において２箇所で灰原を確認し、遺物を採集した。上人谷池を起点に分岐する小浸食谷の分岐点付近に１号灰原が、そこから南に延びる小浸食谷に２号灰原が位置する。他に同池内では１号灰原より北側の池岸と、そのさらに北側の２箇所において灰原が確認されている（妙見山麓遺跡調査会1989）。

上人谷池南１号灰原は、池内西端に位置する。採集した土器の一部を図示した。図137－115～118、121～123は須恵器鉢である。115は片口を有し、口縁端部は拡張しない。116は片口を有し、口縁端部が外側に肥厚する。器高が低く、口径が大きい。焼き歪みにより口径が開いていると考えられる。121～123は口縁部である。いずれも口縁端部を内側に屈曲もしくは突出させる。図137－119は須恵器皿である。底部と体部の境が明瞭である。図137－120は須恵器塊である。体部が直線的に開く。

上人谷池南２号灰原は、池の南岸付近に位置する。採集した遺物は極めて少量かつ小片で、図示できるほどの資料はない。

（８）軒瓦

老ノ口地区（1984）から出土した軒瓦は、軒丸瓦14点、軒平瓦16点、道具瓦１点を図示した。老ノ口地区（1984）は範囲が広域にわたっており、地点によって出土している軒瓦の型式構成に差がある。よって当節では、地点ごとに出土した軒瓦を報告する。出土地点は表20の通りである。

①０トレンチ（図138）

NH801は１区出土の宝相華唐草文軒平瓦である。唐草の先端が中心に向かって折り返して長く延びる。瓦当貼付ｂ技法によって瓦当を成形している。

NM801・NH802は２区から出土している。NM801は木瓜文軒丸瓦である。中房に凸線で木瓜文が表現され、周囲は圏線で囲まれる。外区には珠文帯が巡る。

NH802は均整唐草文軒平瓦である。Ｃ字下向中心飾から唐草が２転する。おそらく２個並んだＣ字下向中心飾であると考えられる。上下には圏線があり、脇区は切り縮められている。

NM802・NH803は３区から出土している。NM802は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋６＋８の蓮子を配し、花弁はわずかに盛り上がった半円形で表現される。周縁には圏線が巡る。

NH803は均整唐草文軒平瓦である。樹状中心飾と見られ、蕨手が下向きに３本、その外側に上向きの蕨手が延びる。上下には圏線が巡る。瓦当成形は包み込みｂ技法による。

NM803～806・NH804～807は４区から出土している。NM803は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋８の蓮子が配される。蓮弁は凸線で表現されており、先端が凹んだM字形である。その内側に突出した子葉が置かれる。各蓮弁を区切るように縦長の間弁が配置される。

NM804～806は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房に蓮子が配され、周囲には雄蕊帯が巡る。蓮弁は弁面の盛り上がりで表現され、先端は凹んだ形となっている。子葉は２つの窪みで表される。蓮弁の形に沿って圏線が巡り、蓮弁間には水滴状の表現が見られる。NM804とNM805・806では蓮弁の表現にわずかに違いが見られ、NM805では圏線が見られる。

NH804は均整唐草文軒平瓦である。上向きの蕨手が並ぶ。脇区には圏線が見られる。後述するNH810と同様の意匠であると考えられる。

NH805・806は宝相華唐草文軒平瓦である。複雑な展開の唐草文が展開する。NH805は包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NH807は唐草文である。凸線が部分的に扁平な線となる。

②５トレンチ～48トレンチ（図139）

NH808は５トレンチ出土である。均整唐草文軒平瓦である。中心飾はＣ字下向を２個並べ、蕨手が左右に３葉展開する。上下には圏線が巡る。包み込みｂ技法によって瓦当を成形している。

NM807・808は48トレンチ出土である。NM807は複弁蓮華文軒丸瓦で、NM803と同意匠である。

NM808は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は区画線状の凸線で表現されており、非常に抽象化されている。

NH809・810は均整唐草文軒平瓦である。樹状中心飾は下向きの蕨手が３本延び、左右に上向きの蕨手が展開する。NH810は上向蕨手が中心飾からは分離して始まっており、やや意匠が異なる。NH809は46トレンチ、NH810は38トレンチ出土である。

NM809・810は26トレンチ東部出土である。NM809は複弁蓮華文軒丸瓦である。花弁は窪んだ弁面に子葉を２つ突出させて表現している。外区には内外に圏線を伴う珠文帯が巡る。珠文は大粒で楕円形を呈す。顎面には２本の突帯の間に半截花文が表現される。文様はスタンプによるものである。

NM810は蓮華文軒丸瓦である。中房に蓮子を密に配置し、周囲には雄蕊帯が巡る。欠損により、蓮弁の表現は不明である。

NH811は24トレンチ出土の均整唐草文軒平瓦である。中心飾は下向蕨手３葉で、左右に上向蕨手が展開する。他の同意匠の軒平瓦よりも線幅が広く、表現がやや異なる。

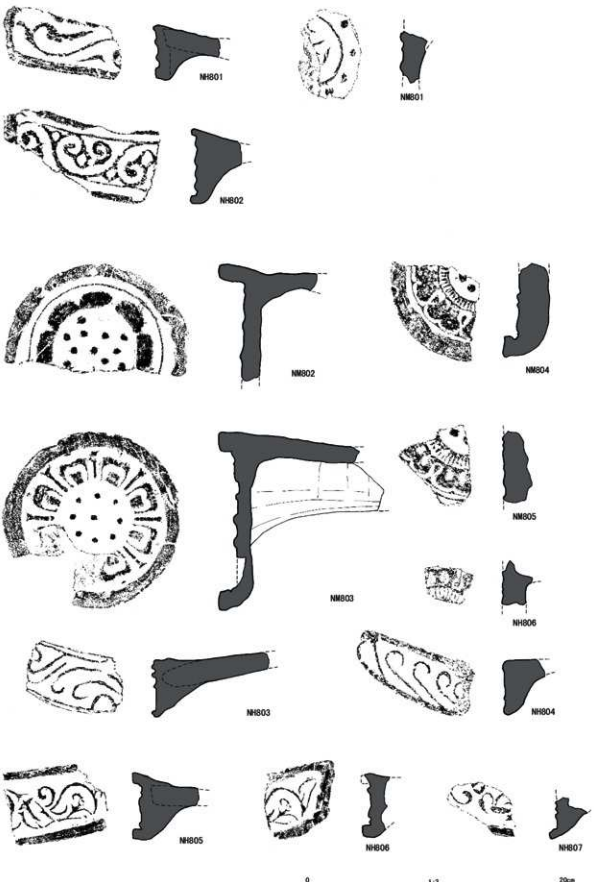


図138　老ノ口地区（1984）出土軒瓦①

図139　老ノ口地区（1984）出土軒瓦②

③28・29・53トレンチ（図140）

これらの調査区は、前述の通り粘土採掘杭が多数見つかっている。図示した瓦はそれぞれ近接箇所から出土している。NH812が28トレンチ東部、NH817が29トレンチから出土しており、それ以外は53トレンチ出土である。

NM811は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋８で大粒の蓮子が配され、周囲には圏線が巡る。蓮弁は縦長の台形を呈し、突出して表現されており、子葉はない。各蓮弁は凸線で区画される。

NM812は単弁十葉蓮華文軒丸瓦である。中房には１＋５の蓮子が配され、周囲には圏線が巡る。各蓮弁は凸線で四角に区画されており、その内側を楕円形に突出させる。簡略化した表現となっている。外区には珠文帯が巡り、内外に圏線を伴う。珠文は小粒で21を数える。瓦当面の文様表現は全体に凹凸が小さく平坦である。NM813も同意匠であると考えられる。

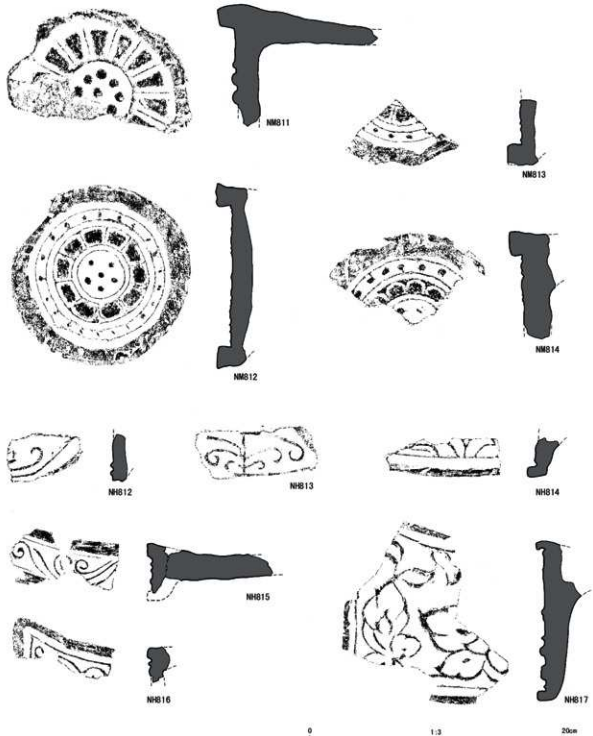


図140　老ノ口地区（1984）出土軒瓦③

NM814は単弁蓮華文軒丸瓦である。NM812と近似した意匠であるが、蓮弁の形状が丸く表現されており、間弁状の表現も見られる。蓮弁の外周には、内外に圏線を伴う珠文帯が巡る。珠文の径もやや大きい。

NH812・813は均整唐草文軒平瓦である。NH813は下向蕨手３葉の中心飾で、左右に上向蕨手が展開すると考えられる。中心飾が同系統の意匠に比べ、かなり非対称である。NH812は下圏線を持ち、上向蕨手がわずかに確認できる。

NH814は均整唐草文軒平瓦である。樹状中心飾で、左右に唐草が展開する。外周に圏線を持つ。堂ノ前支群において同意匠の軒平瓦が出土している。

NH815は均整唐草文軒平瓦である。３葉の蕨手を１転半展開させる。C字下向が２つ並んだ中心飾であると考えられる。上下に圏線を持つ。

NH816は唐草文軒平瓦である。周縁に圏線が伴う[2]。

NH817は宝相華文瓦である。幅広の凸線で宝相華文を縁取って表現し、周縁には圏線を巡らせる。瓦当面は正方形に近い形状を呈し、通常の軒平瓦とは異なるため、使用形態は不明だが道具瓦の一種と考えられる。

---

[1] 『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』（1987）には合計13基とあるが、どの窯跡を指すのか不明である。
[2] 図面作成時には接合する２個体と考えていたが、接合部にややズレが見られ、同一個体ではあるが、接合しない可能性がある。

表19　老ノ口地区（1984）出土土器

※（　）は復元数値

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
120	1	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器椀	(15.70)	5.60	4.00	淡黒灰	淡黒灰	淡黒灰	良好	精良	
	2	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器椀	(14.80)	(5.90)	(5.15)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2mm以下の砂粒まばら（黒色粒）	
	3	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器壺				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	3mm以下の小礫・砂粒多い	
	4	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器鉢	(29.40)			青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫・砂粒わずか	
	5	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器鉢	(28.90)			灰	淡灰	灰	良好	6mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	
	6	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器片口鉢	(24.40)			青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の黒色粒まばら	
	7	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器鉢	(25.80)	(8.70)	(10.80)	青灰	青灰	青灰	良好	5mm以下の小礫わずか	
	8	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器片口鉢	(29.30)			青灰	紫灰	紫灰	良好	6mm以下の小礫・砂粒まばら	
	9	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器鉢底部		(11.20)		淡灰	淡灰	淡灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	輪高台
	10	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器片口鉢	(30.60)			灰	灰	灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	11	Oトレンチ　3号窯西側溝	須恵器片口鉢				灰	灰	灰	良好	1mm以下の砂粒わずか	片口は残存部が少なく、図化できず
122	12	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器皿	(8.20)	(5.15)	(1.50)	青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の小礫わずか	写真図版 35-7
	13	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器皿	(8.00)	(4.20)	(1.15)	灰白	灰白	灰白	良好	精良	
	14	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器椀	(15.30)	(6.40)	(4.40)	青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫・砂粒多い	
	15	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器椀	(16.10)	(7.30)	(5.90)	灰褐	灰褐	灰褐	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	16	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器椀	(15.10)	6.70	5.20	淡褐灰	淡褐灰	淡褐灰	やや不良	5mm以下の小礫まばら	
	17	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器椀	(16.10)	(6.50)	(4.25)	灰褐～淡赤褐	灰褐～淡赤褐	淡赤褐	やや良好	1mm以下の砂粒わずか	
	18	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器片口鉢	(20.60)	(9.30)	(5.70)	灰褐～暗赤褐	灰褐～暗赤褐	灰褐～暗赤褐	良好	4mm以下の小礫まばら	実測箇所が片口部分に近いため、本来の口径はもう少し小さい可能性あり
	19	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器片口鉢	(20.50)			灰黄～青灰	灰黄～青灰	灰黄～青灰	良好	5mm以下の小礫・砂粒多い	写真図版 34-4
	20	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器鉢	(28.80)	(9.40)	(10.35)	淡褐灰	淡灰褐	淡褐灰	やや不良	5mm以下の小礫まばら	
	21	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の砂粒わずか	
	22	Oトレンチ　4号窯充填土西	須恵器甕				暗青灰	青灰	緑灰	良好	精良	外面：平行タタキ3本/cm 天地・傾き不明
	23	Oトレンチ　4号窯充填土東	須恵器椀	(14.80)	(6.00)	(4.25)	淡灰褐	淡灰褐	淡灰褐	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	24	Oトレンチ　4号窯充填土東	須恵器甕				暗青灰	暗灰	紫灰	良好	精良	外面：平行タタキ3本/cm 天地・傾き不明
	25	Oトレンチ　4号窯充填土東	須恵器鉢				灰白	灰褐	灰褐	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	26	Oトレンチ　4号窯充填土東	須恵器鉢				黒灰色自然釉	黒灰色自然釉	青灰	良好	7mm以下の小礫わずか	
	27	Oトレンチ　4号窯充填土東	須恵器片口鉢	(30.10)			暗灰	暗灰	暗灰	良好	1mm以下の黒色粒まばら	
	28	Oトレンチ　4号窯充填土東	須恵器鉢	(29.70)	(10.00)	(10.10)	暗灰	暗灰	暗灰	良好	5mm以下の小礫まばら	
	29	Otre 4区　4号窯床面	須恵器鉢	(27.80)			青灰	暗灰褐	暗灰褐	良好	5mm以下の小礫まばら	
	30	Otre 4区　4号窯床面	須恵器鉢				灰褐	灰褐	灰褐	やや良好	1mm以下の黒色粒まばら	
	31	Otre 4区　4号窯床面	須恵器鉢				青灰	暗灰褐～淡黒灰	暗灰褐～淡黒灰	良好	7mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒多い	
	32	Otre 4区　4号窯床面	須恵器鉢底部		8.80		淡黒灰色自然釉	淡黒灰色自然釉	淡黒灰色自然釉	良好	2mm以下の砂粒わずか	
123	33	Oトレンチ1区　灰層	須恵器椀	(15.40)	5.80	5.00	灰褐～暗青灰	灰褐	灰褐	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	34	Oトレンチ1区　灰層	須恵器壺				暗青灰	灰黒色自然釉	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	35	Oトレンチ1区　灰層	須恵器甕				灰	灰	灰	良好	1mm以下の白色粒まばら	外面：平行タタキ3～4本/cm 天地・傾き不明
	36	Oトレンチ1区　灰層	須恵器鉢	(29.40)	(10.40)	(11.80)	青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫まばら	
	37	Oトレンチ1区　灰層	須恵器鉢	(28.10)	(8.60)	(11.30)	暗灰褐	青灰	青灰	良好	精良	
	38	Oトレンチ1区　灰層	須恵器鉢	(30.00)	(11.50)	(11.40)	青灰～暗青灰	青灰	青灰	良好	11mm以下の小礫わずか	
	39	Oトレンチ1区　灰層	須恵器鉢	(28.00)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	精良	
	40	Oトレンチ1区　灰層	須恵器片口鉢	(32.00)			青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒まばら	歪みにより口径開き気味か 内面：ナデが粗い
	41	Oトレンチ1区　灰層	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	42	Oトレンチ1区　灰層	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	精良	

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
124	43	Oトレンチ2区 灰層	須恵器碗	(16.00)	(6.20)	(5.00)	灰褐	灰褐	灰褐	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	44	Oトレンチ2区 灰層	須恵器鉢				淡褐	淡褐	淡褐	不良	2mm以下の砂粒わずか	
	45	Oトレンチ2区 灰層	須恵器鉢				淡黒灰	淡灰褐～淡黒灰	淡灰褐	良好	2mm以下の砂粒多い	
	46	Oトレンチ2区 灰層	須恵器甕				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	外面：平行タタキ2～3本/cm 天地傾き不明
	47	Oトレンチ2区 灰層	須恵器碗	(15.50)	(5.20)	(4.00)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	8mm以下の小礫まばら	
	48	Oトレンチ2区 灰層	須恵器鉢				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	1mm以下の砂粒わずか	
	49	Oトレンチ2区 灰層	須恵器片口鉢	(29.20)			暗褐	淡灰	淡灰	良好	精良	3mm以下の黒色粒有 片口は残存部が少なく、図化できず
125	50	Oトレンチ3区 灰層	白磁碗底部		(6.30)		青灰	青灰	暗青灰	良好	3mm以下の砂粒多い	輪高台
	51	Oトレンチ3区 灰層	須恵器甕				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	精良	外面：平行タタキ2～3本/cm 天地傾き不明
	52	Oトレンチ3区 灰層	須恵器碗	(15.80)	6.00	5.30	淡灰	淡灰	淡灰	良好	5mm以下の小礫わずか	
	53	Oトレンチ3区 灰層	須恵器碗	(16.00)	5.90	5.20	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5mm以下の小礫わずか	
	54	Oトレンチ3区 灰層	須恵器碗	16.20	6.65	5.60	淡褐	淡褐	淡褐	やや不良	4mm以下の小礫わずか	
	55	Oトレンチ3区 灰層	須恵器鉢				灰	灰	灰	良好	4mm以下の小礫わずか	
	56	Oトレンチ3区 灰層	須恵器鉢				淡灰	淡灰	淡灰	良好	4mm以下の小礫わずか	
	57	Oトレンチ3区 灰層	土師器皿	(7.90)	(4.60)	(1.60)	明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化 良好	2mm以下の砂粒まばら（赤色粒）	
	58	Oトレンチ3区 灰層	須恵器皿	(7.60)	(4.20)	(1.20)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	精良	
	59	Oトレンチ3区 灰層	須恵器鉢	(36.20)			淡灰褐	淡黒灰	淡灰褐	やや不良	2mm以下の砂粒わずか	
	60	Oトレンチ3区 灰層	須恵器鉢	(30.50)	5.70	11.40	淡灰褐	淡灰褐	淡灰褐	やや良好	8mm以下の小礫わずか	写真図版 33-4
	61	Oトレンチ3区 灰層	須恵器鉢	(28.40)	(9.60)	(12.25)	灰褐～淡黒灰	灰褐	灰褐	やや不良	5mm以下の小礫まばら	
	62	Oトレンチ3区 灰層	須恵器鉢	(31.00)			黒色自然釉	暗褐～黒灰色自然釉	暗褐	良好	4mm以下の小礫わずか	
	63	Oトレンチ3区 灰層	須恵器鉢				青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	良好	6mm以下の小礫わずか	
	64	Oトレンチ3区 灰層	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	4mm以下の小礫わずか	
	65	Oトレンチ3区 灰層（下層）	須恵器甕	(25.00)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	8mm以下の小礫わずか	写真図版 34-16
126	66	Oトレンチ4区 灰層	須恵器皿	(7.20)	(5.60)	(2.20)	青灰	暗灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	67	Oトレンチ4区 灰層	須恵器碗	(16.40)	5.60	4.75	青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の黒色粒まばら	
	68	Oトレンチ4区 灰層	須恵器碗	(15.70)	5.50	5.15	青灰	青灰	青灰	良好	4mm以下の小礫わずか	
	69	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	70	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢	(31.50)	(11.00)	(10.40)	青灰	青灰	青灰	良好	12mm以下の小礫わずか	
	71	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢	(29.20)			青灰	青灰	青灰	良好	6mm以下の小礫まばら	
	72	Oトレンチ4区 灰層	須恵器皿	(8.00)	(4.80)	(2.00)	淡灰	淡灰	淡灰	良好	4mm以下の小礫わずか	写真図版 35-6
	73	Oトレンチ4区 灰層	須恵器碗	15.20	6.00	6.30	青灰	灰	灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	74	Oトレンチ4区 灰層	須恵器碗	(16.60)	(5.60)	(5.10)	灰	灰	灰	良好	4mm以下の砂粒わずか	
	75	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢	(20.00)			灰	灰	灰	良好	2mm以下の黒色粒多い	
	76	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢	(21.00)			灰	灰	灰	やや良好	3mm以下の黒色粒まばら	
	77	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢	(21.00)	9.00	7.80	青灰	青灰	青灰	良好	8mm以下の小礫・砂粒まばら	
	78	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢	(29.60)	(9.80)	(10.60)	灰褐	灰褐	灰褐	良好	4mm以下の黒色粒まばら	
	79	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢	(26.00)			青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の黒色粒多い	
	80	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢	(30.00)	(10.00)	(10.90)	青灰	暗青灰	青灰	良好	9mm以下の小礫まばら	
	81	Oトレンチ4区 灰層	須恵器片口鉢	(30.40)			青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	82	Oトレンチ4区 灰層	須恵器片口鉢				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2mm以下の黒色粒まばら	
	83	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢				灰～暗灰	灰～青灰	青灰	良好	2mm以下の黒色粒まばら	
	84	Oトレンチ4区 灰層	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	傾き推定
	85	Oトレンチ4区 灰層	須恵器甕	(14.40)			灰白	灰白	灰白	やや不良	2mm以下の砂粒まばら	
129	86	24トレンチ 上部灰層	土師器皿	(11.80)	(8.20)	(2.10)	明赤褐	明赤褐	明赤褐	酸化 やや良好	3mm以下の砂粒まばら（雲母、赤色粒）	
	87	24トレンチ 上部灰層	須恵器碗	(12.80)	(4.60)	(4.10)	青灰	青灰	青灰	良好	10mm以下の小礫わずか、1mm以下の砂粒まばら	
	88	24トレンチ 上部灰層	須恵器鉢				淡黒灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	傾き不明
	89	24トレンチ 灰層	土師器杯底部		5.00		淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 良好	精良	
	90	24トレンチ 灰層	土師器皿	(10.80)	(5.00)	(2.10)	赤褐	赤褐	赤褐	酸化 やや不良	3mm以下の砂粒まばら（石英、赤色粒）	写真図版 36-10
	91	24tre 灰層+暗灰色土層	土師器皿	(9.80)	(5.60)	(1.50)	淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化 良好	1mm以下の赤色粒まばら	
	92	25トレンチ 上部灰層	土師器皿	(9.60)	(5.50)	(2.40)	濃赤褐	濃赤褐	濃赤褐	酸化 不良	3mm以下の砂粒多い（石英、赤色粒）	
	93	25トレンチ 上部灰層	土師器鍋				淡褐	淡褐	淡赤褐	酸化 良好	3mm以下の砂粒まばら	
	94	25トレンチ 上部灰層	須恵器碗	(14.80)	6.40	5.30	青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒まばら	
	95	25トレンチ 上部灰層	須恵器碗	(1.40)	(6.40)	3.30	青灰	青灰	青灰	良好	4mm以下の白色粒多い	
	96	25トレンチ 上部灰層	須恵器碗			(6.45)	灰褐	灰褐	灰褐	良好	3mm以下の小礫わずか	体部：沈線
	97	25トレンチ 上部灰層	須恵器甕？				黒褐～暗褐色自然釉	暗黄褐色自然釉	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	98	25トレンチ 下部灰層	土師器杯底部		(6.80)		淡橙褐	淡橙褐	淡橙褐	酸化 やや良好	2mm以下の砂粒まばら（石英、赤色粒）	写真図版 36-13
	99	25トレンチ 下部灰層	土師器鍋				赤褐	赤褐	赤褐	酸化 不良	4mm以下の小礫・砂粒多い（石英、赤色粒）、粗い	
	100	25トレンチ 下部灰層	土師器鍋				褐	赤褐	赤褐	酸化 やや不良	2mm以下の砂粒多い（石英、赤色粒）	外面：突帯貼付後、把手を貼付 傾き推定
	101	25トレンチ 下部灰層	須恵器椀底部		(7.20)		黒灰～青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫わずか	輪高台

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
129	102	25トレンチ　下部灰層	須恵器 椀底部		(4.80)		灰	灰	灰	良好	精良	
	103	25トレンチ　下部灰層	須恵器 椀底部		(7.80)		青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	104	25トレンチ　下部灰層	須恵器 鉢				暗灰	青灰	青灰	良好	精良	
	105	25トレンチ　下部灰層	須恵器 壺				灰	灰	灰	やや良好	3㎜以下の小礫わずか	
	106	25トレンチ　灰層＋暗茶灰色土層	土師器 皿	(12.00)	(7.60)	(1.60)	暗赤褐	暗赤褐	暗赤褐	酸化 不良	2㎜以下の赤色粒まばら	
	107	25トレンチ　灰層＋暗茶灰色土層	土師器 椀底部		(5.40)		赤褐	赤褐	赤褐	酸化 やや良好	2㎜以下の赤色粒まばら	
	108	25トレンチ　灰層＋暗茶灰色土層	須恵器 椀底部		(8.00)		淡灰	淡灰	淡灰	やや良好	精良	輪高台
	109	25トレンチ　灰層＋暗茶灰色土層	須恵器 椀底部		5.40		灰白	灰白	灰白	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	110	25トレンチ　灰層＋暗茶灰色土層	須恵器 盤か	(13.80)	(12.80)	(2.60)	青灰	青灰	青灰	良好	精良	
	111	25トレンチ　灰層＋暗茶灰色土層	須恵器 壺				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	112	25トレンチ　灰層＋暗茶灰色土層	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	精良	
136	113	40トレンチ　灰層	須恵器 鉢				明青灰	明青灰	明青灰	良好	1㎜以下の砂粒まばら	
	114	40トレンチ　灰層	須恵器 壺				青灰	青灰	青灰	良好	1㎜以下の砂粒まばら	
137	115	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 片口鉢	(29.20)			黒灰	暗青灰～黒灰	暗青灰～黒灰	良好	6㎜以下の小礫わずか	「KDK」混入
	116	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 片口鉢	(31.40)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	9㎜以下の小礫わずか	「KDK」混入
	117	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 鉢	(28.00)			青灰	暗青灰色自然釉	青灰	良好	2㎜以下の砂粒まばら	「KDK」混入
	118	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 鉢	(27.80)			青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の砂粒わずか	「KDK」混入
	119	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 皿	(8.80)	(6.00)	(1.80)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	精良	「KDK」混入
	120	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 椀	(17.40)	(8.30)		青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の黒色粒まばら	「KDK」混入
	121	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 鉢				青灰	青灰	青灰	良好	8㎜以下の小礫わずか	「KDK」混入
	122	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 鉢				淡灰	青灰～暗褐	青灰	良好	4㎜以下の小礫・砂粒まばら	「KDK」混入
	123	上人谷池南1号灰原　表採	須恵器 鉢				灰白	灰白	灰白	やや不良	5㎜以下の小礫まばら（石英）	「KDK」混入
	124	5号窯　上層	須恵器 鉢									写真図版33-12

表20　老ノ口地区（1984）出土軒瓦

軒丸瓦

※（　）は復元数値

図版	番号	文様	出土地	瓦当径（cm）	瓦当厚（cm）	外区			内区			備考
						外縁幅（cm）	外縁高（cm）	内縁幅（cm）	中房径（cm）	蓮子	弁数	
138	NM801	木瓜文	Oトレンチ2区　東畦下	−	−	−	−	1.4	−	−	−	
	NM802	単弁蓮華文	Oトレンチ3区灰原	14.6	−	1.3	2.0	−	6.0	11～	9か	写真図版37-10
	NM803	複弁蓮華文	Oトレンチ4区灰原・5号窯上層	14.2	2.7	1.55	1.05	−	6.0	1+6	8	写真図版37-18
	NM804	複弁蓮華文	Oトレンチ4区灰原	(12.8)	3.6	1.6	1.2	−	−	あり	−	写真図版37-21
	NM805	複弁蓮華文	Oトレンチ4区灰原	−	−	−	−	−	−	あり	−	
	NM806	複弁蓮華文	Oトレンチ4区　5号窯充填土西	−	−	−	−	−	−	あり	−	
139	NM807	複弁蓮華文	40トレンチ　灰層	−	−	−	−	−	−	あり	−	
	NM808	単弁蓮華文	40トレンチ　暗茶色土	(16.4)	2.4	2.1	0.8	−	−	−	−	写真図版38-24
	NM809	複弁蓮華文	26トレンチ東端　灰層	(19.0)	−	1.2	0.9	2.0	−	−	−	顎面施文（スタンプ）、写真図版37-14
	NM810	蓮華文	26トレンチ東端　SK02	−	−	−	−	−	−	12～	−	
140	NM811	単弁蓮華文	53トレンチ西区　落込み	(14.6)	−	1.9	1.3	−	5.75	1+6か	14か	
	NM812	単弁蓮華文	53トレンチ西区　落込み	14.6	−	1.35	1.2	1.4	4.4	1+5	10	写真図版38-20
	NM813	単弁蓮華文	53トレンチ　落込み2	−	−	1.1	1.1	1.3	−	−	−	
	NM814	単弁蓮華文	53トレンチ	−	−	2.0	1..5	1.6	−	あり	−	写真図38-17

軒平瓦

図版	番号	文様	出土地	瓦当幅（cm）	瓦当厚（cm）	外区				脇区幅（cm）	顎深（cm）	備考
						上外縁厚（cm）	下外縁厚（cm）	上外縁高（cm）	下外縁高（cm）			
138	NH801	宝相華唐草文	Oトレンチ1区灰原	−	4.1	0.2	0.8	0.1	0.3	1.1	−	写真図版40-14
	NH802	均整唐草文	Oトレンチ2区　3号窯西側溝	−	5.8	0.4	0.5	0.4	0.5	−	−	写真図版41-17
	NH803	均整唐草文	Oトレンチ3区灰原	−	4.5	0.3	0.45	−	0.4	−	−	写真図版39-17
	NH804	均整唐草文	Oトレンチ4区　5号窯西	−	(4.2)	(0.7)	(0.7)	(0.15)	(0.1)	−	−	
	NH805	宝相華唐草文	Oトレンチ4区　5号窯西	−	5.2	0.9	0.7	0.5	0.7	−	−	写真図版40-12
	NH806	宝相華唐草文	Oトレンチ4区灰原・5号窯上層	−	4.8	1.1	0.8	0.85	0.75	1.2	−	
	NH807	唐草文	Oトレンチ4区　5号窯西	−	−	−	0.6	−	0.8	−	−	写真図版42-6
139	NH808	均整唐草文	5トレンチ	−	−	1.1	−	0.2	−	2.0	(3.2)	写真図版42-15
	NH809	均整唐草文	40トレンチ	−	4.3	0.3	−	0.1	−	−	−	
	NH810	均整唐草文	38トレンチ	−	−	0.5	0.4	0.1	0.1	−	−	写真図版39-18
	NH811	均整唐草文	24トレンチ　pit3掘形	−	4.4	0.4	0.9	0.2	0.35	0.7	−	写真図版39-12
140	NH812	均整唐草文	28トレンチ東区　暗灰色土	−	−	−	0.4	−	0.35	−	−	
	NH813	均整唐草文	53トレンチ　落込2	−	(4.1)	−	−	−	−	−	−	写真図版39-16
	NH814	均整唐草文	53トレンチ西区　落込	−	−	−	0.9	−	0.8	−	−	
	NH815	均整唐草文	53トレンチ　落込1	−	−	1.2	1.25	0.4	0.5	−	−	写真図版41-12
	NH816	唐草文	53トレンチ　遺構面	−	−	1.05	−	0.35	−	1.1	−	
	NH817	宝相華文	29トレンチ　暗灰色土	−	12.3	0.8	0.8	0.7	0.7	0.7	−	道具瓦、写真図42-9

第11章　昭和62年度　第17次調査（万堡池支群）の成果

第１節　調査区の設定と基本層序（図141、142）

万堡池支群は、万宝池堰堤改修工事に伴う仮設道路建設工事によって、万宝池北岸に存在していた窯跡（１号窯）が損壊を受け、緊急に窯体断面の精査作業と、窯跡及び灰原の遺存状態の確認を目的に調査を実施した。

灰層の範囲確認のため、検出した窯跡の前庭部に１×11.5mの南北方向のトレンチ１本（東西トレンチとの交点より北をNトレンチ、南をSトレンチ）と、それに直交する１×約17mのトレンチ１本（南北トレンチとの交点より東をEトレンチ、西をWトレンチ）を設定した。またWトレンチの北西に約４mのトレンチを１本設定した。調査記録よりNトレンチとEトレンチに挟まれた地点を１区とし、各トレンチとの間を反時計回りに１～４区としたと考えられる。

また、万宝池の南半でも窯跡（２号窯）とその灰原を１箇所確認し、遺物の採集をおこなった。

窯跡周辺では、池の水を抜いた状態の地表面は標高106.30～106.90mで、礫層・シルト層の下に灰層・焼土層が互層をなして堆積している。標高105.50～106.50mで基盤層である黄灰色砂礫土層となる。

図141　万堡池支群　トレンチ配置図（S=1/3,000）

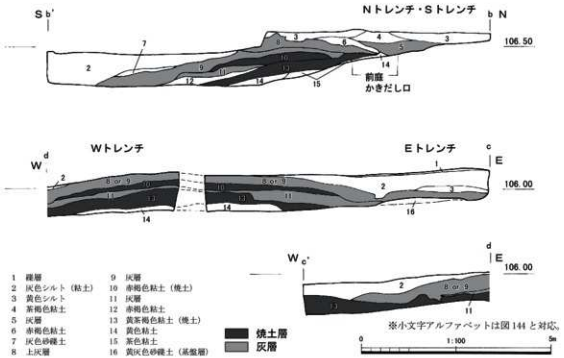


図142　万堡池支群　トレンチ土層断面図

第２節　調査成果

調査の結果、窯跡２基とそれに伴う灰原を検出した。

１号窯において、露出した断面の精査と窯跡及び灰原の遺存状態の確認をおこなった。万宝池南半で発見した２号窯の灰原では遺物の採集をおこなった。

１号窯は北西から入り込むやや広めの谷から分岐した小浸食谷の北側斜面に位置し、２号窯は広めの谷の南側斜面に位置する。この２号窯の灰原から採集した土器の一部が、『昭和62年度年報』において、「灰原出土遺物」として報告されている。しかし、『昭和62年度年報』では２号窯灰原について言及しておらず、１号窯灰原出土遺物と２号窯灰原出土遺物が峻別されていない。改めて本書では、１号窯と２号窯灰原の遺物を分けて報告する。

表21　万堡池支群　遺構名対応表

本書	昭和 62 年度年報	未報告	備考
１号窯	１号窯	—	
２号窯灰原	灰原出土遺物 （fig. 2-21- 6～8）	２号窯灰原採集	『神戸市文化財分布図（西区）』（1989）に窯跡の位置、向きを掲載

（１）１号窯（図144、145）

１号窯は万宝池の北岸に位置する窯跡である。現存長6.0m、最大幅3.3m、最大高0.8mを測る。削平された部分以外は平面検出のみで現地保存したため、床面傾斜角度は不明である。また、窯跡の北西部は攪乱によって削平されている。

仮設道路建設工事によって、１号窯の焚口と燃焼部が大きく切断されており、その際の掘削土を灰原上に積んでいた。この掘削土を除去し、遺物の採集に努めた。

断面観察から、窯体を一度大きく修復しており、幅を3.3mから2.25mに縮小していることがわかる。その後も何回かの修復の痕跡を確認したが、損壊箇所であるため、詳細は不明である。また、窯体構築の際には、スサ入り粘土で壁面を作っているが、床面に粘土を張った痕跡は、この損壊箇所では認められない。Nトレンチ北半では基盤層直上に赤く焼きしまった被熱痕跡を検出した[1]。

灰原の確認は、主にトレンチ調査によっておこなった。その結果、南北10m×東西20mの範囲に広がり、Wトレンチで灰原の西端、Sトレンチで南端を検出した。遺物は窯体内及び周辺の灰原から出土している。

①1号窯体内・1号窯掘削土（図143、146）

1号窯体内からは須恵器鉢・塊・甕が出土している。そのうち須恵器鉢・甕を図示した。図143－1～4は須恵器鉢である。1は片口を有する。口縁端部は内側に緩く屈曲する。2の口縁端部は内側に肥厚する。3・4は口縁部小片で、いずれも口縁端部を外側に拡張する。4は口縁端部を外側につまむように突出させる。図143－5・6は須恵器甕である。5は口縁部を上方につまみ上げて収める。口縁部内面はわずかに凹む。6は大きく外反する頸部を持ち、口縁端部が上方に突出する。

図146－7～18は1号窯掘削土から採集されたものと考えられる。図146－7は白磁碗である。口縁部を欠損し、底部は輪高台である。内面は回線があり、全面に釉がかかる。

図146－8は須恵器塊である。外面に粘土紐痕跡をよく残す。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外反する。図146－9は須恵器壺の口縁部である。口縁端部はやや

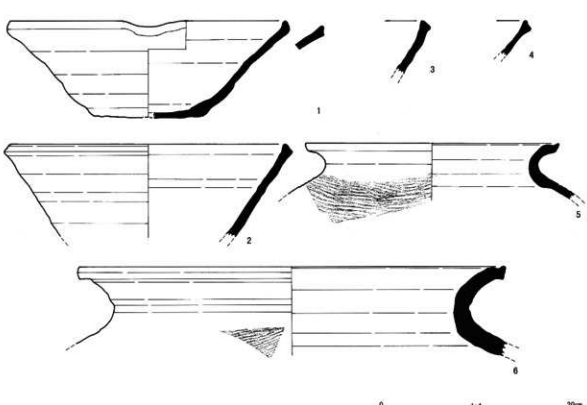


図143　万堡池支群　1号窯出土土器

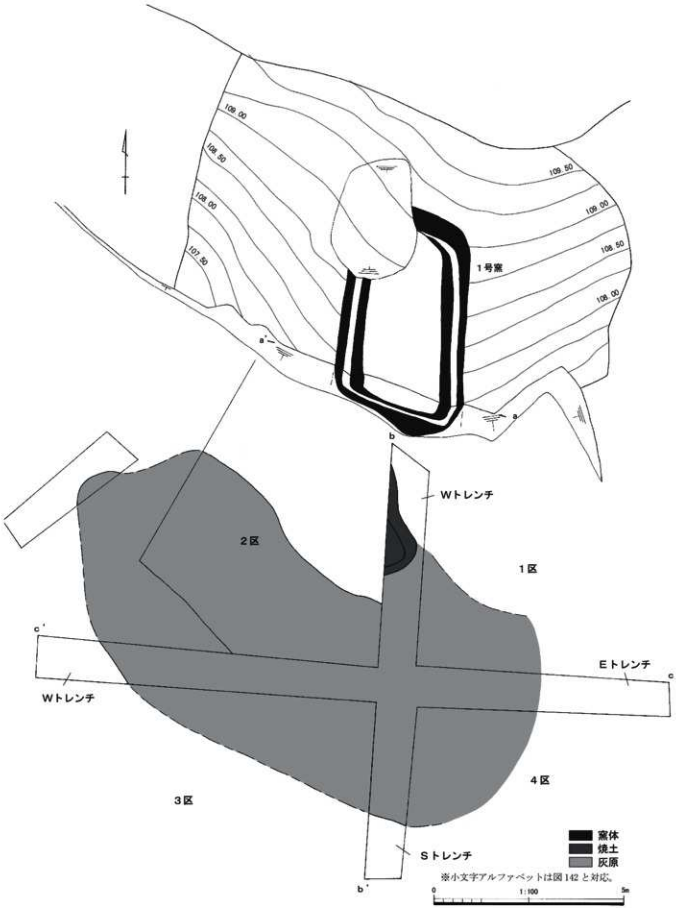


図144　万堡池支群　1号窯・トレンチ平面図

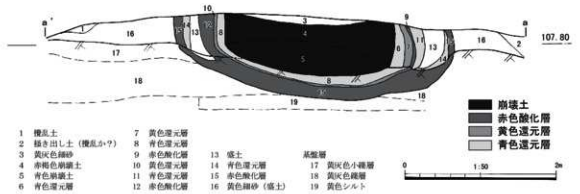


図145　万堡池支群　１号窯土層断面図

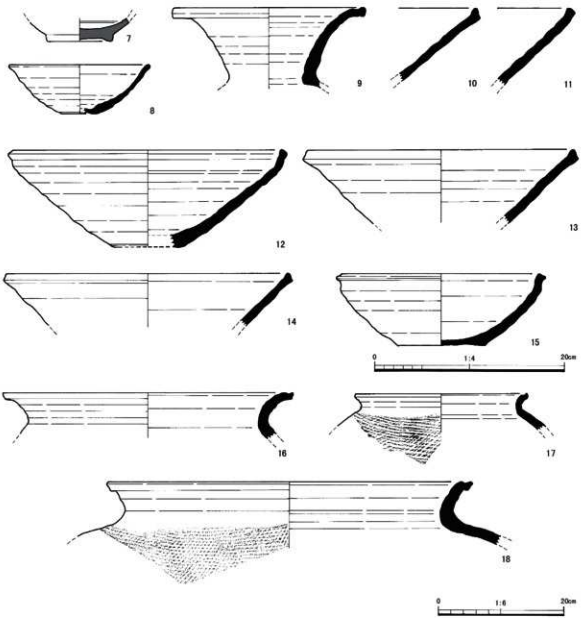


図146　万堡池支群　１号窯掘削土出土土器

丸く収め、内面に凹みが見られる。図146－10～15は須恵器鉢である。10・11は口縁部の小片である。12は内外面ともによく粘土紐痕跡を残す。口縁端部直下でくびれるが、端部は拡張しない。13は内側に肥厚する口縁端部を持つ。15は小型品である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。図146－16～18は須恵器甕である。16は頸部が緩く外反し、口縁端部で上方に突出させる。17は短い口縁部を持ち、口縁部内面が凹む。18の頸部はやや直線的に立ち上がり、口縁部で外側に屈曲し、上方に突出する口縁端部を持つ。

②2区灰層（図147）

2区灰層からも一定量の遺物が出土している。これらも1号窯掘削土と同じく、工事により削平された部分の灰層から出土したものと考えられる。

図147－19・20は須恵器鉢である。ともに口縁部が外反するが、20の方がより強く外反する。また20は焼き歪みによりロが開き、底部が非常に小さく復元された。本来の器形、傾きとはかなり異なると考えられる。図147－21～24は須恵器甕である。21は口径が小さく全体的に小振りである。短い口縁部を持ち、端部はほとんど拡張しない。22は口縁端部内面が凹む。端部整形時に、つまむようにしてナデを施したためと考えられる。23は頸部が直線的でやや開き気味に立ち上がり、口縁部は短く、端部が上方に突出する。24は口縁部の小片である。端部は鋭く収める。図147－25は土師器鍋の口縁部である。小片のため、傾きは推定である。口縁部は内側に巻き込むように立ち上がる。

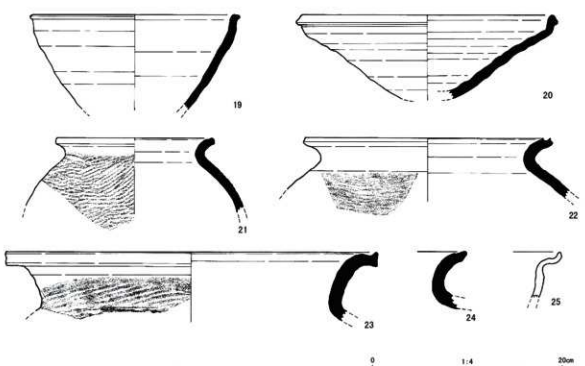


図147　万堡池支群　2区灰層出土土器

③Nトレンチ（図148）

Nトレンチは窯体の削平部分から焚口付近に設定した。

Nトレンチの灰層から出土した土器は、土師器坏、皿・鍋、須恵器鉢・埦・甕・皿である。そのうち図148－26～34を図示した。図148－26は土師器鍋の口縁部である。図148－27～30は須恵器埦である。27の体部は内湾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。体部外面に沈線を持つ。28は底部が平高台である。29は底部に輪高台を持つ。図148－31～33は須恵器鉢の口縁部である。31は体部が直線的に開き、口縁部は丸みを帯びる。図148－32は口縁部で強く外反する。33は体部外面と口縁部端面が直角をなし、端部は拡張しない。図148－34は須恵器甕である。外面は平行タタキ、内面はナデを施す。頸部が直線的に立ち上がり、外側に屈曲する短い口縁部を持つ。口縁部は内面に段差を作り、端部はわずかに上下に拡張する。

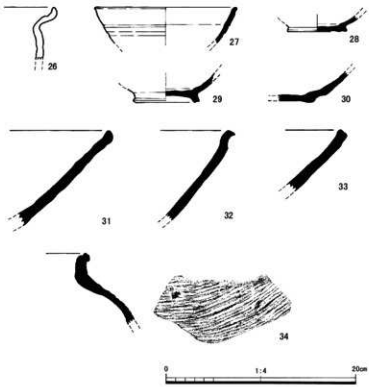


図148　万堡池支群　Nトレンチ灰層出土土器

④Sトレンチ（図149）

Sトレンチ灰層から出土した土器は須恵器鉢・埦・甕・壺であり、その一部を図示した。図149－35～37は須恵器壺である。35・36は口縁端部がいずれも上方に突出する。37は肩部に一条の突帯を貼り付ける。突帯が水平になるように傾きを設定したが、体部の窄まりが急なため、傾きが異なる可能性がある。図149－38～40は須恵器鉢である。38は明瞭な底部を持ち、口縁部で強く外反する。39は片口を有し、口縁端部はわずかに内側に突出する。図149－41・42は須恵器甕である。41は短い口縁部を持ち、端部は拡張しないが、口縁端部内面にやや段をつくる。42は頸部がくの字状を呈し、口縁端部内面が凹み、端部がわずかに上方に突出する。

⑤Wトレンチ（図150、151）

Wトレンチは窯体の南西に位置するトレンチである。

Wトレンチ灰層からは土師器托、須恵器鉢・埦・甕・壺が出土している。図150－43は土師器托である。体部は内傾せず、直線的に立ち上がる。図150－44～48は須恵器埦である。44の底部は輪高台を貼り付ける。45は短い輪高台がついた底部である。47は高い輪高台を貼り付けており、器高が高い。体部外面に沈線を施す。48は体部が内湾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。図150－49～51は須恵器壺である。それぞれ残存する部分が異なるが、

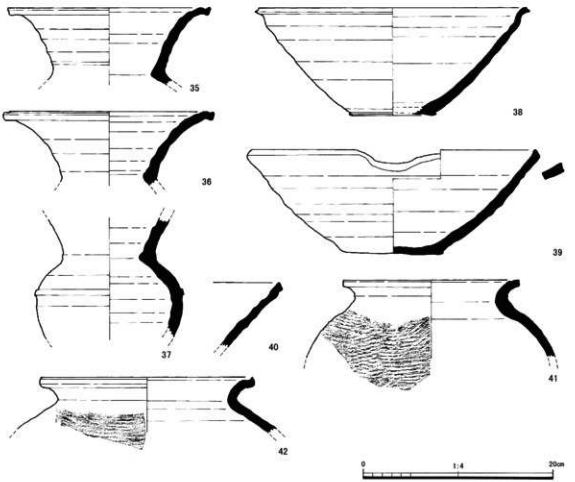


図149　万堂池支群　Sトレンチ灰層出土土器

すべて別個体だと考えられる。49は口縁部である。口縁端部は四角く収める。50は肩部である。外面に断面台形の突帯を1条貼り付けている。突帯がある肩部内面は、大きく凹む。これは突帯貼付時に内面から強く抑えたためと考えられる。図150－52～57は須恵器鉢である。52は片口を有する。体部外面に粘土紐痕跡をよく残す。53は体部が直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。端部は拡張しない。54は外側につまみ出すように突出する口縁端部を持つ。55は内外両方に拡張する口縁端部を持つ。56・57は口縁部である。56は強く外反する口縁部を持つ。57は器壁が薄く、小型品の可能性がある。図151－58～62は須恵器甕である。いずれも胴部外面に平行タタキ、内面に不定方向のナデを施す。口縁部から頸部にかけては内外面ともにロクロナデを施す。58・60はいずれも短い口縁部を持ち、端部を四角く収める。60は58に比べ、頸部の屈曲がやや緩やかである。59は短い口縁部を持ち、口縁端部が上方に突出する。61は頸部が大きく弧を描いて外反し、口縁端部は折り曲げるように上方に突出する。62は他と比べて口径が大きい。頸部は大きく外反し、口縁端部は上下に拡張する。

⑥Eトレンチ（図152）

Eトレンチの灰層からは土師器皿、須恵器鉢・埦・甕・皿・壺が出土している。図152－63は土師器皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、外反する口縁部を持つ。図152－64は須恵器埦である。灰層上面から出土した。底部に輪高台を持つ。図152－65は須恵器壺の肩

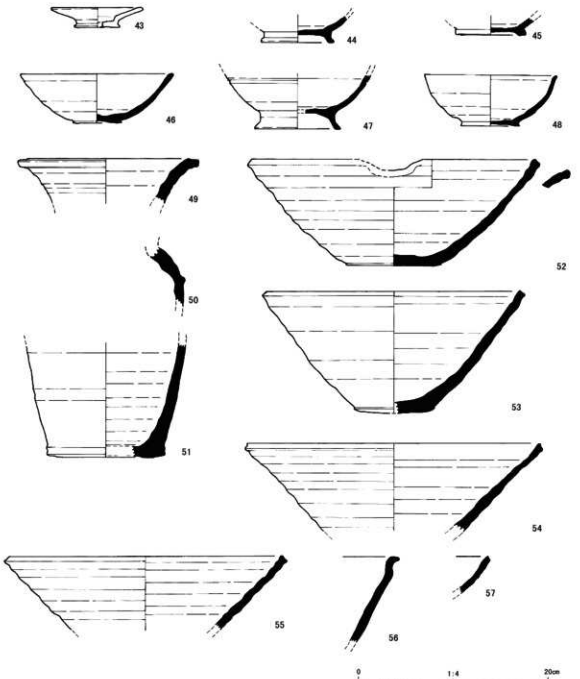


図150　万堡池支群　Wトレンチ灰層出土土器①

部である。1条の突帯を貼り付けている。図152－66・67は須恵器鉢である。66の体部は内湾し、口縁部で外反する。67も体部は内湾し、口縁端部は外側にわずかに突出する。図152－68・69は須恵器甕である。68は口縁部である。端部は丸く収める。69は口縁部が斜め上方に突出する。体部の焼け歪みが大きい。

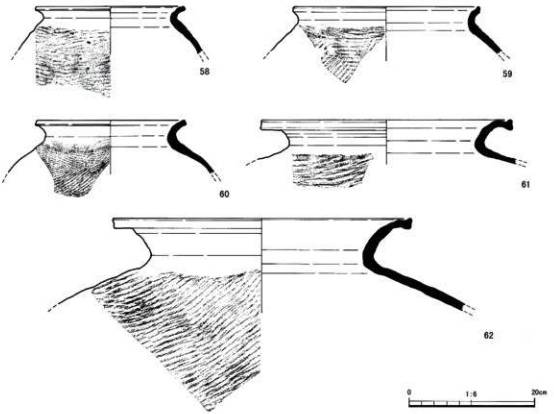


図151　万堂池支群　Wトレンチ灰層出土土器②

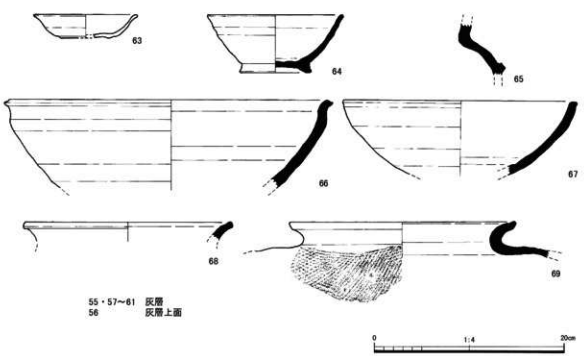


図152　万堂池支群　Eトレンチ灰層出土土器

（2）２号窯灰原[2]（図153）

万宝池の南半で窯跡及びその灰原と推定される地点において遺物を採集した。須恵器鉢・塊がある。

図153－70～72は須恵器塊である。70は体部が直線的に開く。器高が低い。71・72[3]は底部である。いずれも底部に輪高台を持つ。図153－73は須恵器鉢である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。焼け歪みにより、傾きが正確ではない。

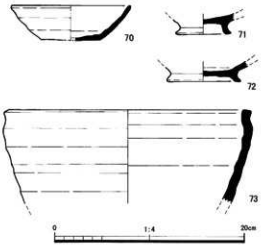


図153　万堡池支群　２号窯採集土器

（3）軒瓦（図154、表23）

万堡池支群から出土した軒瓦として軒丸瓦２点、軒平瓦６点を図示した。他に拓本のみ３点掲載した。

①軒丸瓦

NM901は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は１＋８で蓮子が配される。蓮弁は先端に細かな切れ込みの表現が見られる。各蓮弁の間には、縦長の間弁が表現される。

NM902は中房に蓮子が配され、その周囲に二重の圏線が巡る文様の軒丸瓦である。

NM903・904[4]は複弁蓮華文である。蓮弁は九葉もしくは十葉と考えられる。立体的な中房の上に蓮子を配置する。蓮弁は花弁を縁取るように凸線で囲み内側は膨らんだ表現と考えられる。

②軒平瓦

NH901～904は偏行唐草文軒平瓦である。同じ意匠の文様であるとみられるが、NH901・902はやや簡略化されている。NH901・903は端部が切り縮められている。

NH905は均整唐草文軒平瓦である。唐草文は形骸化して山形に見え、枝葉を表現していると思われる珠文状の凸線が隙間に配置される。周囲には圏線が巡る。

NH906は均整唐草文軒平瓦である。上外区のみ圏線が見られる。右端は切り縮められている。尊勝寺で同意匠が出土しており、それによると樹状中心飾を持つことがわかる。

NH907[4]は均整唐草文軒平瓦である。神出窯跡群・垣内支群から同意匠が出土しており、それから樹状中心飾を持つと考えられる。

---

[1] 調査記録ではこの被熱痕跡を「焚口床面？」としているが、この痕跡の長軸方向と１号窯の長軸方向が異なるため、１号窯以前に構築された別の窯跡である可能性を整理時に、森内秀造氏からご指摘いただいた。
[2] 窯体の位置については、『神戸市文化財分布図（西区）』(1989) に記載がある。
[3] 年報 fig. 2-21- ８・７と同一の遺物である可能性がある。
[4] NM903・904・NH907は現在愛知県陶磁資料館に貸出されており、瓦の観察・断面図の作成ができていない。

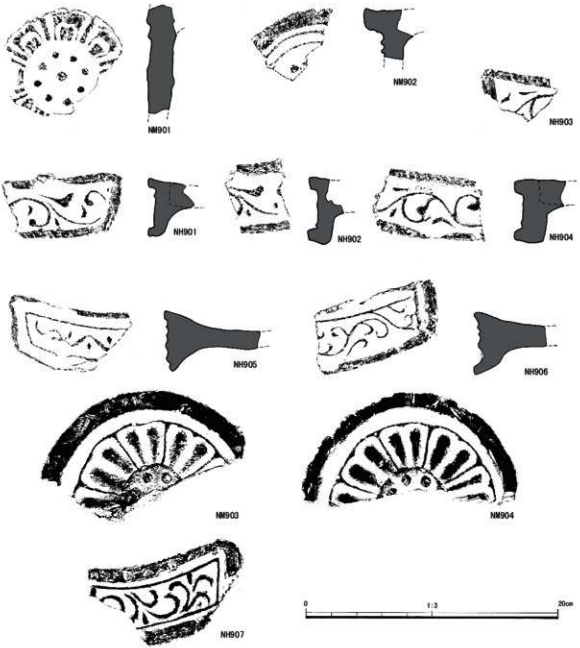


図154　万堡池支群出土軒瓦

表22　万堡池支群出土土器

※（　）は復元数値

図版	遺物	出土地	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	色調 外面	色調 内面	色調 断面	焼成	胎土	備考
143	1	1号室体内	須恵器片口鉢	(29.20)	(11.60)	(10.20)	灰黄	灰	灰	良好	7mm以下の小礫・砂粒多い	
	2	1号室体内	須恵器鉢	(29.00)			黒灰色白色軸	暗灰	暗灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	3	1号室体内	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	4	1号室体内	須恵器鉢				暗灰	暗灰	暗灰	良好	1mm以下の砂粒まばら	
	5	1号室体内	須恵器鉢	(28.80)			青灰	青灰	青灰	良好	5mm以下の小礫・砂粒多い	外面：平行タタキ2～3本／cm
	6	1号室体内	須恵器鉢	(45.00)			黄灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の小礫・砂粒多い	外面：平行タタキ4本／cm
146	7	1号室　調査土	白瓷鉢底部		(6.80)		灰白	白色軸	灰白	良好	精良	
	8	1号室　調査土	須恵器鉢	(14.80)	(4.20)	(5.15)	青灰	青灰	青灰	良好	2mm以下の砂粒わずか	
	9	1号室　調査土	須恵器鉢	(20.30)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2mm以下の砂粒多い（白色粒）	写真図版 35-13
	10	1号室　調査土	須恵器鉢				暗灰色白色軸	青灰	青灰	良好	2mm以下の黒色粒まばら	
	11	1号室　調査土	須恵器鉢				暗灰	暗灰	暗灰	良好	1mm以下の白色粒まばら	面内によりロ径開き気味か
	12	1号室　調査土	須恵器鉢	(28.20)	(8.20)	(10.20)	淡灰	淡灰	淡灰	良好	3mm以下の黒色粒まばら	面内によりロ径開き気味か 写真図版 33-9
	13	1号室　調査土	須恵器鉢	(28.20)			暗青灰	青灰	青灰	良好	3mm以下の黒色粒まばら	
	14	1号室　調査土	須恵器鉢	(30.00)			黒灰色白色軸	青灰	青灰	良好	1mm以下の黒色粒まばら	
	15	1号室　調査土	須恵器鉢	(20.80)	(9.20)	(7.55)	淡灰	淡灰	淡灰	良好	7mm以下の小礫わずか	
	16	1号室　調査土	須恵器鉢	(46.40)			黒灰色白色軸	暗青灰	暗青灰	良好	3mm以下の小礫わずか	
	17	1号室　調査土	須恵器鉢	(27.40)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2mm以下の砂粒まばら（白色粒）	
	18	1号室　調査土	須恵器鉢	(47.20)			淡黄色～青灰	暗青灰	暗青灰	良好	3mm以下の小礫わずか	写真図版 34-19

図版	遺物	出土地	器種	法量			色調			焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	断面			
147	19	2区　灰層	須恵器鉢	(21.00)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5㎜以下の小礫まばら、やや粗い	
	20	2区　灰層	須恵器鉢	(26.40)			黒黄色自然釉	青黒色自然釉	淡青灰	良好	7㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の砂粒まばら	歪みにより口径開き気味か
	21	2区　灰層	須恵器甕	(16.40)			青	青灰	青灰	良好	7㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の黒色粒多い	写真図版34-20
	22	2区　灰層	須恵器甕	(25.80)			暗青灰	暗灰	淡青灰	良好	6㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の砂粒多い	外面：平行タタキ2～3本／㎝
	23	2区　灰層	須恵器甕	(39.20)			青灰	青灰	淡褐	やや不良	6㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の砂粒多い、やや粗い	外面：ロクロナデのち斜線上の文様？
	24	2区　灰層	須恵器甕				暗青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	25	2区　灰層	土師器鍋				淡赤褐	淡赤褐	淡赤褐	酸化やや不良	6㎜以下の小礫・砂粒まばら、やや粗い	
148	26	Nトレンチ　灰層	土師器鍋				褐	橙褐	淡赤褐	酸化やや不良	2㎜以下の砂粒多い	
	27	Nトレンチ　灰層	須恵器碗	(15.00)			青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	体部：沈線が途中で切れる 強いナデによる段差あり
	28	Nトレンチ　灰層	須恵器椀底部		6.20		淡灰	淡灰	淡灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	
	29	Nトレンチ　灰層	須恵器椀底部		6.00		青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の黒色粒多い	輪高台
	30	Nトレンチ　灰層	須恵器椀底部				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	精良	内面：13㎜程度の緑色釉焼付着
	31	Nトレンチ　灰層	須恵器鉢				淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	精良	
	32	Nトレンチ　灰層	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒多い、やや粗い	
	33	Nトレンチ　灰層	須恵器鉢				紫灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の白色粒多い、やや粗い	
	34	Nトレンチ　灰層	須恵器甕				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	外面：平行タタキ3本／㎝
149	35	Sトレンチ　灰層	須恵器蓋	(21.40)			暗青灰～黒灰	暗青灰	暗青灰	良好	1㎜以下の白色粒多い	
	36	Sトレンチ　灰層	須恵器蓋	(22.00)			灰	灰	灰	良好	4㎜以下の黒色粒多い、やや粗い	
	37	Sトレンチ　灰層	須恵器蓋				灰	灰	灰	良好	2㎜以下の黒色粒多い	内面：6㎜以下の黒灰色釉滴まばら 硯と推定
	38	Sトレンチ　灰層	須恵器鉢	(28.20)	(9.20)	(11.30)	青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫まばら	
	39	Sトレンチ　灰層	須恵器片口鉢	(30.00)	10.40	11.00	暗青灰	灰褐	灰褐	良好	5㎜以下の小礫まばら	写真図版33-5
	40	Sトレンチ　灰層	須恵器鉢				暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	
	41	Sトレンチ　灰層	須恵器甕	(18.60)			青灰	青灰	青灰	良好	精良	内面：5㎜以下の黒色釉滴多い、外面：平行タタキ3本／㎝、壺、写真図版34-17
	42	Sトレンチ　灰層	須恵器甕	(22.20)			暗青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒多い	S62年報fig.2-21-4か
150	43	Wトレンチ　灰層	土師器皿	(9.60)	(8.60)	(2.60)	灰褐	灰褐	灰褐	酸化不良	4㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒多い（若黒）	
	44	Wトレンチ　灰層	須恵器椀底部		7.70		褐	褐	褐	酸化不良	1㎜以下の小礫まばら、2㎜以下の砂粒多い（赤色、黒色、やや粗い）	輪高台
	45	Wトレンチ　灰層	須恵器椀底部		7.40		灰	灰	灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	輪高台
	46	Wトレンチ　灰層	須恵器碗	(16.20)	15.20	(5.20)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	両面：3㎜以下の黒色釉滴あり
	47	Wトレンチ　灰層	須恵器椀底部		(9.00)		黒灰色自然釉	灰	灰	良好	精良	輪高台、体部：沈線、写真図版34-18
	48	Wトレンチ　灰層	須恵器碗	(14.00)	(6.20)	(3.40)	青灰	青灰	青灰	良好	3㎜以下の小礫わずか	外面：溶着
	49	Wトレンチ　灰層	須恵器蓋	(19.00)			灰	灰	灰	良好	3㎜以下の小礫・黒色粒多い	
	50	Wトレンチ　灰層	須恵器蓋				青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の黒色粒多い	硯と推定、1本突帯か
	51	Wトレンチ　灰層	須恵器蓋		(12.50)		灰	明青灰	明青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の砂粒多い	
	52	Wトレンチ　灰層	須恵器片口鉢	(30.00)	(10.00)	(11.20)	暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか、2㎜以下の白色粒まばら	写真図版33-10
	53	Wトレンチ　灰層	須恵器鉢	(26.80)	(8.40)	(12.90)	青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	内面：5㎜以下の黒色釉滴あり 写真図版33-2
	54	Wトレンチ　灰層	須恵器鉢	(30.80)			暗褐～暗青灰	灰	灰	良好	6㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の白色粒まばら	
	55	Wトレンチ　灰層	須恵器鉢	(26.60)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか、1㎜以下の白色粒多い	
	56	Wトレンチ　灰層	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	5㎜以下の小礫わずか	
	57	Wトレンチ　灰層	須恵器鉢				青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の黒色粒まばら	
151	58	Wトレンチ　灰層	須恵器甕	(23.80)			暗青灰	明青灰	明青灰	良好	5㎜以下の小礫・砂粒まばら	
	59	Wトレンチ　灰層	須恵器甕	(29.60)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	16㎜以下の礫わずか、2㎜以下の白・黒色粒多い	外面：平行タタキ3～4本／㎝
	60	Wトレンチ　灰層	須恵器甕	(23.60)			暗青灰	青灰	青灰	良好	2㎜以下の砂粒わずか	外面：平行タタキ、写真図版34-21
	61	Wトレンチ　灰層	須恵器甕	(39.80)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	6㎜以下の小礫まばら、1㎜以下の砂粒まばら	外面：平行タタキ2本／㎝
	62	Wトレンチ　灰層	須恵器甕	(47.20)			灰	灰	灰	良好	3㎜以下の小礫まばら	
152	63	Eトレンチ　灰層	土師器皿	(10.80)	(4.80)	(2.50)	褐白	褐白	褐白	酸化不良	2㎜以下の砂粒多い（若黒）	
	64	Eトレンチ　灰層上面	須恵器碗	(14.20)	7.50	6.10	淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	9㎜以下の小礫わずか	輪高台、写真図版34-8
	65	Eトレンチ　灰層	須恵器壺底部				暗青灰	灰褐	灰褐	良好	2㎜以下の砂粒わずか	硯と推定、1本突帯か
	66	Eトレンチ　灰層	須恵器鉢	(32.80)			暗青灰	暗青灰	暗青灰	良好	2㎜以下の白・黒色粒多い、やや粗い	S62年報fig.2-21-1か
	67	Eトレンチ　灰層	須恵器鉢	(24.40)			淡褐灰	淡褐灰	淡褐灰	やや不良	4㎜以下の小礫わずか	
	68	Eトレンチ　灰層	須恵器甕	(21.80)			青灰	青灰～暗青灰	青灰～暗青灰	良好	1㎜以下の白色粒まばら	
	69	Eトレンチ　灰層	須恵器甕	(24.00)			暗青灰	青灰	青灰	良好	4㎜以下の小礫わずか	体部の歪み激しい、写真図版35-3
153	70	2号窯灰原　表採	須恵器碗	(12.60)	(6.40)	(3.70)	淡青灰	淡青灰	淡青灰	良好	1㎜以下の砂粒多い	S62年報fig.2-21-6
	71	2号窯灰原　表採	須恵器椀底部		5.80		灰黄	灰黄	灰黄	良好	2㎜以下の砂粒まばら	輪高台 S62年報fig.2-21-8
	72	2号窯灰原　表採	須恵器椀底部		7.70		淡灰	淡灰	淡灰	良好	2㎜以下の小礫わずか	輪高台 S62年報fig.2-21-7
	73	2号窯灰原　表採	須恵器鉢	(26.20)			灰	灰	灰白	良好	7㎜の小礫・砂粒多い（黒色粒）、やや粗い	

表23　万堡池支群出土軒瓦

※（　）は復元数値

軒丸瓦

図版	番号	文様	出土地	瓦当径(㎝)	瓦当厚(㎝)	外区			内区			備考
						外縁幅(㎝)	外縁高(㎝)	内縁幅(㎝)	中房径(㎝)	蓮子	弁数	
145	NM901	複弁蓮華文	2区	－	－	－	－	－	5.7	1+6	8か	『昭和62年度年報』掲載
	NM902	蓮子・二重圏線		－	－	1.7	1.6	1.2	－	－	－	写真図版38-23
	NM903	複弁蓮華文	4区Eトレンチ　灰層上面	－	－	－	－	－	－	あり	10か	『昭和62年度年報』掲載、愛知県陶磁資料館に貸出中
	NM904	複弁蓮華文	1号窯残土	－	－	－	－	－	－	あり	10か	『昭和62年度年報』掲載、愛知県陶磁資料館に貸出中

軒平瓦

図版	番号	文様	出土地	瓦当幅(㎝)	瓦当厚(㎝)	外区				瓦区幅(㎝)	瓦深(㎝)	備考
						上外縁厚(㎝)	下外縁厚(㎝)	上外縁高(㎝)	下外縁高(㎝)			
145	NH901	偏行唐草文	2区	－	4.6	0.8	0.7	0.6	0.5	0.95	－	『昭和62年度年報』掲載、写真図版41-24
	NH902	偏行唐草文		－	4.9	1.1	0.9	0.7	0.8	－	－	
	NH903	偏行唐草文	4区Eトレンチ　灰層	－	－	1.0	－	0.25	－	1.1	－	
	NH904	偏行唐草文		－	4.7	1.0	0.9	0.7	0.65	－	－	『昭和62年度年報』掲載、写真図版41-25
	NH905	均整唐草文	4区Eトレンチ　灰層	－	4.8	0.7	－	0.25	－	1.0	－	『昭和62年度年報』掲載
	NH906	均整唐草文	4区Nトレンチ	－	4.9	－	1.2	－	0.7	1.8	－	『昭和62年度年報』掲載、写真図版39-10
	NH907	均整唐草文		－	－	－	－	－	－	－	－	『昭和62年度年報』掲載、愛知県陶磁資料館に貸出中